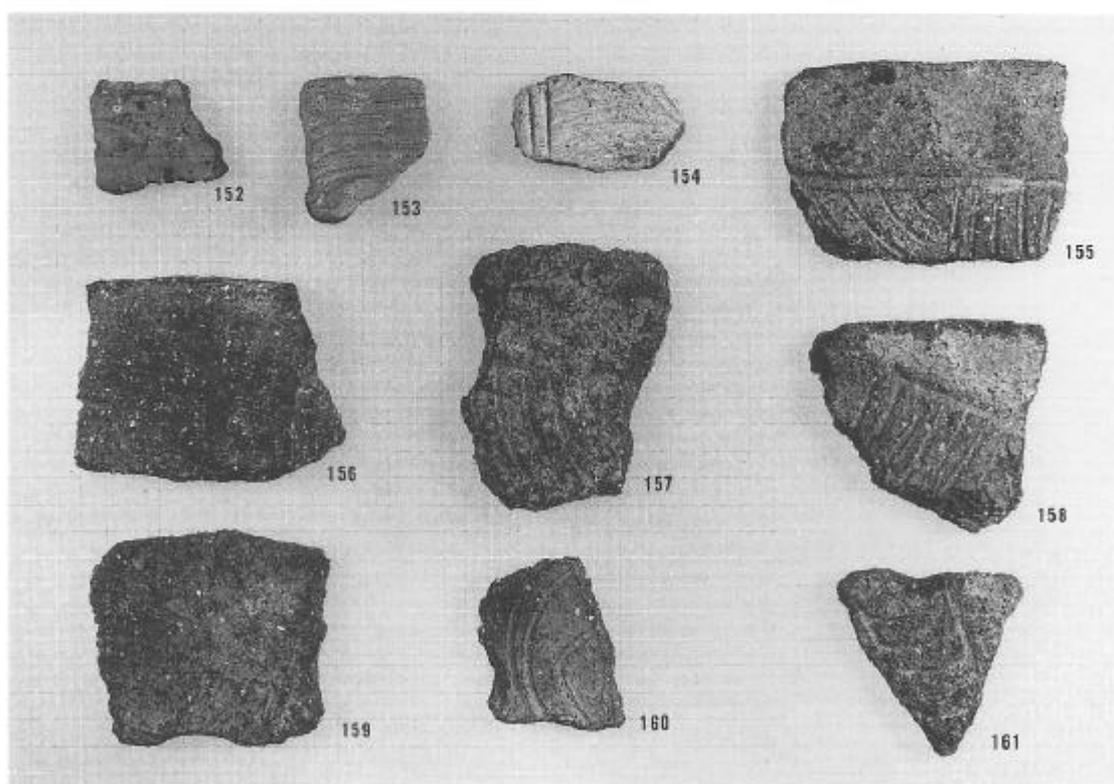
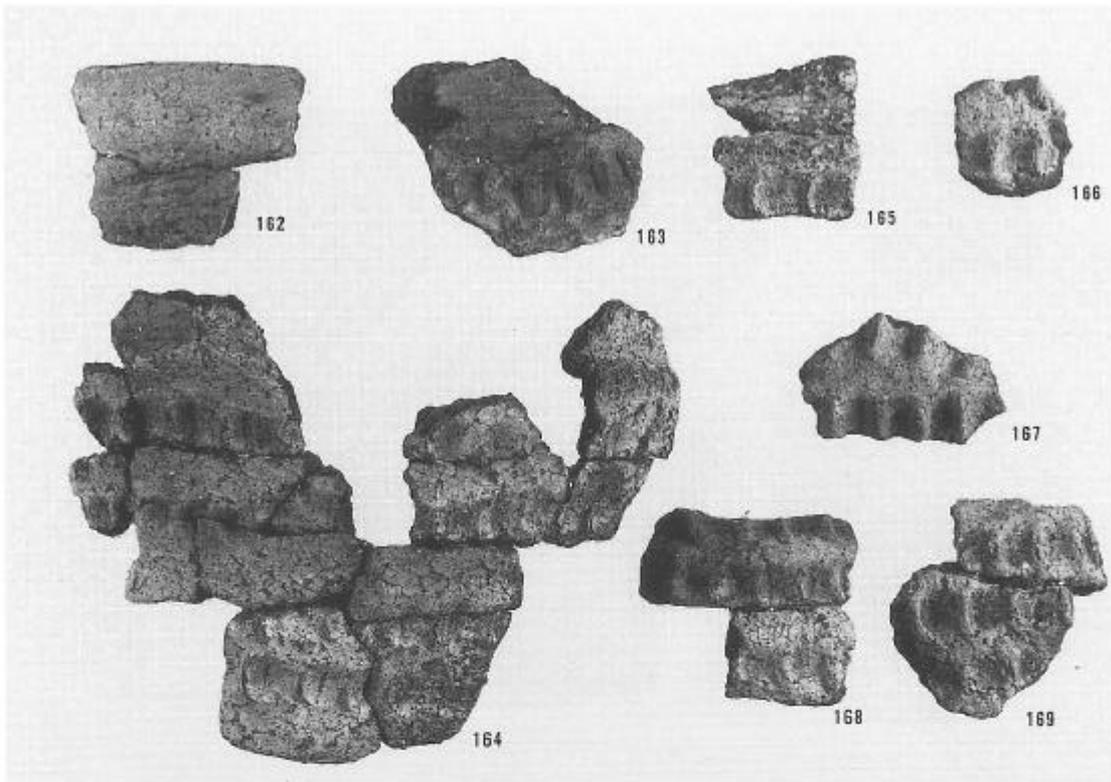


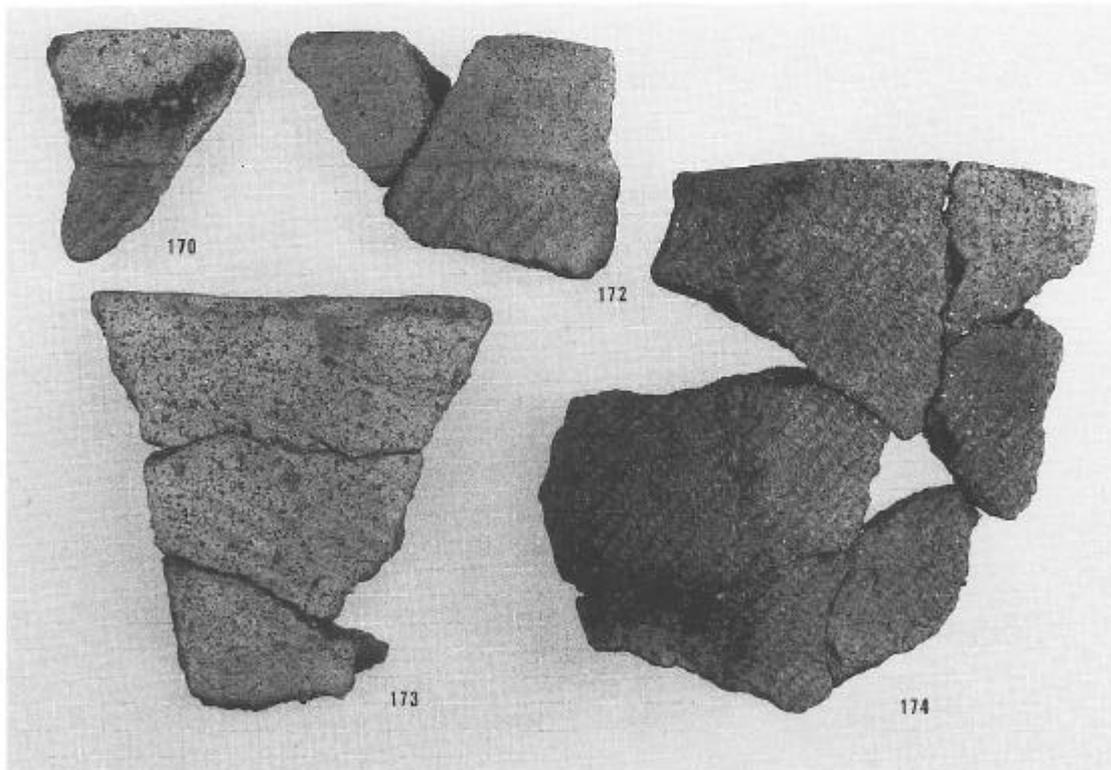
1 遺構外出土遺物(13)



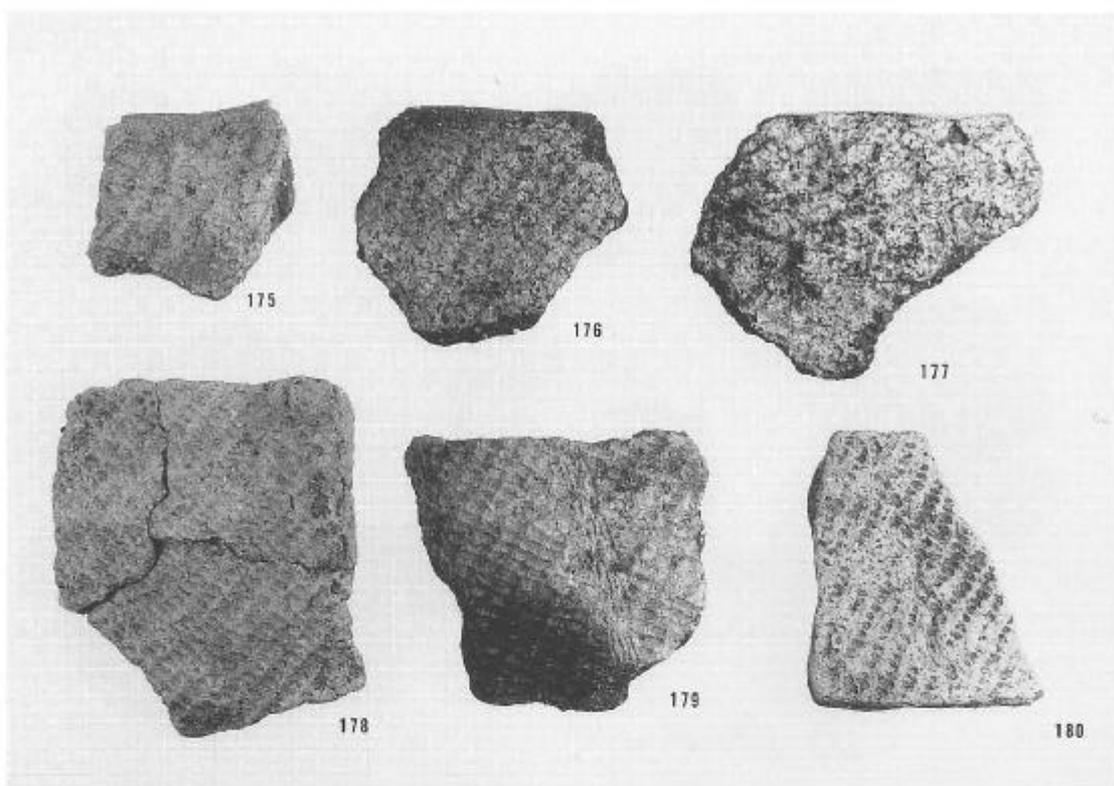
2 遺構外出土遺物(14)



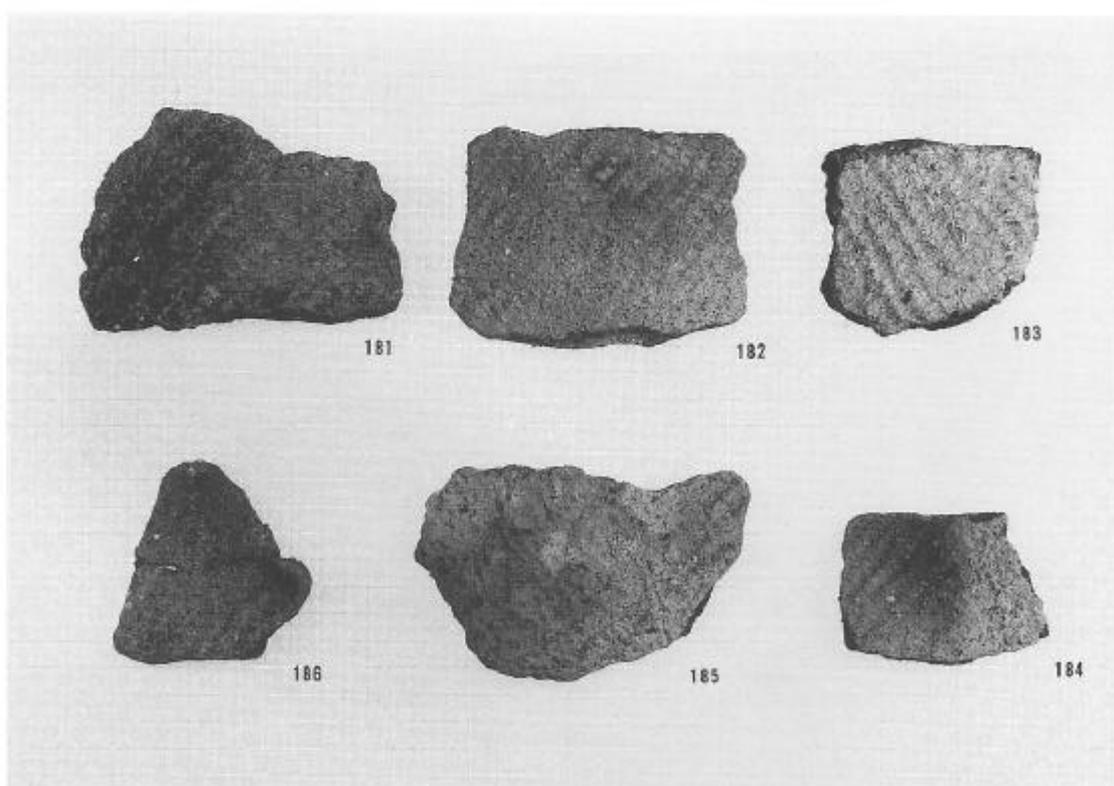
1 遺構外出土遺物(15)



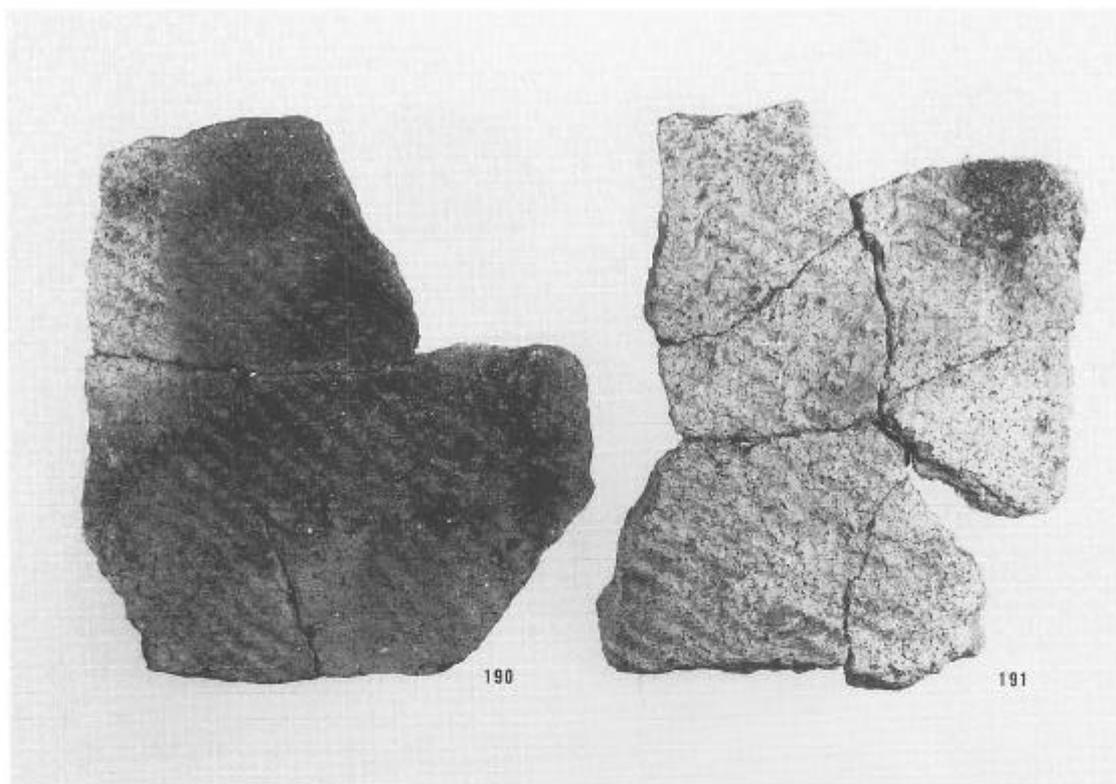
2 遺構外出土遺物(16)



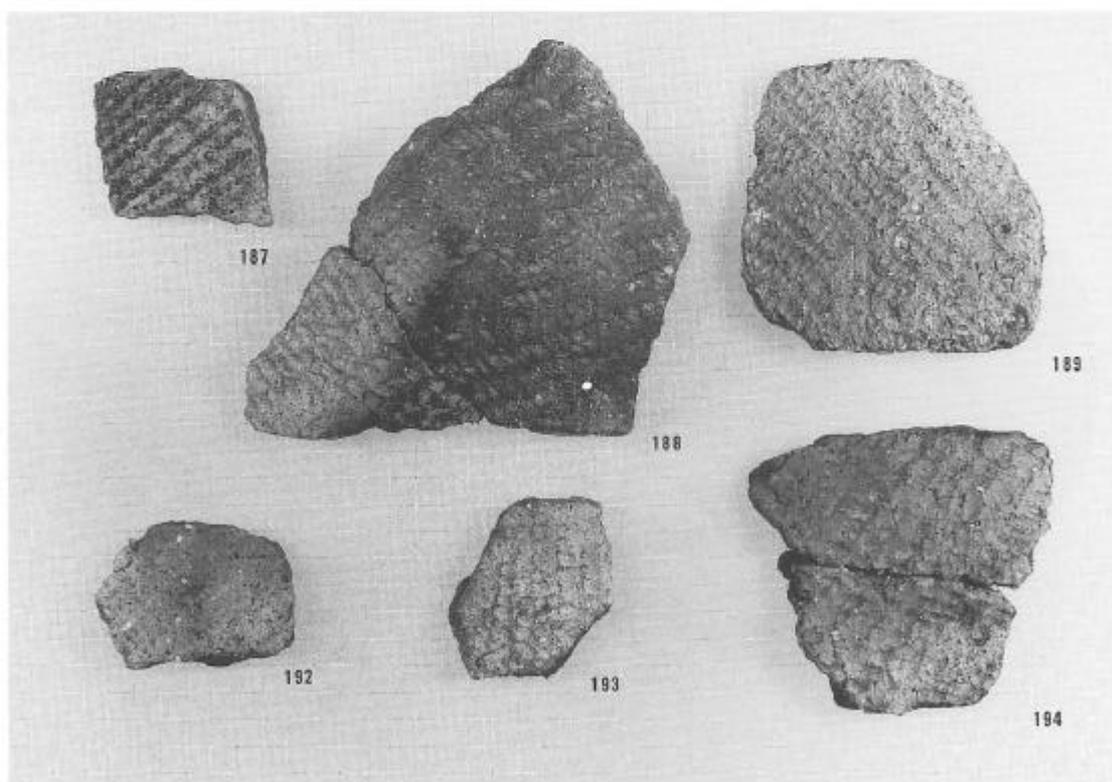
1 遺構外出土遺物(17)



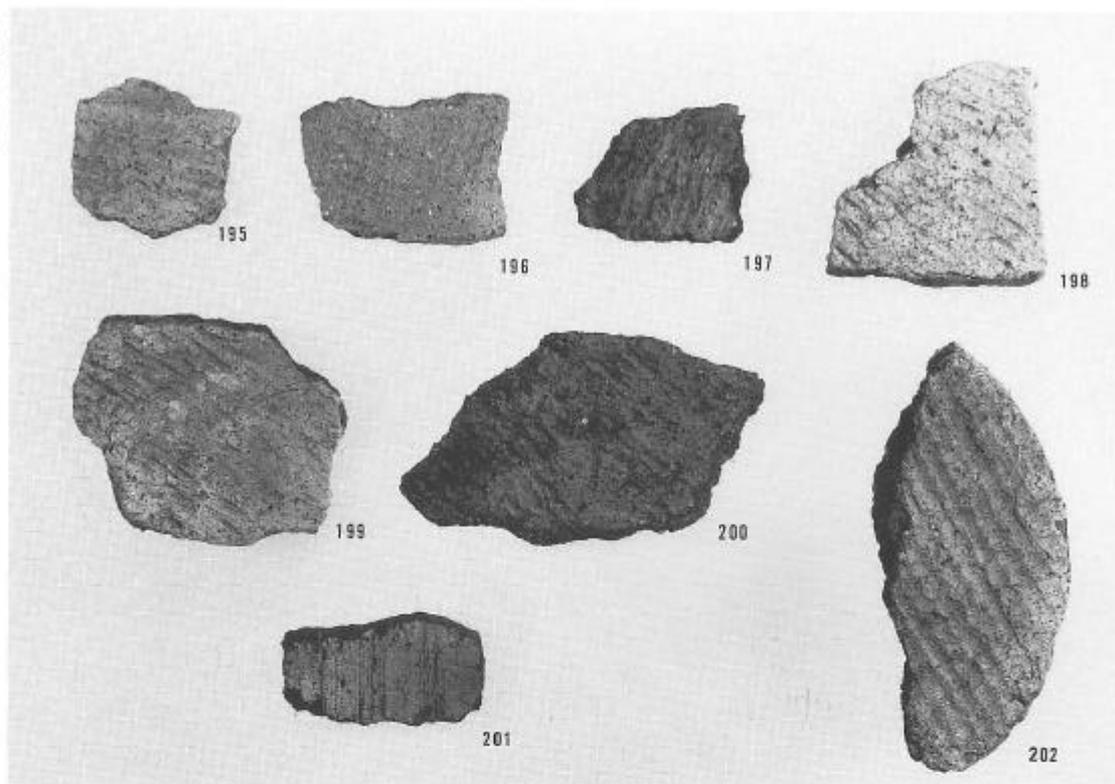
2 遺構外出土遺物(18)



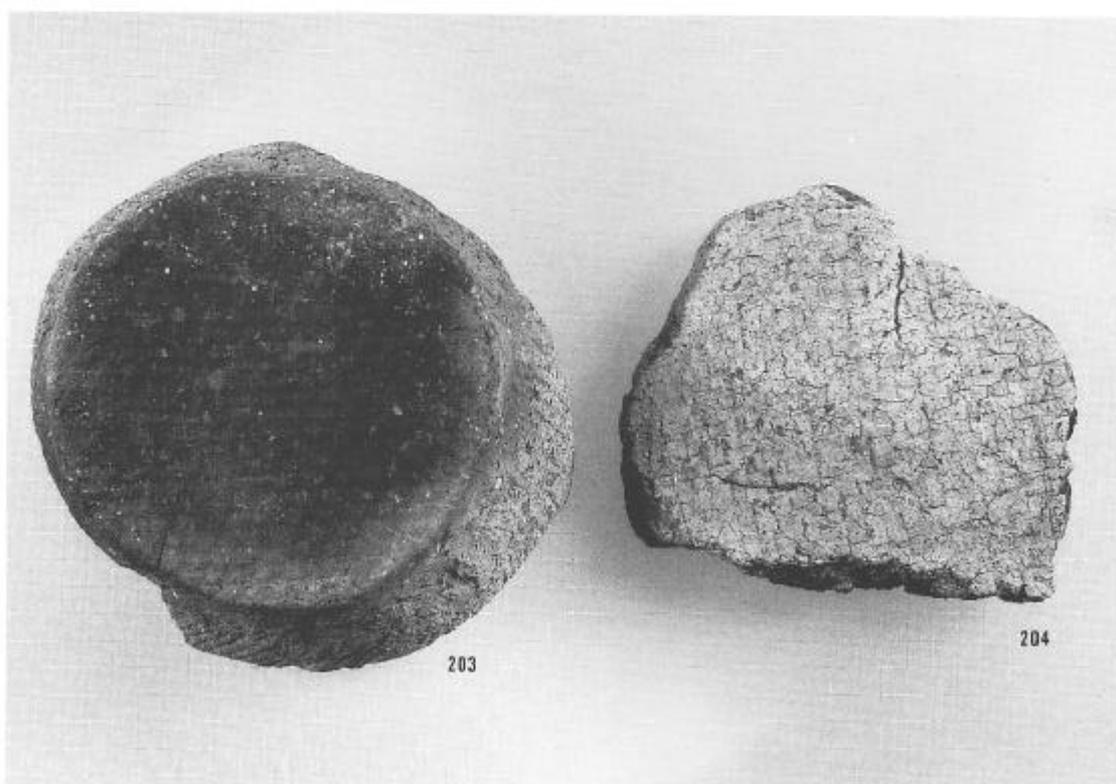
1 遺構外出土遺物(19)



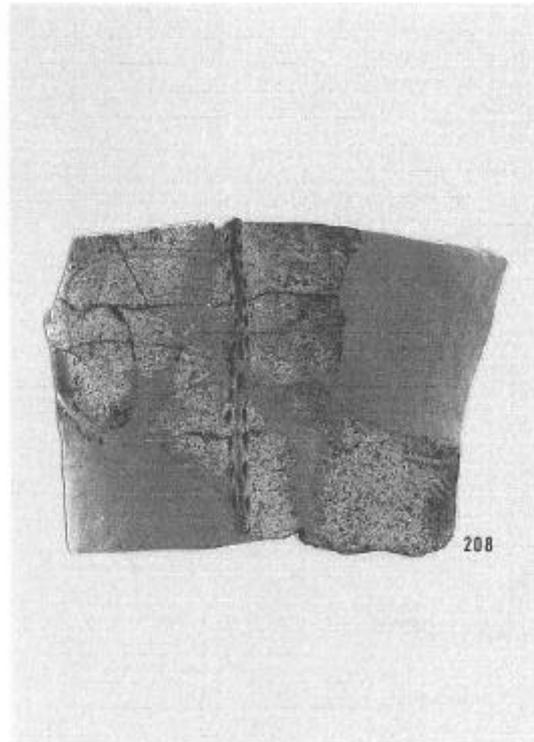
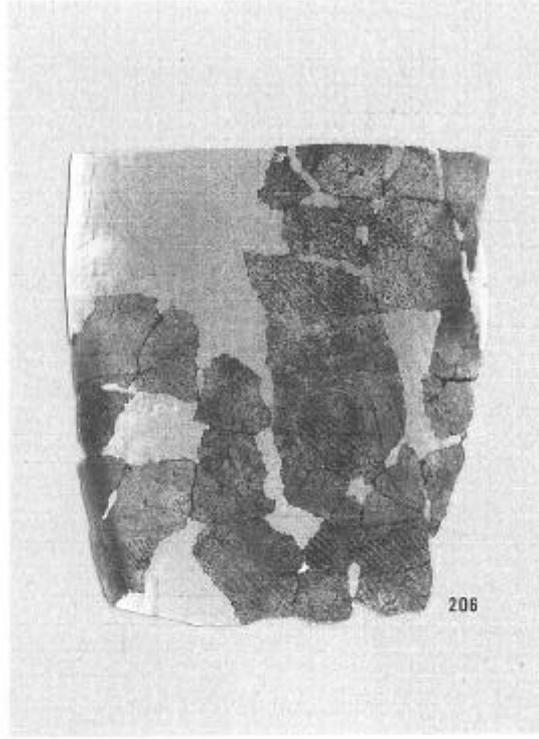
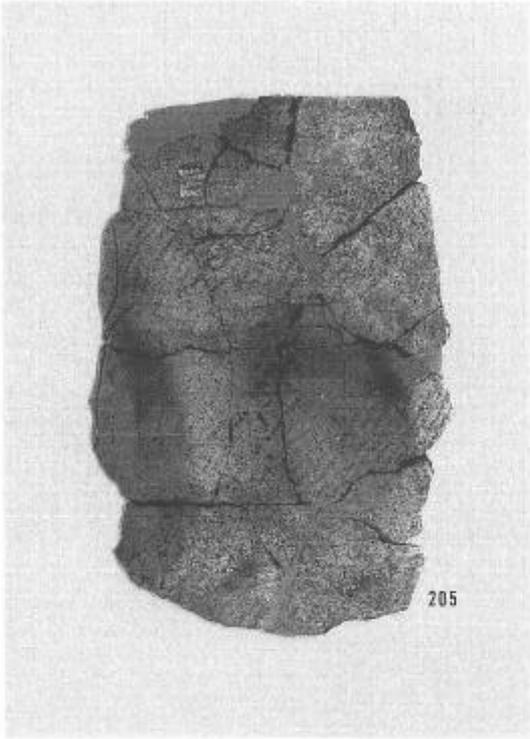
2 遺構外出土遺物(20)



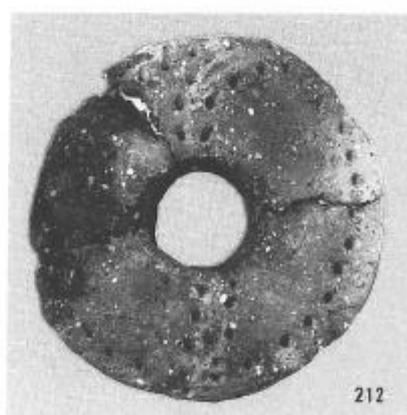
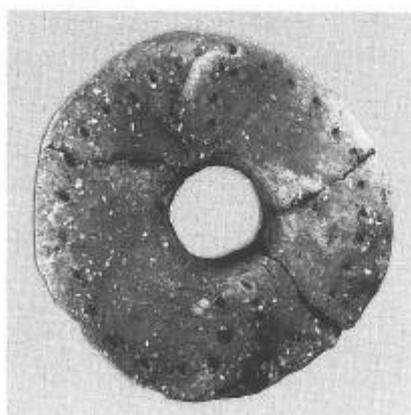
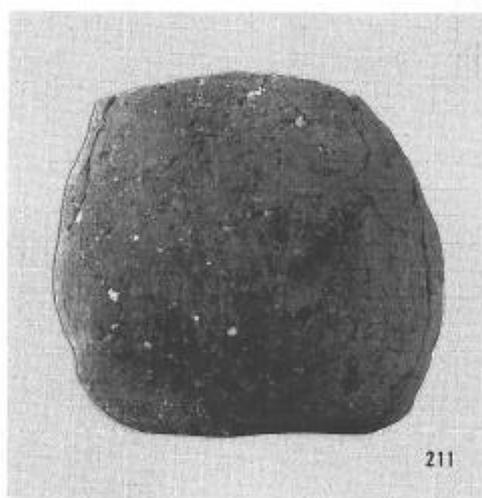
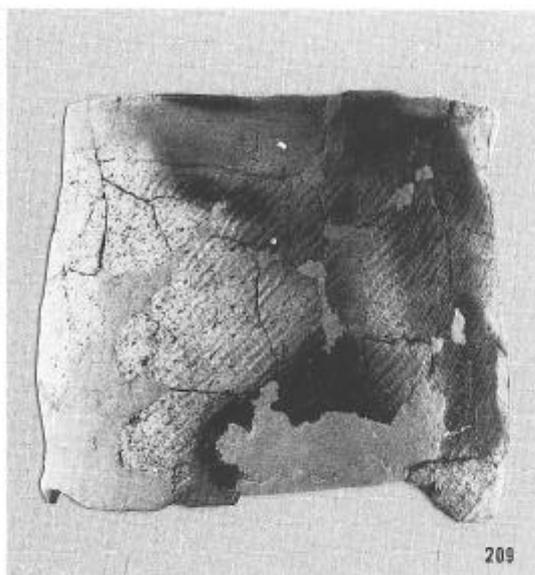
1 遺構外出土遺物(21)



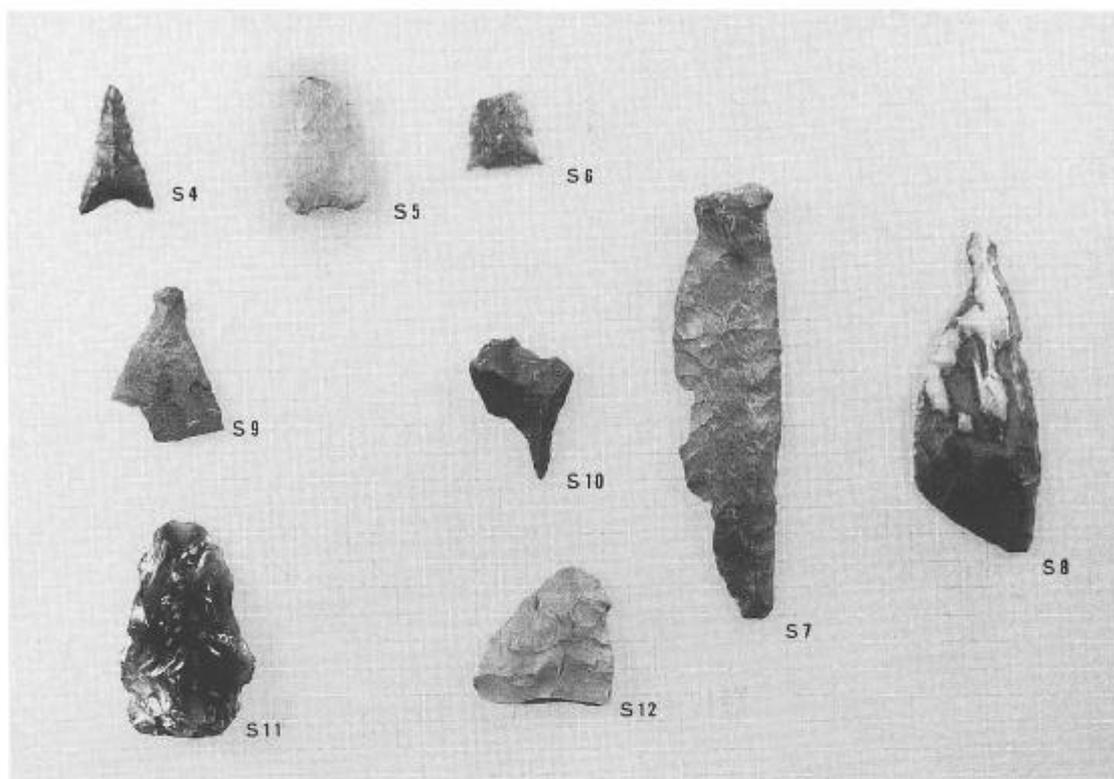
2 遺構外出土遺物(22)



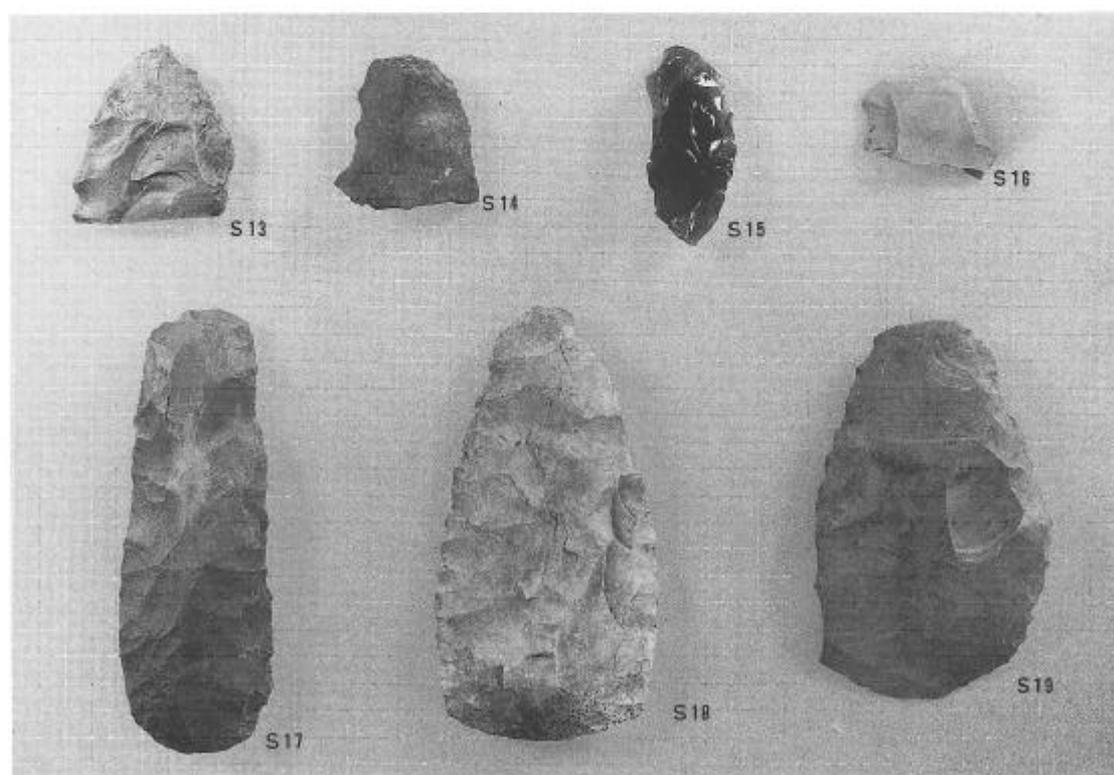
遺構外出土遺物(23)



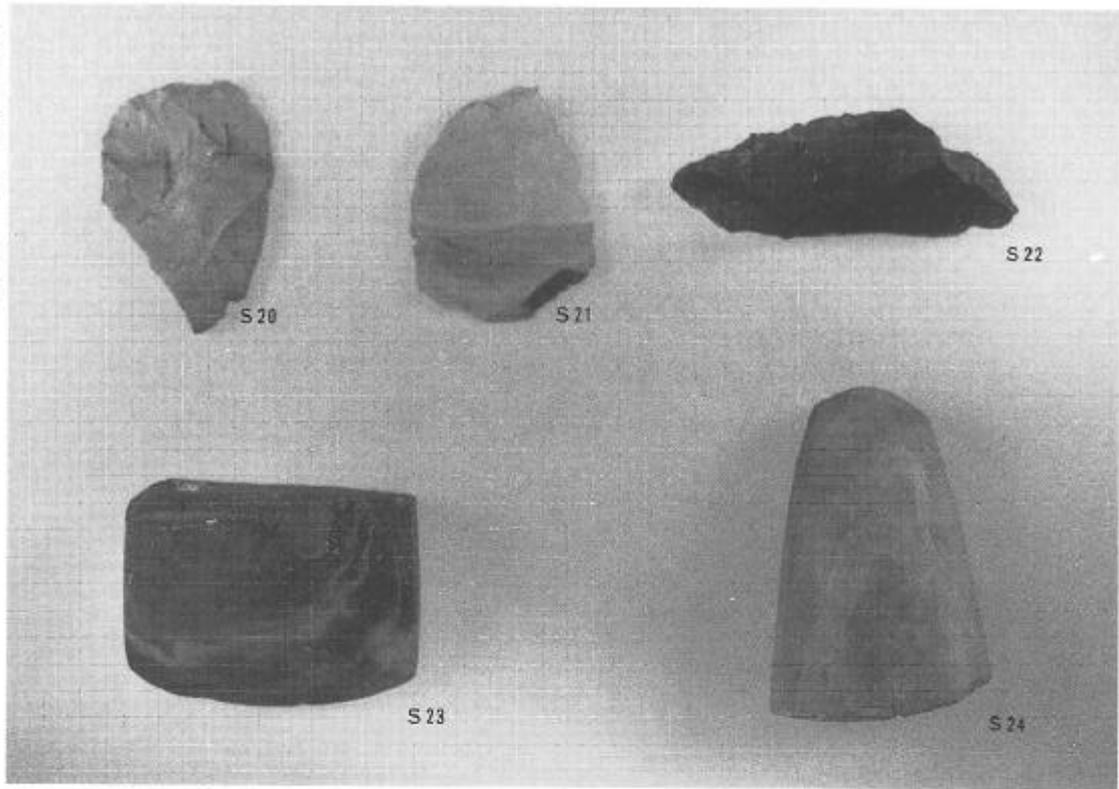
遺構外出土遺物(24)



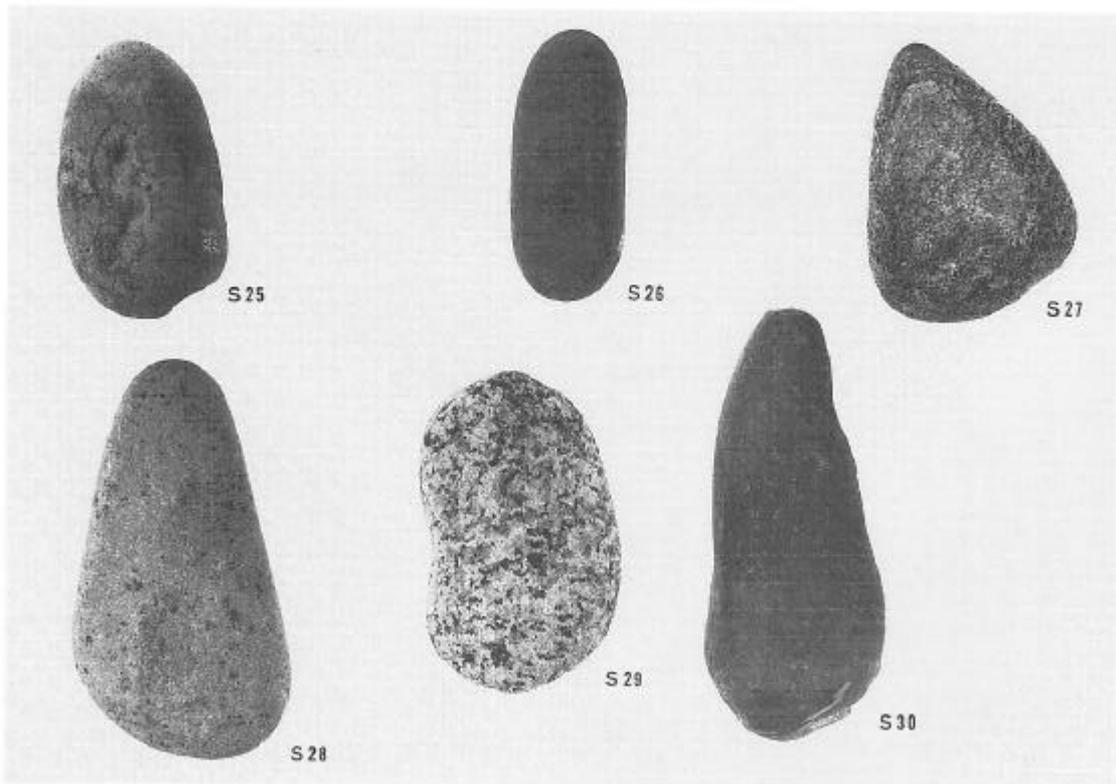
1 遺構外出土遺物(25)



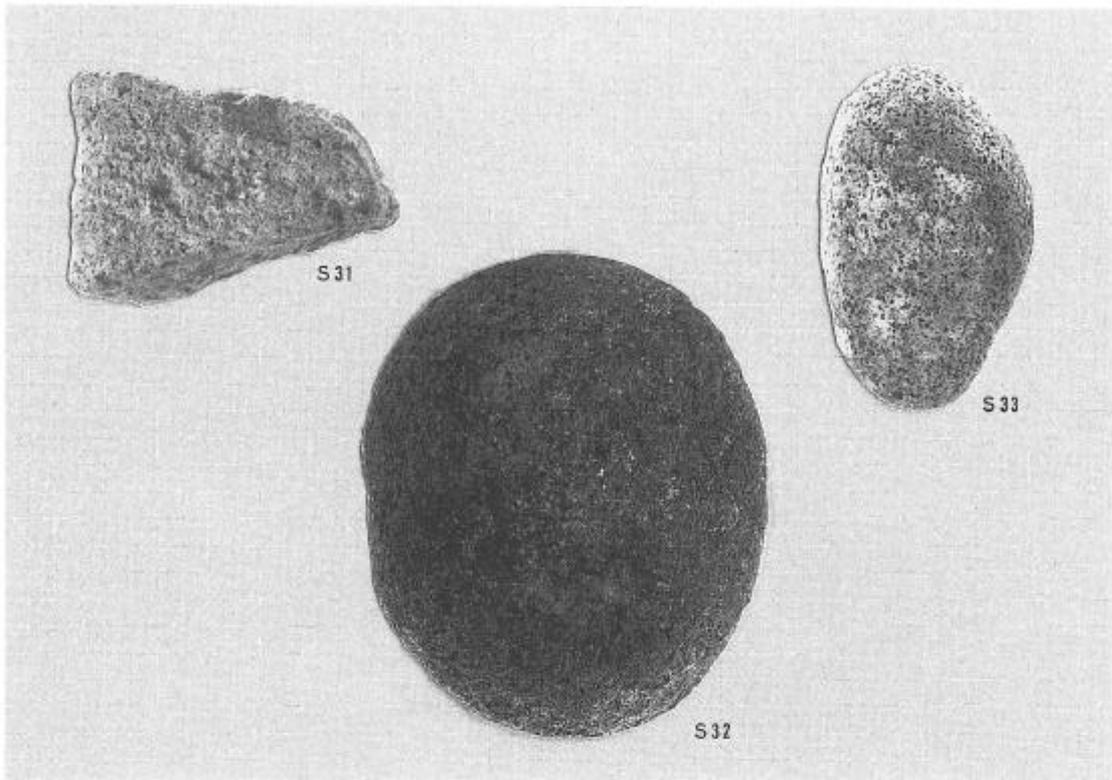
2 遺構外出土遺物(26)



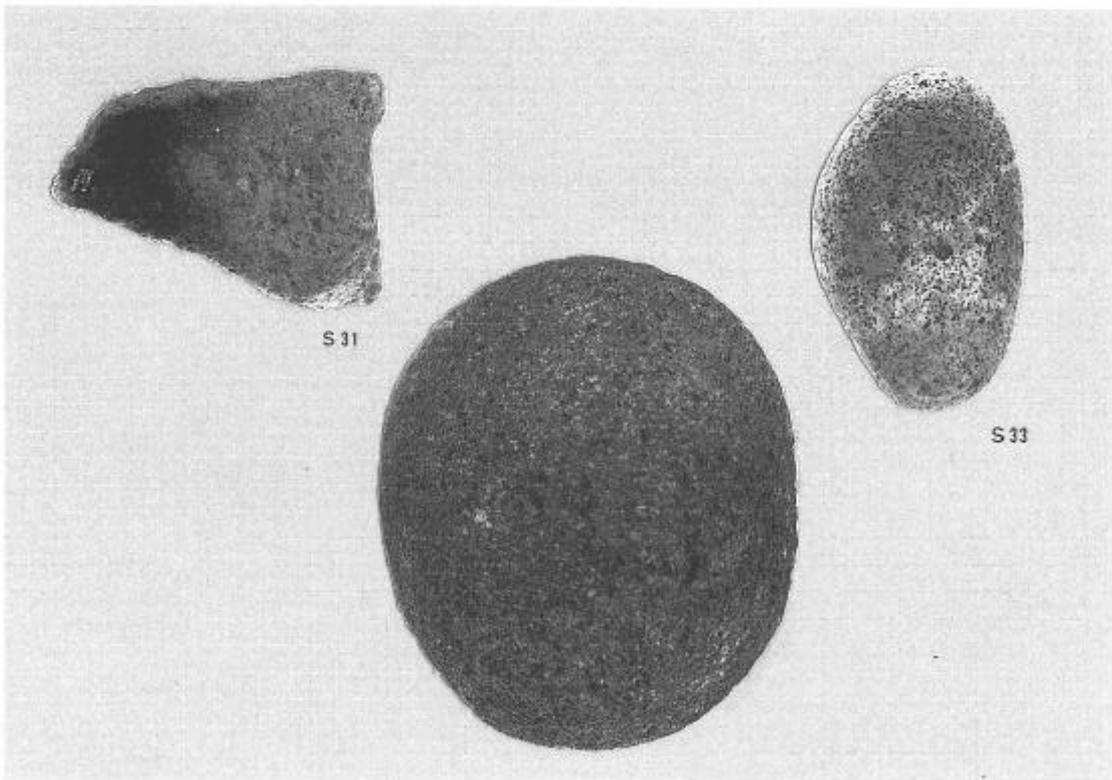
1 遺構外出土遺物(27)



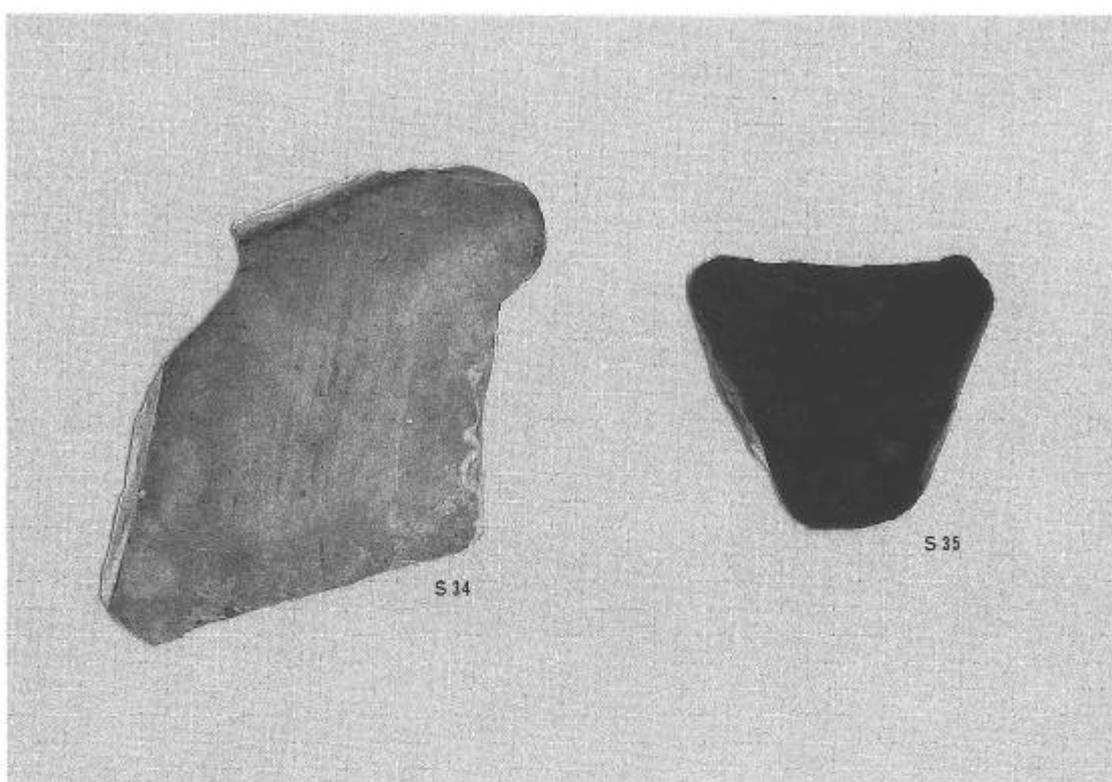
2 遺構外出土遺物(28)



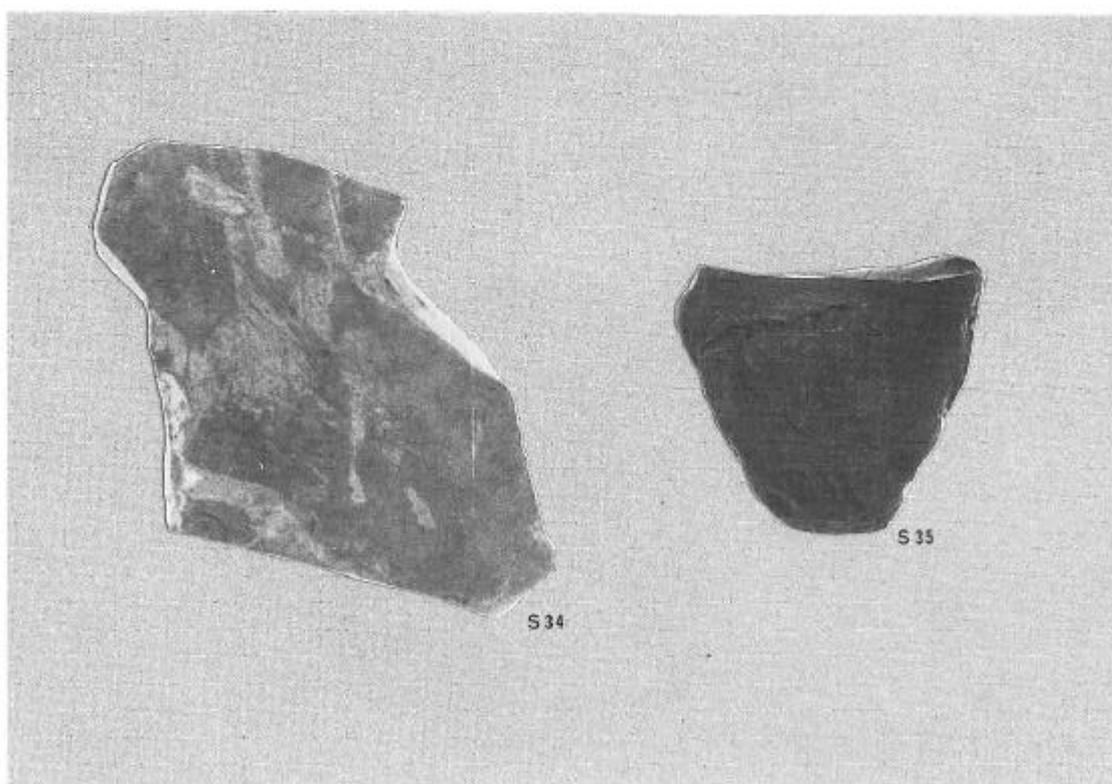
1 遺構外出土遺物(29) 表面



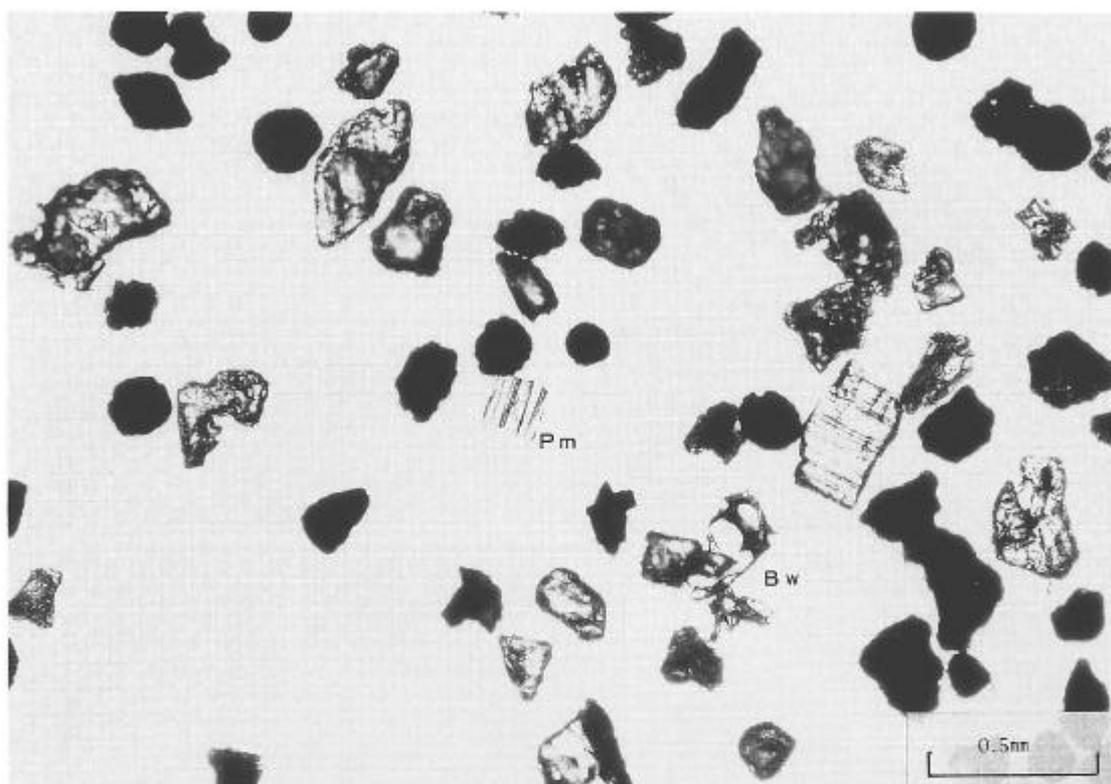
2 同上 裏面



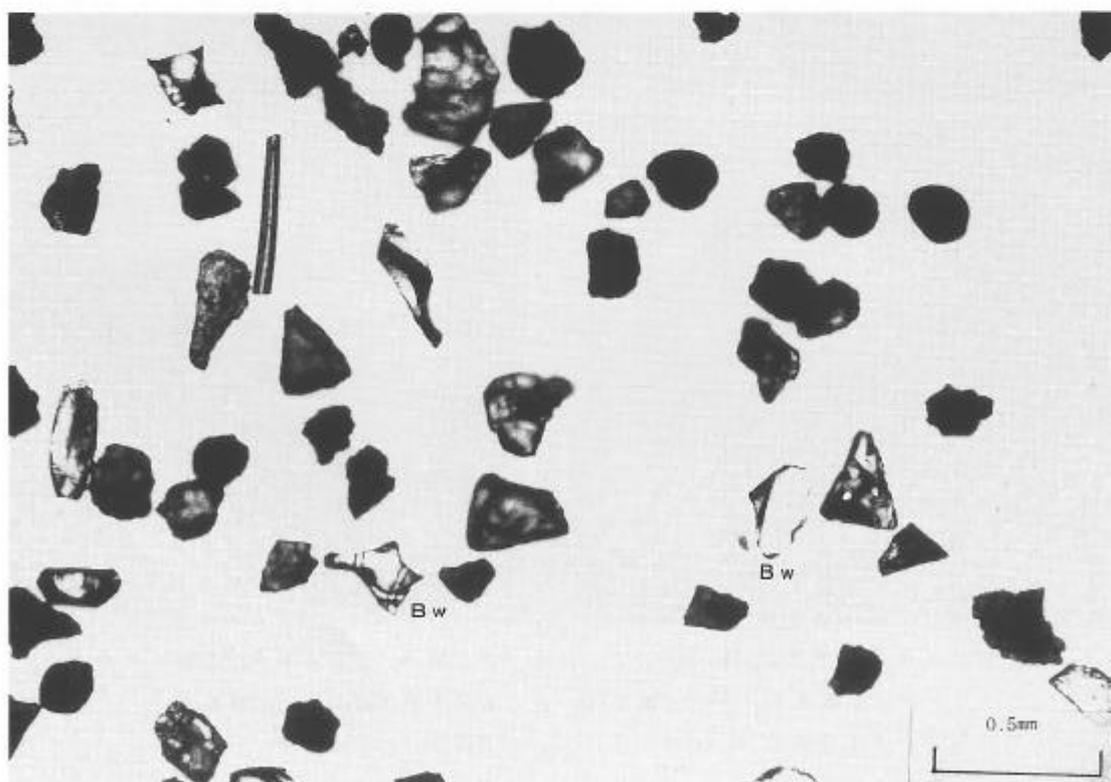
1 遺構外出土遺物(30) 表面



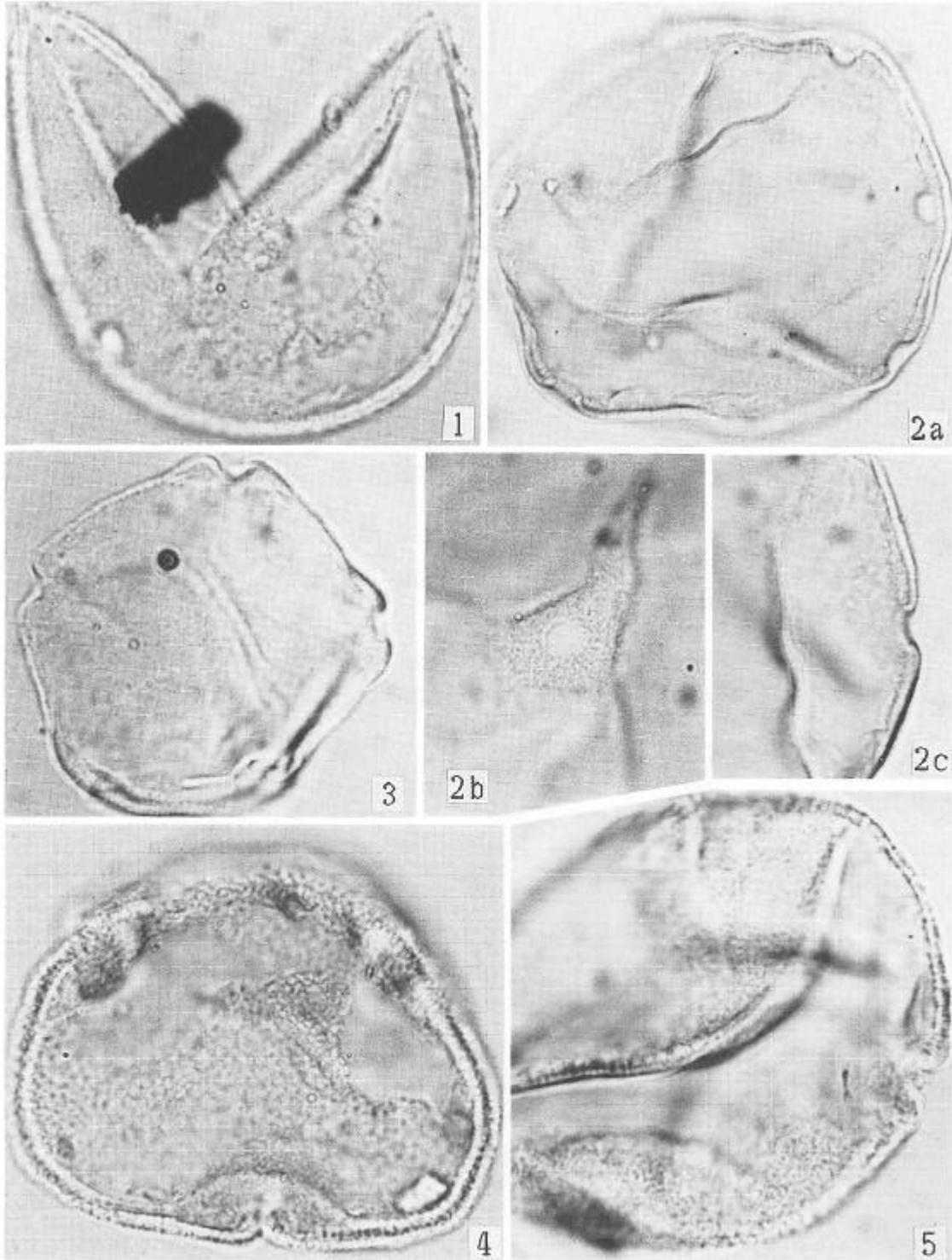
2 同上 裏面



1 No.2に含まれる火山ガラス(Pm:軽石型ガラス Bw:バブル型ガラス)

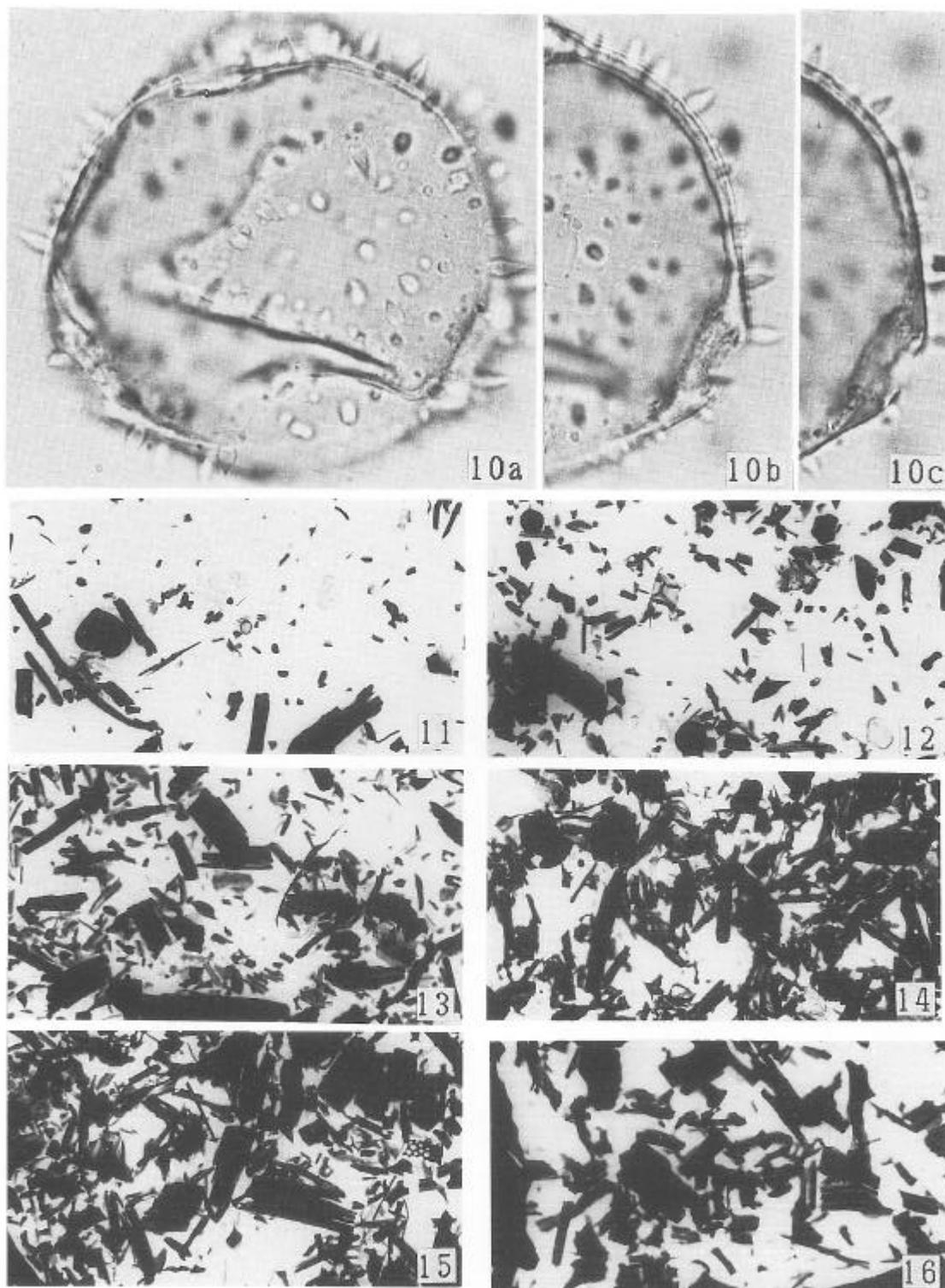


2 No.12に含まれる火山ガラス



1. スギ, No6, P A L, M Y 210 2. クルミ属, No10, P A L, M Y 214
3. ハンノキ属, No10, P A L, M Y 215 4. シナノキ属, No2, P A L, M Y 206
5. ブナ, No2, P A L, M Y 207 [$\times 1,400$ (No2, a $\times 1,120$)]

花粉顕微鏡写真(1)

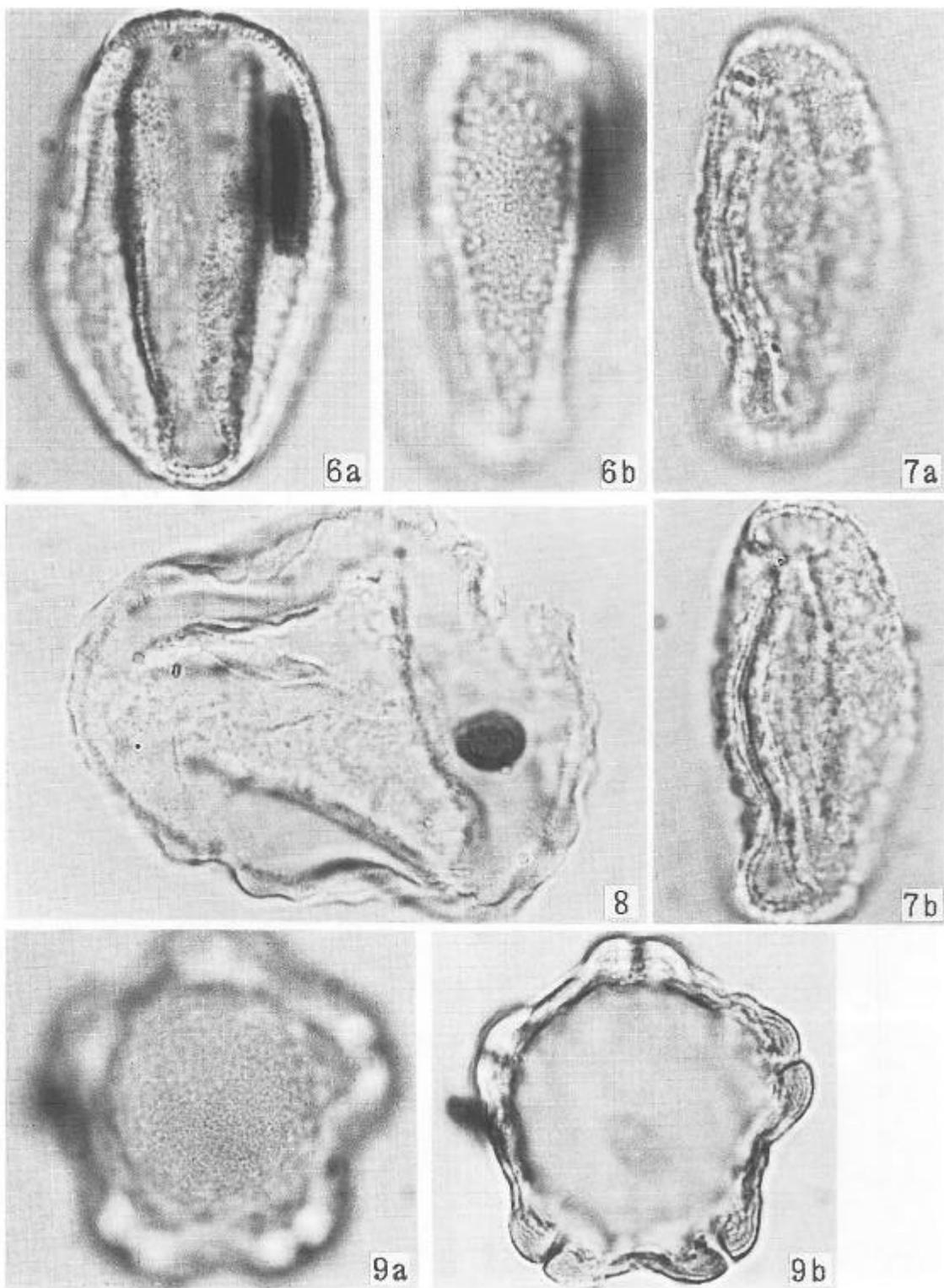


10. タニウツギ属, No6, P A L, M Y 209(×1,120)

11, No1 12, No2 13, No3 14, No5

15, No9 16, No13(11-16 ×140)

花粉頭微鏡写真(2)



6. コナラ亜属, No2, P A L, M Y 205

7. コナラ亜属, No1, P A L, M Y 202

8. ケヤキ属, No1, P A L, M Y 201

9. アリノトウグサ属, No1, P A L, M Y 203

($\times 1,400$)

花粉顕微鏡写真(3)

寺 沢 遺 跡

第1章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

遺跡は、JR奥羽本線刈和野駅から直線で南西約4.3kmに位置し、北方約2kmを蛇行しながら西流する雄物川によって形成された、標高約46～56mの河岸段丘上に立地している。

遺跡の南側は深くて大きな開析谷で、満々と水を湛えた九升田沼となっている。この沼を挟んで対岸の標高60m前後の段丘上には、上野台遺跡が立地している。北側は急峻な斜面となっており、直下の平坦肥沃な水田地帯に続いている。この水田面(沖積地)との比高は約39.3mである。

遺跡の現況は、北端部が杉林の他は畑地である。この中を町道九升田向四号線が東西に走っており、調査区は南北に分断されている。また、遺跡の地形は、北側で標高約55.3m、南側で標高約48.5mの南向きの緩い斜面となっている。

なお、遺跡は昭和40年以前まで雑木林であったが、その後開墾造成されて牧草地となり、さらに耕地整理されて畑地となったところである。

第2節 調査の方法

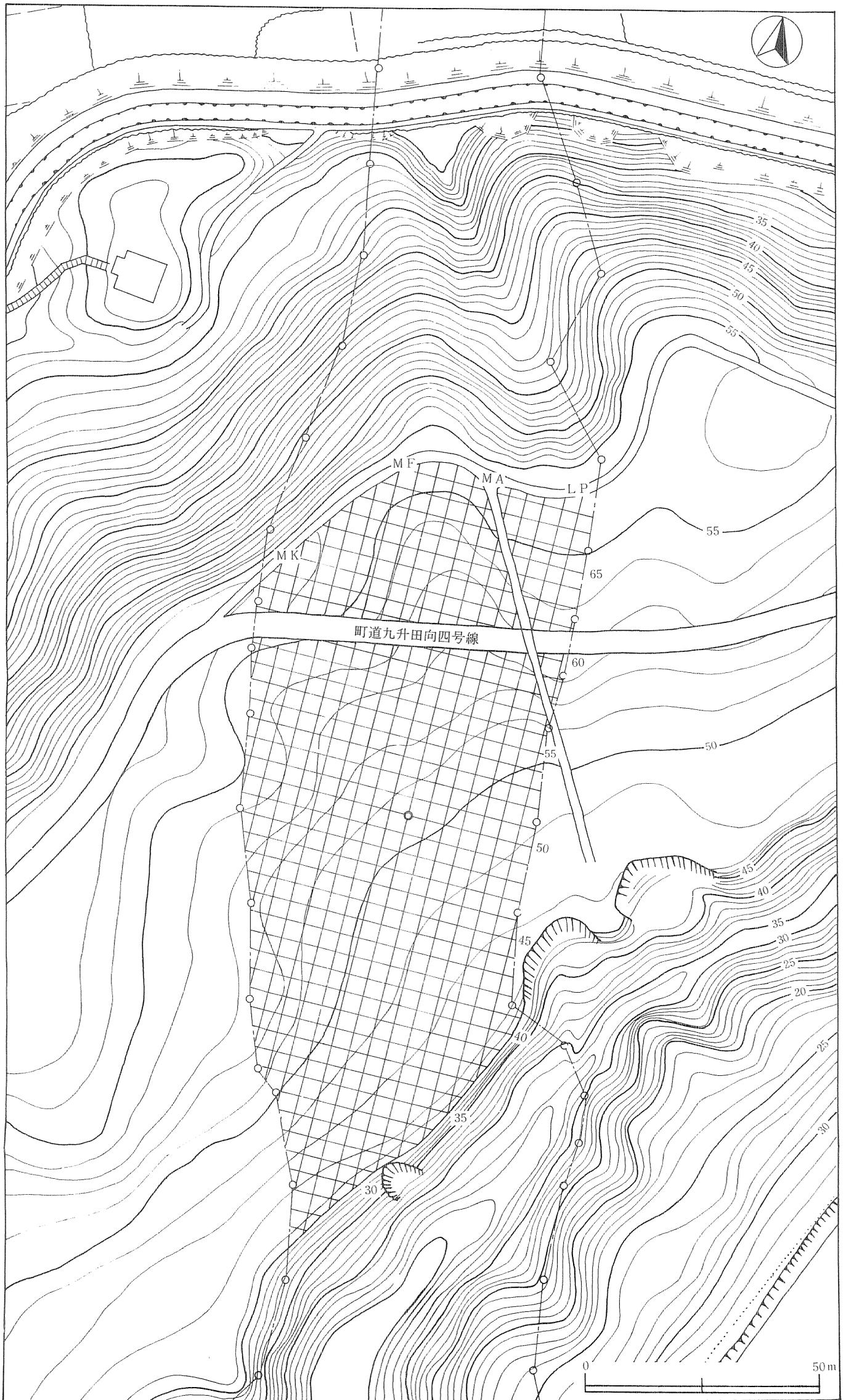
調査は、調査区外にプレハブ設置場所と排土場所を確保できず、調査区内にその場所を求めざるを得なかったため、調査区中心部から幅1～2mのトレンチを南北に入れ、さらにこれと直交するトレンチを東西に設定し、遺構遺物の分布状況と遺跡の基本層序を把握してから全面発掘を行った。また、発掘にあたっては、調査区全域が地表から第Ⅱ層(地山)上面まで浅いため、スコップの使用は、堅い表土を剥ぐ程度とし、使用して掘り下げても10cm位の深さで止めて、以下は主にジョレンと移植ベラで掘り下げることにした。遺構等の実測は、各グリッド杭を利用した遣り方測量(縮尺20分の1)、調査区範囲は平板測量(縮尺500分の1)を行い、これらの遺構平面図と範囲図から遺構配置図など必要な図面を作成した。

第3節 調査の経過

4月22日、遺構・遺物の分布状況等を把握し、プレハブ設置場所と排土場所を選定するため、

町道北側、南側調査区に合計27本のトレンチを設定して調査を開始した。翌23日、町道北側でS K01、同南側でS I02、S K03を検出。同日、北側調査区の北部と一段高い東部に入れたトレンチを拡張してほぼ全面を調査した。その結果、遺構・遺物が検出されなかったため、東部をプレハブ設置場所に充て北部を排土場所にして、北側調査区のトレンチ排土をここに除去しながら拡張した。24日、北側調査区中央部付近から、石冠、石匙などが出土した。25日、北側調査区西部の表土を全面除去し遺構確認精査を行ったが、遺構・遺物は検出されなかったので排土場所とした。27日、南側調査区北西部から中央部にかけて表土除去と遺構精査を行った。28日、南側調査区でS K04を検出したが、同区北西部の遺構確認精査では、遺構・遺物が検出されず器材収納プレハブ設置場所に充てた。30日、北側調査区中央部でS K05～07の土坑3基を検出した。本日までの一週間の調査で、プレハブ設置場所と排土場所を調査区内に確保することができた。しかし、排土場所は北側調査区北部・西部だけで充分ではないと判断、同区東部を除く北側全域を排土場所とするため、同区中央部と検出した遺構を早期に調査することにした。5月1日から、北側調査区に主力をおいて、両調査区の全面発掘調査に入った。全面表土除去と遺構確認精査を開始。北側調査区中央部でS K08～11の土坑4基を検出した。6日、北側調査区の表土除去を終えた。南側調査区でS K12を検出した。翌7日、北側調査区の遺構確認精査を終了。この結果、北側調査区で検出した遺構は土坑8基であった。同日、グリッド杭打設開始(5月9日グリッド杭打設完了)。南側調査区でS K13を検出した。8日、全棟プレハブ設置完了。14日、北側調査区的全調査を終了し、同区プレハブ設置場所を除く全区域を排土場所とした。なお、S K09・12は遺構でないことが判明し欠番とした。

18日、S I02の調査を開始した。20日、南側調査区でS K14～16の土坑を検出した。S K14とS K15は重複していた。25日、S K03・16は攪乱と判明し欠番とした。27日、南側調査区でS K17～19の土坑3基を検出した。翌日、同区でS K20を検出。6月2日、S K21・22を検出。3日、S I23を検出。5日、S K22は当地が昭和40年代に開墾整地された際の削平痕跡であり欠番とした。S K24・25を検出した。8日、S K24・25は木の根跡であったため欠番とした。10日、S K26、翌11日にはS K27を検出したが、S K26・27はともに攪乱と判明し欠番とした。旧沢部分でS E28井戸状遺構を検出した。22日、精査と各遺構の掘り下げを終了。翌23日、全遺構の実測と写真撮影および発掘後の調査区全景の写真撮影を終え、発掘器材等を撤収して寺沢遺跡の発掘調査を終了した。



第1図 地形・グリッド配置図

第2章 調査の記録

第1節 遺跡の層序

調査区全域は、過去に行われた開墾や耕地整理によって、遺構確認面の褐色土(地山)も深く削平を受けている。このため盛土整地後の耕作土が主層であり、地表から褐色土面までの深さは平均20cm前後と浅かった。遺跡の層序は、町道北側調査区のMDラインと、同南側調査区のMAラインに入れた南北トレンチの東壁土層から、以下の通り観察できた。

第Ⅰ層 黒褐色土(10YR2/3)：層厚5～37cmの耕作土(表土)である。

第Ⅱ層 褐色土(10YR4/6)：大小礫を含み、よくしまった粘質の地山である。

第2節 検出遺構と遺物

本調査では、縄文時代の土坑11基、平安時代の竪穴住居跡2軒、土坑5基、近世以降の井戸状遺構1基の計19遺構を第Ⅱ層上面で検出した。しかし、検出遺構は、土地造成の際の削平を受けており、遺存状態の良いものはなかった。遺物は第Ⅰ層及び遺構覆土層中から縄文時代の土器と石器、平安時代の土師器と須恵器などが出土した。

1 縄文時代

(1) 検出遺構と出土遺物

① 土 坑

SK01(第2・3・5図、図版7・16)

ME64グリッドで確認された。平面形は長軸(北東-南西)1.43m×短軸(北西-南東)1.29mの楕円形を呈し、確認面からの深さ0.20mである。底面は平坦であるが、南東から北西へ傾斜する長軸88cm×短軸59cmの凹みをもっている。壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は1層黒褐色土、2層褐色土で、両層ともよくしまっている。遺物は1層下部から縄文土器片50点、石錐1点、スクレイパー1点、剥片・碎片143点(うち剥片10点と碎片6点は火熱を受けている)と炭化したクルミ殻の碎片が若干出土した。なお、土器はほとんどが細片で、その上磨滅が著しく文様が不鮮明なため図示できなかったが、胎土に繊維を含み軽い土器である。

S1はつまみ部を欠損している石錐である。先端と両側縁を押圧剥離し錐部を作出している。

S 2はスクレイパーで、主要剥離面の左側縁を押圧剥離して刃部を作出している。

SK04(第2・3図、図版7)

MC56・57、MD56・57グリッドにかけて確認された。平面形は長軸(北西-南東)0.84m×短軸(北東-南西)0.67mの楕円形を呈し、確認面からの深さ0.28mである。底面は丸みを帯びており、壁はやや緩やかに立ち上がっている。覆土は1層黒褐色土、2層黒褐色土、3層黄褐色土、4層褐色土であり、全層ともよくしまっている。遺物は出土しなかった。

SK05(第2・3・6図、図版7・8・16)

ME60、MF60グリッドにかけて確認された。平面形は長軸(北西-南東)0.99m×短軸(北東-南西)0.89mの楕円形を呈し、確認面からの深さ0.15mである。底面はほぼ平坦であり、北東側から南西側へ僅かに傾斜している。壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は1層黒褐色土、2層褐色土で、両層ともよくしまっている。遺物は1層中の土坑中央部から西壁中央寄りにかけて縄文土器片、石鏃1点、石錐2点、スクレイパー1点、剥片・碎片245点(うち剥片8点と碎片23点は火熱を受けている)と炭化したクルミ殻の碎片が1点出土した。なお、土器はもろくて磨滅しているため、復原できた部位を図示掲載した。

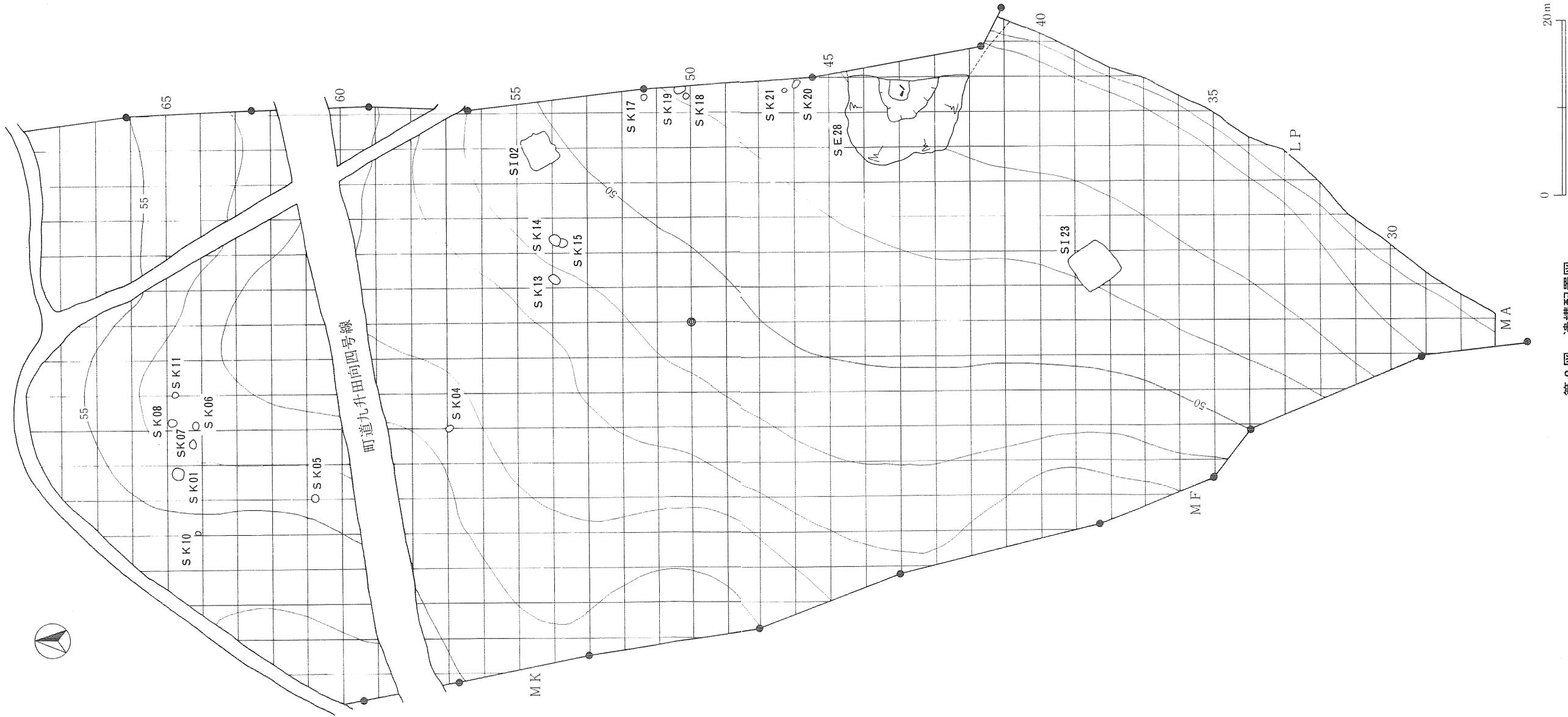
1は深鉢形土器の頸部から体部上半の破片である。頸部にはRL縄文原体の側面圧痕が施文されている。体部にはRL縄文が横位回転施文されており、その内面には工具による横ナデの条痕が認められる。胎土には繊維を含んでいる。S3は石鏃で、両面とも全面二次加工されているが未製品である。S4は石錐で、三角形状に突出する両側縁に押圧剥離を施して錐部を作り出している。S5・6はスクレイパーで、S5は二等辺三角形状を呈し、その尖端部に向かう両側縁を押圧剥離して刃部としている。S6は主要剥離面を残し背面に調整を加えて、その先端に刃部を作出している。また、火熱を受けて、両面の縁辺が一部剥落している。

SK06(第2・3図、図版8)

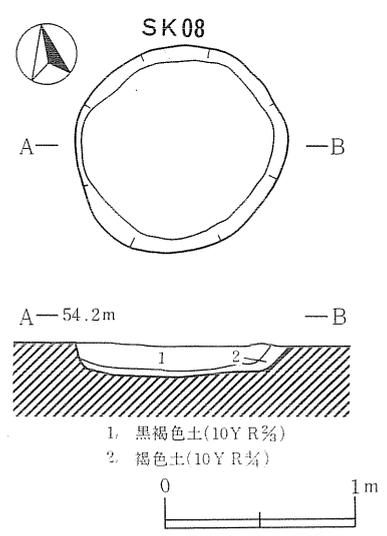
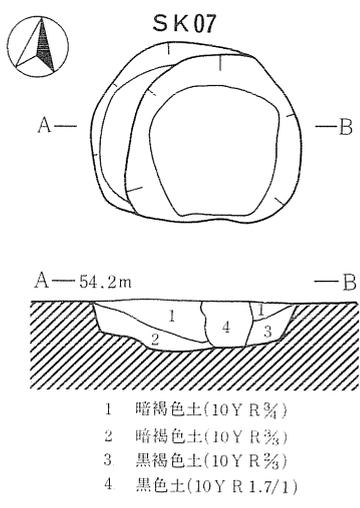
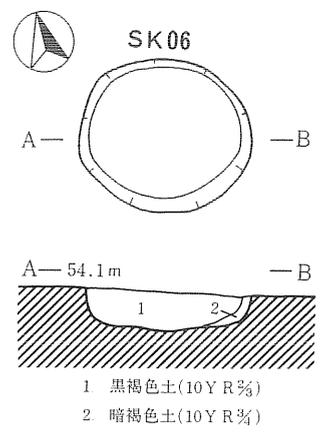
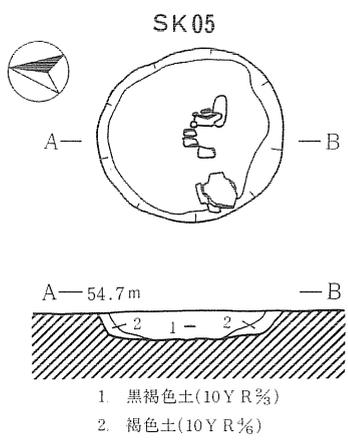
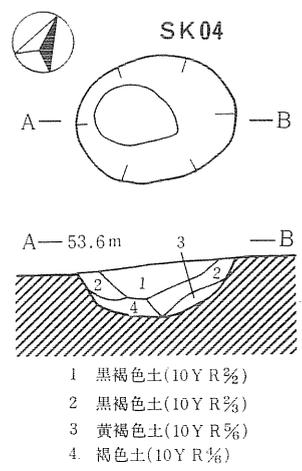
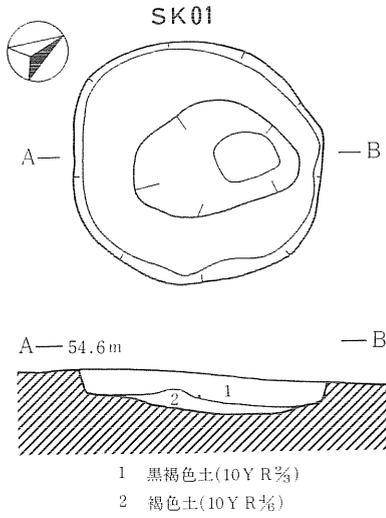
MC64グリッドで確認された。平面形は長軸(北西-南東)0.90m×短軸(北東-南西)0.81mの楕円形を呈し、確認面からの深さ0.20mである。底面は中央部が僅かに凸凹しているが、ほぼ平坦である。壁はやや内湾気味に立ち上がっている。覆土は1層黒褐色土、2層暗褐色土で、両層ともよくしまっている。遺物は出土しなかった。

SK07(第2・3図、図版9)

MD64グリッドで確認された。平面形は長軸(北西-南東)1.13m×短軸(北東-南西)0.97mの楕円形を呈し、確認面からの深さ0.28mである。底面は西側が一段高くなっているが、両底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は1層暗褐色土、2層暗褐色土、3層黒褐色土、4層現代の杭跡であり、全層ともややしまりが無い。遺物は2層中から剥片・碎片18点(うち剥片2点と碎片3点は火熱を受けている)が出土した。



第2図 遺構配置図



第3図 SK01・04・05・06・07・08土坑

寺沢遺跡

SK08(第2・3図、図版9)

MC64グリッドで確認された。平面形は長軸(北東-南西)1.15m×短軸(北西-南東)1.06mの楕円形を呈し、確認面からの深さ0.16mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は1層炭化物を少量含む黒褐色土、2層褐色土で、両層ともよくしまっている。遺物は1層中から剥片2点が出土したが、火熱は受けていない。

SK10(第2・4図、図版9)

MF64グリッドで確認された。平面形は径約0.57mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さ0.10mである。底面はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は炭化物を少量含む暗褐色土であり、よくしまっている。遺物は出土しなかった。

SK11(第2・4図、図版10)

MB64、MC64グリッドにかけて確認された。平面形は長軸(北西-南東)0.75m×短軸(北東-南西)0.70mの楕円形を呈し、確認面からの深さ0.21mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は1層黒褐色土、2層褐色土で、両層ともよくしまっている。遺物は出土しなかった。

SK13(第2・4・6図、図版10・16)

LS53・54グリッドにかけて確認された。平面形は長軸(北東-南西)1.44m×短軸(北西-南東)0.94mの楕円形を呈し、確認面からの深さ0.24mである。底面は南側が若干高く、東側は木の根の攪乱で凹んでいる。壁は緩やかに立ち上がっており、木の根の攪乱で西側を一部欠如している。覆土は1層炭化物を若干含む黒褐色土、2層暗褐色土、3層褐色土であり、全層ともややしまりがいい。遺物は縄文土器片が1層中から1点出土した。

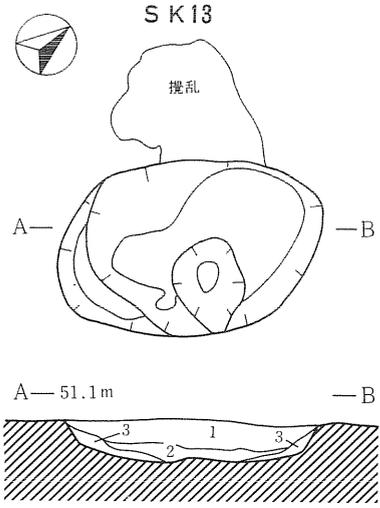
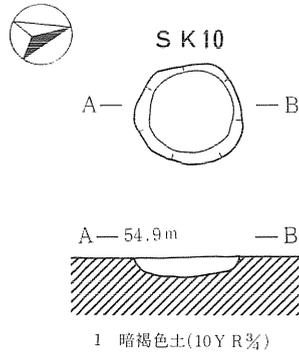
2は深鉢形土器の体部の破片である。その器面にはLR縄文が横位回転施文されている。

SK14(第2・4図、図版10)

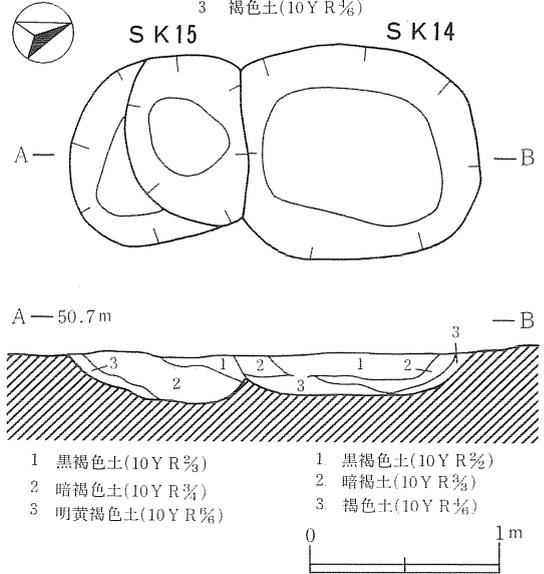
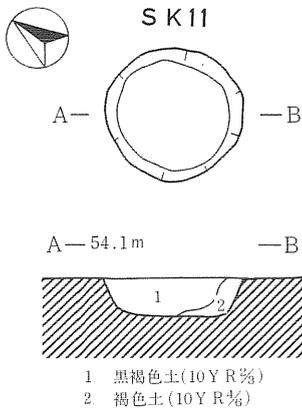
LR53・54グリッドにかけて確認され、SK15の南側を切っている。平面形は長軸(北東-南西)1.40m×短軸(北西-南東)1.16mの楕円形を呈し、確認面からの深さ0.22mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は1層黒褐色土、2層暗褐色土、3層褐色土であり、全層ともよくしまっている。遺物は出土しなかった。

SK15(第2・4図、図版10)

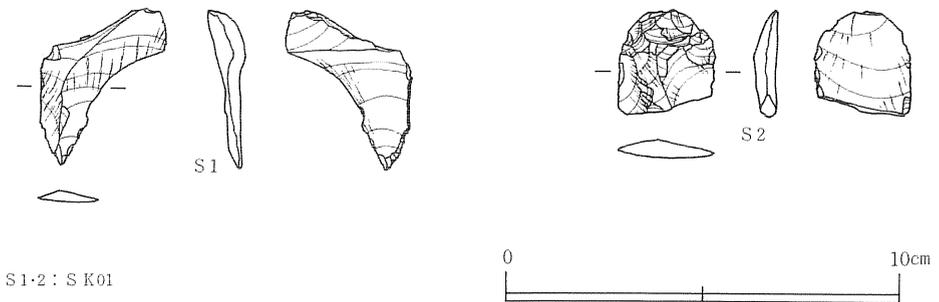
LR53グリッドで確認され、SK14に北側を切られている。平面形は楕円形を呈すると思われる。残存部の長軸(北西-南東)1.15m×短軸(北東-南西)1.03mで、確認面からの深さ0.25mである。底面は南側が若干高く、北側へ傾斜している。壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は1層黒褐色土、2層炭化物を少量含む暗褐色土、3層明黄褐色土であり、全層ともよくしまっている。遺物は出土しなかった。



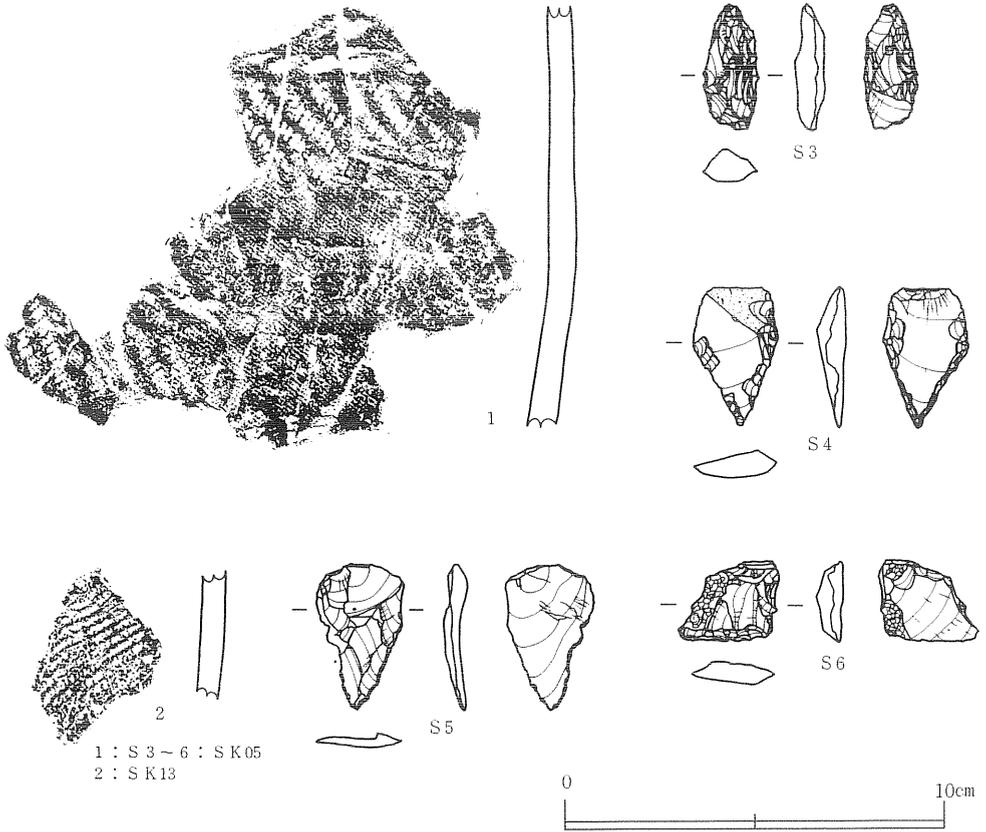
- 1 黒褐色土(10Y R $\frac{3}{4}$)
- 2 暗褐色土(10Y R $\frac{3}{4}$)
- 3 褐色土(10Y R $\frac{3}{4}$)



第4図 S K 10・11・13・14・15土坑

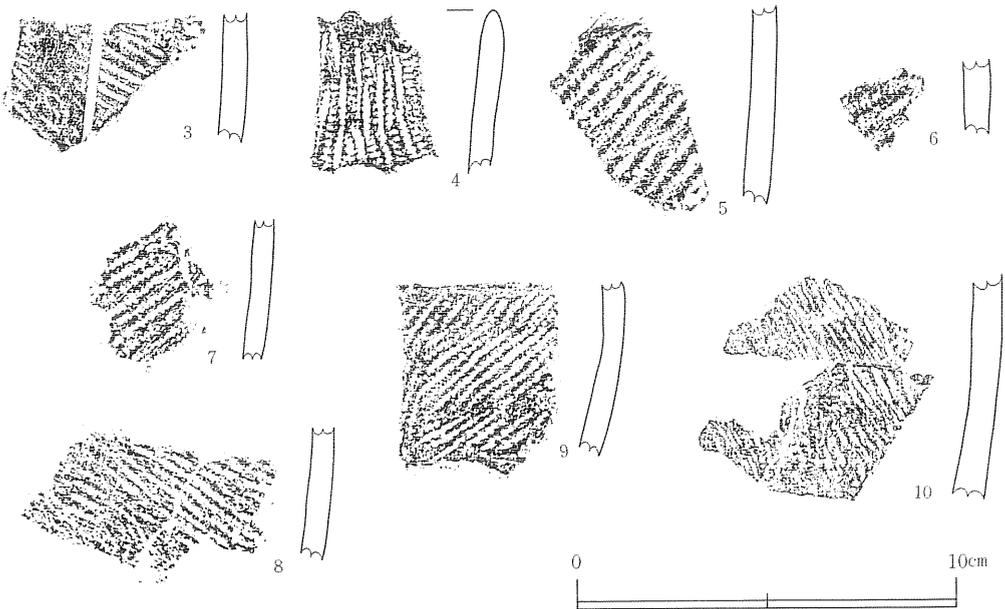


第5図 遺構内出土遺物(1)



1 : S 3 ~ 6 : SK05
2 : SK13

第6図 遺構内出土遺物(2)



第7図 遺構外出土遺物(1)

(2) 遺構外出土遺物

出土遺物は、土器、石器、石製品などで、その出土数量はコンテナで1箱ほどである。また、土器は石器に比して非常に少なかった。

① 土器(第7図、図版16)

出土した土器は20点と僅かであり、その上細片で磨滅したものが多い。このため図示掲載できた資料はその半分であった。

3は深鉢形土器の体部の破片で、その器面にはR 捺糸文を横位回転施文した後に沈線を描き込んで、これを境にした一方の縄文を磨消している。時期は、中期末に位置付けられると思われる。4は口縁部の破片で、口唇部には連続して指頭の圧痕が施され、小波状を呈しており、器面にはR L 縄文の付加縄文が斜位回転施文されている。時期は、晩期後葉くらいになるものと思われる。5～10はいずれも粗製深鉢形土器の体部の破片である。5～9は器面にL R 縄文が横位回転施文され、10はR 捺糸文が横位回転施文されている。これらの土器の時期は、後期から晩期までにおさまるものと思われる。

② 石器(第8～19図、図版17～24)

出土した石器は、石鏃、石槍、石錐、石匙、石筥、スクレイパーとその他の剥片石器などである。

石鏃(S 7～16) S 7は両面の縁辺部にのみ押圧剥離が施されている。S 8は基部を欠損しているが、両面とも全面に押圧剥離が施されている。S 9は主要剥離面に僅かに素材の剥離面を残しており、基部が若干突出している。S 10・11は先端部を欠損している石鏃である。S 10は両面に押圧剥離が施されているが、主要剥離面に素材の剥離面を若干残している。S 11は両面とも全面を押圧剥離しており、基部中央部には抉りをいれている。S 12は抉りのある基部の一端を欠損している。両面には押圧剥離が縁辺部に施され、素材の剥離面を残している。S 13は両面の全面に、丁寧な押圧剥離が施され、基部中央部が僅かに抉入している。S 14は先端部を欠いている。背面全面を押圧剥離しているが、主要剥離面は基部付近のみに調整を加えているだけで、素材の剥離面を残している。鏃身は弓なりに反っており、基部先端が僅かに外反している。S 15は素材の主要剥離面が残っており、基部は丸味を帯びている。S 16は両面ともに二次加工されているが、未製品である。

石槍(S 17・18) S 17は断面形が凸レンズ状を呈するものである。基部にはわずかな丸みをもたせ、尖頭部は鈍角に作り出されている。S 18は尖頭部を含む体部を欠損しており、残存する基部の平面形は、正三角形に近い形状を呈している。この二つの石槍は、ともに素材の主要剥離面を残している。

石錐(S 19・20) S 19は平面形が二等辺三角形に近い形状を呈し、S 20は棒状を呈している。

いずれも先端部とそれに向かう縁辺部のみに、両面から押圧剥離が施され、錐部が作出されている。

石匙(S21~39) 縦型(S21~37)と横型(S38・39)の2種類があり、S26~37はすべて縦型石匙の欠損片である。S21~26・29・30・33・35~37は背面の全面が押圧剥離され、素材の剥離面を残さないが、他の縦型石匙は両面に素材の剥離面を残している。また、縦型石匙は背面の稜線の右面が左面に比して狭く作られており、断面形は鈍角三角形状を呈している。横型石匙のS38は両全面に押圧剥離されているが、S39は調整が粗雑なものである。

石篋(S40~72) 基部が丸味をもつものと、尖っているものとに別けられるが、前者のものが多く、後者はS43・45・51・54・59の5点である。二次加工は半両面調整のものがほとんどで、断面形は凸レンズ状や蒲鋒形を呈している。

スクレイパー(S73~90) 刃部としての機能をもつ部位が、S73・88・89は馬蹄形を呈し、S74は楕円形を呈している。このS74は火熱を受けて、主要剥離面の中央部が剥落している。S75・76は刃部をなす部位がほぼ直線的であり、S77~79は弧状を呈する縁辺部に刃部をつけている。S81は縦長剥片の一端に刃部を作出している。また、S85は石匙の破片で、S86・87は石篋の欠損片であるが、ここでは、それに再び二次加工を施しスクレイパーとして再利用している。S90は中央部の両縁辺部に抉りのある刃部を作り出している。

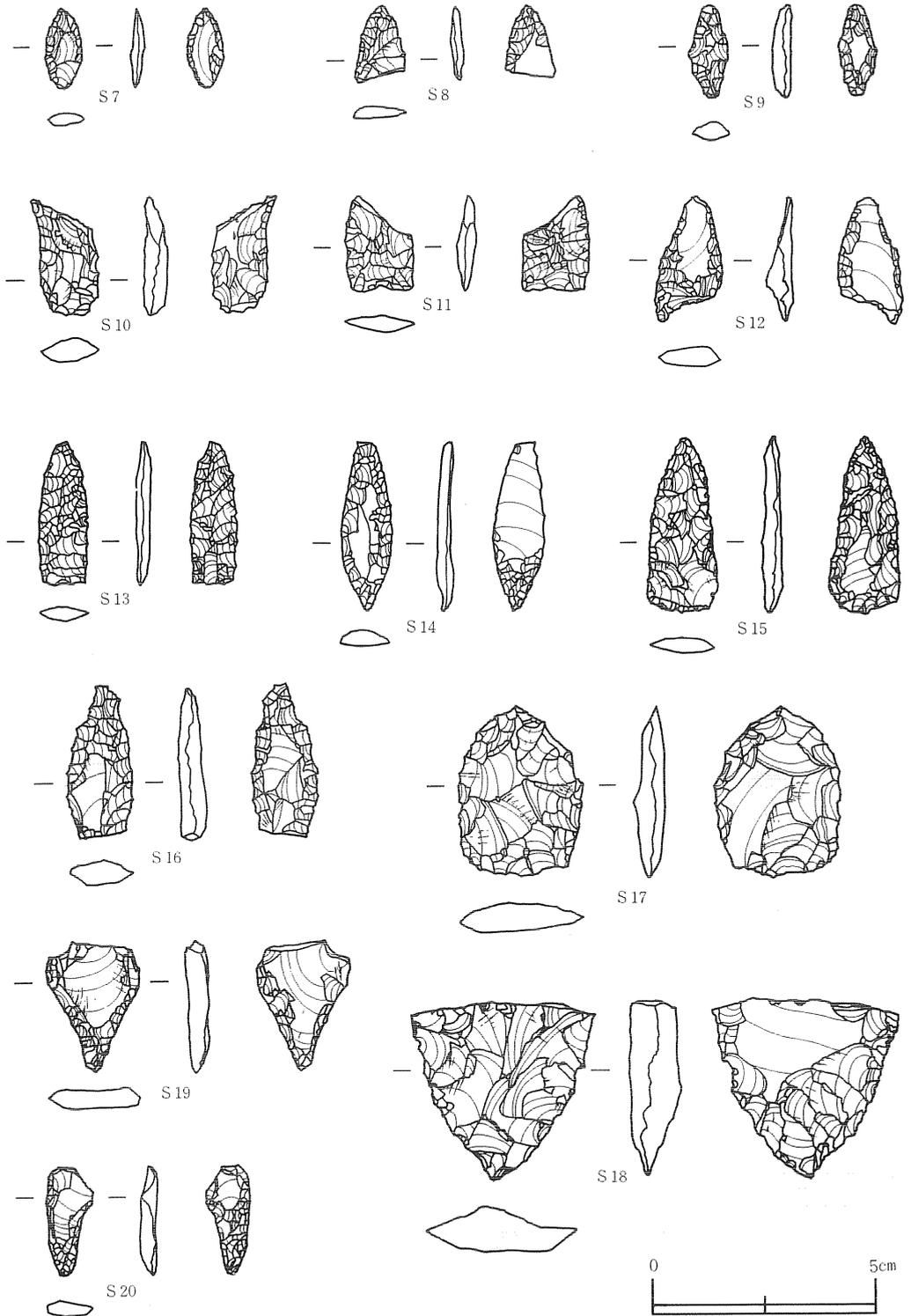
その他の剥片石器(S91~95) S91~93は両面とも二次加工が施され、素材の剥離面を残していない石器である。S91は一端を欠損しており、残存部の平面形は左右非対称形の半月形を呈している。丁寧に二次加工されて薄く仕上げられている。他に類がなく性格不明の石器である。S94・95は素材の剥離面をほとんど残しているが、両縁辺部には剥離痕が認められるものである。

これらの石器の石材は主に頁岩であるが、S7は水晶石、S50はチャート、S90は蛇紋岩を石材としている。

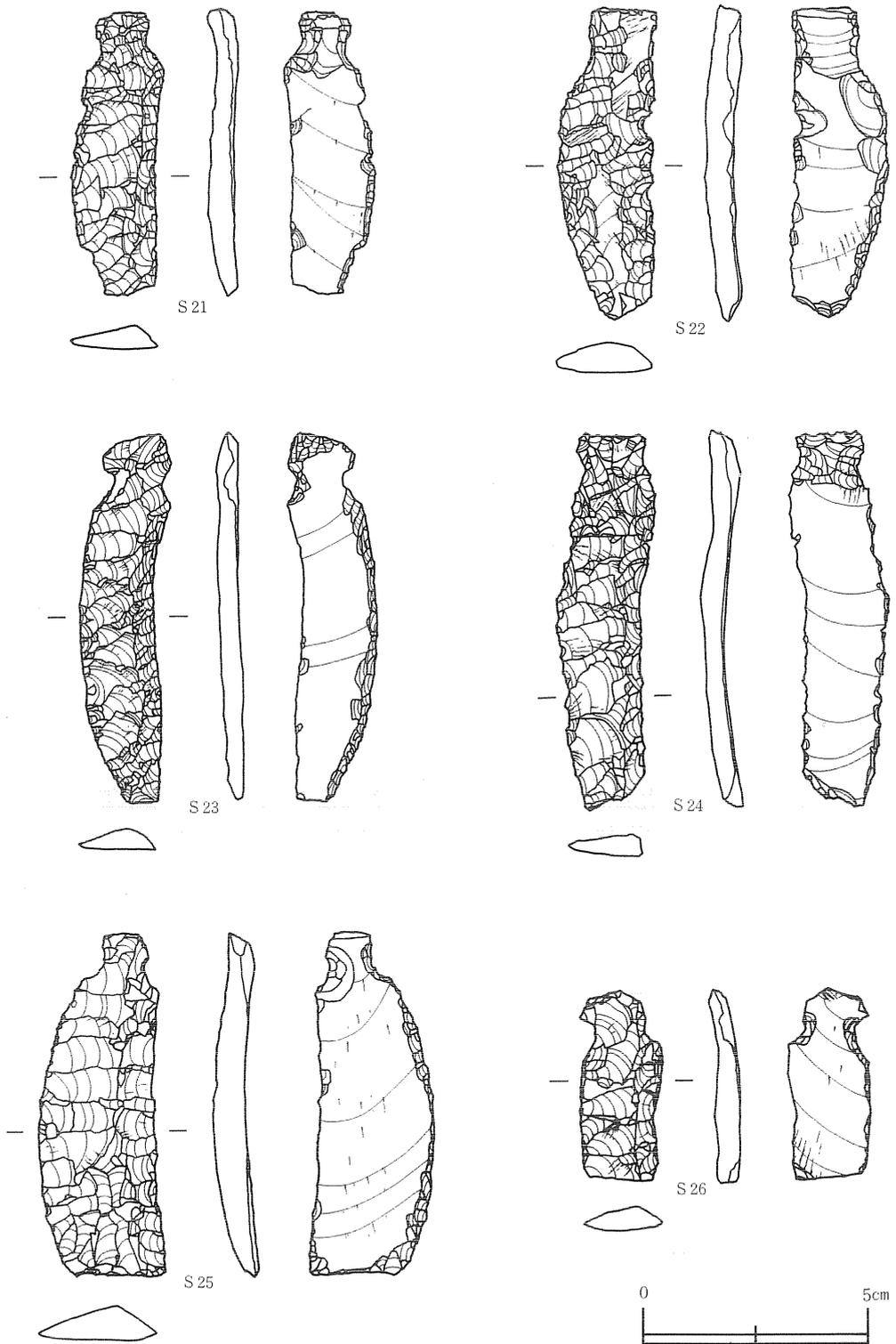
③石製品(第19図、図版24)

北側調査区のMH61グリッドの第I層耕作土中から出土した石冠1点である。

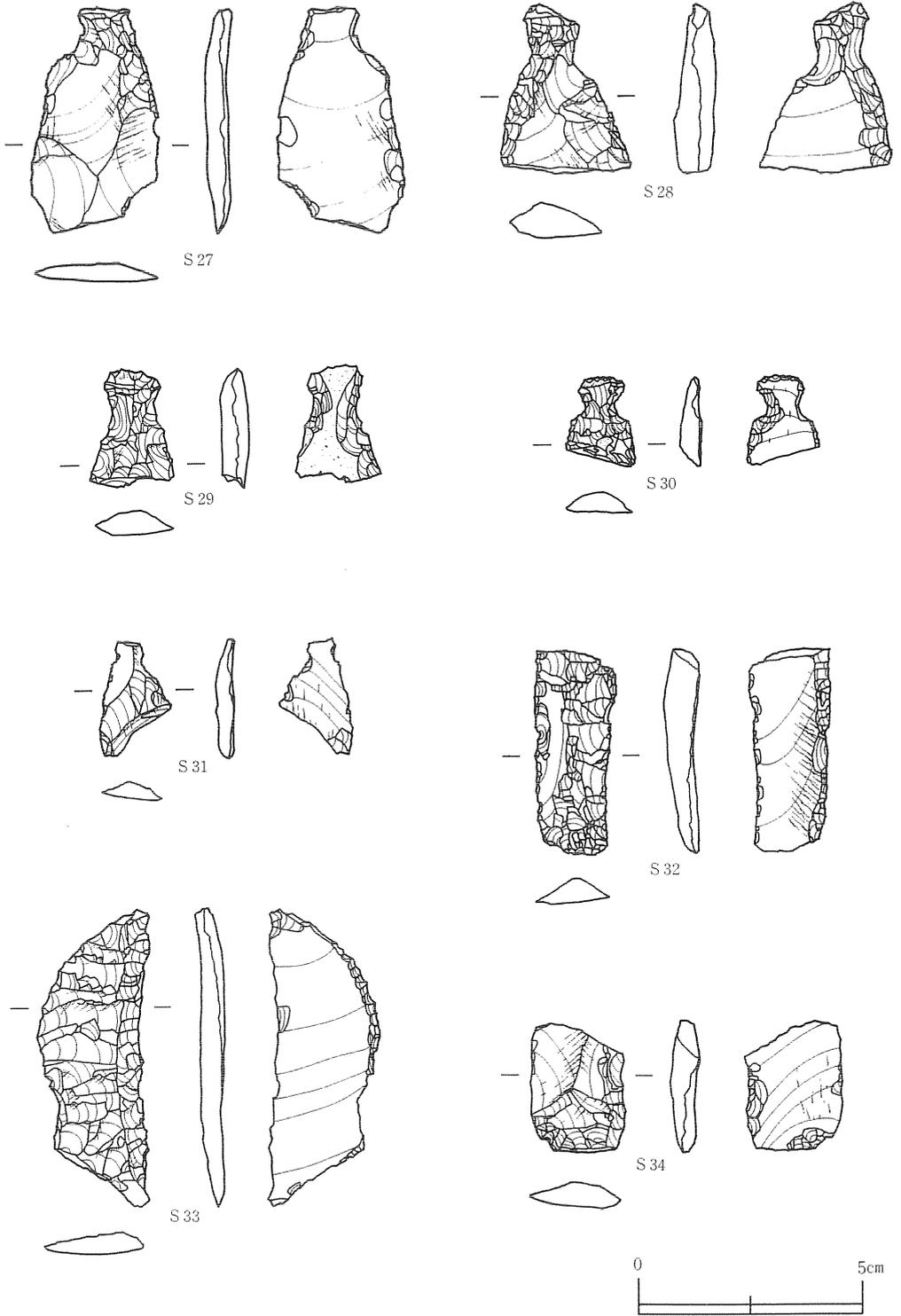
石冠(S96) 一面を除いて全面が研磨されている石器で、断面形は三角形に近い形状を呈している。ほぼ平坦な底面には数条の刻線が、台形状の両側面にも刻線が認められる。また、この両側面には敲打による複数の凹みが存在し、頂部には敲打痕と擦痕が認められる。これらの痕跡から、この種の石製品が一般的に言われる祭儀礼的なものに使用された他に、実用品としても用いられていたことが伺われる。石材は凝灰岩である。



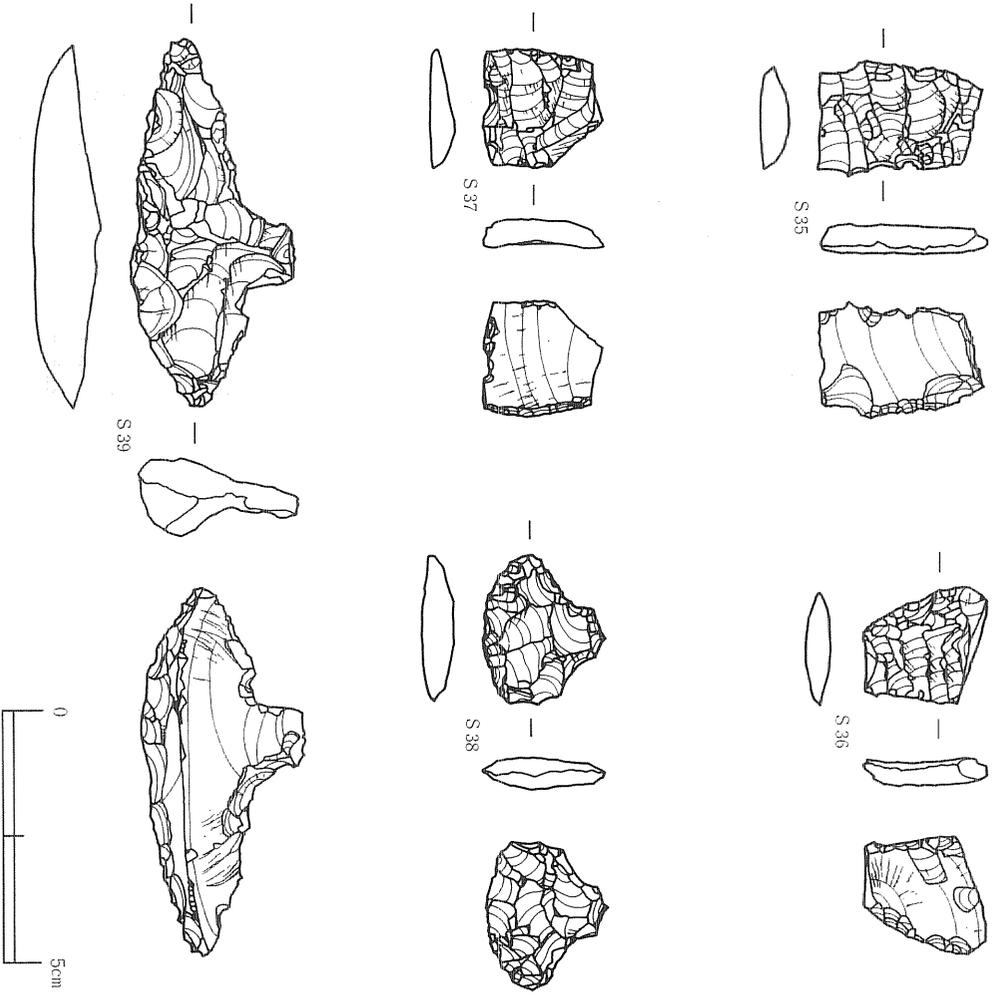
第8図 遺構外出土遺物(2)



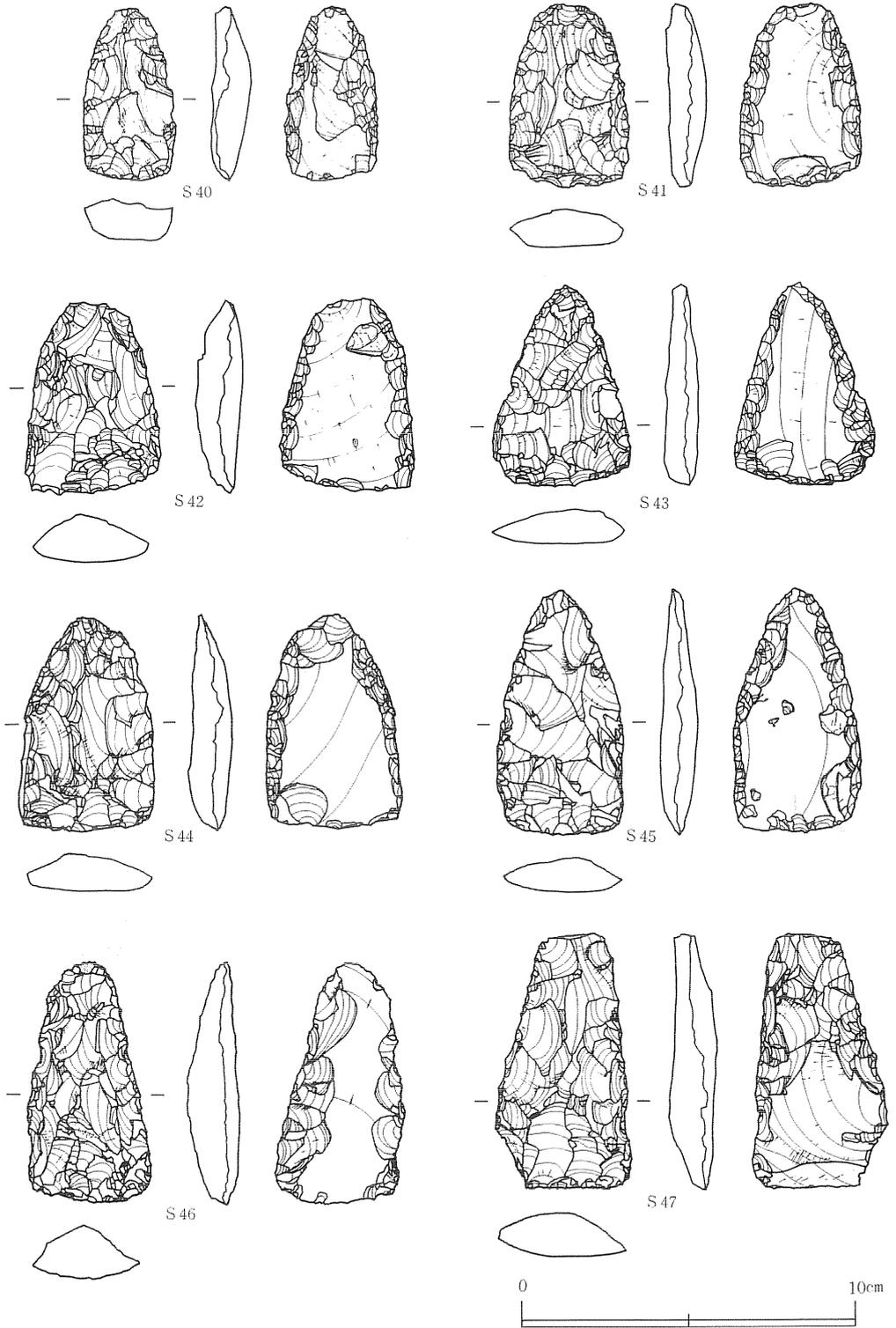
第9図 遺構外出土遺物(3)



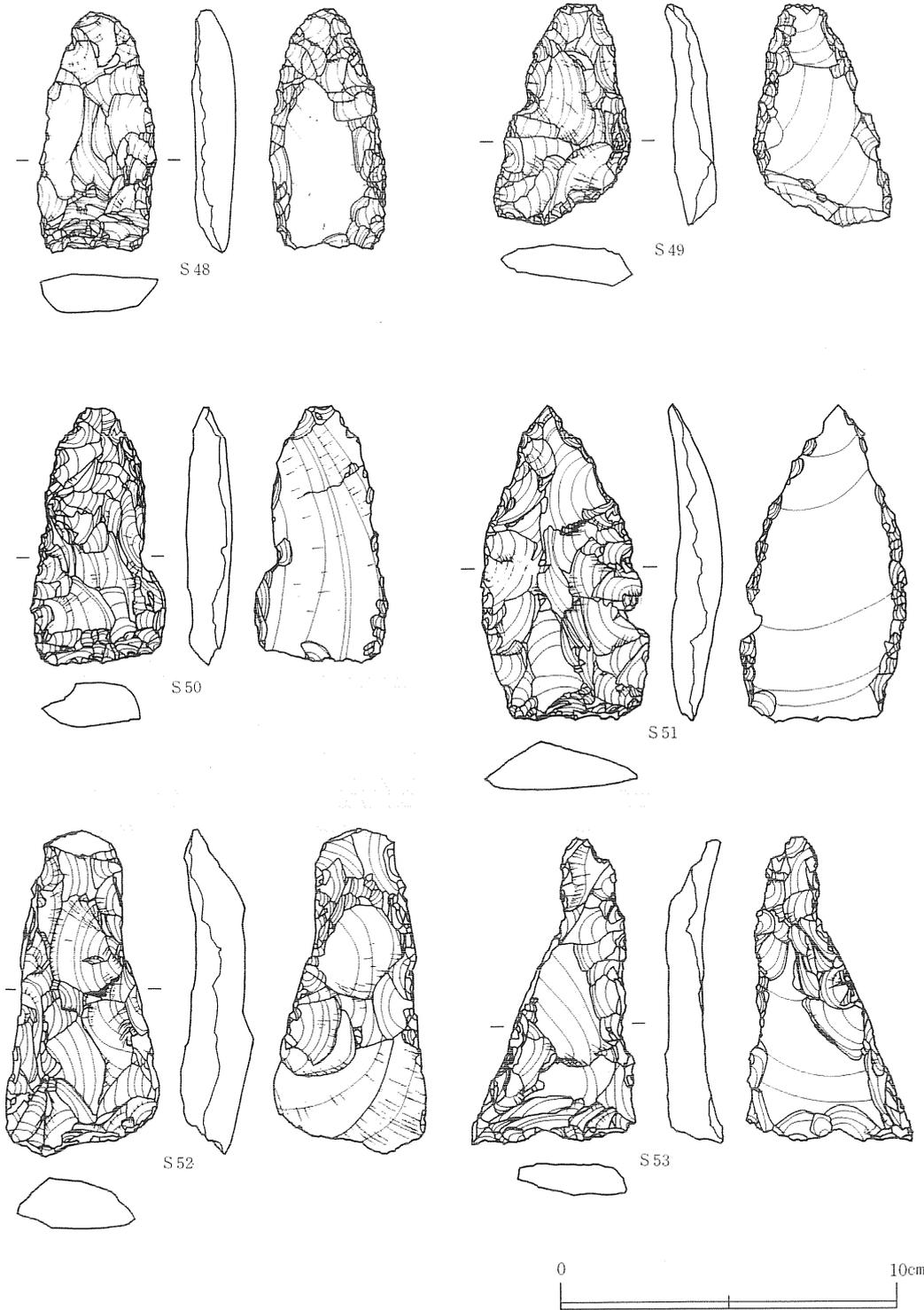
第10図 遺構外出土遺物(4)



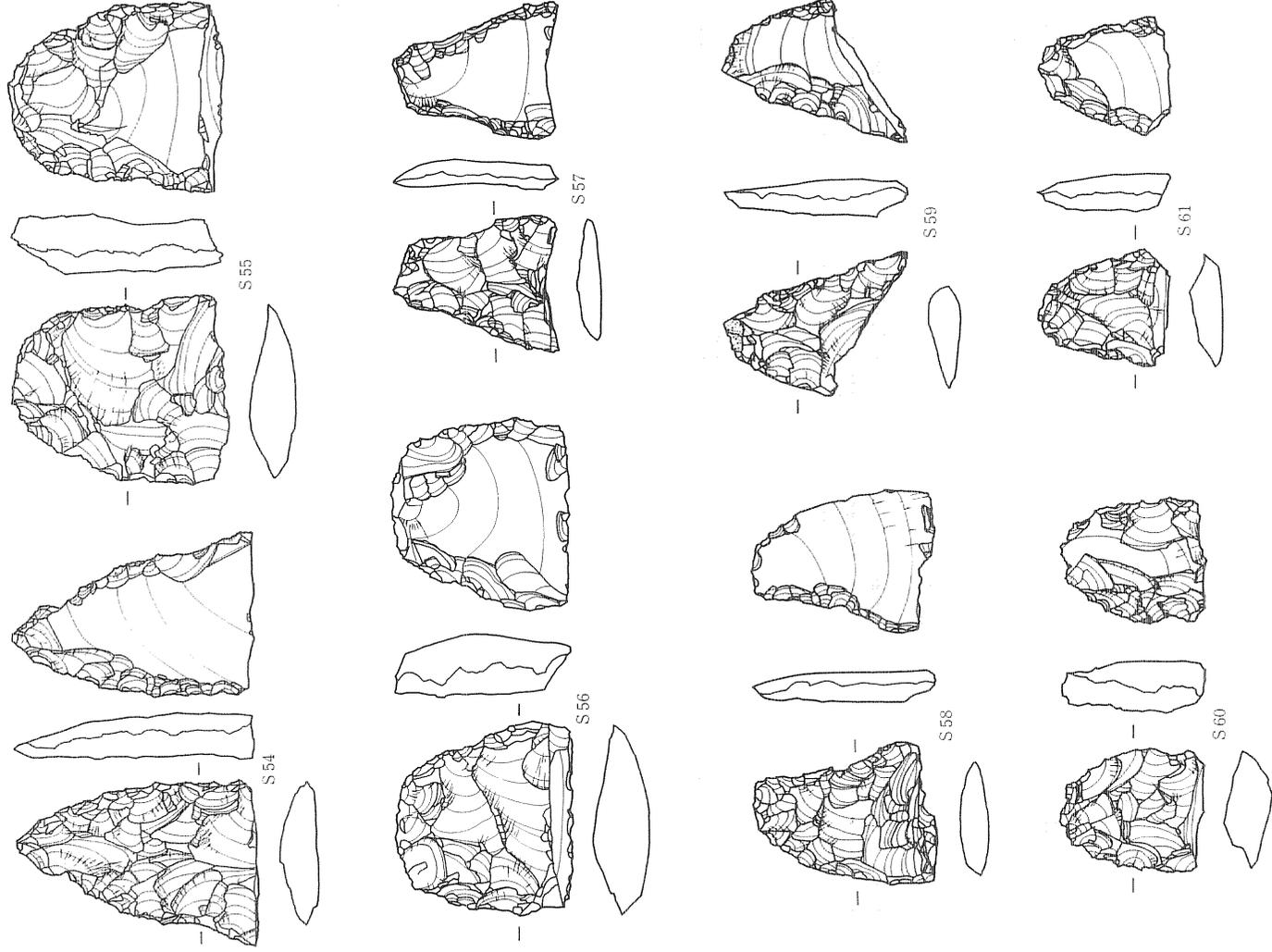
第11図 遺構外出土遺物(5)



第12図 遺構外出土遺物(6)

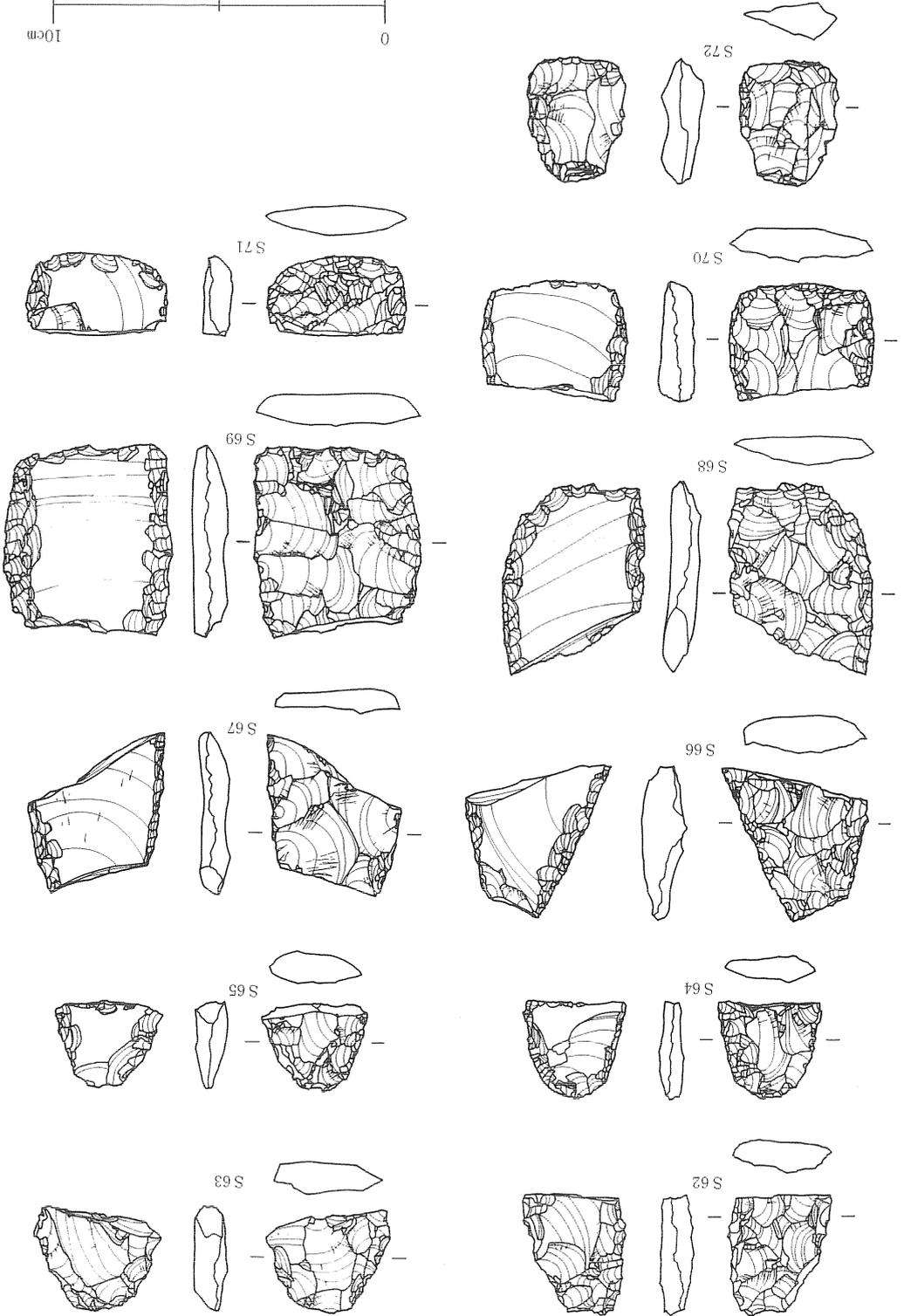


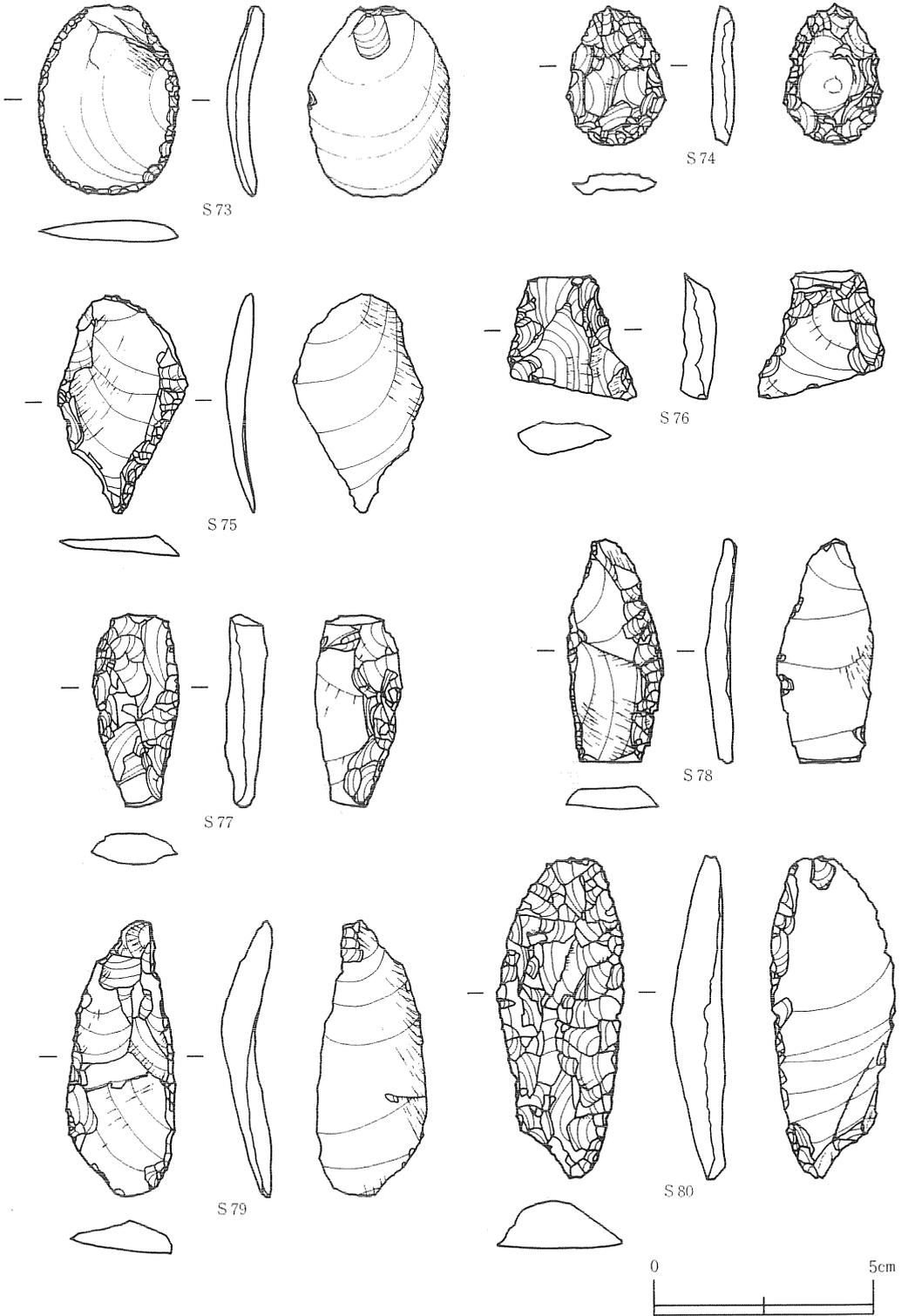
第13図 遺構外出土遺物(7)



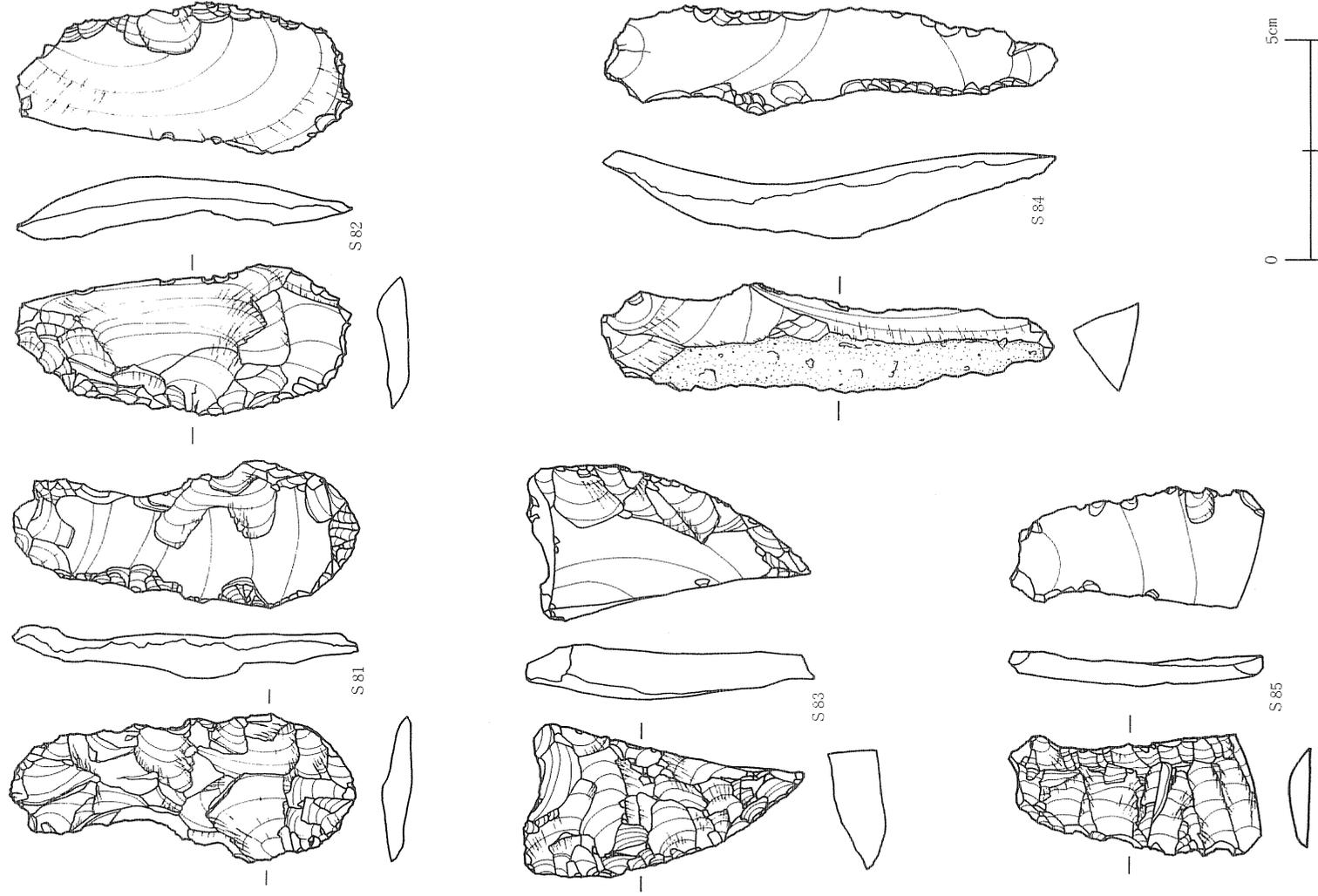
第14図 遺構外出土遺物(8)

第15圖 遺構外出土遺物(9)

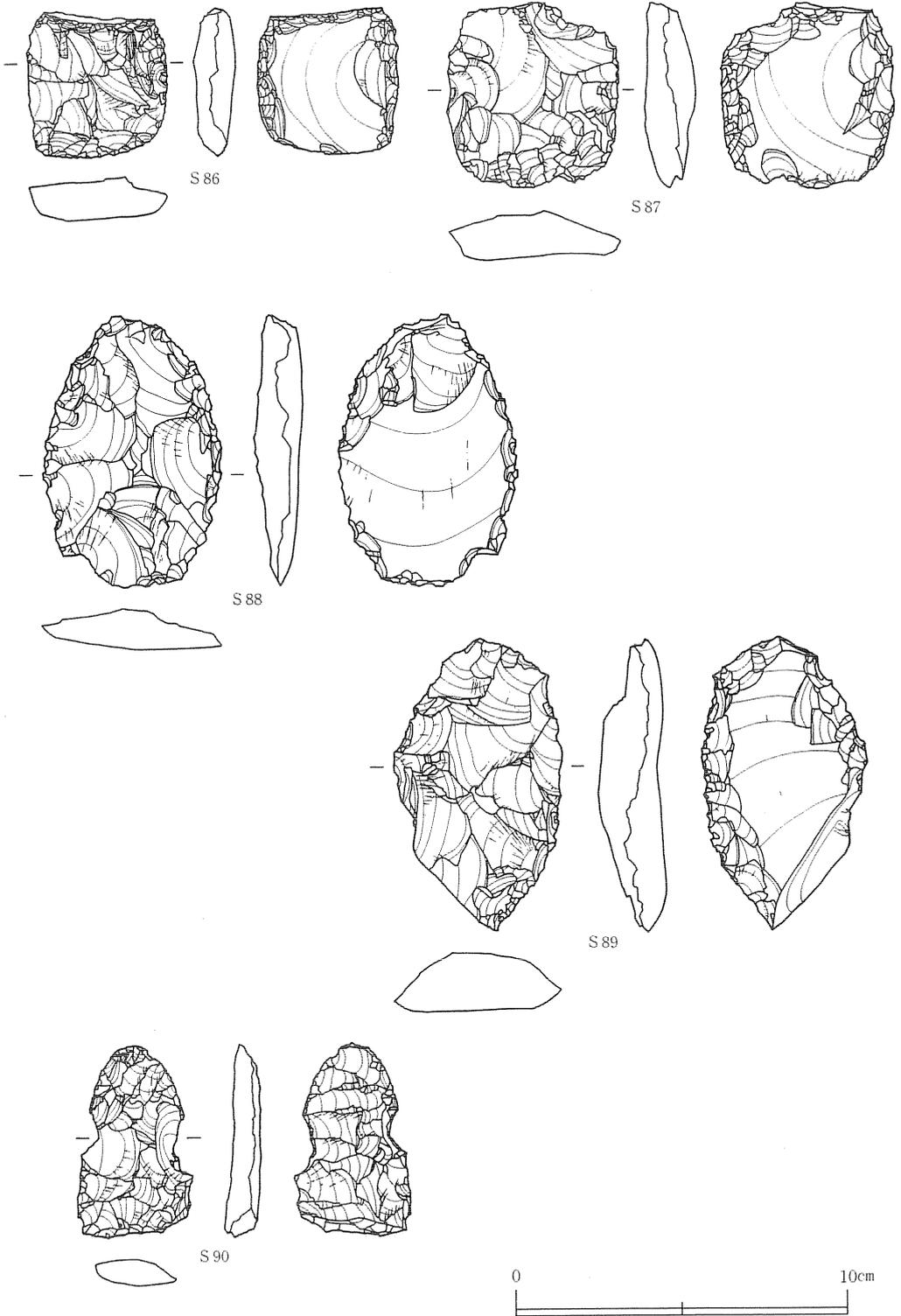




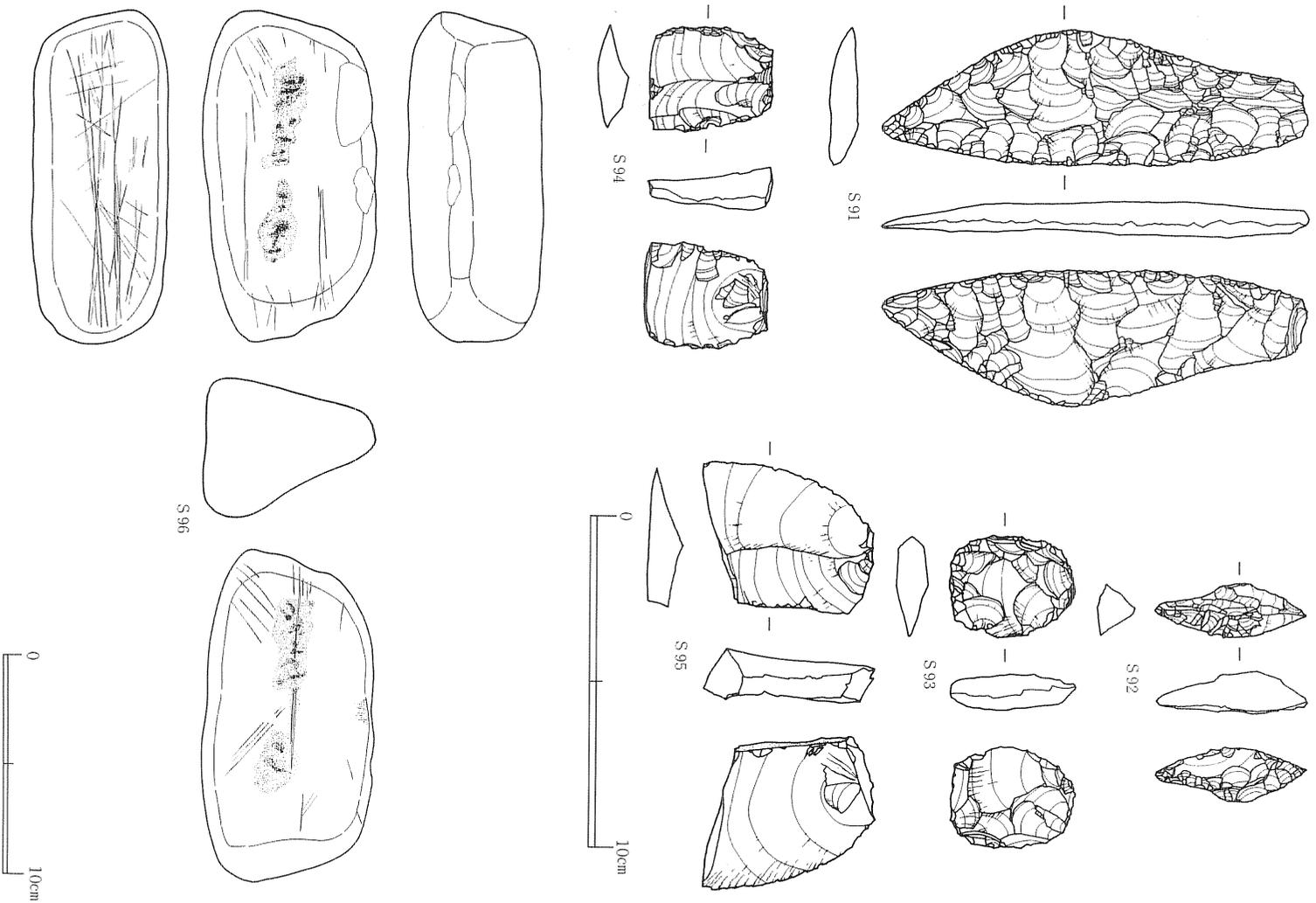
第16図 遺構外出土遺物(10)



第17図 遺構外出土遺物(11)



第18図 遺構外出土遺物(12)



第19図 遺構外出土遺物(13)

2 平安時代

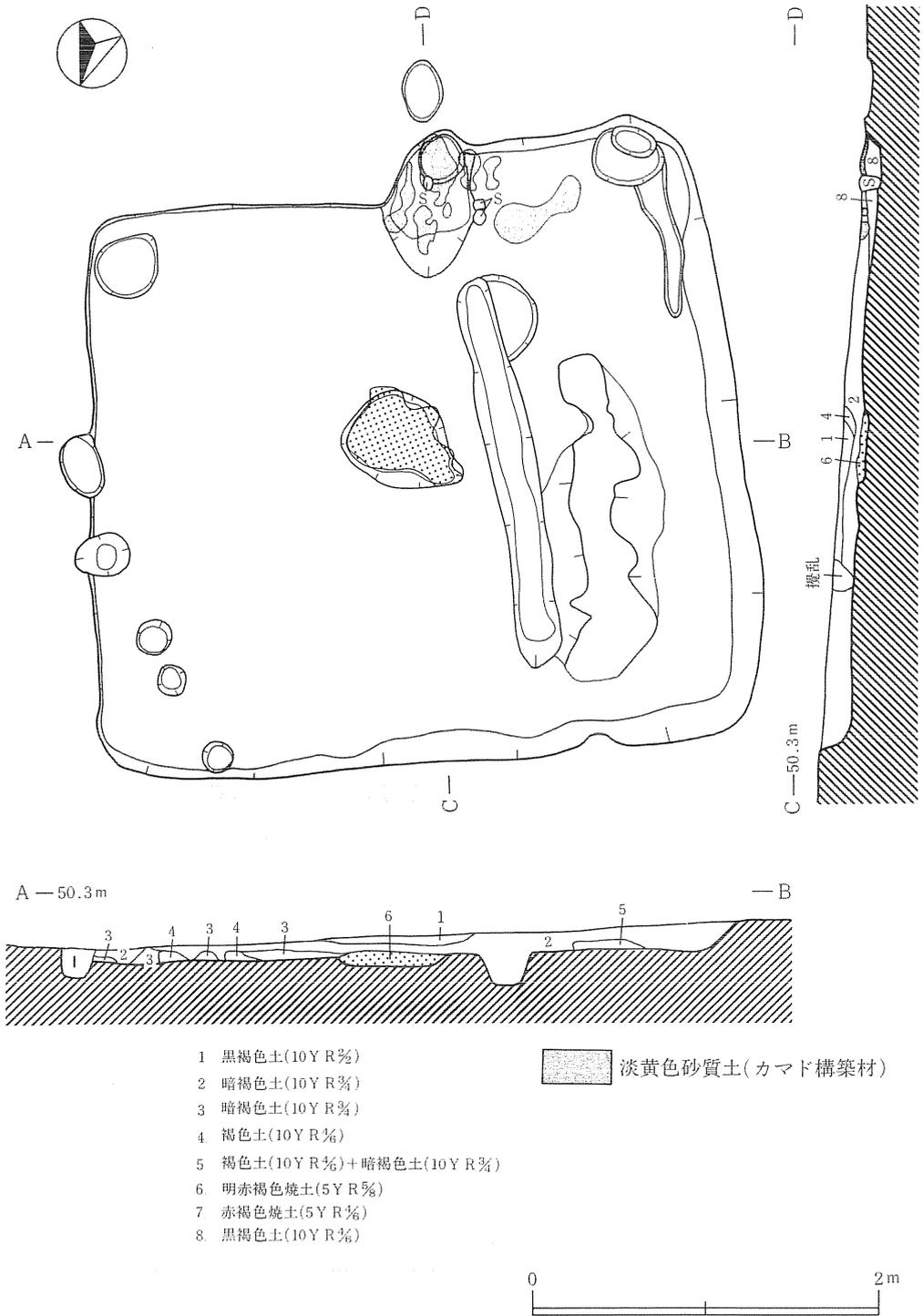
(1) 検出遺構と出土遺物

① 竪穴住居跡

SI 02 (第2・20・23図、図版11・25)

L O53・54、L P53・54グリッドにかけて確認された。南側にカマドが付設され、その西側が南に張り出している竪穴住居跡である。平面形は北壁3.67m、南壁3.45m、東・西壁ともに3.10mのほぼ隅丸方形を呈しており、壁高は北壁19cm、南壁10cm、東壁7cm、西壁21cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は第Ⅱ層に含まれる小礫が露出しているが、ほぼ平坦で堅くしまっている。その北壁～東壁にかけて径17～32cm、床面からの深さ5～14cmのピットが4個穿たれている。その他に南東隅には長軸42cm×短軸36cm、床面からの深さ7cmの凹み、南西隅には長軸42cm×短軸34cmで、床面からの深さ5cmの凹みと、この中に長軸25cm×短軸16cmで、床面からの深さ8cmの凹みをもっている。さらにこの凹みから幅9～15cm、床面からの深さ2cmで西壁に沿って北へ81cm延びる溝がある。また、床面中央部には焼土を含む長軸72cm×短軸54cm、床面からの深さ4～7cmの凹みがあり、この凹みの西側には、長軸2.29m×短軸0.28m、床面からの深さ19cmの南北に細長い溝がある。土層観察から、この溝は当住居跡が埋まる(土の流入)前に、掘り込まれたと思われ、この西側には溝を掘った際の除土が盛土されていた。カマドの西側の張り出し部分は南に35cm出ており、カマドから西壁までは1.3mである。カマドは、南壁のほぼ中央部に付設されているが、天井部と煙道部は削平を受け、袖部は崩壊して原形を失っている。カマドの現状は長軸87cm×短軸53cm、深さ4cm前後で、その先端には径28cmの円形を呈する凹みがあり、支脚であろう長さ13cm、幅7cm前後の自然石が立っている。この石は火熱を受けて赤変している。天井部や袖部の構築素材には、カマド付近の床面で検出された自然石や淡黄色砂質土などが用いられたものと思われる。覆土は1層炭化物を多量に含む黒褐色土、2層住居跡の主たる覆土で炭化物を少量含むパサパサしている暗褐色土、3層若干炭化物を含む暗褐色土、4層褐色土ブロック、5層溝を掘り込んだ際の除土、6層明赤褐色焼土、7層カマド内の赤褐色焼土である。遺物はカマド付近の床面から土師器の杯・甕の破片などが出土したが、細片で磨滅しており、図示できるものは少なかった。

11～13は土師器甕の口縁部である。いずれも口縁部端が僅かに外反している。11は外面に横ナデ調整が認められるが、内面は磨滅している。胎土は2mmほどの小石を少量含み、焼成は良好である。色調は内外面とも浅黄橙色である。12は内外面ともケズリ調整されている。胎土は2mmほどの小石を少量含み、焼成は良好である。色調は外面が灰黄褐色で、内面がにぶい橙色である。13は外面は磨滅しているが、内面には横ナデ調整が認められる。胎土は3～4mmの小石を少量含み、焼成は良好である。色調は外面が橙色で、内面がにぶい褐色である。



第20図 SI 02 竪穴住居跡

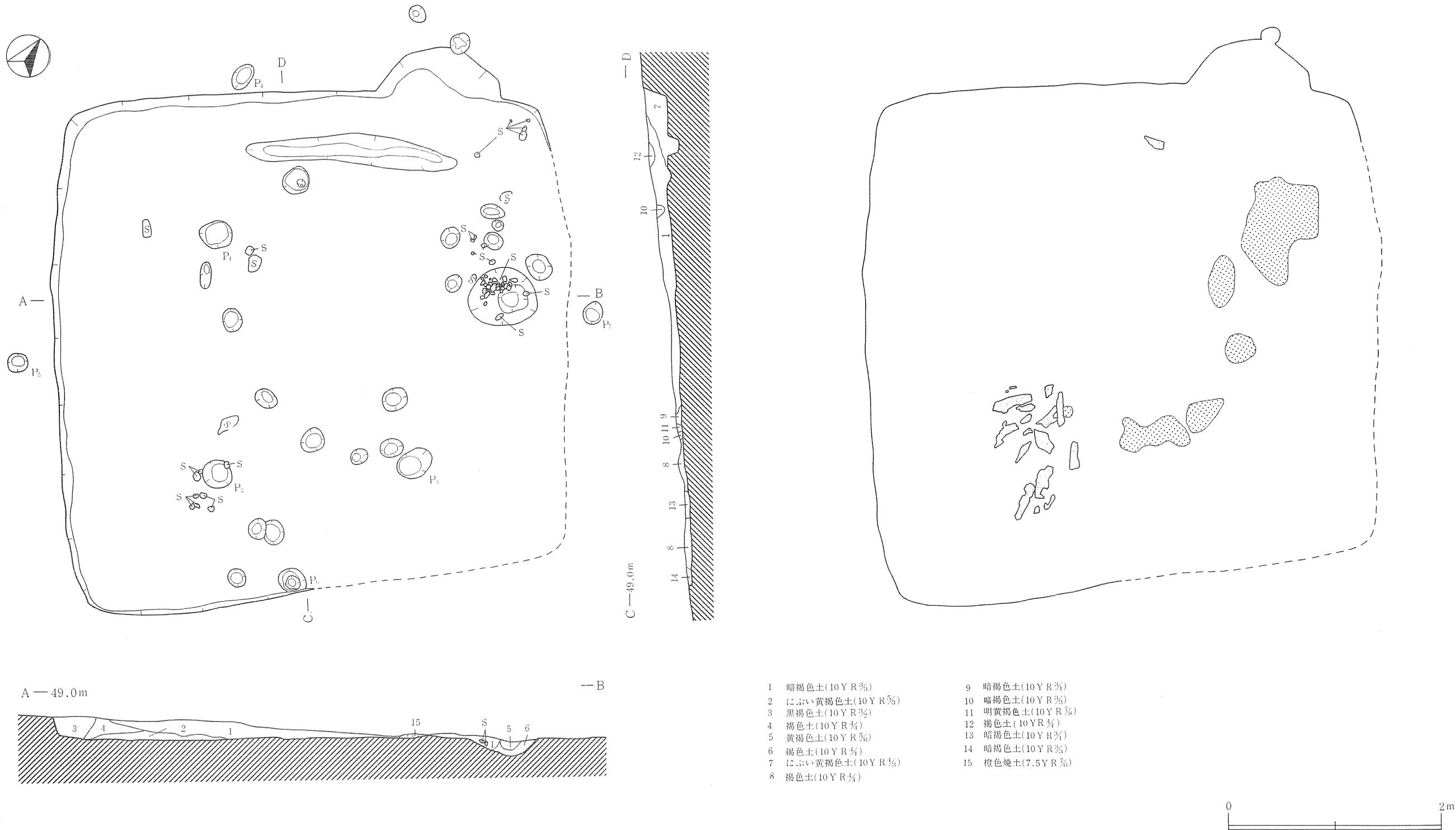
SI 23(第2・21・23～26図、図版12・25～27)

LR38、LS37～39、LT38グリッドにかけて確認されたが、南東側半分と北東側の壁は土地造成の際に削平されて消失していた。北東側にカマドの痕跡が認められる竪穴住居跡である。平面形は現存する北西壁・南西壁・南東壁(半分弱現存)から、一辺4.50m前後のほぼ隅丸方形を呈するものと復原される。壁高(現存壁から)は5～24cmで、壁はほぼ急傾斜で立ち上がっている。床面は地山(第Ⅱ層)の小礫が部分的に露出しているが、ほぼ平坦で堅くしまっており、床壁面は全体に赤味を帯びている。住居中央部分の東寄りの床面及びその数cm上には、灰混じりの焼土の広がりを検出し、床面中央部から西と南寄り及びカマド付近で、火熱を受けて赤変した自然石、北西壁中央そばと床面中央部の南寄りの床面で炭化材を検出した。壁溝は検出されなかったが、住居内外に計28個のピットを検出した。この中から住居の支柱穴を、個々の位置関係と間隔から3個をとりだすことができ、さらに各辺の中央部分の内外に、支柱穴を各1個の計4個とらえられた。支柱穴のP₁は径30cm、床面からの深さ41.5cm、P₂は径28cm、床面からの深さ46.8cm、P₃は径34cm、床面からの深さ6.6cmを測り、支柱穴のP₄は径26cm、確認面からの深さ5.7cm、P₅は径20cm、確認面からの深さ11.9cm、P₆は径27cm、床面からの深さ16.5cm、P₇は径30cm、確認面からの深さ5cmを測る。現状で支柱穴跡は3個であるが、P₂を原点として直角となるようP₁とP₃を直線で結び、P₂とP₁の辺をP₃まで、P₂とP₃の辺をP₁まで平行移動して4角直角をなす方形にすれば、当住居は4本の支柱によって、構成されていたであろうことが図上復原できる。従って、4本目の柱は、掘り込みをもたせずに直接床面上に立てたものと推定される。

また、北西壁に近い床面には、長軸2m×短軸0.28mで、床面からの深さ15cmの北東-南西方向に細長い溝がある。土層観察から、SI02と同様な行為によるものと思われる。カマドは住居北東隅から南東へ1mほど下った部分に付設された痕跡が認められたが、土地造成で削平され本体を失っておりその全容は不明である。しかし、袖部分の床面を掘り込んで石を埋めたとと思われる跡もあり、天井部や袖部の構築素材には、カマド痕跡付近やその南隣の床に穿たれた径80cm、深さ50cmの凹みから検出された、大小の自然石などが使用されたものと思われる。覆土は1層炭化材片と炭化物及び焼土を少量含む暗褐色土、2層にぶい黄褐色土、3層炭化物を若干含む黒褐色土、4層炭化物を少量含む褐色土、5層炭化物を若干含む黄褐色土、6層炭化物を多量に含む褐色土、7層小礫を少量含むにぶい黄褐色土、8層炭化物を少量含む褐色土、9層焼土を若干含む暗褐色土、10層暗褐色土、11層明黄褐色土(耕作による攪乱)、12層褐色土でパサパサしている。13層炭化物を若干含む暗褐色土、14層暗褐色土、15層褐色焼土である。遺物は2層中やカマド痕跡付近の床面及び炭化材検出付近から、土師器の杯・皿・甕の破片などが出土した。

14~16・22・23は土師器杯で、17は土師器皿である。これらの成形は、ロクロによるものである。14は復原によりほぼ完形となった。口径11.1cm、底径4.9cm、器高4cmを測る。ロクロ成形後の内外面の調整はなく、ロクロからの切り離しは右回転糸切りである。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は外面がにぶい橙色で、内面がにぶい褐色である。15は底部から口縁部まであり、残存率は4分の1である。器高は4cmで、図上復原による口径は12.1cm、底径は5.5cmである。ロクロ成形後の内外面の調整はなく、ロクロからの切り離しは右回転糸切りである。胎土は砂粒を少量含み、焼成は良好で、色調は外面が橙色で、内面が浅黄橙色である。16は底部から口縁部まであり、残存率は3分の1ほどである。器高は3.9cmで、図上復原による口径は12.3cm、底径は5.1cmである。ロクロ成形後の内外面の調整はない。ロクロからの切り離しは、底部が磨滅しているため不鮮明であるが、おそらく糸切り離しであろう。胎土は砂粒を少量含み、焼成は良好である。色調は内外面とも淡黄色である。17は底部から口縁部まであり、残存率は5分の1ほどである。ロクロからの切り離しは右回転糸切りである。胎土は砂粒を少量含み、焼成は良好である。色調は外面がにぶい橙色で、内面が明灰褐色である。22・23は口縁部の破片である。22は口縁部が外反するが、23は口縁部がやや直線的である。いずれも器面は磨滅している。色調は22が内外面とも浅黄橙色で、23が灰白色である。

18~21・24~37は土師器甕で、うち全体の器形を図上復原できたのは、口縁部から底部まであった18と21だけである。18は口縁部がやや外反し、体部中央部に膨らみをもたせた甕である。器高は16.7cmで、図上復原による口径12.3cm、底径は8.5cmである。口縁部の外面にケズリによる調整痕が、若干認められる以外は器面が磨滅している。胎土は3~5mmの小石を多量に含み、焼成は良好である。色調は内外面ともにぶい褐色である。21は底部から口縁部に向かって緩やかに立ち上がり、口縁部でやや外反している。器高は26.9cmで、図上復原による口径19.4cm、底径9.9cmである。外面の口縁部には横ナデ、体部下端にはケズリ調整が認められるが、以外の器面は磨滅している。胎土は3~5mmの小石を少量含み、焼成は良好である。色調は外面が黄橙色で、内面が橙色である。19・20は体部上半から口縁部の破片である。いずれも内外面は横ナデ調整されており、胎土は3~5mmの小石を含み、焼成は良好である。19の色調は外面がにぶい黄橙色、内面がにぶい橙色、20は外面がにぶい橙色、内面が橙色である。24~32は甕の口縁部の破片である。24は口縁部端がやや外反しており、胎土は緻密で、器面も平滑であり、焼成はかなり良好である。色調は外面が浅黄橙色で、内面がにぶい黄橙色である。25は口縁部端が僅かに外反しており、外面には横ナデ調整が若干認められる。胎土は4mmの小石を含み、焼成は良好である。色調は外面が浅黄橙色で、内面がにぶい黄橙色である。26は口縁部が「く」の字状を呈している。内面には横ナデ調整が認められるが、外面は磨滅している。胎土は4~5mmの小石を含み、焼成は良好である。色調は内外面ともにぶい黄橙色である。27は



第21図 SI 23堅穴住居跡・炭化材出土状況図

口縁部がやや外反しており、内外面には僅かに横ナデ調整が認められる。胎土は5mmの小石を含み、焼成は良好である。色調は内外面とも浅黄橙色である。28・31は口縁部がほぼ直線的に立ち上がっており、29・33は口縁部端が外反し、30・32・34は「く」の字状を呈している。うち32の外面の成形痕と34の内外面に僅かに横ナデ調整が認められるが、他のものは内外面とも磨滅している。35～37は甕の底部から体部下端の破片である。いずれも内外面とも磨滅しており、胎土に含まれた4～5mmの小石が器面に露出してザラザラしている。焼成は良好である。

②土坑

SK17(第2・22図、図版13)

LN51グリッドで確認された。平面形は長軸(北東－南西)0.71m×短軸(北西－南東)0.69mのほぼ楕円形を呈し、確認面からの深さ0.28mである。底面は丸底ぎみであり、壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は1層暗褐色土、2層にぶい黄褐色土、3層褐色土、4層黄褐色土、5層明黄褐色土で、人為的な埋土と思われる。遺物は出土しなかった。

SK18(第2・22図、図版13)

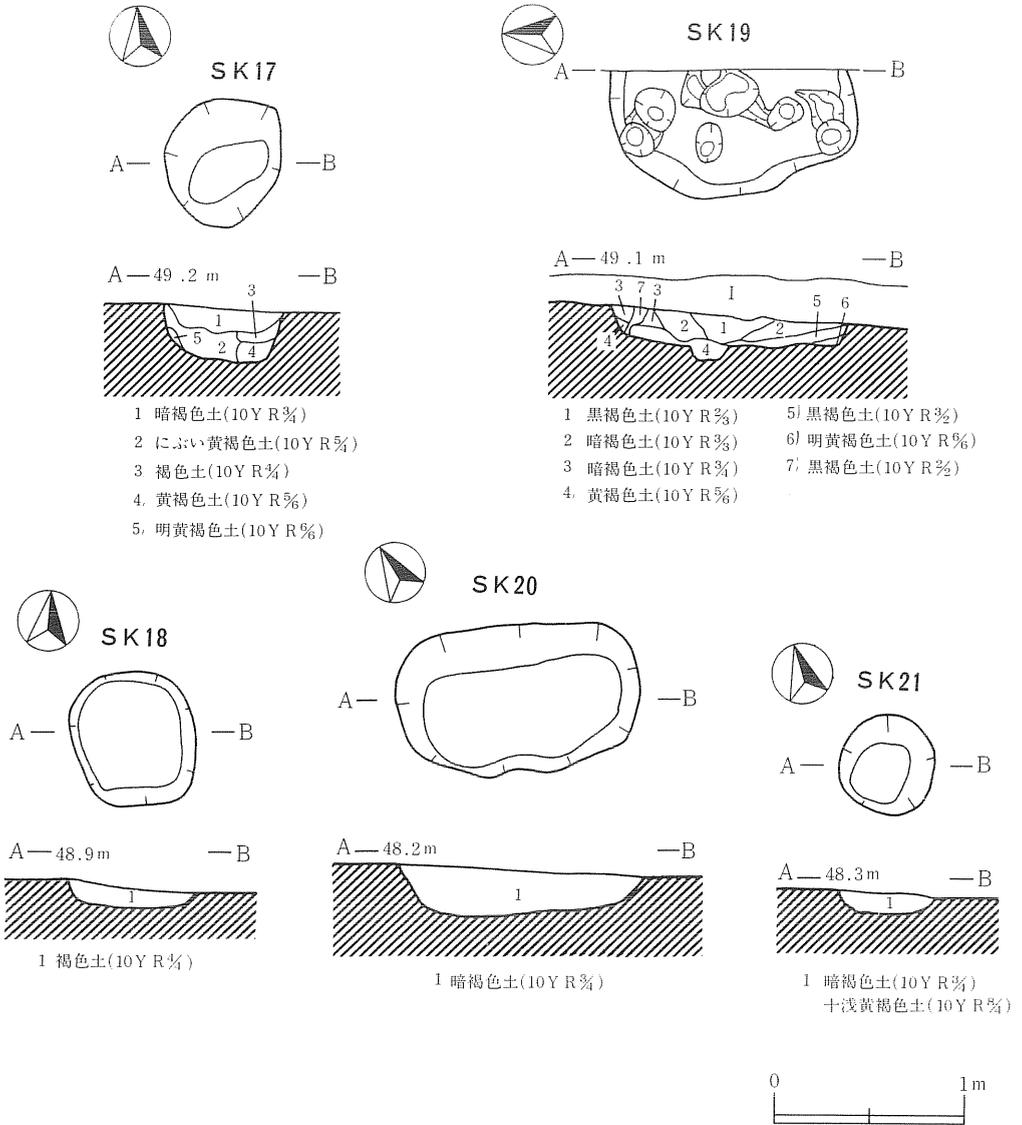
LN50グリッドで確認された。平面形は長軸(北西－南東)0.77m×短軸(北東－南西)0.67mのほぼ楕円形を呈し、確認面からの深さ0.11mである。底面はほぼ平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土はにぶい黄褐色土粒子を多量に含む褐色土で、ややしまりのある層である。遺物は出土しなかった。

SK19(第2・22図、図版13)

LN50グリッドで確認された。本土坑の西側は調査区外にかかっているため、全容を把握することができなかった。その平面形は、現存する部分が長軸(南北)1.29m×短軸(東西)0.68mのほぼ楕円形を呈していると思われ、確認面からの深さ0.17mである。底面は木の根による攪乱を受けており、凸凹しているが本来は平坦であったと思われる。覆土は人為的に埋め戻された状況を呈している。1層炭化物を少量含む黒褐色土、2層炭化物を少量含む暗褐色土、3層暗褐色土、4層黄褐色土、5層黒褐色土、6層明黄褐色土、7層黒褐色土で、全層ともややしまりが無い。遺物は5層中から土師器甕の体部の破片が2点出土したが、3cm前後の破片であり図示掲載しなかった。なお、内外面には僅かにナデ調整が認められ、胎土は2mmの小石を含み、焼成は良好である。

SK20(第2・22図、図版14)

LM46、LN46・47グリッドにかけて確認された。平面形は長軸(北西－南東)1.27m×短軸(北東－南西)0.80mのほぼ楕円形を呈し、確認面からの深さは0.26mである。底面は東側から西側へ傾斜しているが、ほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は明黄褐色土ブロック多量と炭化物少量含む暗褐色土である。また混入するブロックとかなり混在している

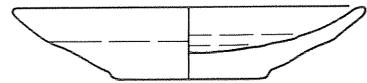
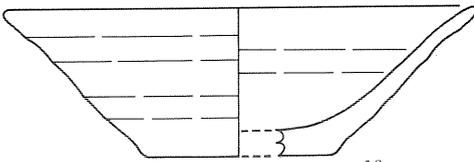
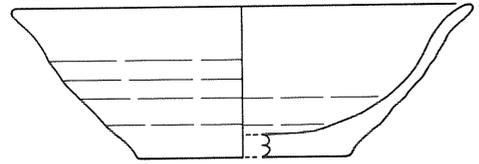
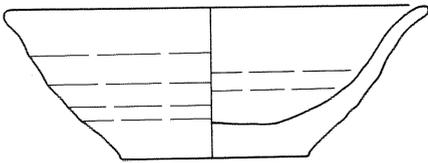
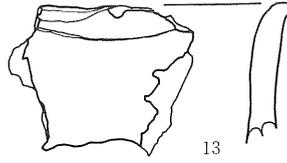
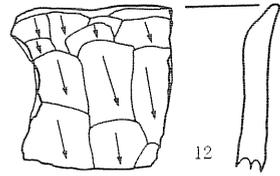
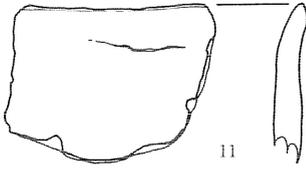


第22図 SK17・18・19・20・21土坑

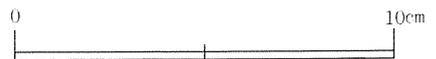
ことから、人為的な埋土であると思われる。遺物は覆土下部から土師器杯の口縁部と甕の体部の破片が3点出土したが、1～3cmの破片で磨滅しており、図示掲載できなかった。

SK21(第2・22図、図版14)

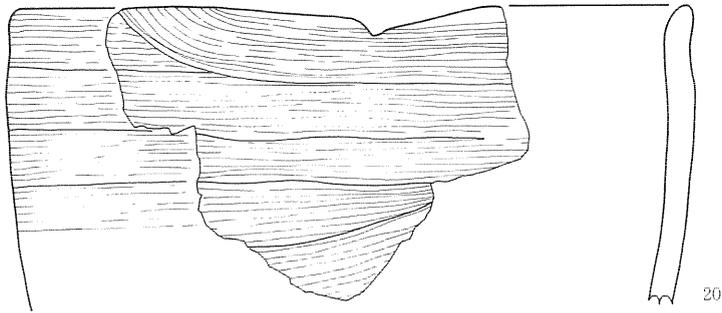
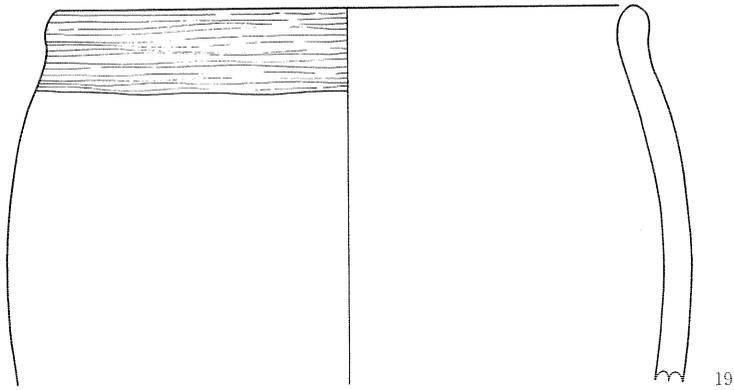
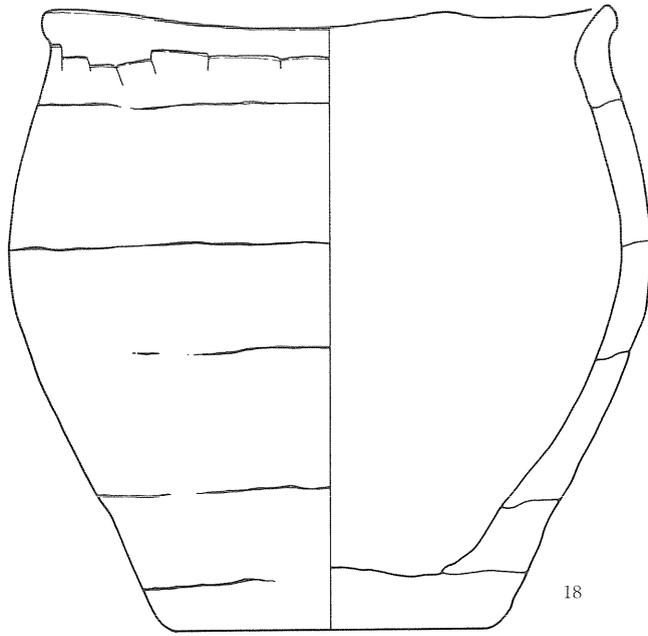
L N47グリッドで確認された。平面形は径約0.52mのほぼ円形を呈しており、確認面からの深さ0.11mである。底面はほぼ平坦であり、壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は暗褐色土と浅黄褐色土の混合土で炭化物も若干含まれ、しまりのない層である。遺物は出土しなかった。



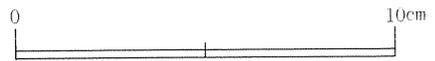
11~13: S I 02
14~17: S I 23



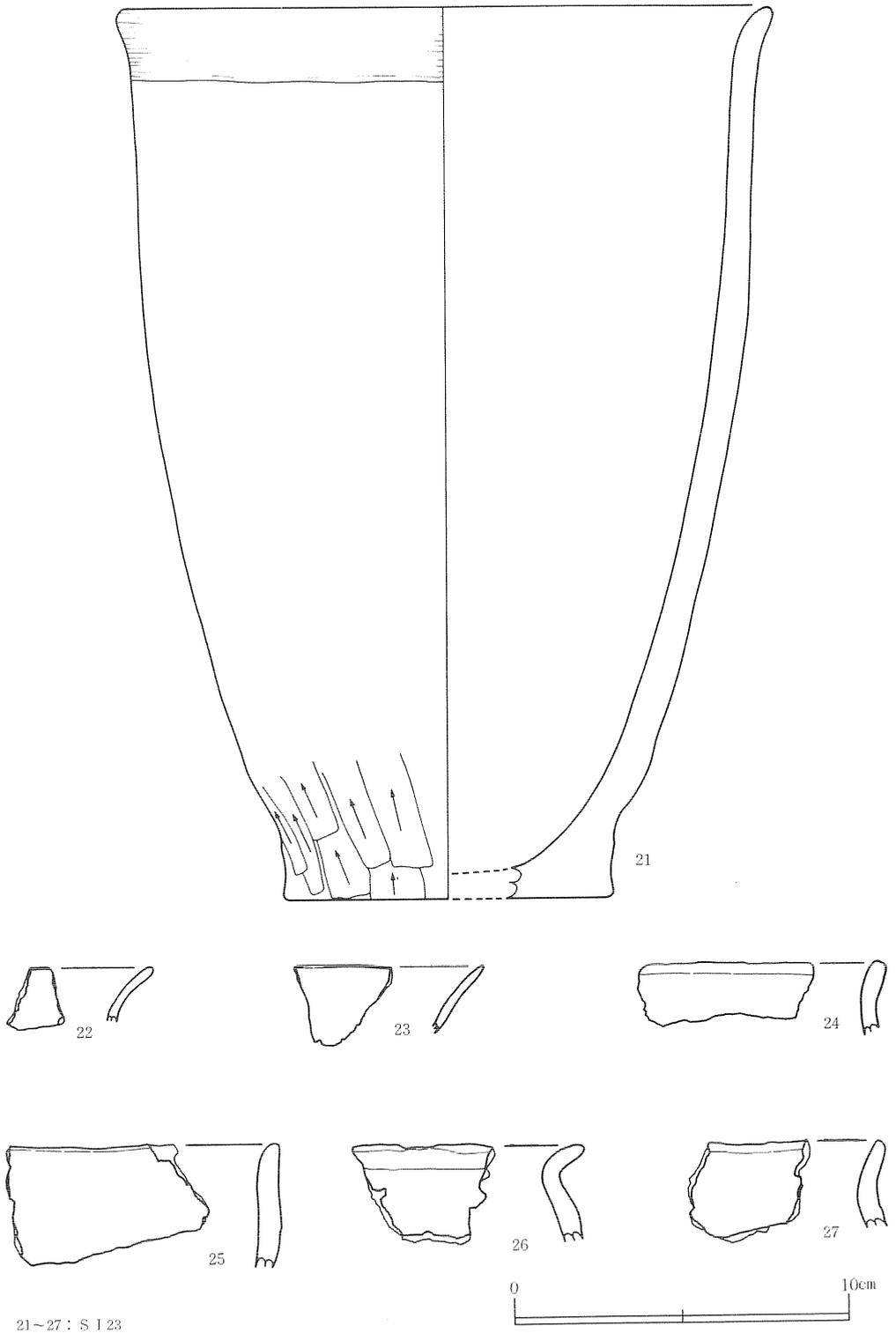
第23図 遺構内出土遺物(3)



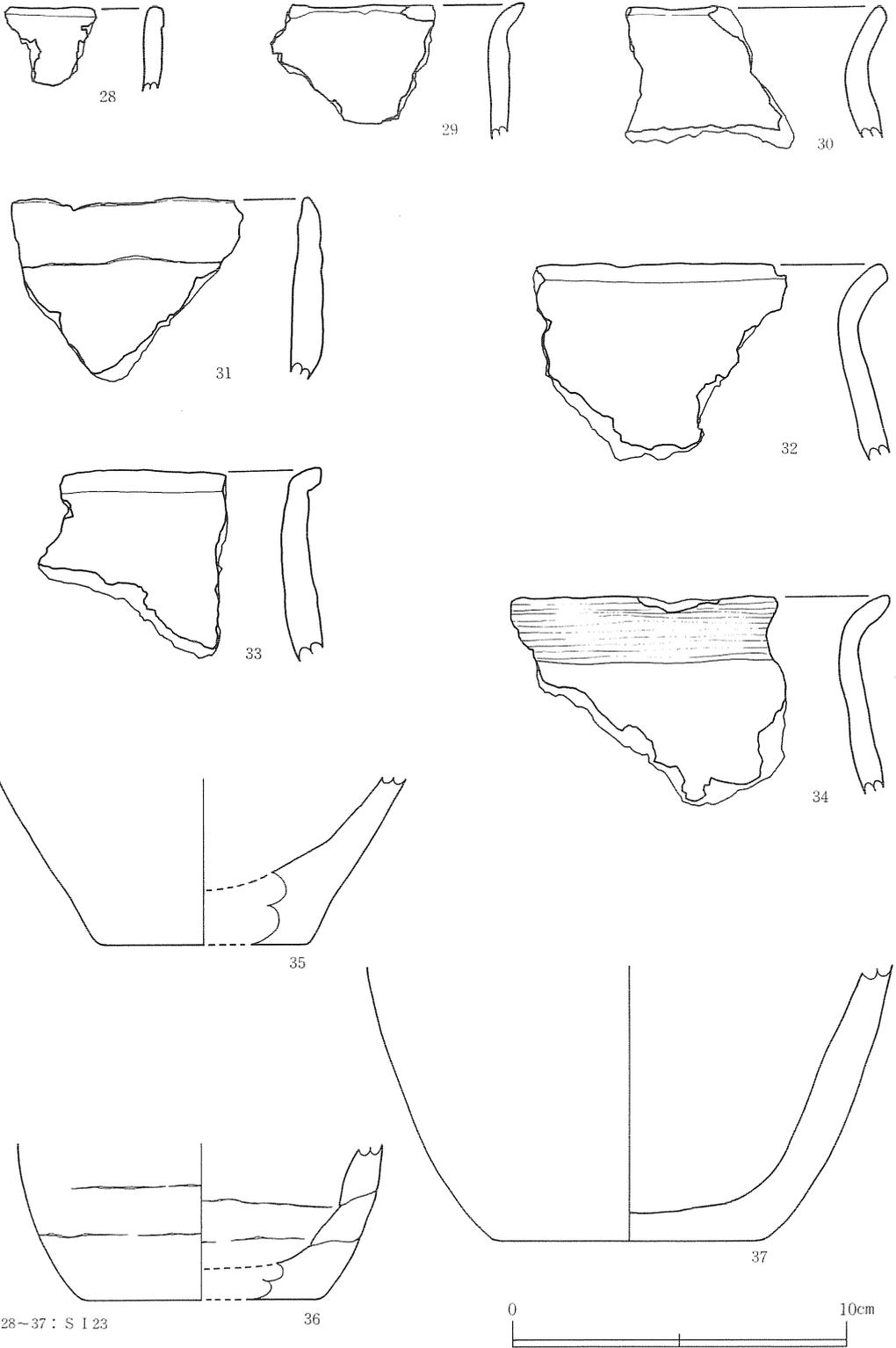
18~20 : S I 23



第24図 遺構内出土遺物(4)



第25図 遺構内出土遺物(5)



28-37: S I 23

第26図 遺構内出土遺物(6)

(2) 遺構外出土遺物

出土遺物は、土師器杯・甕など少量と須恵器杯・甕などが若干出土した。しかし、ほとんどが口縁部や体部の細片で磨滅が著しく、全体の形状のわかるものもなく、図示掲載できたのは、比較的遺存状態の良好な須恵器の破片とわずかな土師器の破片である。

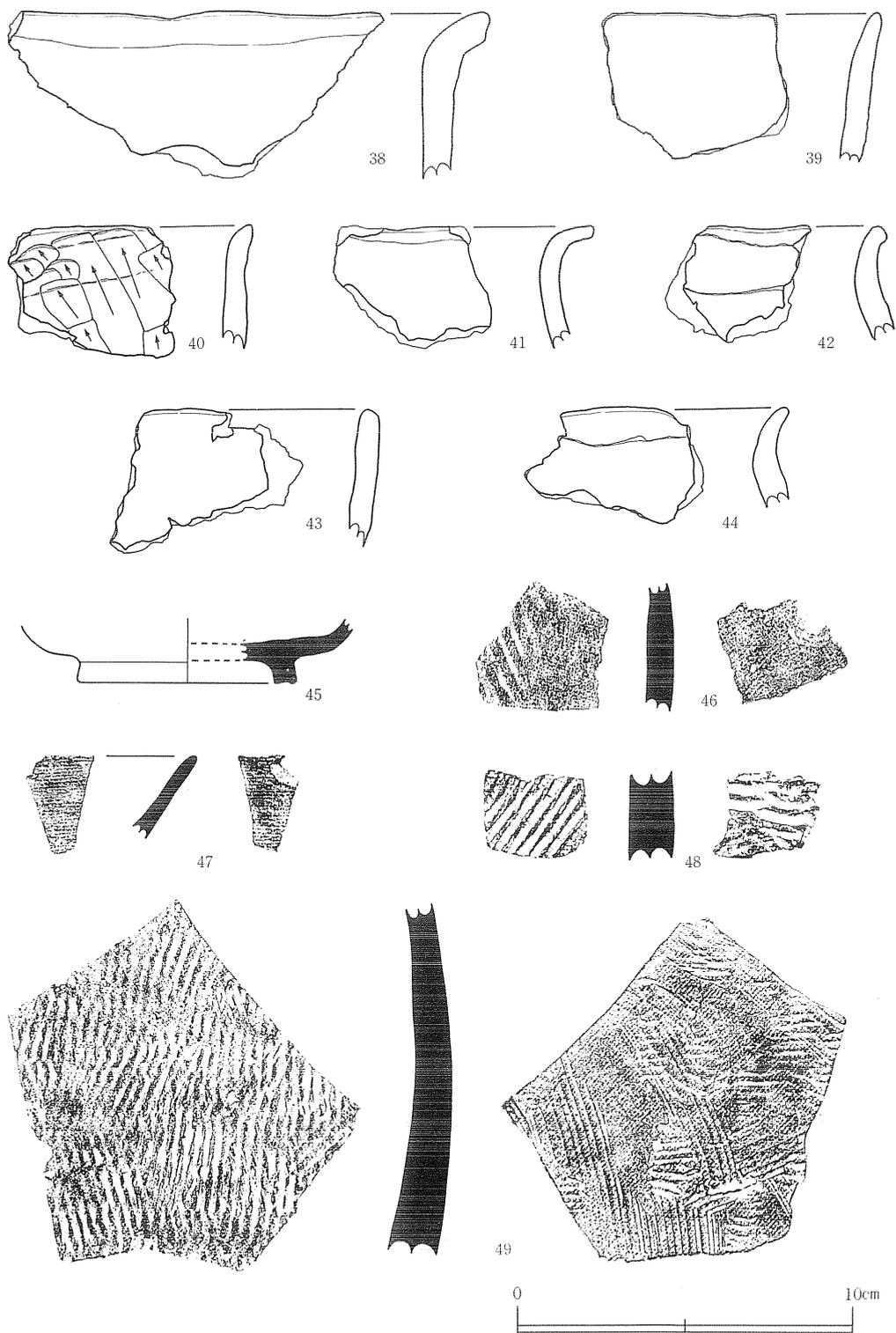
38～44は土師器甕の口縁部の破片である。38・41・42・44は口縁部が「く」の字状を呈し、39・40・43はほぼ直線的な形状を呈している。38・41・42は若干内外面に横ナデが認められる。40は外面がケズリ、内面が横ナデされている。他は内外面とも磨滅しており明確にできなかった。胎土には2～5mmの小石を含んでおり、小石が器面に露出してザラザラしているものが多い。焼成は大体良好で、各内外面の色調はにぶい黄褐色、にぶい黄橙色、浅黄橙色などを呈するものである。

45～49は須恵器の破片である。45は須恵器杯の底部の破片、47は須恵器杯の口縁部の破片、46・48・49は須恵器甕の体部の破片である。45はロクロ成形切り離し後に付高台している。胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は外面が黄灰色で、内面も黄灰色である。46は外面は平行叩目痕、内面には篋状工具による調整痕が認められる。胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は内外面とも灰色である。47はロクロ成形されたものであるが、内外面とも成形後の調整は認められない。胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は外面が暗灰黄色で、内面は灰色である。48は外面は平行叩目痕、内面に篋状工具による調整と青海波を表出させた当て具痕が認められる。胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は外面がにぶい黄褐色で、内面はにぶい黄橙色である。49は外面は平行叩目痕が認められ、内面には篋状工具による調整痕と当て具痕が認められる。胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は外面が青灰色で、内面は紫灰色である。

3 近世以降の遺構

SE28(第2図、図版14・15)

当地が開墾造成された際に埋められた、調査区南東部(LN42・43・44・45、LO42・43・44・45、LP42・43・44・45グリッド)の旧沢部の底面で検出された。沢部分は、上面の長軸(南北)13.60m×短軸(東西)10.10m、底面の長軸(東西)2.36m×短軸(南北)2.34mで、確認面からの深さ2.89mである。井戸状遺構は、厚さ2cm、幅15cm、長さ20～40cm(残存値)ほどの板材の長軸の一端を削って、地面に打ち込んで作られた一辺80cm前後の方形の枠組みである。その時期は出土遺物がなく不明である。



第27図 遺構外出土遺物(14)

第3章 まとめ

寺沢遺跡は、過去から現在に至るまで度々行なわれた開発行為によって、遺構は削平されており(あるいは消失したのも考えられる)、遺物は破損したものが多かった。石器は一部を欠くものが目立ち、縄文土器も殆どが細片で、その器面に表出された文様も不鮮明であり、平安時代の土器もまた器面調整痕のわかるものは少なかった。

検出された土坑は、遺物が出土した土坑や周囲の遺物出土状況などから、縄文時代と平安時代のものに分けた。しかし、その用途をある程度把握できた土坑は、北側調査区に位置する土坑群だけである。同区の土坑7基のうち、SK01・05・07・08からは石器製作時に出土と思われる剥片・碎片が合わせて414点(火熱を受けて剥落したもの52点ある)が出土し、SK01・05からは土器片や石器とその未製品及び炭化したクルミ殻の碎片なども出土している。これらの遺物は土坑に捨てられたものと思われ、7基の土坑は捨て場として利用されたものと考えられる。

また、SK01・05より出土した土器片は、縄文時代前期前葉に属するものであり、SK01・05～08・10・11の土坑は、この時期に位置付けられる土坑群と考えられる。SK13からは、縄文時代後期の粗製深鉢形土器の体部破片が出土し、周囲からも同後期の土器が数点出土しており、SK13はじめSK04・14・15はこの時期の土坑と考えられる。さらに遺構外からは、中期～晩期の粗製の深鉢形土器の破片などが出土しており、当地が縄文時代全般にわたって利用されていたことが窺われる。なおSK19・20からは土師器甕の体部破片が出土し、SK17からSK21に至る周囲でも土師器杯、甕などの破片が出土していることから、SK17～21は平安時代のものとした。

検出された2軒の竪穴住居跡は、出土遺物から平安時代中期頃に属するものと考えられる住居跡で、平面形が隅丸方形でその一辺にカマドを有し、床面にはカマドが位置する壁に向く細長い溝が掘り込まれているという3つの共通点をもっている。が、柱の付設の仕方に相異点がある。SI02はその柱穴の掘り込みの跡をもたないが、SI23は住居内に主柱穴3個と壁内外に支柱穴4個をもっている。前者はおそらく、直接床面上に柱を立てて上屋を構築したものと考えられる。なお、SI23はその床壁面が火熱で赤味を帯びており、床面から炭化材や焼土及び覆土中から多量の細かい炭と灰が検出されたため、焼失した住居跡と判断された。

2軒の竪穴住居跡の存在については、同時に構築されたものか、SI23を新築してSI02を破棄したものか、SI23が焼失したため新たにSI02を構築したのか、それとも家屋焼失に

寺沢遺跡

起因したものではなく、まったくそれぞれが単独で存在していた時期があったものなのかなどの点を考えられるが、両堅穴住居跡の時期差は、前記した3つの共通点と出土遺物から、ほぼ同時に存在していたものと思われる。

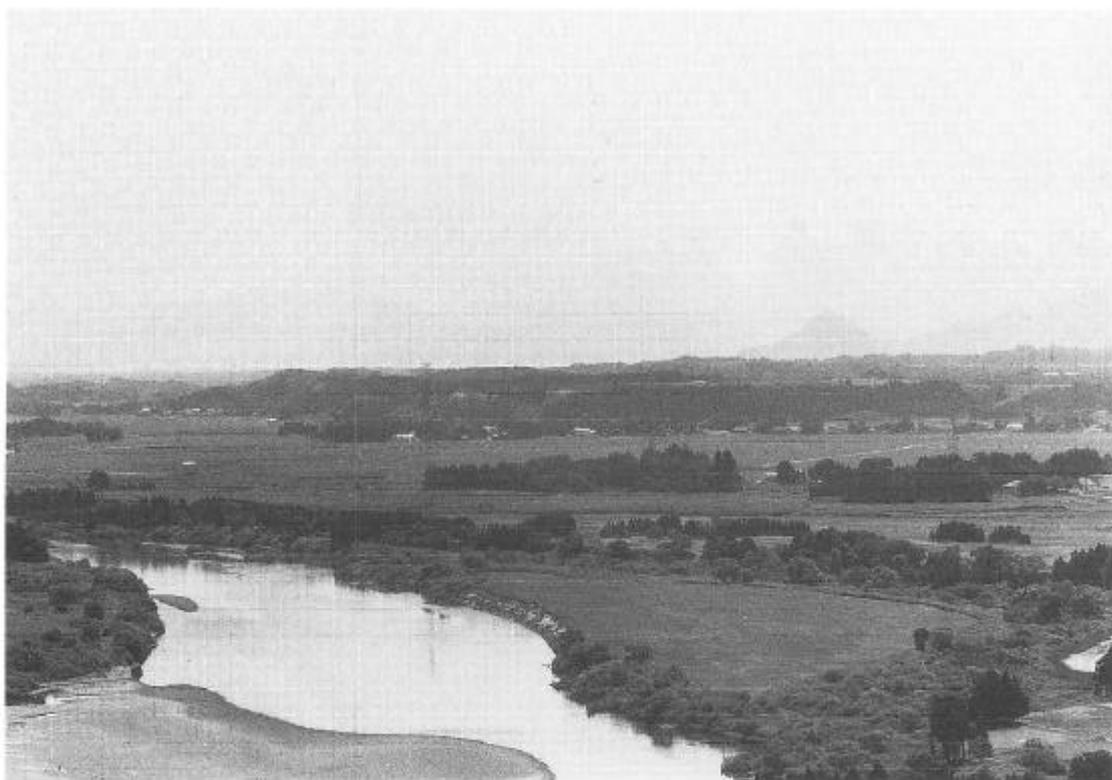
これ以外の堅穴住居跡の存在については、他に堅穴住居跡の痕跡を第Ⅱ層上面に確認できなかったため、本調査範囲には2軒の堅穴住居跡しか構築されなかったのではないかと考えられる。しかし、検出遺構の分布状況と遺跡地形から調査区外の東・西側には少なくとも数軒は存在するものと予測され、2軒以上から成る集落形態をとる遺跡であったと推察する。

以上本遺跡は、縄文時代前期～晩期と平安時代中期にも人々の暮らしがあった複合遺跡であることがわかった。さらに西仙北町に所在する上雨堤遺跡^(註1)は、この頃の掘立柱建物跡から成る集落遺跡であることから、寺沢遺跡は同遺跡と何等かの関連性を持つ遺跡であると考えられる。なお、西仙北町で平安時代の堅穴住居跡が発掘調査されたのは今回が初めてであり、同町の古代集落についての歴史を解明する資料が一つ増加したと言える。

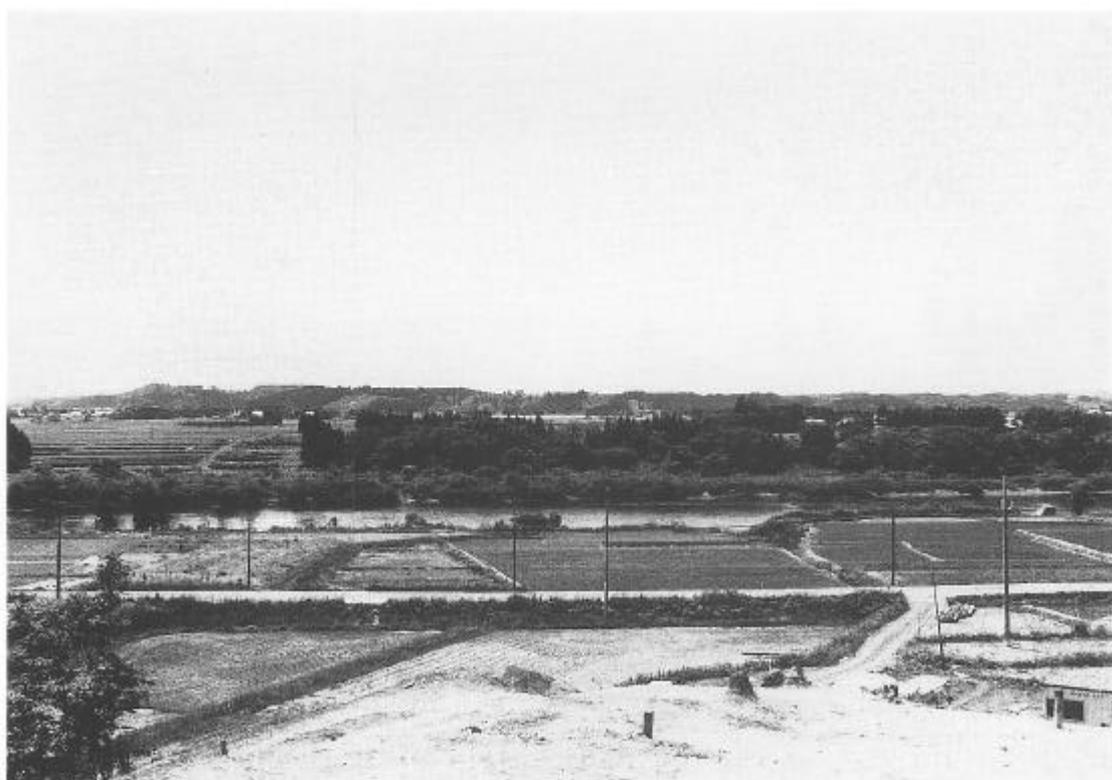
註1 秋田県教育委員会 『上雨堤遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第149集
1986(昭和61年)

参考文献

- 奈良修介・豊島 昂 『秋田県の考古学』 郷土考古学叢書 1967(昭和42年)
- 秋田考古学協会 『中藤根遺跡』 1974(昭和49年)
- 秋田県教育委員会 『下藤根遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第39集 1976(昭和51年)
- 秋田県教育委員会 『内村遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第82集 1981(昭和56年)
- 秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅲ』 秋田県文化財調査報告書第89集
1982(昭和57年)
- 秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅹ』 秋田県文化財調査報告書第109集
1984(昭和59年)
- 秋田県教育委員会 『土井遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第111集
1984(昭和59年)
- 秋田県教育委員会弘田柵跡調査事務所 『弘田柵跡Ⅰ－政庁跡－』 秋田県文化財調査報告書第122集
1985(昭和60年)
- 秋田県教育委員会 『大杉沢遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第151集
1987(昭和62年)
- 秋田県教育委員会 『寒川Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第167集
1988(昭和63年)



1 遺跡遠景(北西▷南東)



2 遺跡遠景(北▷南)



1 町道北側調査前(東▷西)



2 町道北側調査前(南▷北)



1 町道南側調査前(東▷西)



2 町道南側調査前(南▷北)



1 町道北側調査後(北東▷南西)



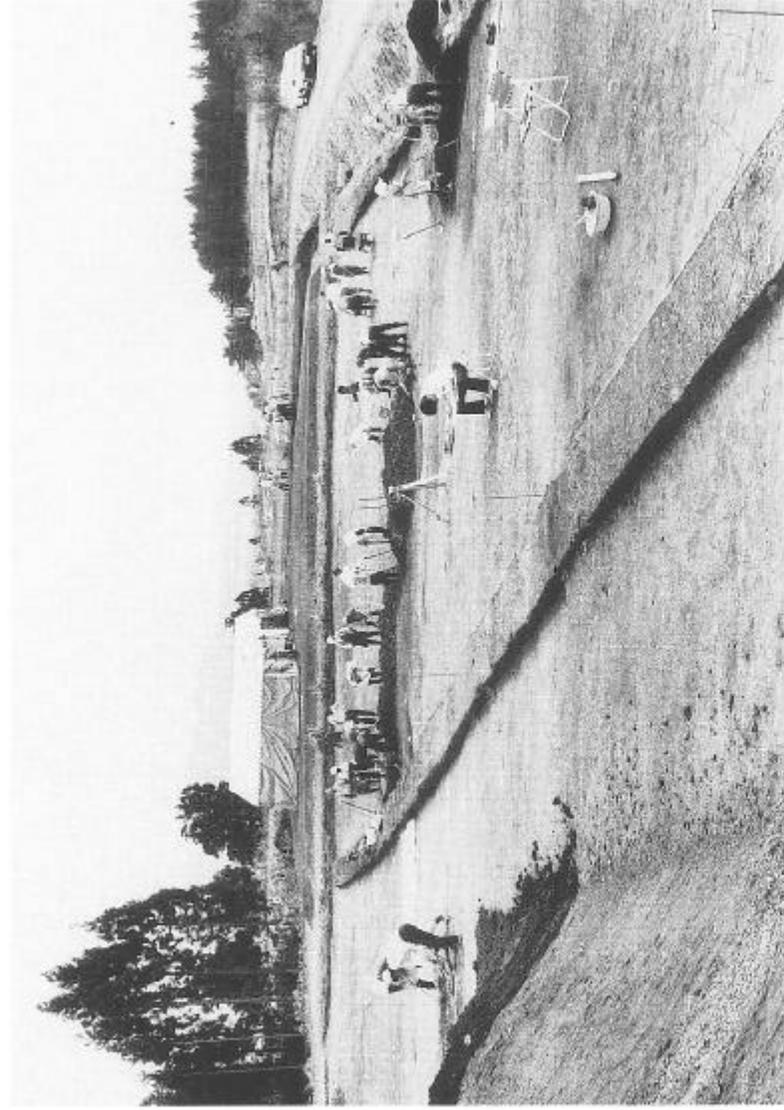
2 町道北側調査後(南東▷北西)



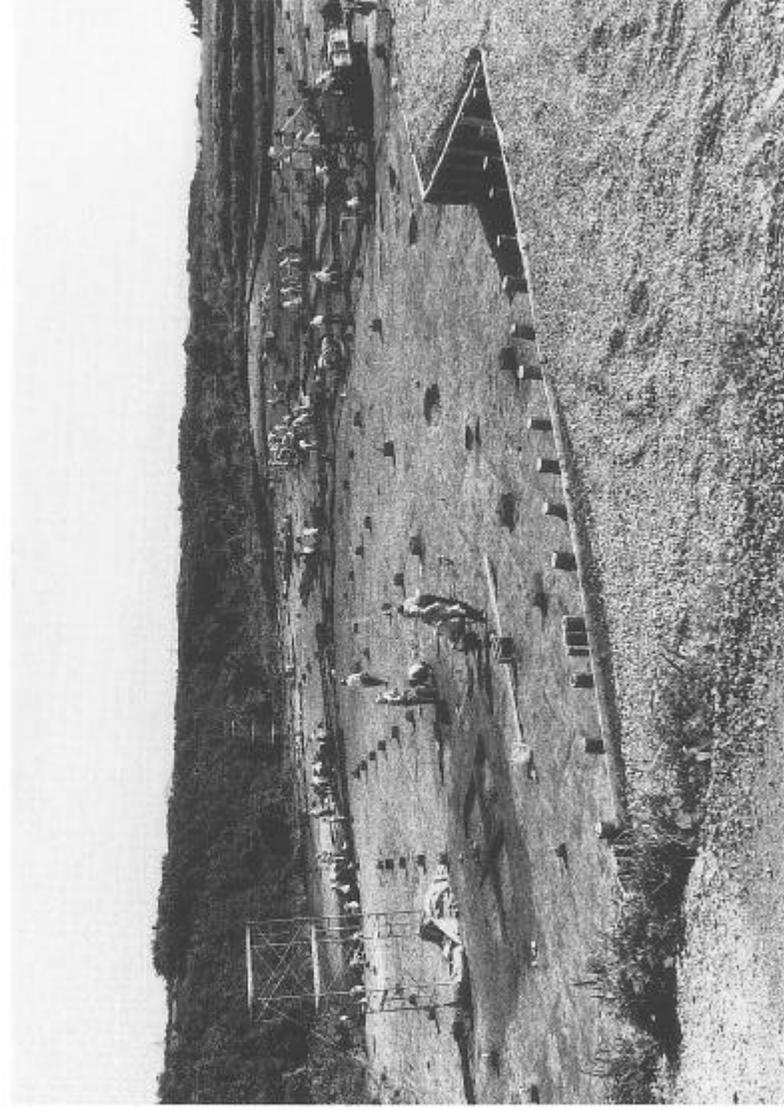
1 町道南側調査後(北▷南)



2 町道南側調査後(北東▷南西)



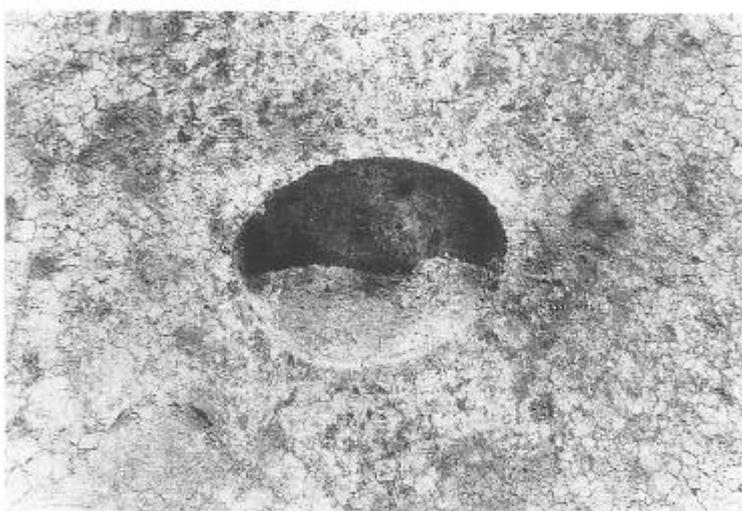
1 町道北側調査風景(西▷東)



2 町道南側調査風景(北▷南)



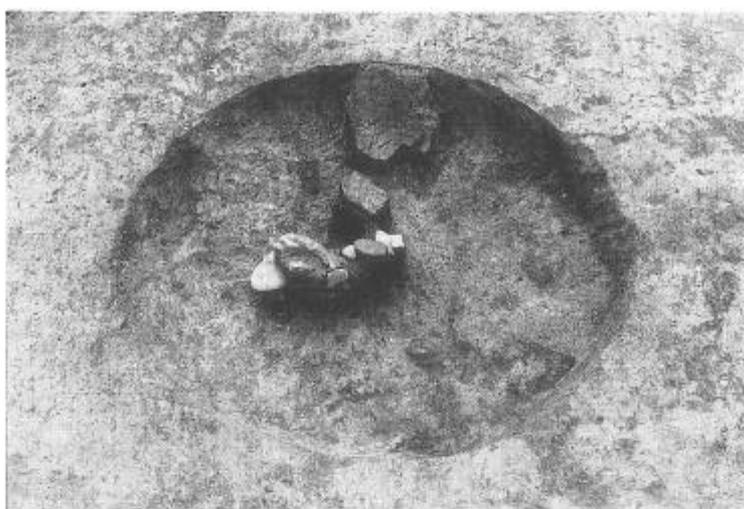
1 SK01土坑(南東▷北西)



2 SK04土坑(北東▷南西)



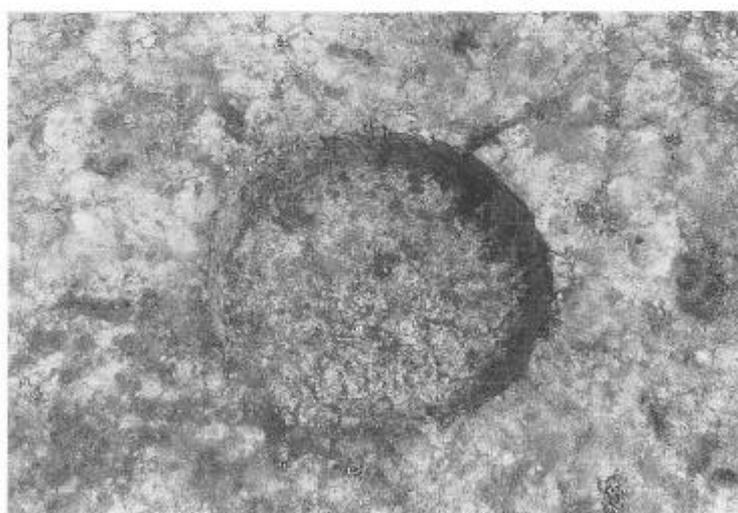
3 SK05土坑土層断面(東▷西)



1 SK05土坑(北東▷南西)



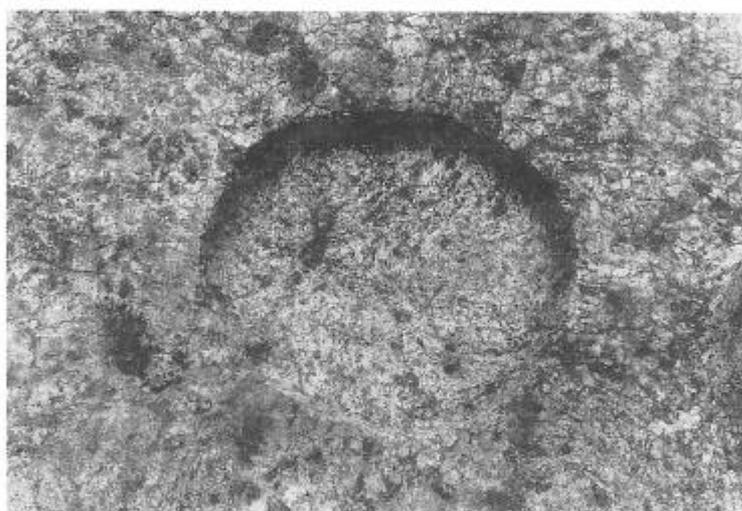
2 SK05土坑遺物出土状況(北東▷南西)



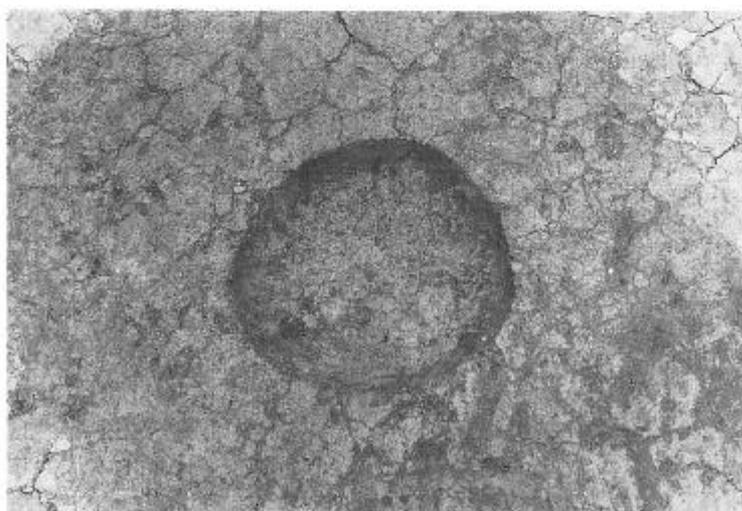
3 SK06土坑(南▷北)



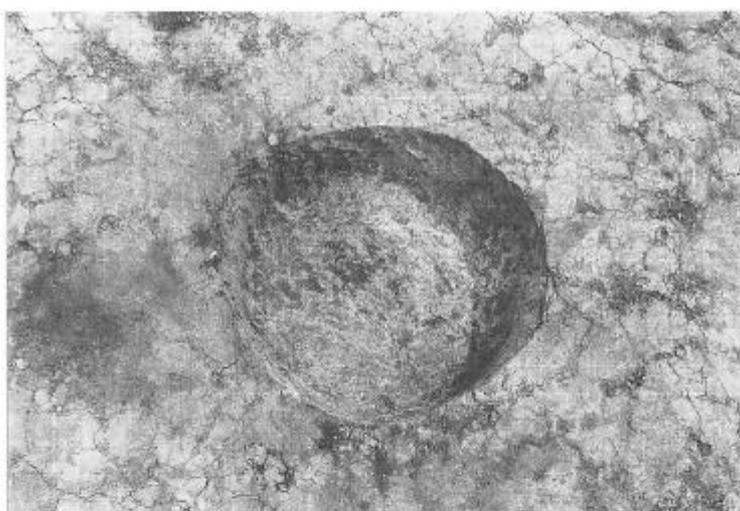
1 SK07土坑(北▷南)



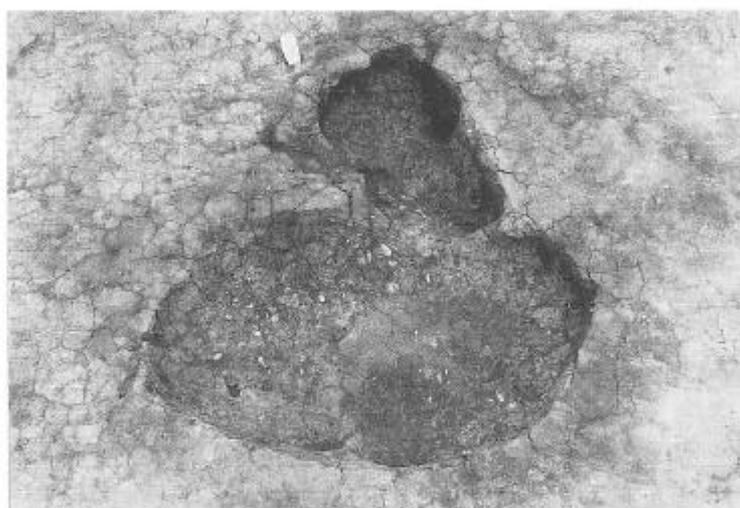
2 SK08土坑(北▷南)



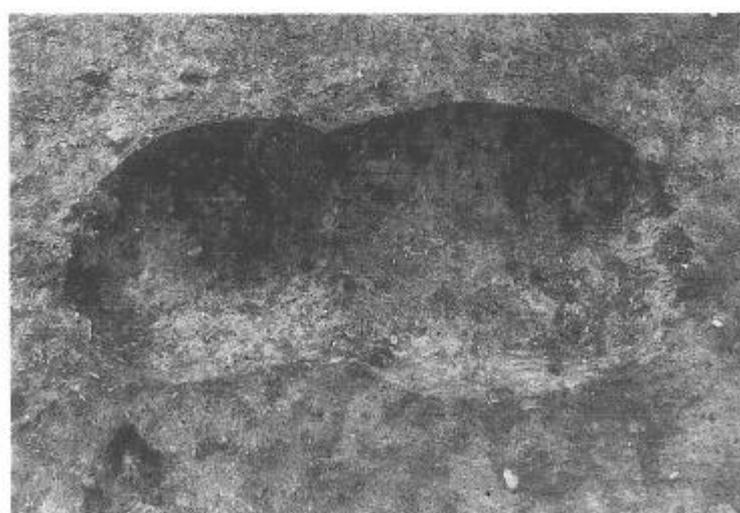
3 SK10土坑(南東▷北西)



1 SK11土坑(西▷東)



2 SK13土坑(南東▷北西)



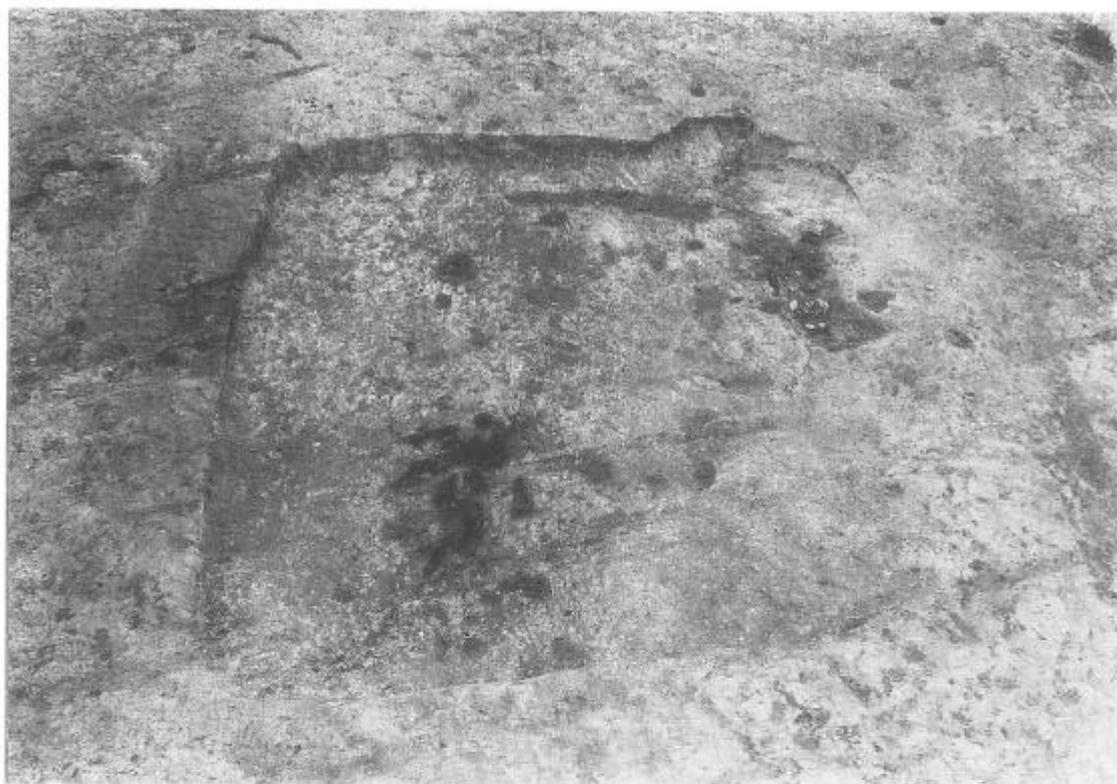
3 SK14・15土坑(南東▷北西)



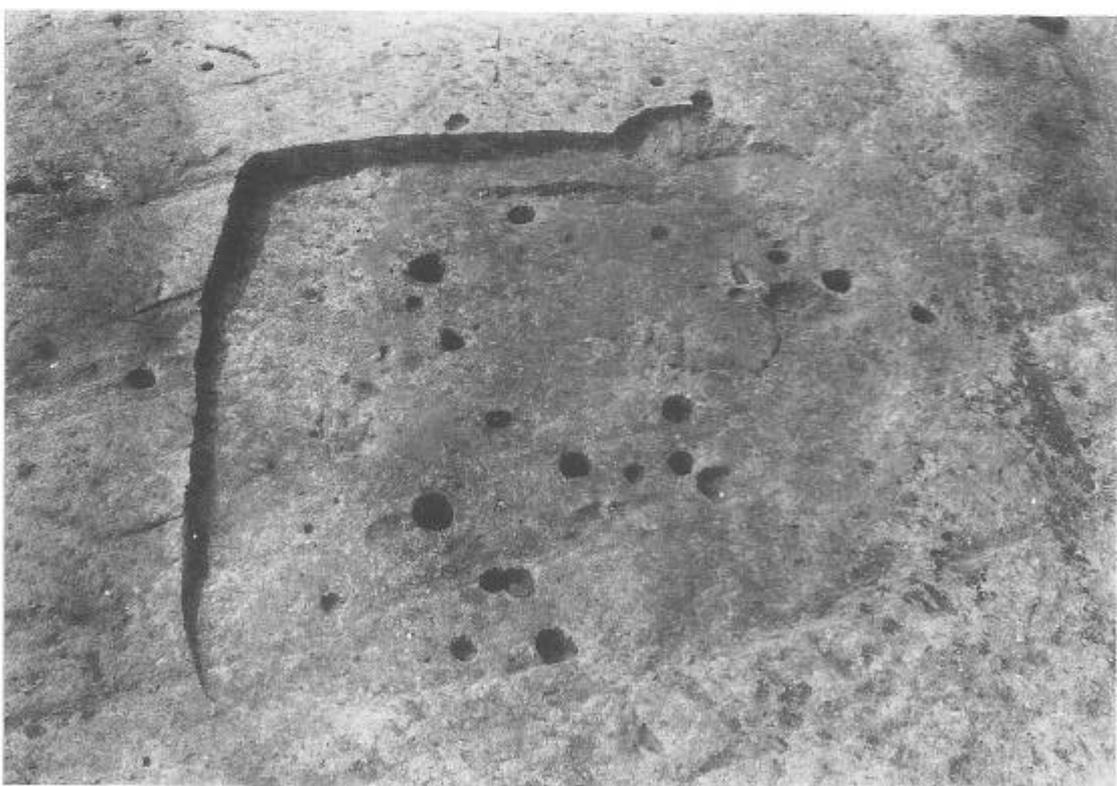
1 S I 02 竪穴住居跡(北▷南)



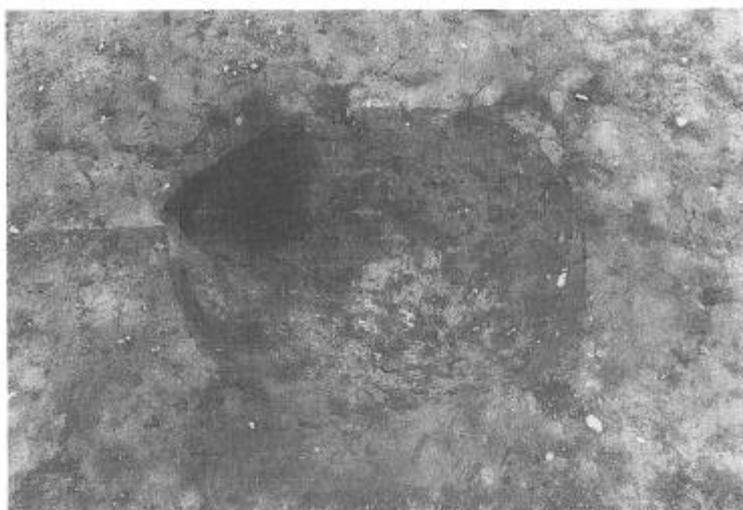
2 S I 02 竪穴住居跡カマド(北▷南)



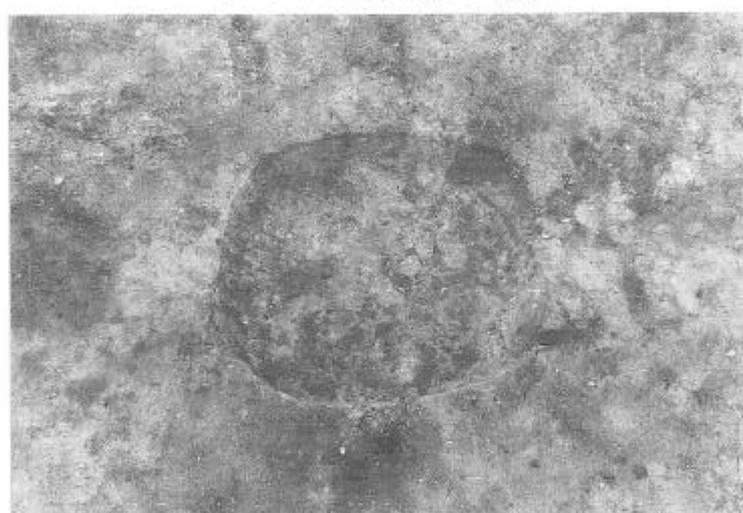
1 S I 23 竪穴住居跡炭化材検出状況(南▷北)



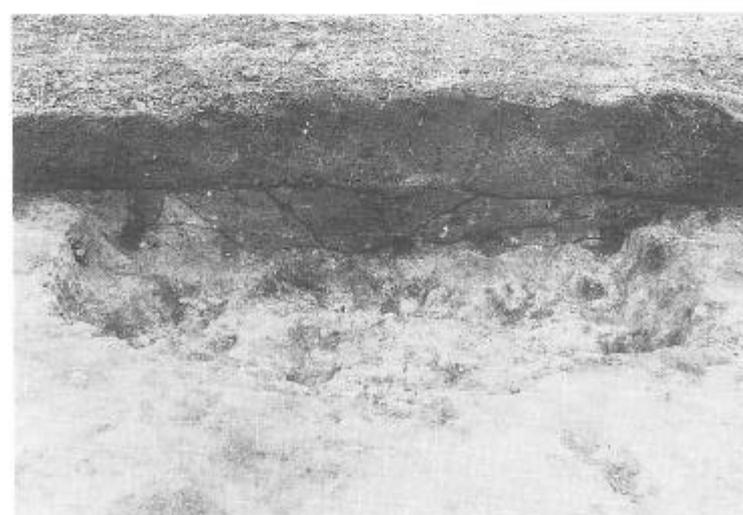
2 S I 23 竪穴住居跡(南▷北)



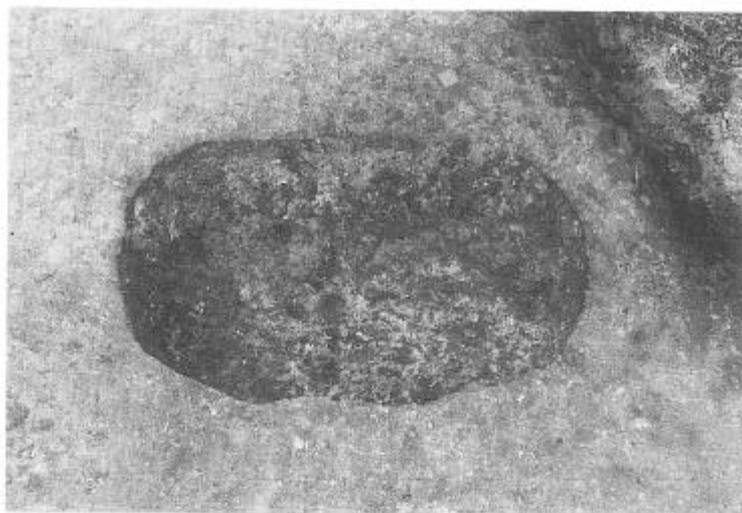
1 SK17土坑(北西▷南東)



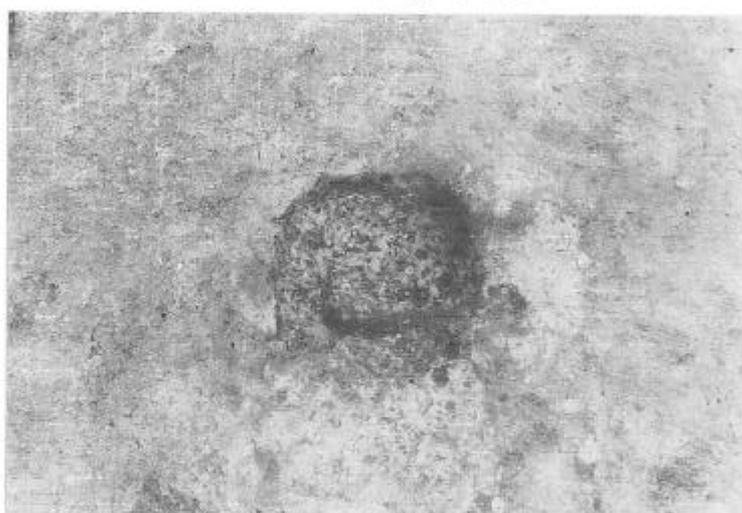
2 SK18土坑(西▷東)



3 SK19土坑(西▷東)



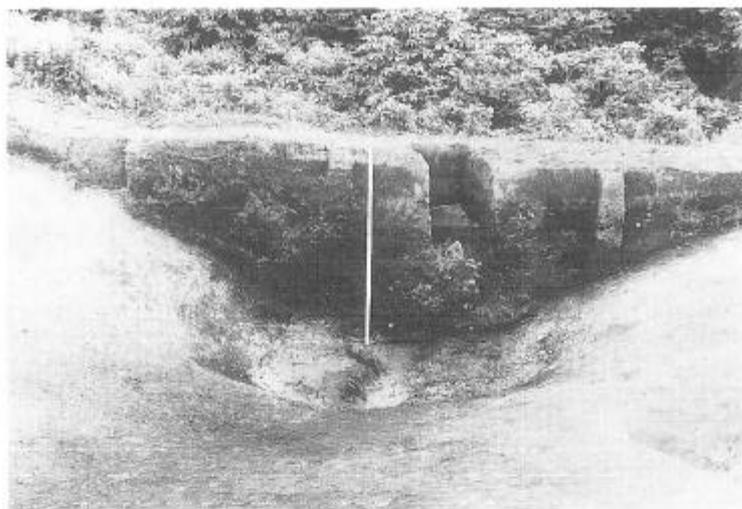
1 SK20土坑(南西▷北東)



2 SK21土坑(北西▷南東)



3 SE20井戸状遺構を検出した旧沢部分(南西▷北東)



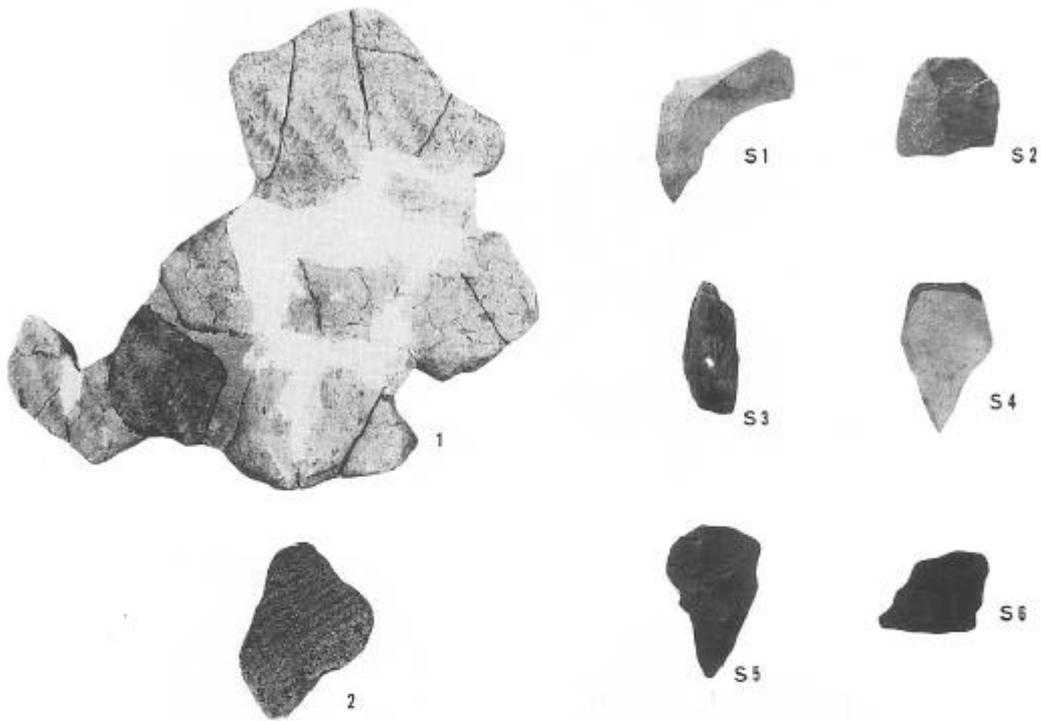
1 SE28井戸状遺構(西▷東)



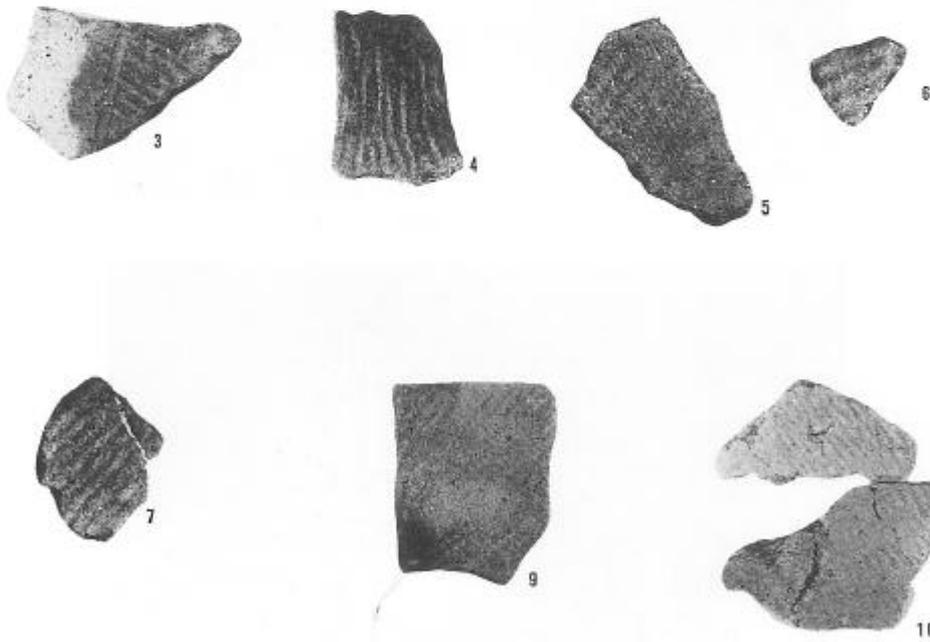
2 SE28井戸状遺構(南▷北)



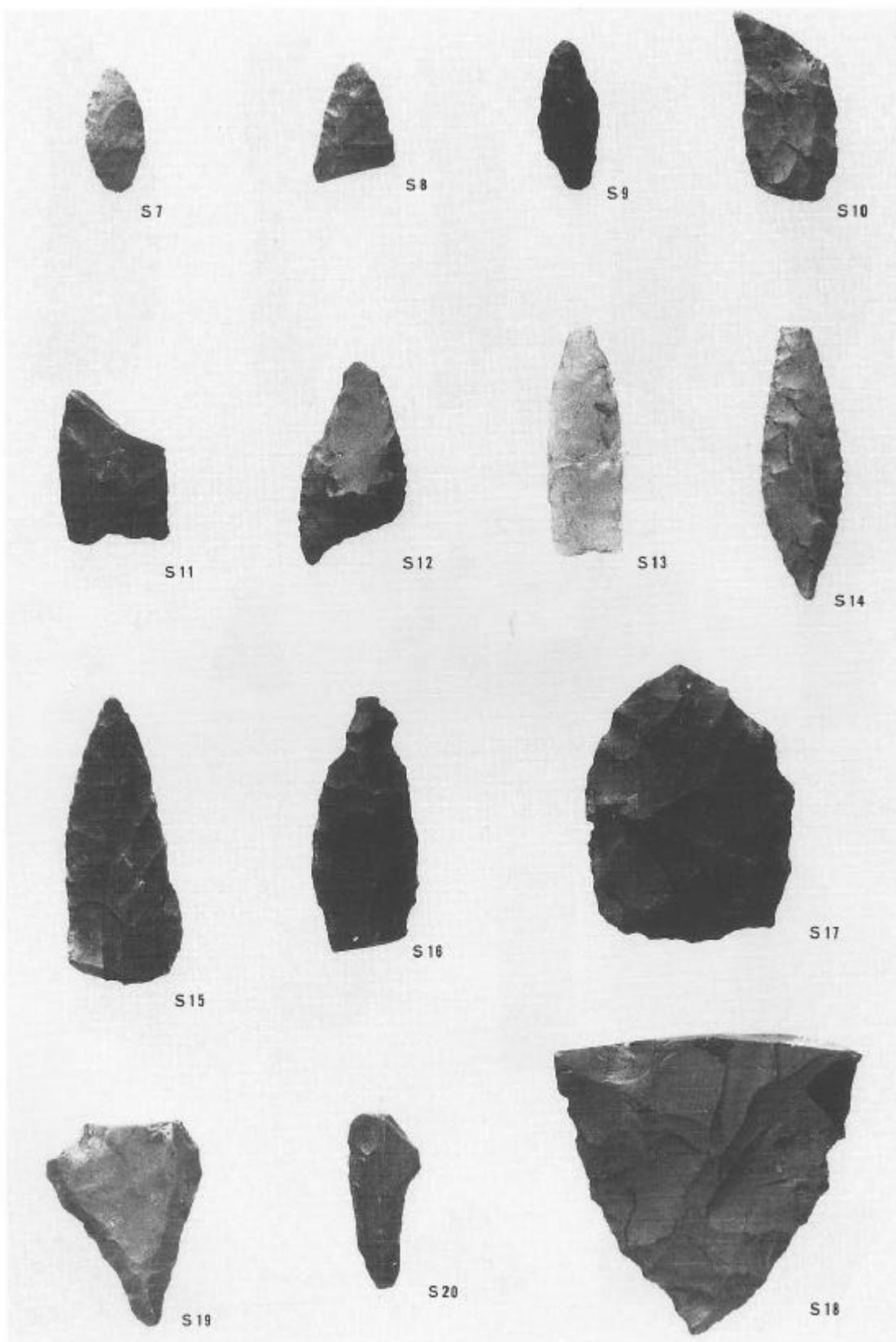
3 SE28井戸状遺構(西▷東)



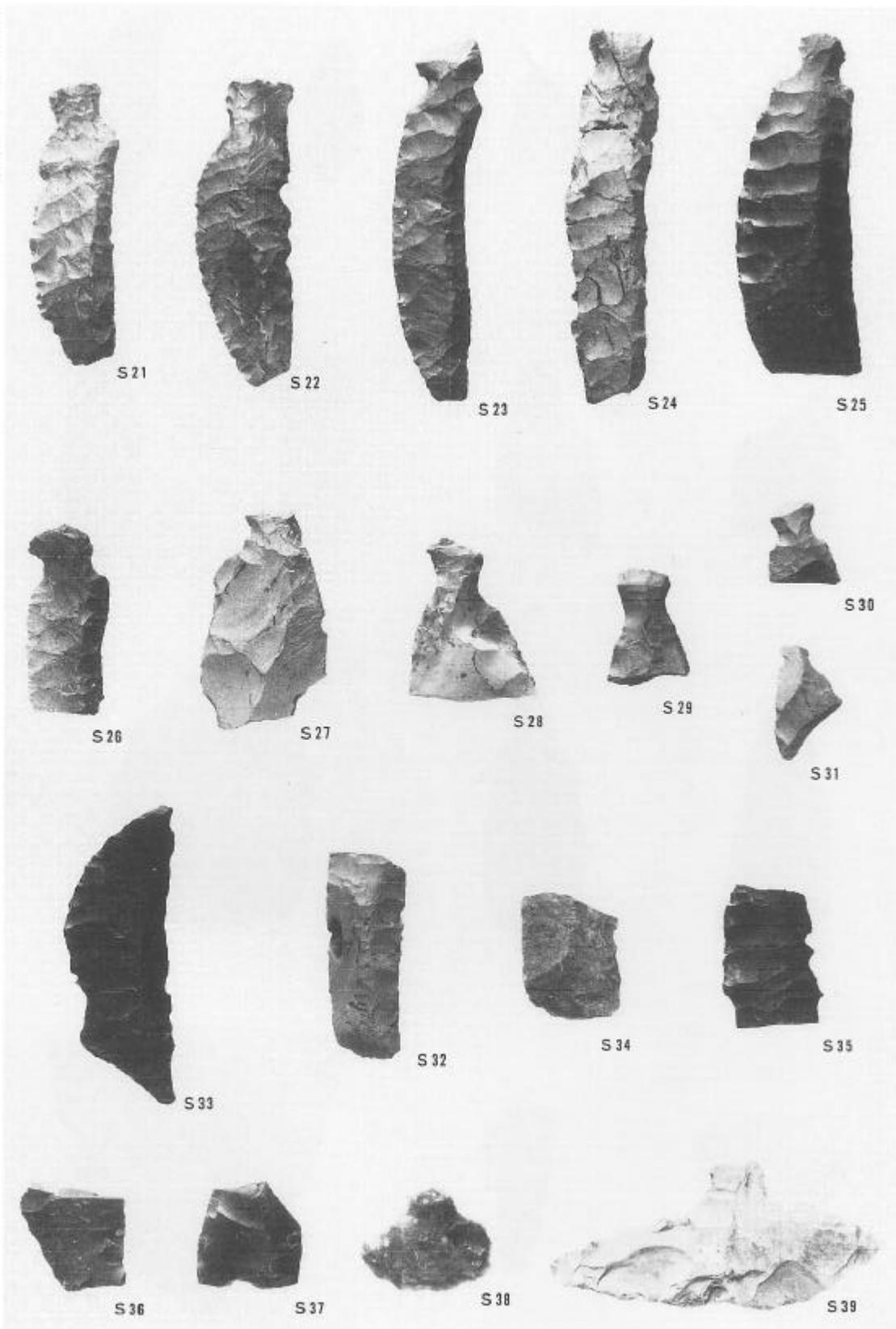
1 遺構内出土遺物(1)



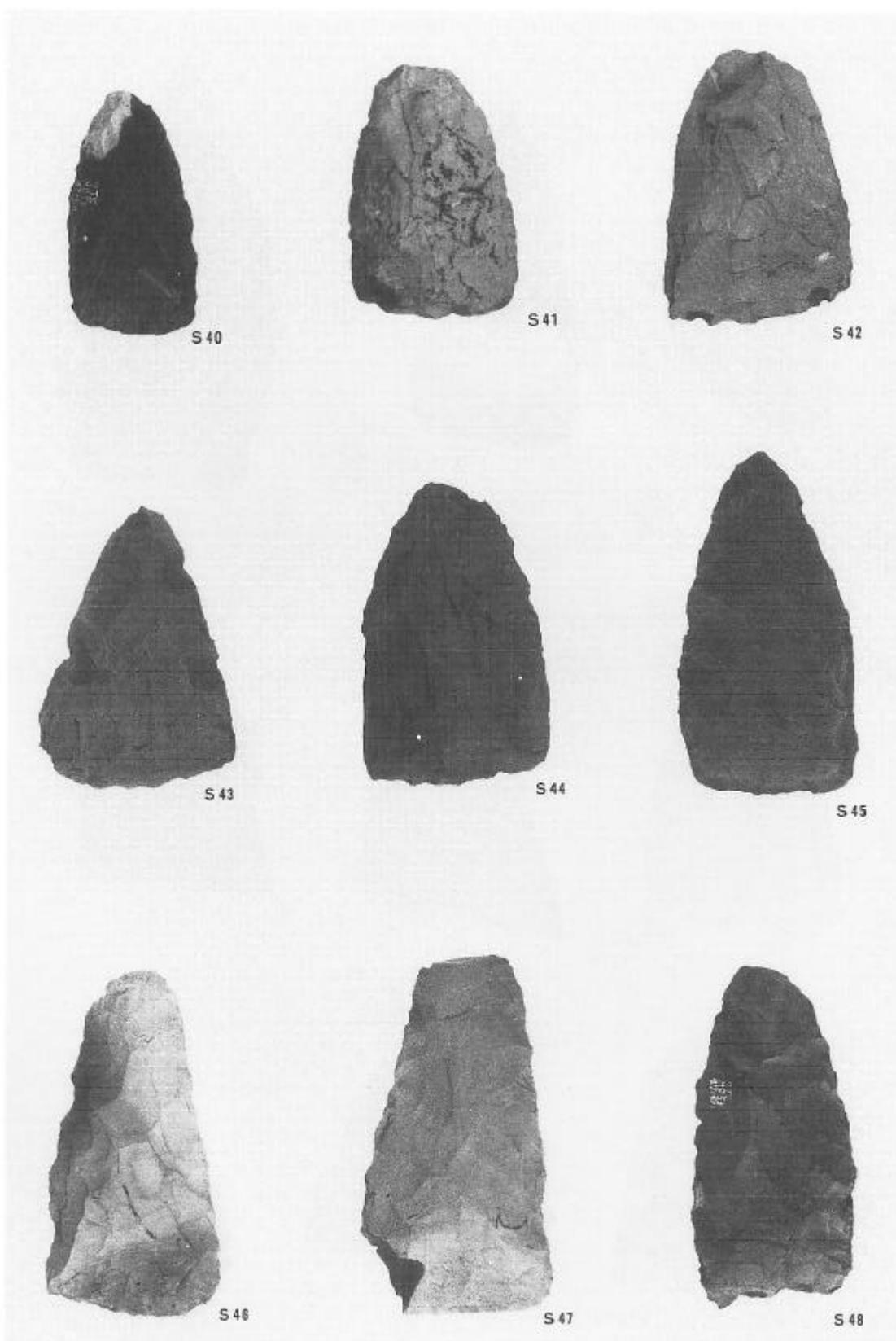
2 遺構外出土遺物(1)



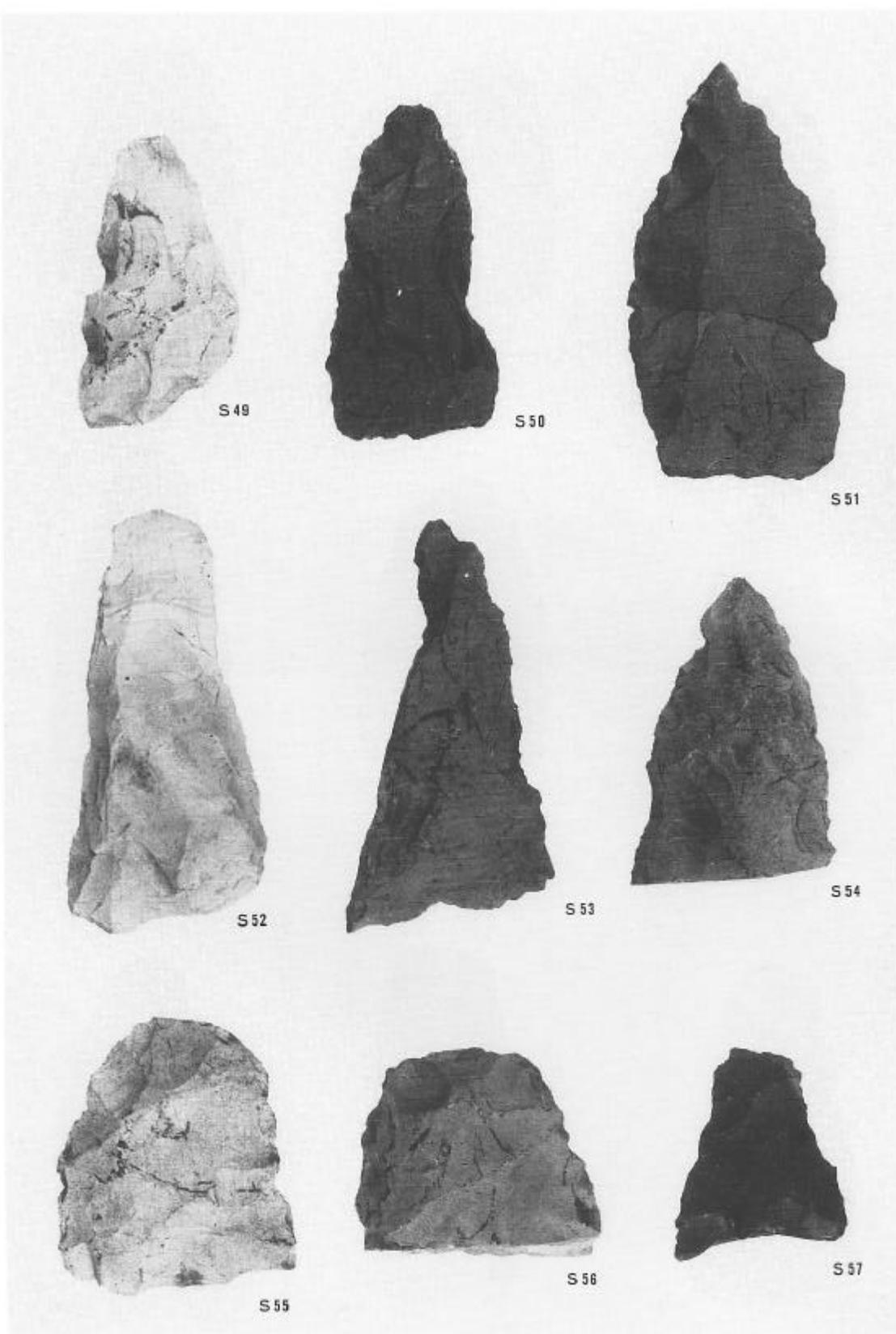
遺構外出土遺物(2)



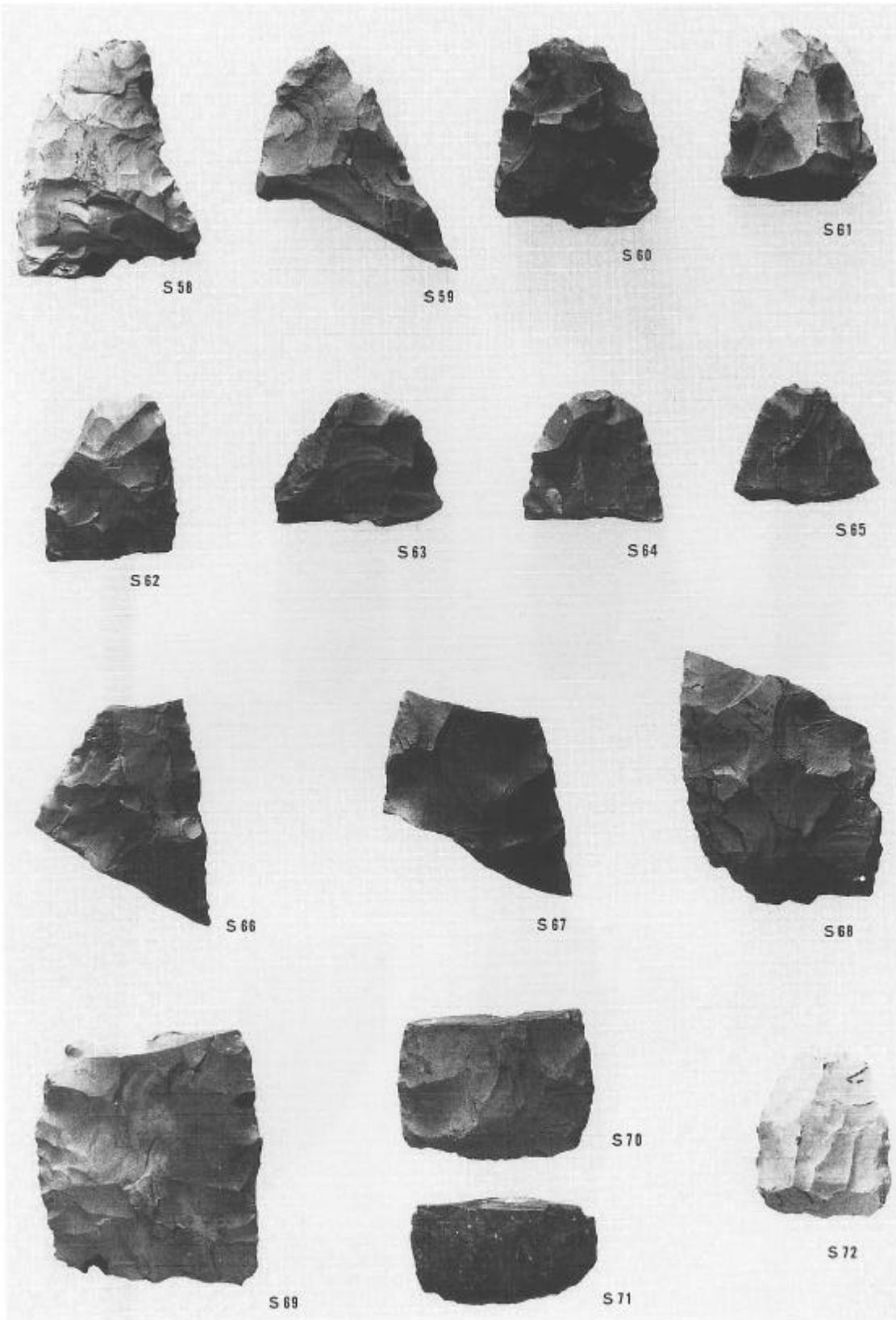
遺構外出土遺物(3)



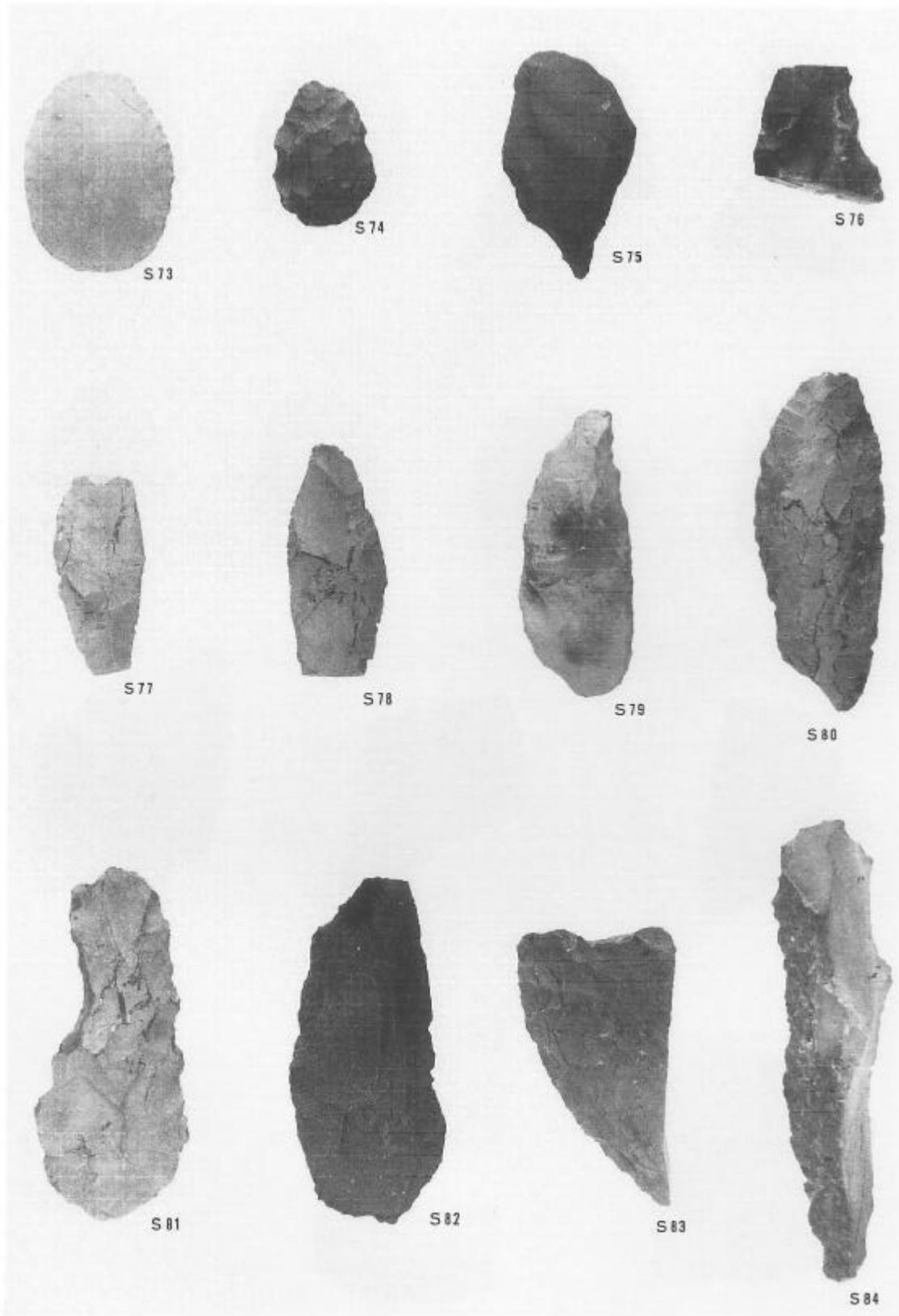
遺構外出土遺物(4)



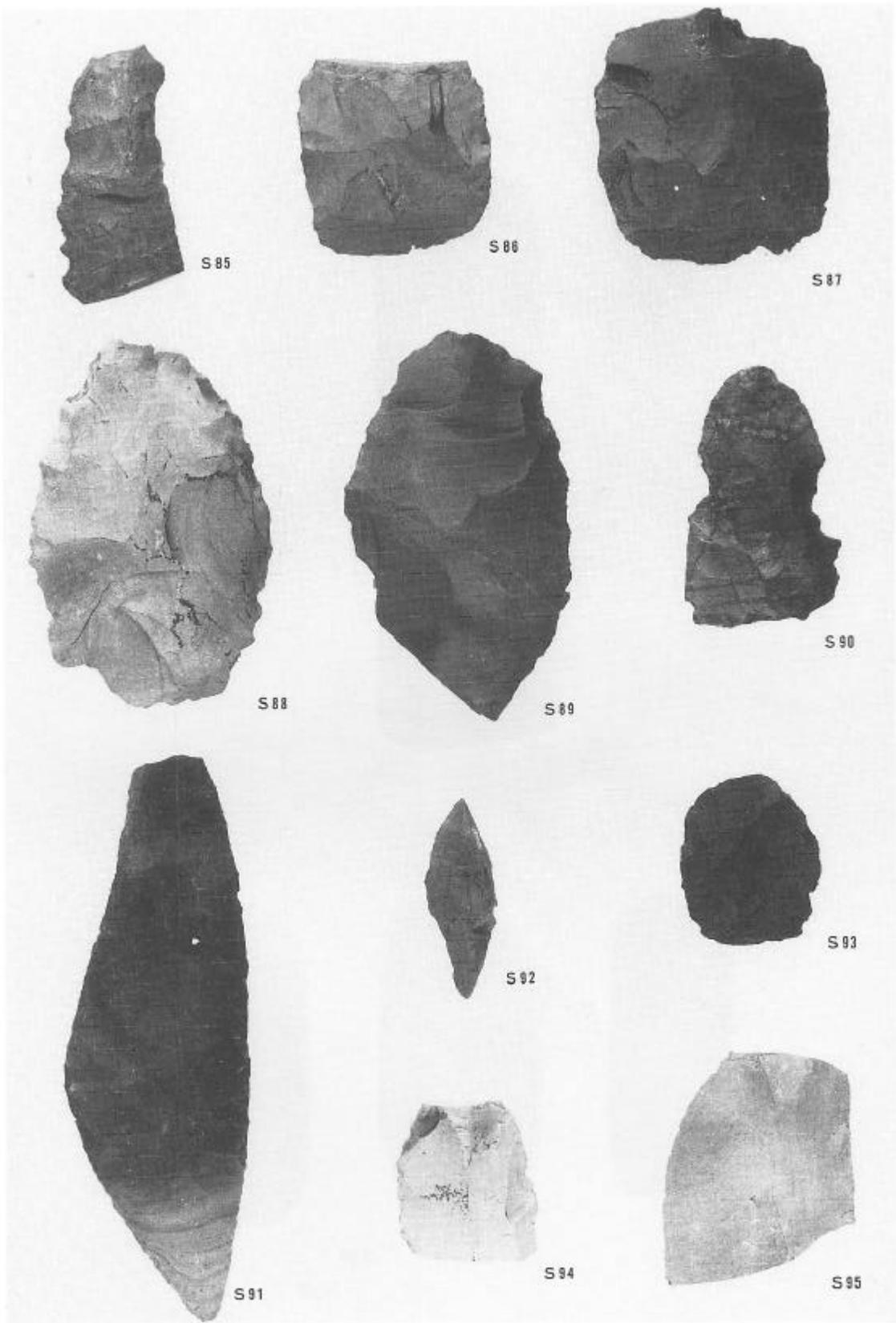
遺構外出土遺物(5)



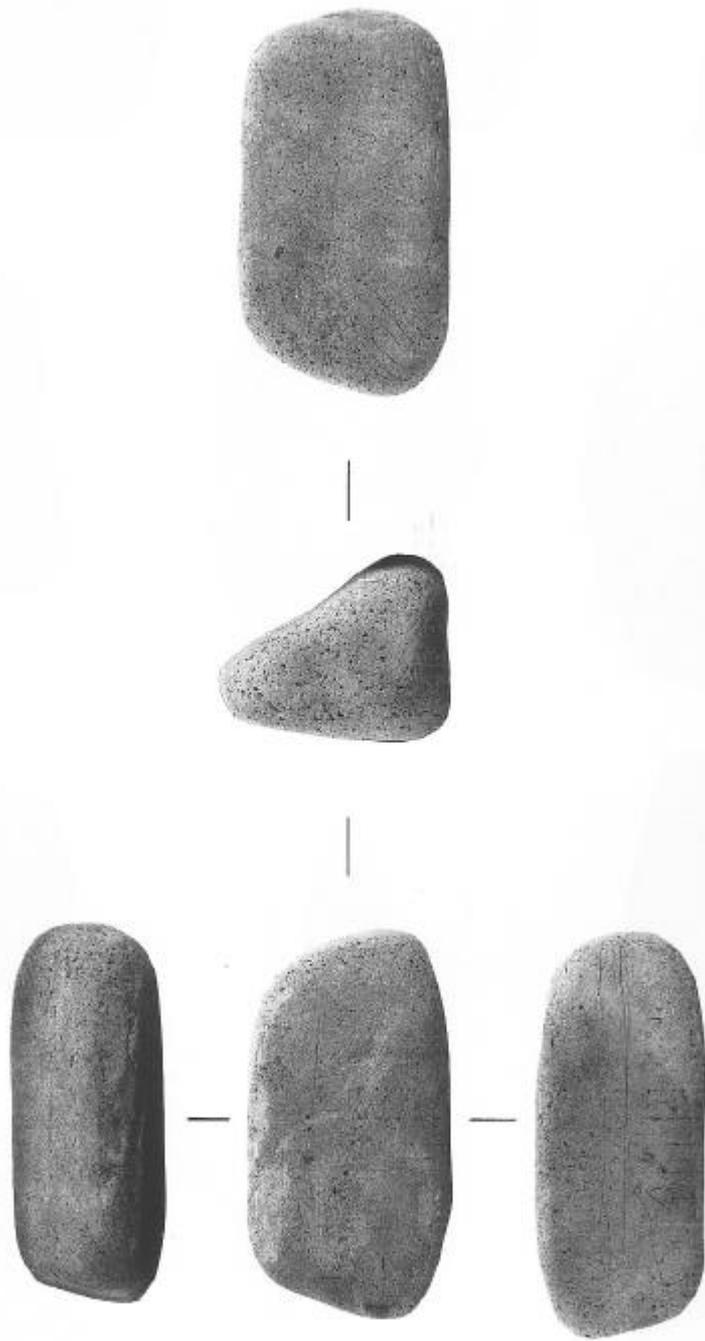
遺構外出土遺物(6)



遺構外出土遺物(7)



遺構外出土遺物(8)



S96

遺構外出土遺物(9)



11



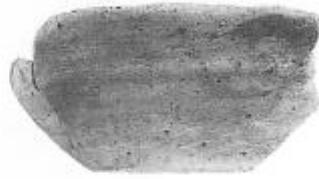
12



13



14



15



16



17



18

遺構内出土遺物(2)



18

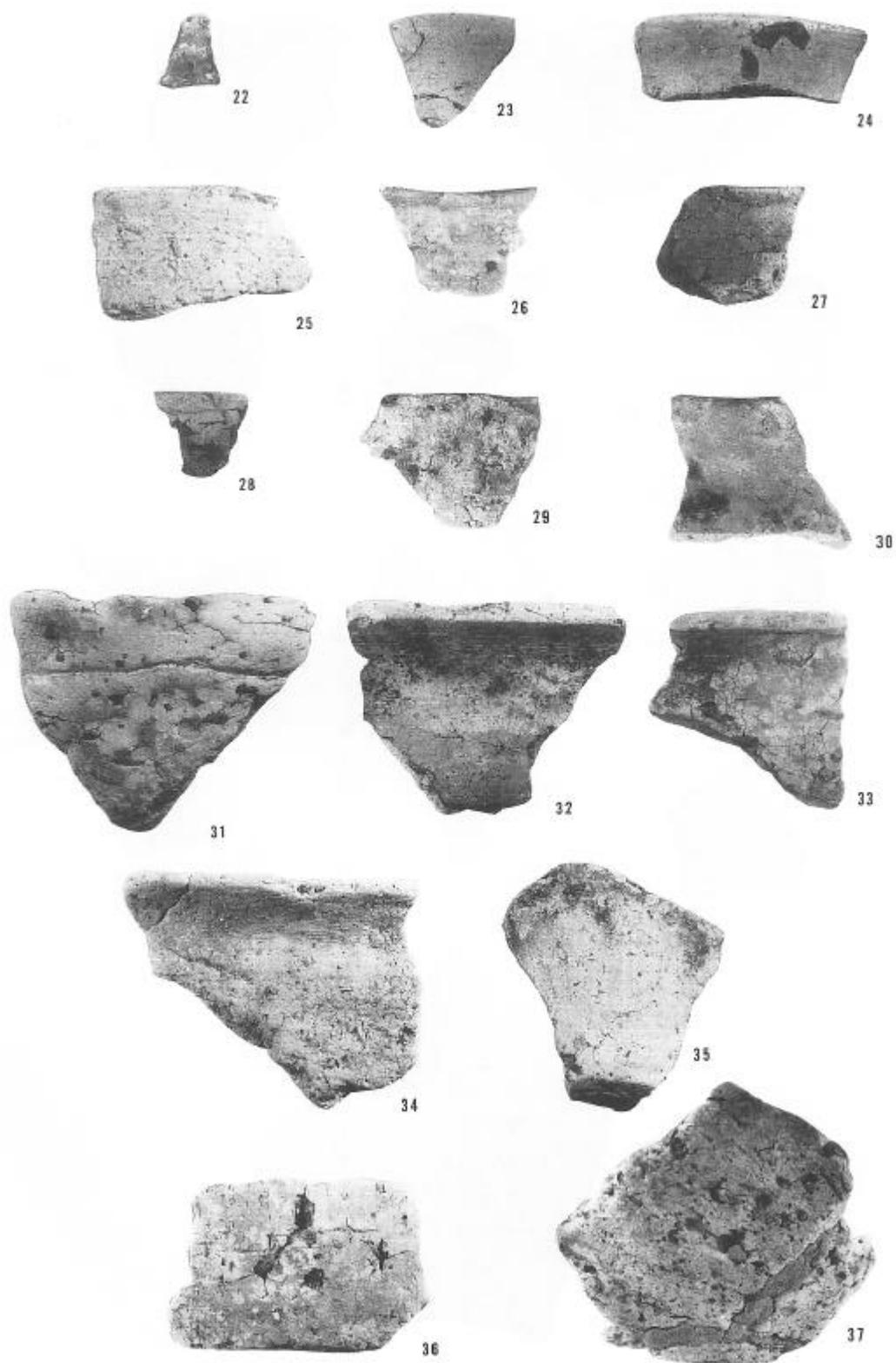


20

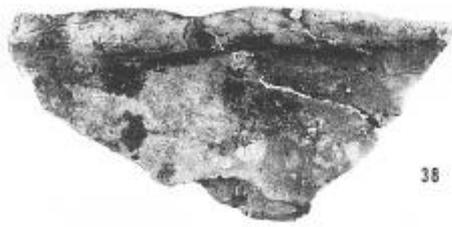


21

遺構内出土遺物(3)



遺構内出土遺物(4)



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49

遺構外出土遺物(10)

半 仙 遺 跡

第1章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観(第3図、図版1)

本遺跡はJR峰吉川駅から南西約1kmの距離にあり、出羽丘陵を横断する雄物川右岸に接する低位丘陵の末端に位置している。調査区は標高が21~32mと約10mの比高差があり、その地形は、西側を除く3方が沢に囲まれている。調査区の平坦面は、幅15~20m、長さ約100mの細長い尾根地形となっている。遺跡からは、竪穴住居跡3軒、焼土遺構2基、陥し穴状遺構3基、土坑35基、土器埋設遺構2基を確認した。遺物は、比較的まとまって出土しているが、ほとんどが遺構外出土のものである。

竪穴住居跡は尾根上に配置され、土坑は調査区北西区域に少なく、尾根中央、北東・南西の緩斜面にかけて広い範囲に検出された。中でも溝状を呈する陥し穴状遺構は、南西緩斜面に集中していた。

遺物には縄文時代早期、前期、中期、後期、弥生時代前期にかけてのものがあり、特に石器においては礫石器の出土が目立った。また、調査区北側では、5~10cmの大型剥片が集中して出土した。

これらの生活の痕跡は、遺跡の地形環境と深く結びついていることが分かる。

第2節 調査の方法(第1図)

本遺跡の調査は後に述べるように、昭和61年度分の調査と同62年度分の調査に分けられる。61年度の調査は尾根より北半分の範囲で、縄文時代前期の遺物が前もって確認されており、その時代の遺跡内容が展開すると予想されていた。そのために、平坦部を中心にトレンチ調査を実施し、遺構・遺物が確認された時点で拡張していく調査方法をとった。また、遺跡は全域杉株が残っている状態であったが、遺構の破壊を避けるために、すべて人力による伐根を行った。その結果、遺構は平坦部を中心とし、北東斜面にもその広がりが認められた。

62年度は前年度の調査結果をうけて、尾根の中心部から南にかけて遺構の分布が密になること、北東斜面での遺構検出状況や北西区域では平坦な面があることから、遺構の検出は広範にわたると予想された。よって、堆積土の浅い北西平坦部から全面的に広げてゆき、厚い堆積を示す緩斜面ではトレンチによる見通しをつけて調査を進める方法をとった。また、人力による伐

半仙遺跡

根が予想以上に困難を伴うことから、重機を用いた伐根を事前に行った。その結果は、以下報告書の中で述べる内容である。なお、遺構番号の決定は、各年度ごとに01から用いたために、報告の中では次年度分に前年度から続くように新たな番号を付して報告してある。また前年度分の欠番には、次年度分の遺構をその番号に与えてある。

第3節 調査経過

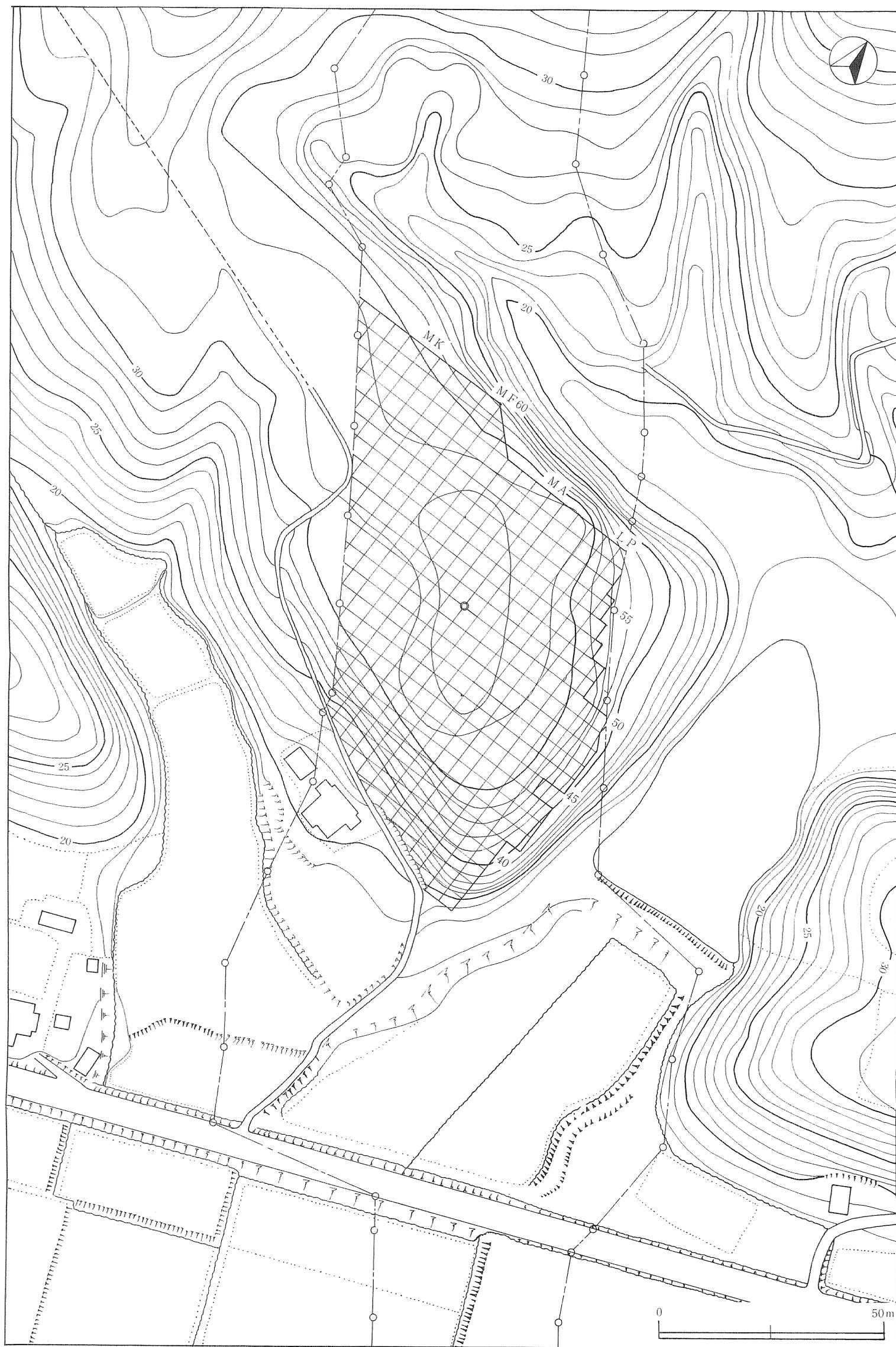
遺跡の調査は、昭和61年度と同62年度の2回に分けて行われた。初年度は昭和61年9月22日から開始し、11月19日に終了した。翌年は昭和62年4月22日から6月13日まで行った。

昭和61年度

- 9月22日 駐車場やプレハブ設置場所の整地作業、調査区にある杉の葉・枝等の除去。
- 9月26日 東側斜面LOラインに幅1mのトレンチを入れて粗掘り調査を開始。縄文時代の土器・石器、土坑2基を検出。
- 10月6日 LN49グリッドで円形プランの土坑を検出。村越潔氏来跡。
- 10月23日 MC54～58、MD55～58グリッドの粗掘りを行う。SI20の南壁が不明瞭であることが判明。工楽善通氏来跡。
- 10月28日 東側斜面の粗掘りを行う。SK04・08～10・15・17の精査終了。SK17完掘、SK21～31までの検出状況写真終了。SK03・05・06の平面図作成終了。
- 11月8日 SK27・28、SN26の精査を行う。SN26・SI31は重複関係にあることが判明。
- 11月15日 東側斜面の粗掘りを行う。SK13・19・SN29の遺構の精査終了。SK27・28の完掘写真終了。SI15・31・SN26のエレベーション図作成終了。
- 11月19日 全調査の終了。

昭和62年度

- 4月22日 進入道路の整備や、調査地にある杉の葉・枝葉の除去運搬を行う。調査区の北西部から粗掘りを開始。
- 4月28日 北西緩斜面で基本土層図作成。
- 5月14日 南側斜面の粗掘りを行う。SK33・SKT34の半截を行い、その土層断面を撮影。
- 5月22日 南側斜面の粗掘りを行う。SK40・41・45の土層断面図作成終了。
- 6月4日 南側斜面の粗掘りを行う。SKT34・36のエレベーション図、SKT35の平面図作成。
- 6月11日 MD50グリッド北壁で、土壌のサンプリングを実施。調査区全域の撮影終了。
- 6月13日 全調査の終了。



第1図 地形・グリッド配置図

第2章 調査の記録

第1節 遺跡の層序(第2図)

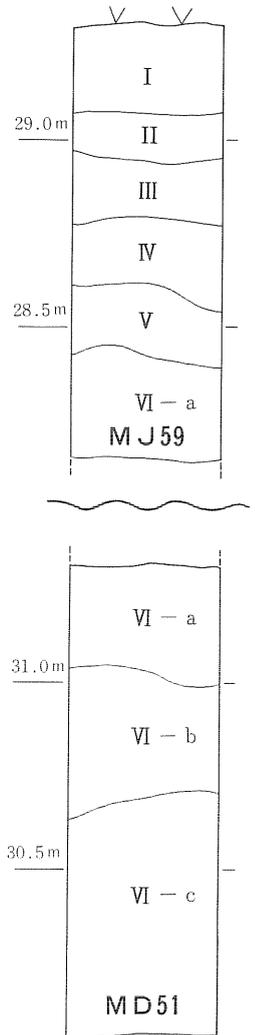
遺跡の基本層位は尾根部分において削平が著しいために、北西緩斜面の安定した土層MJ59グリッド北壁を図示してある。また、平坦部MD51グリッド北壁で深掘りを行ったので、それとも合わせて図示した。

- 第I層 暗褐色土(10Y R3/3) 表土層。層厚20~25cm。
 第II層 黒褐色土(10Y R2/3) 軟かい層である。粘性は普通。層厚10~15cm。
 第III層 黒褐色土(10Y R2/2) 比較的しまりのある層である。炭化物粒を認める。粘性は普通。層厚20cm。
 第IV層 暗褐色土(10Y R3/4) 粘性しまりとも普通である。もっとも色調の明るい層である。
 第V層 黒褐色土(10Y R3/2) 粘性しまりとも普通である。5mm前後の炭化物粒を少量認める。漸移土である。
 第VI-a層 明黄褐色土(10Y R6/6) 粘性しまりとも強い。地山土。層厚30~50cm。

次にMD51グリッド地山土については、以下のようである。

- 第VI-a層 黄褐色土(10Y R5/6) 粘性しまりとも強い。2~3mmの白色砂粒を微量に含有する。層厚20~30cm。
 第VI-b層 にぶい黄褐色土(10Y R6/4) 粘性しまりとも強い。第VI-a層と第VI-c層の漸移的な様相を示す。
 第VI-c層 浅黄色土(2.5Y7/4) 粘性しまりとも強い。部分的に鉄分を含む。層厚50~60cm以上。

第I~VI層の連続した層序を成すのは調査区北西部だけであり、尾根状部分北側や西側の緩斜面には第IV層は認められない。また、場所によっては第V層の認められない部分もあるが、それは第V層地山土の性質によるものと思われる。遺物の包含層は、おおむね第III~IV層中である。



第2図 基本土層模式図

第2節 検出遺構と遺物

1 縄文時代

(1) 検出遺構と出土遺物

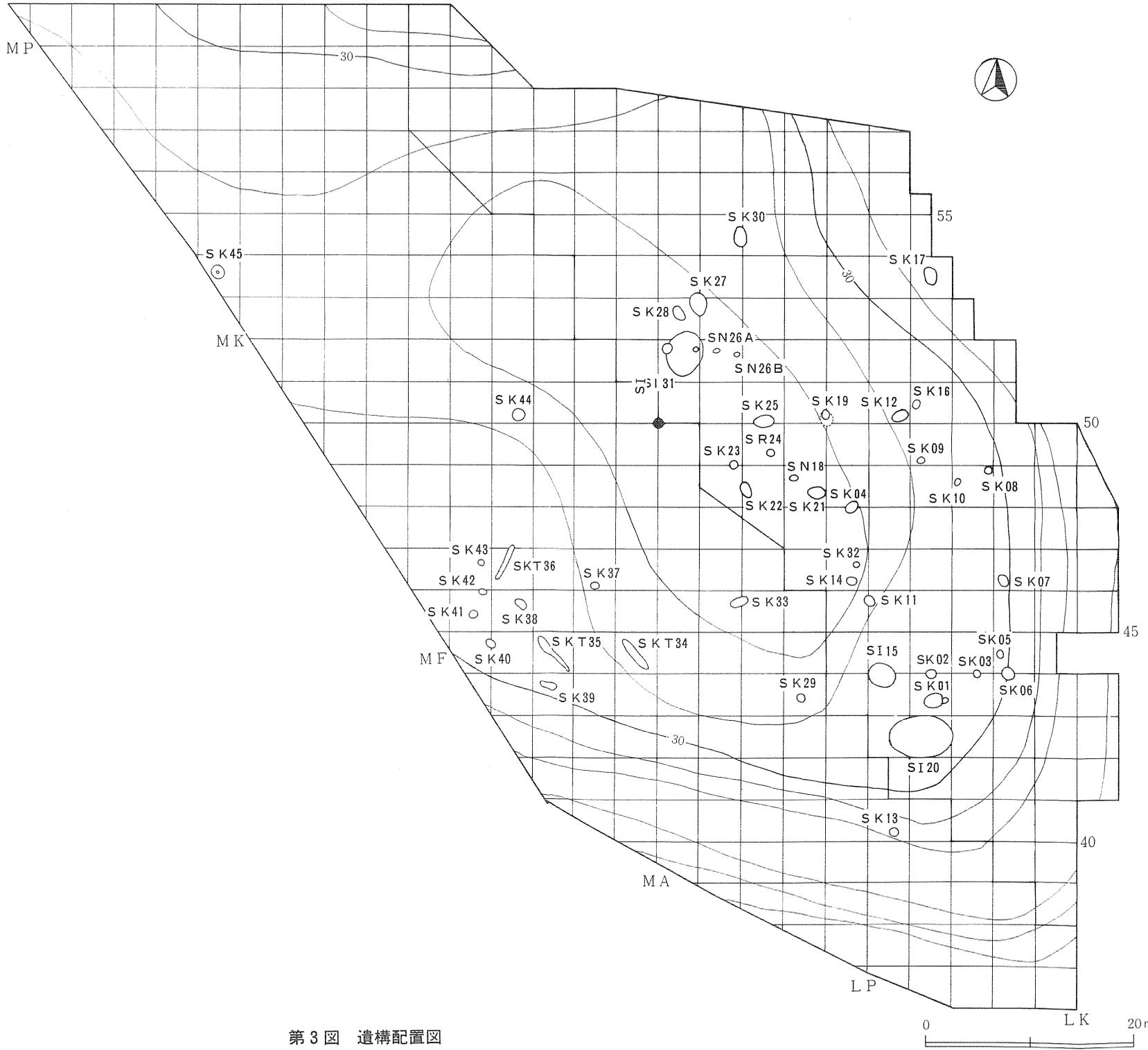
① 竪穴住居跡

SI 20(第4・16図、図版1・18)

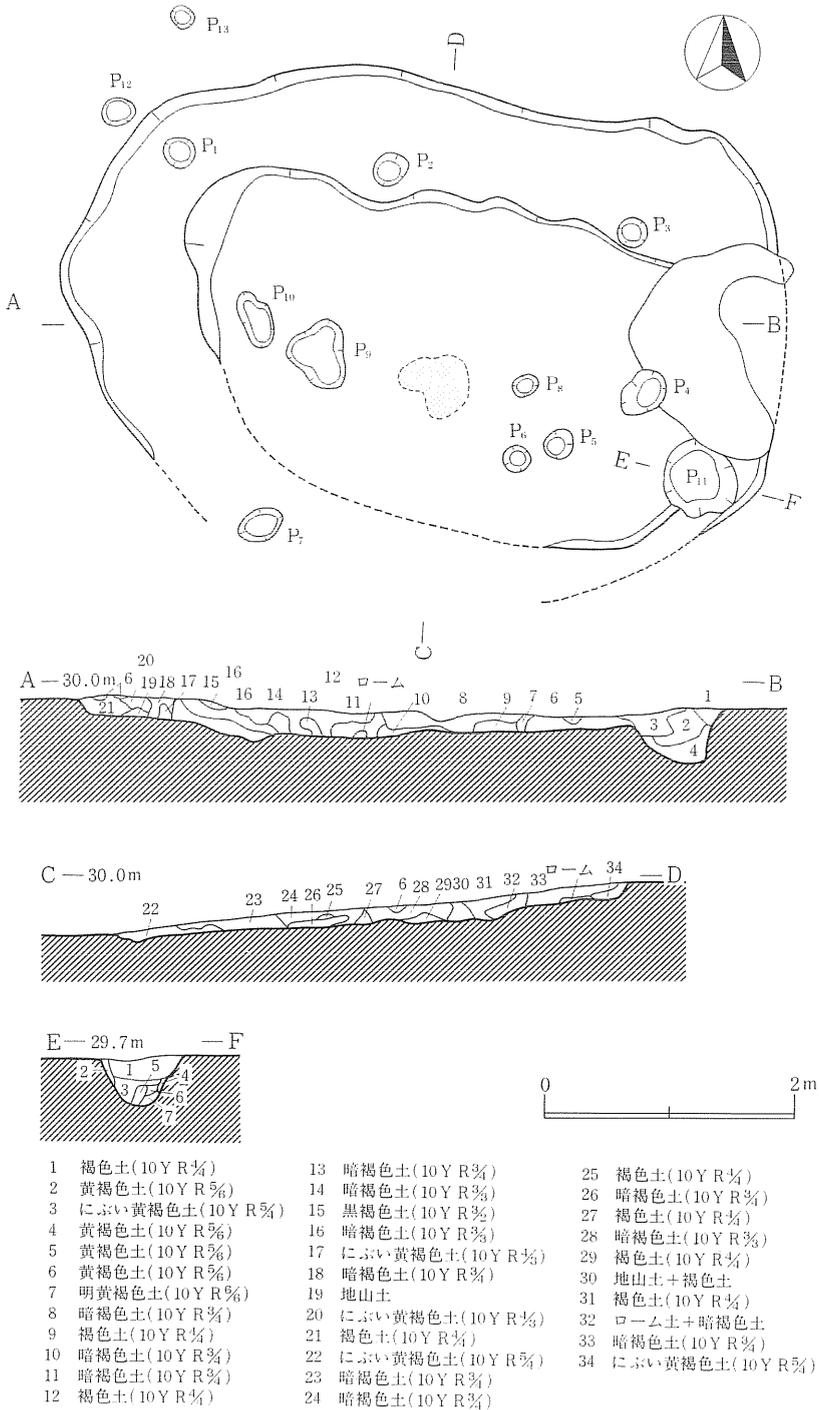
調査区の南東側尾根の先端にあり、LN・LO42グリッドを中心に位置している。竪穴住居跡の南側半分は削平が著しく不明瞭であるが、覆土は10~20cmの堆積がある。長軸は約N-80°-Wの方向を指し、平面形は隅丸方形の楕円形と考えられる。規模は長軸約5.8m×短軸約4mと推定され、壁の立ち上がりは緩く、床面は軟かい。住居跡の中央には、約50×40cmの地床炉の範囲を検出したが、底面の焼け方は弱い。当住居跡には、壁から約1mの幅で内側に緩く傾斜をもつテラス状の部分があり、床面からは約10cmの高さにある。この部分もやはりしまりがなく、ピットはP₁~P₁₃まで検出されたが、確実な支柱穴はP₁~P₄と思われる。P₁₁は住居に伴う土坑である。ピットの規模は、P₁が径約25cm・深さ15cm、P₂が径25~30cm・深さ約20cm、P₃が径約25cm・深さ約15cm、P₄が径30~45cm・深さ25cm、P₅が径20~25cm・深さ約20cm、P₆が径約20cm・深さ15cm、P₇が径25~40cm・深さ約15cm、P₈が径約15~20cm・深さ約5cm、P₉が径40~50cm・深さ15cm、P₁₀が径20~45cm・深さ約10cmである。P₁₁は径55~65cm・深さ約35cmであり、他住居跡の外には径20~25cm・深さ約10cm、径約15cm・深さ約5cmのP₁₂・P₁₃がある。遺物は、覆土中の攪乱層から縄文時代前期の遺物が出土しているだけである。出土土器は繊維を含み、外面底部と胴最下位、内面が丁寧に磨かれている。時期は、土器やテラス状の床を有する形態から縄文時代前期と考えられる。

SI 15(第5・17図、図版2・20)

調査区の南東側尾根の先端にあり、LO43・44グリッドを中心に位置している。平面形は径約2.6mの不整形で、覆土は15cmである。床面や壁の立ち上がりは、比較的しっかりしている。床面の中央部には深鉢を設置した土器埋設炉があり、それと南東側壁との間にも地床炉を伴う。土器埋設炉は30×28cmの掘り方をもち、深さは約20cmである。地床炉の掘り方は径約40cm・深さは5cm前後である。柱穴は、竪穴住居跡の壁上端から外に約17cm以内と接近した距離にあり、P₁~P₆までの6個が検出された。柱穴間の距離は、最大がP₁~P₂間の1.95m、最小がP₃~P₄の1.15mである。柱穴の規模は、P₁が径20~25cm・深さ約20cm、P₂は径約20cm・深さ約20cm、P₃は径約20cm・深さ15cm、P₄は径約20cm・深さ約20cm、P₅は径約25cm・深さ約15cm、P₆は径20~25cm・深さ約15cmである。土器埋設炉の深鉢形土器35は、胎土に砂が多く含まれ、RL縄文を施す。この土器から本住居跡は縄文時代中期と考えられる。



第3図 遺構配置図



第4図 SI20竪穴住居跡

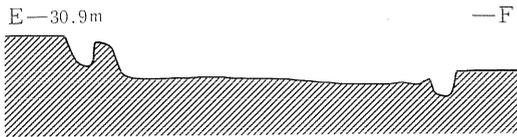
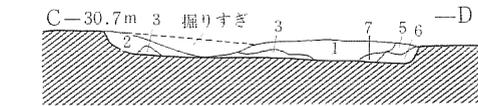
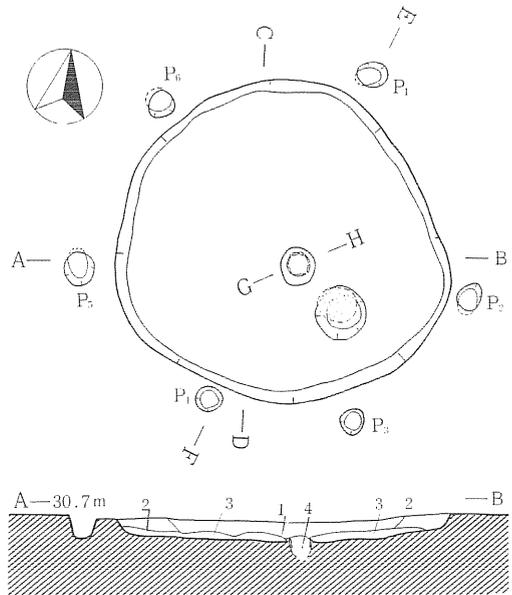
SI 31(第6・16図、図版18)

調査区中央部の北側で、やや緩斜面にさしかかるLT51グリッドを中心に位置している。竪穴住居跡の北東側半分は削平が著しいが、その平面形は径約3.2mの不整形形と推測される。覆土は約15cmと浅い。床面は比較的軟かく、壁の立ち上がりはそれほど明瞭ではない。住居中央やや北東部には、52×40cmの掘り方をもち深さ5cm前後の地床炉が検出された。その中には、焼土が多量に検出された。また、住居跡の南西内側には、半径約40cmの半弧状を呈する張り出し部分があり、床面からの高さは15cmである。柱穴は、当住居跡に伴うものとしてP₁～P₅の5個が考えられるが、そのうちP₁とP₅は壁に接してある。他のP₁～P₃は、壁との関係は不明なもの、きわめて近い位置が想定できる。柱穴の規模は、P₁が径約25cm・深さ約20cm、P₂が径約30cm・深さ30cm、P₃が径25cm・深さ20cm、P₄が径30～40cm・深さ約25cm、P₅が径25～35cm・深さ約35cmである。遺物は覆土中から縄文時代前期と考えられる土器を2片出土した。出土土器2・3は繊維を含み、2は羽状縄文が施されている。土器は縄文時代前期であるが、柱穴が住居壁際に配置される例はむしろSI 15のあり方と類似し、ここでは本竪穴住居跡の時期を縄文時代中期と推定しておきたい。

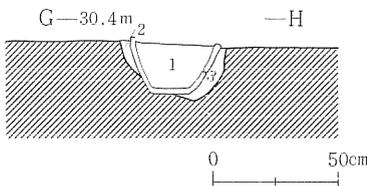
②焼土遺構

S N26 A・B(第6・16図、図版3・18)

調査区中央部の北側、やや緩斜面に

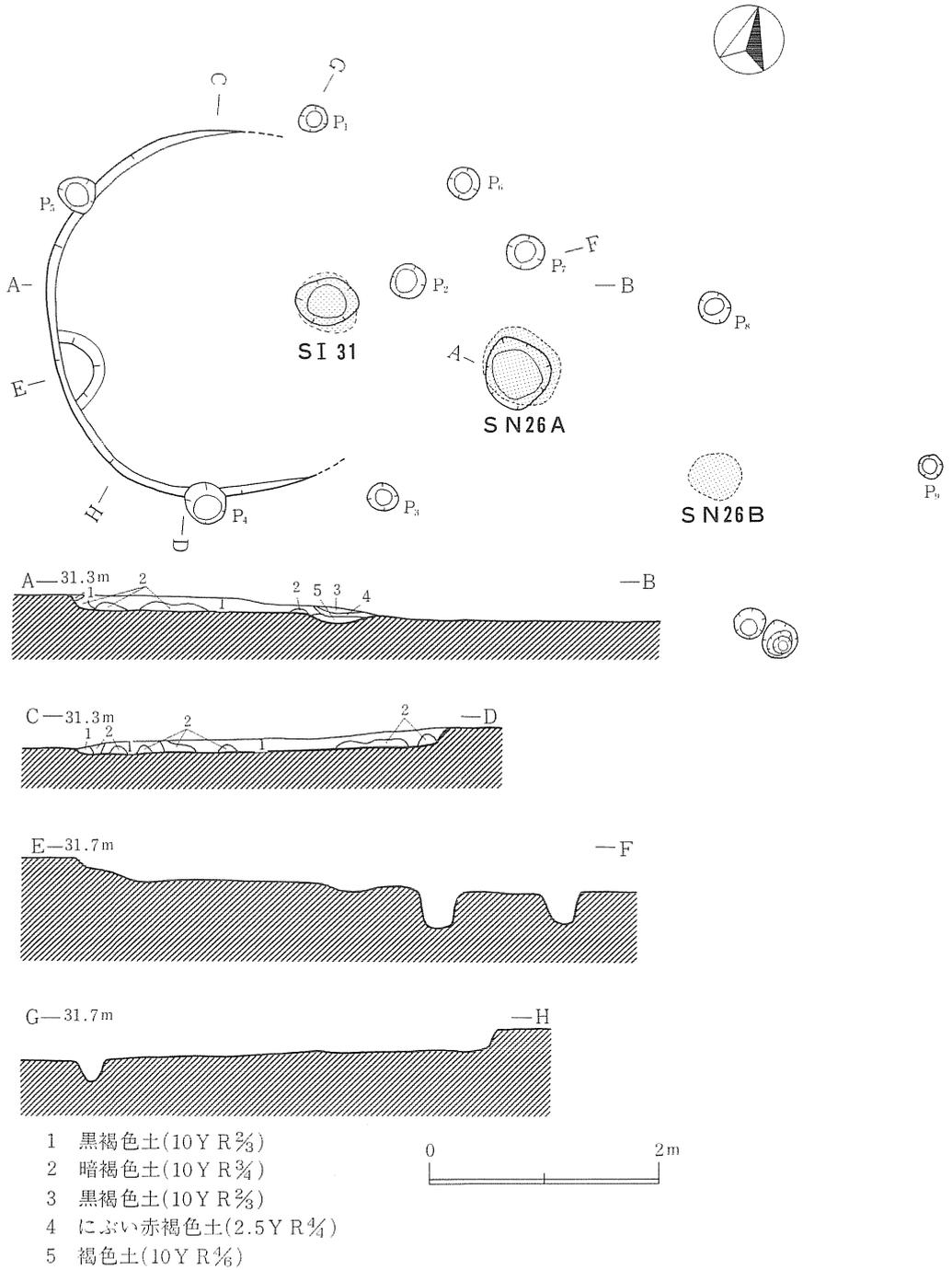


- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1 黒褐色土(10Y R 2½) | 5 暗褐色土(10Y R ¾) |
| 2 暗褐色土(10Y R 3¾) | 6 褐色土(10Y R ¾) |
| 3 にぶい黄橙色土(10YR 6¼) | 7 にぶい黄橙色土(10Y R ¾) |
| 4 褐色土(10Y R ¾) | |



- | |
|--------------------|
| 1 黒色土(10Y R ¾) |
| 2 褐色土(10Y R ¾) |
| 3 にぶい黄褐色土(10Y R ¾) |

第5図 SI 15竪穴住居跡



第6図 SI 31 竪穴住居跡, SN26 焼土遺構

半仙遺跡

さしかかるL S 51グリッドを中心に位置しているが、著しく削平を受けている。北西にあるS N 26 Aは、径50～65cm・深さ約10cmの掘り方をもつ地床炉と考えられ、その中には、焼土や炭化物が含まれる。また、S N 26 Bは掘り方こそもないが、50×40cmの範囲をもつ焼土であり、これも地床炉と考えられる。これらS N 26 Aの掘り方上端とS N 26 B焼土確認面は、ほぼ水平な地山面を形成するほか、周囲にはP₆～P₉とした柱穴と思われるピット群が検出された。よってS N 26 A・Bは、主軸を南南東～北北西にとる堅穴住居跡に付設した2つの炉の可能性がある。それぞれの柱穴の規模は、P₆が径約30cm・深さ約25cm、P₇が径約20cm・深さ約20cm、P₈が径30～35cm・深さ30cm、P₉が径約25cm・深さ35cmである。付近からは縄文時代前期の土器が数片出土している。出土土器4～6は繊維を含む土器で、4・5は内面に炭化物が付着している。

③陥し穴状遺構

SKT34(第7・16図、図版5・18)

調査区南西緩斜面のMA44グリッドに位置する。長軸はN-50°-Wの方向を指し、斜面の傾斜に直交するように配置されている。平面形は長軸2.8m×短軸0.2mの溝状を呈し、深さは約80cmである。壁の立ち上がりは、北西先端ではオーバーハングしており、南東端では垂直に近い。横断面は漏斗状を呈し、底面はほぼ水平である。覆土中より遺物が数片出土している。出土土器7は繊維を含み、表面には縄文が施されている。

SKT35(第7図、図版5)

調査区南西緩斜面のMC44グリッドに位置している。長軸はN-40°-Wの方向を指し、斜面の傾斜に直交するように配置されている。平面形は長軸3.6m×短軸0.4mの溝状を呈し、深さは約1.2mである。壁の立ち上がりは、北西先端では垂直に近く、南東端ではオーバーハングし壁に1つの突出部をつくっている。断面は漏斗状を呈し、底面はほぼ水平である。遺物は出土していない。

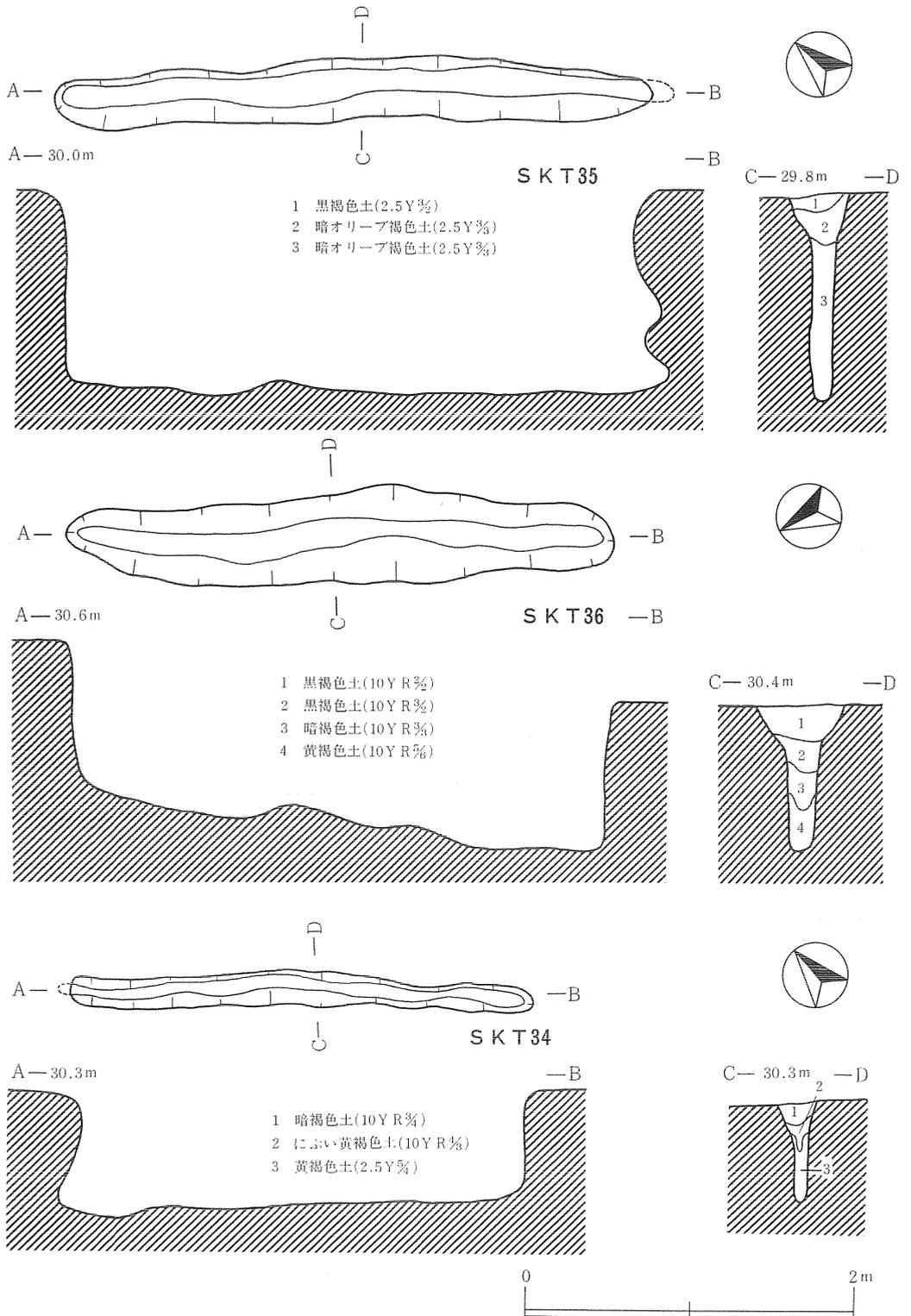
SKT36(第7図、図版5)

調査区南西緩斜面のMD46グリッドを中心に位置している。長軸はN-35°-Eの方向を指し、斜面の傾斜に沿うように配置されている。平面形は長軸3.35m×短軸0.6mの溝状を呈し、深さは約1mである。壁の立ち上がりは、先端では直立に近く断面では漏斗状を呈す。底面は斜面に沿う勾配がつくが、中央に2つの盛りあがりがある。遺物は出土していない。

④土坑

SK01(第13図、図版15)

調査区の南東側尾根の先端にあり、L N 43グリッドに位置している。東壁が、長軸65cm×短軸50cmのピットに切られている。平面形は長軸約2m×短軸1.7mの隅丸方形を呈し、深さは20



第7図 SKT 34・35・36陥し穴状遺構

半仙遺跡

～30cmである。長軸はおよそN-80°-Eの方向を指す。底面は平坦で、壁は直線的に立ち上がる。遺物は出土していない。

S K 02(第12図、図版13)

調査区の南東側尾根の先端にあり、L N43・44グリッドに位置している。平面形は上面が長軸1m×短軸0.95mの楕円形、底面も長軸1.05m×短軸0.75mの楕円形を呈し、底面までの深さは約80cmである。底面は平坦で、北西側の壁は急に立ち上がる。遺物は出土していない。

S K 03(第10図、図版8)

調査区の南東尾根の先端よりやや東の緩斜面にあり、L U43・44グリッドに位置している。平面形は長軸1m×短軸0.85mの楕円形を呈し、深さは10～20cmである。長軸は、N-60°-Wの方向を指す。底面はほぼ平坦で、やや谷部に傾斜する傾向にある。壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土していない。

S K 04(第14図、図版15)

調査区の中央やや南東寄りのL P47・48グリッドに位置している。平面形は上面が径約1mの略円形、底面も0.9×0.85mの略円形を呈し、深さは約90cmである。底面はほぼ平坦で、壁は底面から内傾し上位では外傾する。いわゆるフラスコ状土坑で、遺物は出土していない。

S K 05(第12図、図版12)

調査区の南東尾根の先端よりやや東の緩斜面にあり、L L44グリッドに位置している。平面形は上面が長軸1m×短軸0.9mの楕円形、下端も長軸0.5m×短軸0.35mの楕円形を呈し、深さは30～35cmである。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは東側においてやや急角度であるが西側は緩く、その上位では屈折して外へ開く。遺物は出土していない。

S K 06(第12図、図版13)

調査区の南東尾根の先端から東にやや降りた緩斜面、L M43・44グリッドに位置している。北壁の一部が径55cmの不整ピットに切られている。平面形は上面が1.2×1.1mの不整円形、底面も0.55×0.5mの不整円形を呈し、底面までの深さは25～40cmである。壁の中央沿いは、南東部分を除いて、5～20cm幅のテラスを形成している。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは比較的強い。遺物は出土していない。

S K 07(第9・16図、図版7・18)

調査区中央部北側の、やや緩斜面にさしかかるL L46・52グリッドに位置している。平面形は上面が1.25×1.1mの不整形、中央が不整隅丸方形、底面が0.7×0.6mの不整隅丸方形を呈し、底面までの深さは約1.35mである。底面はほぼ平坦で、壁は急角度で直線的に立ち上がる。底面の中央には、径25～30cm・深さ10cmのピットがある。遺物は、覆土中から土器が数片出土している。

SK08(第10図、図版8)

調査区東側斜面のLM48グリッドに位置している。平面形は長軸95cm×短軸75cmの楕円形を呈し、深さは15cm前後である。底面はやや凹凸があり、やや谷部に傾斜する傾向にある。壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土していない。

SK09(第11図、図版11)

調査区北東緩斜面のLN49グリッドに位置している。平面形は長軸80cm×短軸70cmの楕円形を呈し、深さは約20cmである。長軸はN-10°-Eの方向を指す。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土していない。

SK10(第11図、図版10)

調査区北東緩斜面のLM48グリッドに位置している。平面形は長軸80cm×短軸65cmの不整楕円形を呈し、深さは約20cmである。長軸はN-25°-Eの方向を指す。底面は緩く湾曲し、壁の立ち上がりは約60°である。遺物は出土していない。

SK11(第10・18図、図版8・20)

調査区南東側尾根の先端にあり、LO・LP44グリッドに位置している。平面形は長軸1m×短軸0.85mの不整楕円形を呈し、深さは10~20cmである。長軸はN-40°-Eの方向を指す。床面はほぼ平坦で、立ち上がりは比較的緩やかである。遺物は覆土中より土器が数片出土している。

SK12(第13図、図版14)

調査区中央やや東寄りの緩斜面、LO50グリッドに位置している。平面形は長軸1.6m×短軸1.1mの楕円形を呈し、深さ約10cmである。長軸はN-75°-Wの方向を指す。底面は平坦で、壁は緩く立ち上がる。底面から約10cm上には、長軸90cm×短軸70cmの範囲に焼土面が検出された。遺物は出土していない。

SK14(第10・18図、図版9・21)

調査区の尾根先端、LP46グリッドに位置している。平面形は長軸95cm×短軸85cmの楕円形を呈し、深さ35cmである。長軸はN-40°-Wの方向を指す。底面はほぼ平坦で、壁は急な角度で直線的に立ち上がる。遺物は覆土中より土器が2片出土している。出土土器41・42は砂粒を多量に含み、沈線とRL縄文によって文様を構成している。

SK16(第11図、図版11)

調査区北東緩斜面のLN50グリッドに位置している。平面形は長軸70cm×短軸50cmの楕円形を呈し、深さは約10cmである。長軸はN-25°-Eの方向を指す。底面の中軸線上には、径約15cmのピットが2個付設される。また底面は斜面に沿って緩い勾配があり、壁も緩やかに立ち上がる。遺物は出土していない。

半仙遺跡

SK17(第10図、図版9)

調査区北東斜面のLN53グリッドに位置している。平面形は長軸1.3m×短軸1.15mの不整形を呈し、深さは30~50cmである。底面はほぼ平坦で、壁は約60°で立ち上がる。遺物は出土していない。

SK18(第11図、図版11)

調査区の中央やや南東寄りのLQ48グリッドに、長軸約70cm×短軸約60cmの範囲がある焼土を切りこんで位置している。平面形は上面が径約55cmの円形、底面も径約45cmの円形を呈し、深さは35~45cmである。底面はわずかに凹凸があり、壁は直立ぎみに立ち上がる。遺物は出土していない。

SK19(第14・19図、図版15・21)

調査区中央部の北側にあり、やや緩斜面にさしかかるLQ・LR50グリッドに位置している。平面形は上面が1.1×1mの不整楕円形、底面が1.3×1.2mの不整円形を呈し、深さは約80cmである。底面はやや凸凹して、壁は底面から内傾し上位では外傾する。いわゆるフラスコ状土坑である。遺物は覆土中より縄文時代後期の土器が数片出土している。出土土器43~54は砂粒を多量に含み、48を除いてLR縄文、沈線、無文帯による文様構成をとる。

SK21(第13・19図、図版14・21)

調査区の中央やや南東寄りのLQ48グリッドに位置している。平面形は長軸1.9m×短軸1.25mの楕円形を呈し、深さは約20cmである。長軸はN-85°-Eの方向を指す。底面はほぼ平坦で、壁の立ちあがりは約60°である。遺物は覆土中より縄文時代後期と考えられる土器が数片出土している。出土土器55~57は砂粒を多量に含む。

SK22(第12図、図版13)

調査区の中央部、LR48グリッドを中心に位置している。平面形は上面が1.25×1.2mの不整形円形、底面が長軸70cm×短軸50cmの楕円形を呈し、深さは80cmである。底面は緩い湾曲を示し、壁はやや内側に湾曲しながら立ちあがる。遺物は出土していない。

SK23(第9図、図版7)

調査区の中央、LS49グリッドに位置している。北壁部分の2箇所が攪乱をうけている。平面形は上面が径約1.2mの不整形円形、底面が、65×50cmの楕円形を呈し、底面までの深さは約60cmである。底面は平坦で、壁は約60°の傾斜で直線的に立ち上がり上面付近で外へ開く。底面の中央には、40×35cm・深さ10~15cmの浅いピットがある。遺物は出土していない。

SK25(第10図、図版9)

調査区の中央部、LR49・50グリッドに位置している。平面形は長軸1.1m×短軸0.9mの楕円形を呈し、深さは約20cmである。長軸はN-35°-Eの方向を指す。底面はほぼ平坦であるが

谷部に傾斜する傾向にある。壁は東壁では緩やかで西壁では比較的急な角度で立ち上がる。遺物は出土していない。

SK27(第9・16図、図版7・18)

調査区中央部の北側で、やや緩斜面にさしかかるLS・LT52グリッドを中心に位置している。平面形は上面が 1.65×1.5 mの円形、中央が隅丸方形、底面が 85×70 cmの不整楕円形を呈し、床面までの深さは約1.3 mである。底面は平坦で、壁は強い角度で直線的に立ち上がる。遺物は覆土中より土器が数片出土した。出土土器9～21は繊維を含む。そのうち16・18・19は羽状を呈し、9・10の口唇部には、縄文が認められる。

SK28(第8・16図、図版6・19)

調査区中央部の北側にあり、やや緩斜面にさしかかるLT52グリッドに位置している。平面形は上面が 1.25×1.1 mの不整形、中央が不整隅丸方形、底面が 70×60 cmの不整隅丸方形を呈し、底面までの深さは約1.35 mである。底面は平坦で、壁は強い角度で直線的に立ち上がる。底面の中央には、 30×27 cm・深さ10 cmのピットがある。遺物は覆土中より土器が数片出土している。

SK30(第13図、図版14)

調査区中央より北側の緩斜面、LR・LS54グリッドに位置している。平面形は長軸約2 m × 短軸1.2 mの不整形を呈し、深さは約50 cmである。長軸はN-20°-Eの方向を指す。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは直立ぎみである。遺物は出土していない。

SK32(第11図、図版9)

調査区の南東側尾根の先端寄りにあり、LP46グリッドに位置している。平面形は径約60 cmの円形を呈し、深さは約35 cmである。底面は平坦で、壁は強い角度で直線的に開く。遺物は出土していない。

SK33(第14図、図版16)

調査区の南東側尾根の先端にあり、LR・LS45グリッドに位置している。平面形は長軸2.6 m × 短軸約0.7 mの不整形を呈し、深さは50～70 cmである。長軸はN-70°-Wの方向を指す。底面は長軸辺の片側に傾斜し、壁の立ち上がりもそこでは急であり、対する辺の壁では緩やかである。遺物は出土していない。

SK37(第11・16図、図版10・19)

調査区南西緩斜面のMB46グリッドに位置している。平面形は径約55 cm・深さ約20 cmの略円形を呈するが、北壁は攪乱を受けている。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は覆土中より土器1片が出土している。出土土器26は繊維を含み、表面にはRL縄文を施す。胎土・焼成は良好。

SK 38(第14図、図版16)

調査区南西緩斜面のMD45グリッドに位置する。平面形は長軸1.65m×短軸0.7mの不整楕円形を呈し、深さは10~15cmである。長軸はN-50°-Wの方向を指す。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。南東端の底面近くからは、重なった2枚の扁平な石と土器が1片出土している。脆く図示できない。

SK 39(第14図、図版16)

調査区南西斜面のMC43グリッドに位置している。平面形は長軸2m×短軸0.5mの楕円形を呈し、深さは15cmである。長軸はN-70°-Wの方向を指す。底面は緩やかに湾曲し、壁も内湾ぎみに立ち上がる。遺物は出土していない。

SK 40(第12図、図版12)

調査区南西緩斜面MD・ME44グリッドに位置している。平面形は、上面で1×0.9mの不整形、底面は長軸55×50cmの楕円形を呈し、深さは45cmである。底面はほぼ平坦で、壁は強い角度で立ち上がり上位で屈折して外に開く。遺物は出土していない。

SK 41(第12・17図、図版12・19)

調査区南西緩斜面のME41グリッドに位置している。平面形は長軸90cm×短軸80cmの楕円形を呈し、深さは40~45cmである。底面は緩く湾曲し、壁は比較的強い角度で立ち上がる。遺物は底面付近より土器が数片出土している。出土土器27~29は繊維を含み、そのうち28はRL原体庄痕文によって、口唇部の直下には平行線が、やや下には孤状の文様を施している。口唇部には刺突文がある。

SK 42(第11図、図版11)

調査区南西緩斜面のME45・46グリッドに位置している。トレンチによって初めて検出できた。平面形は径約70cmの不整円形を呈し、深さは45cmである。底面はほぼ平坦で、壁は西壁で強い角度で立ち上がり、北東はオーバーハングしている。底面近くの覆土は硬くしまっている。遺物は出土していない。

SK 43(第11・19図、図版10・21)

調査区南西緩斜面のME46グリッドに位置している。平面形は65×60cmの楕円形を呈し、その深さは約20cmである。底面はほぼ平坦で、立ち上がりは、東壁においては緩く西壁ではやや強い傾斜を示す。遺物は土器が数片出土している。出土土器58・59は砂粒を多量に含む。

SK 44(第14・17図、図版15・19)

調査区中央部やや西側の緩斜面にあり、MD50グリッドに位置している。平面形は上面で径約1mの不整形、底面では長軸60cm×短軸50cmの楕円形を呈し、深さは約40cm前後である。底面は緩く湾曲し、壁はオーバーハングする。いわゆる袋状土坑である。遺物は底面付近より土器が数片出土している。出土土器30~34は繊維を含まず砂が日立つ。そのうち、30は平行する

原体圧痕文の間に、半月状圧痕文が平行に施されている。31～34は隆帯によって文様を構成している。口唇部は外湾する。

S K 45(第8図、図版6)

調査区西側の平坦面、MK53グリッドに位置する。平面形は上面が1.3×1.25mの不整形円形、中央が、不整隅丸方形、底面は70×55cmの不整楕円形を呈し、底面までの深さは1.15mである。底面はほぼ平坦で、壁は直立ぎみに立ち上がる。底面の中央やや西寄りには、径約15cm・深さ45cmのピットがある。また、土坑の北側と南側には、それぞれ径15～20cm・深さ35cmと径20～25cm・深さ15cmのピットがある。遺物は出土していない。

⑤土器埋設遺構

S R 24(第15・21図、図版17・23)

調査区の中央尾根部、L R 49グリッドに位置している。明瞭な掘り方がなく、深鉢の胴部が設置されるだけの穴を掘り、そこに土器を付設したと考えられる。深鉢は、長径30cm×短径20cmで高さは5cm前後である。東～南側にかけては、土器に接して焼土の広がりがある。時期は縄文時代後期と考えられる。出土土器73～76は砂粒を多量に含む。表面の縄文は磨滅が著しい。

S R 29(第15・20図、図版17・22)

調査区の南東側尾根の先端にあり、L Q 43グリッドに位置している。南東側の半分は削平によって消失している。掘り方の長軸は北東から南東の方向を指すと思われる、その規模はおおよそ1.2mと推定される。現存する深さは約50cmで、その内部には深鉢の大型破片が設置された状態で出土した。時代は縄文時代後期である。出土遺物60～72は砂粒を含み、文様は捺糸の地文に沈線・刺突文・無文帯などで構成している。

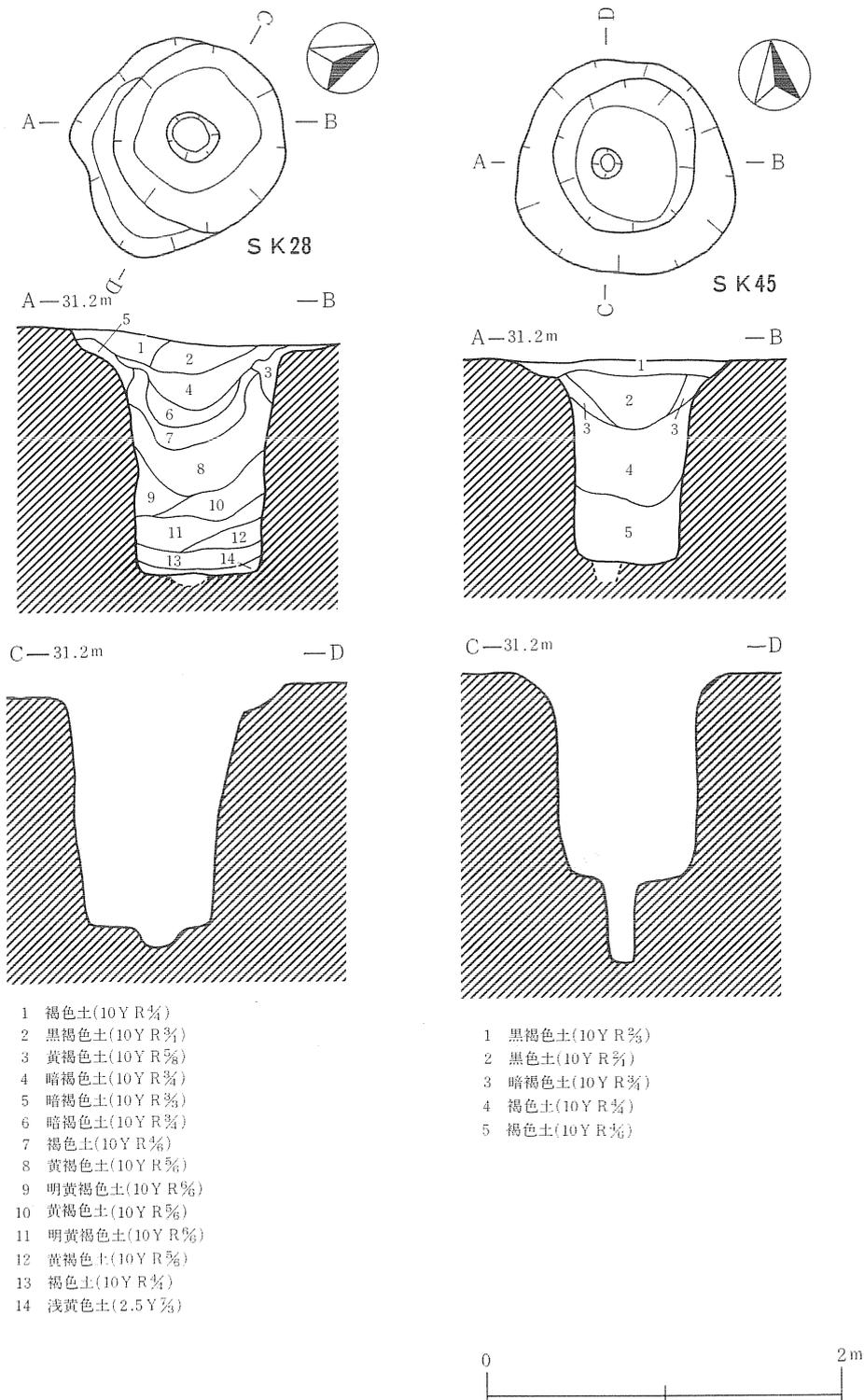
(2)遺構外出土遺物

①土器 (第22～29図、図版24～33、第3～5表)

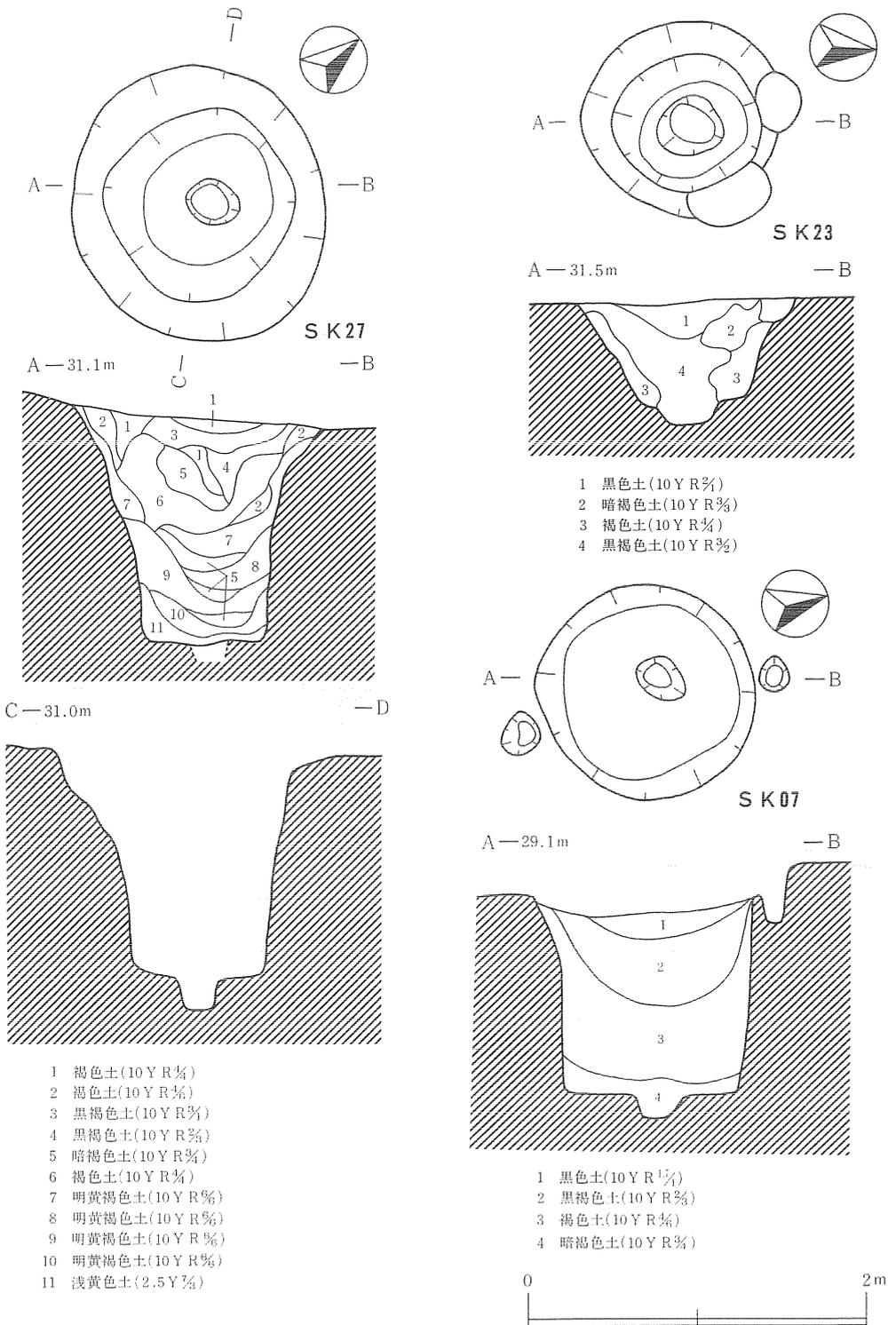
図示してある遺構外出土の土器は、すべて深鉢形土器で総数138点を数える。その中には、同一個体でありながら複数の破片となっている場合、また、別個体でありながら類似点の強いものなどがあるが、ここでは時代ごとに大きく分類し文様、胎土、焼成上共通する破片をまとめて説明していく。また、底部資料を一括した。

縄文時代早期～前期(83～190)

83～87は明瞭に繊維を含み、表・裏両面にR LもしくはL Rの縄文を施す。胎土は良好。83～85の口縁部は直立ぎみに立ち上がり、83と85の平坦な口唇部には縄文が施されている。83は補修孔をもつ。色調は、表面がにぶい黄橙色(10Y R 7/4)、裏面が灰黄褐色(10Y R 6/2)を呈す。84は裏面に炭化物が付着している。

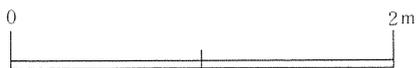
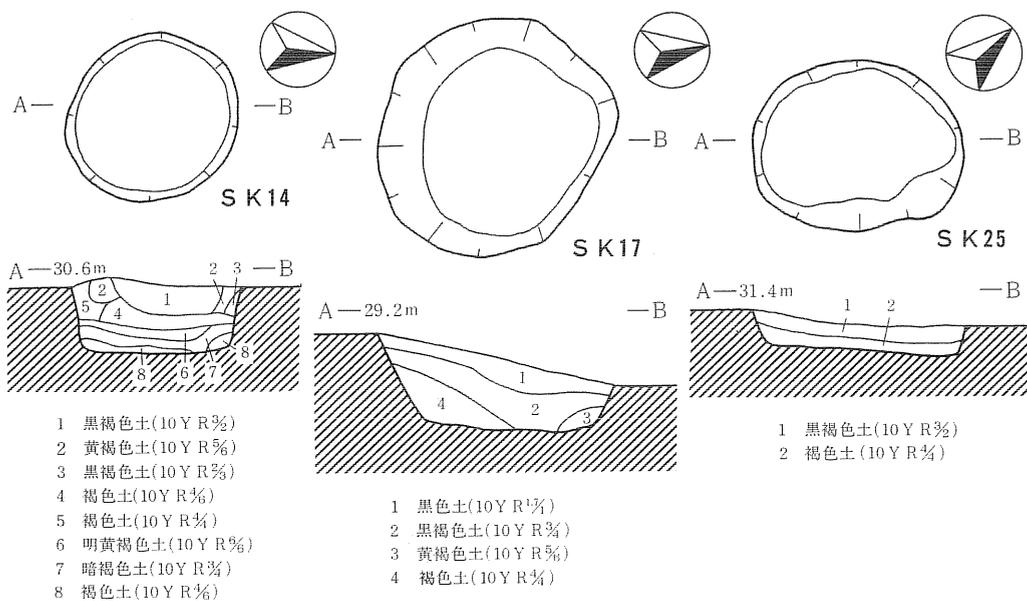
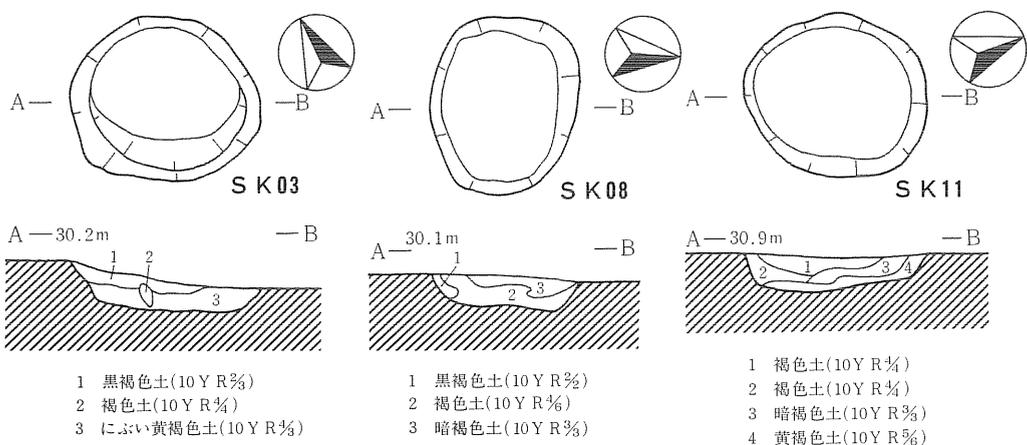


第8图 SK28·45土坑

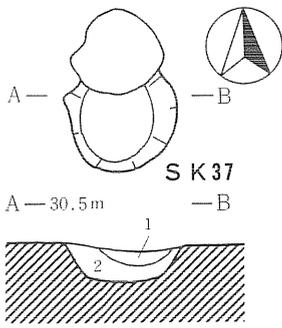


第9図 SK07・23・27土坑

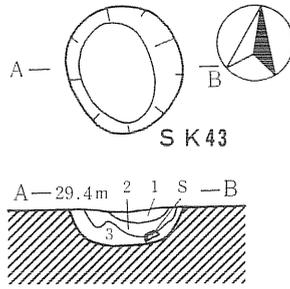
半仙遺跡



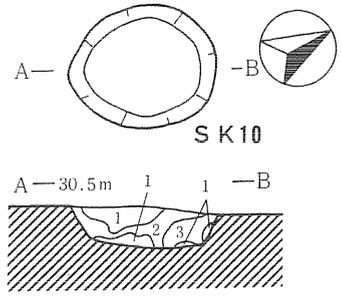
第10図 S K 03・08・11・14・17・25土坑



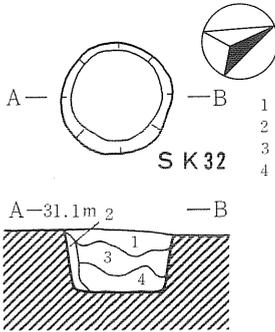
- 1 暗褐色土(10Y R%)
- 2 褐色土(10Y R%)



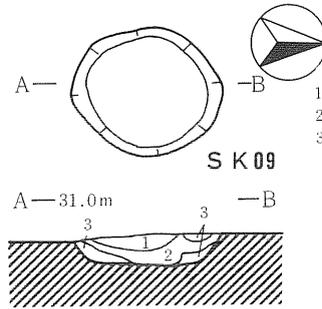
- 1 褐色土(10Y R%)
- 2 褐色土(10Y R%)
- 3 褐色土(10Y R%)



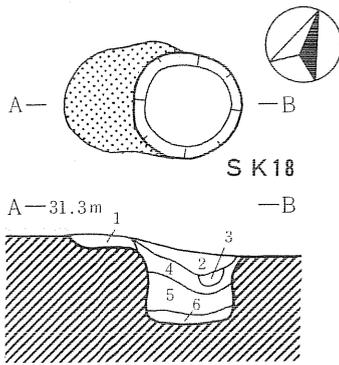
- 1 灰白色土(5Y %)
- 2 暗褐色土(10Y R%)
- 3 黄褐色土(10Y R%)



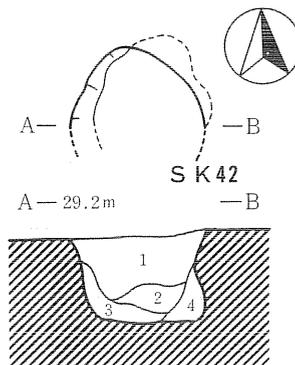
- 1 暗褐色土(10Y R%)
- 2 褐色土(10Y R%)
- 3 暗褐色土(10Y R%)
- 4 黒褐色土(10Y R%)



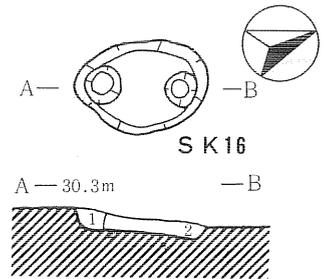
- 1 褐色土(10Y R%)
- 2 黄褐色土(10Y R%)
- 3 明黄褐色土(10Y R%)



- 1 暗褐色土(10Y R%)
- 2 暗褐色土(10Y R%)
- 3 褐色土(10Y R%)
- 4 黒褐色土(10Y R%)
- 5 黒褐色土(10Y R%)
- 6 褐色土(10Y R%)



- 1 褐色土(10Y R%)
- 2 暗褐色土(10Y R%)
- 3 褐色土(10Y R%)
- 4 褐色土(10Y R%)

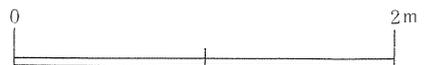
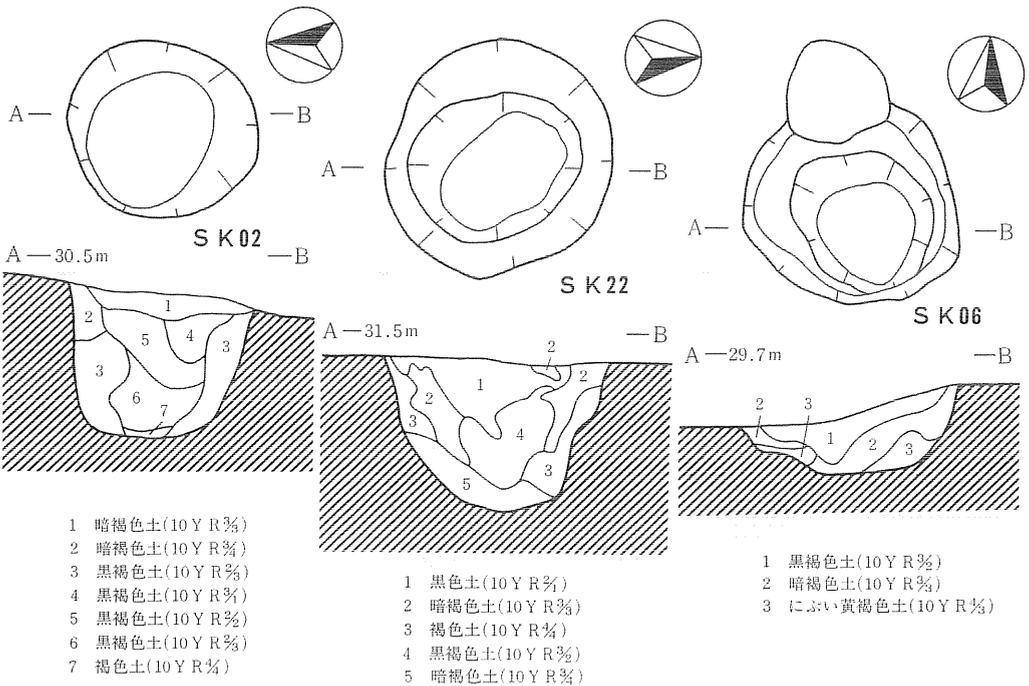
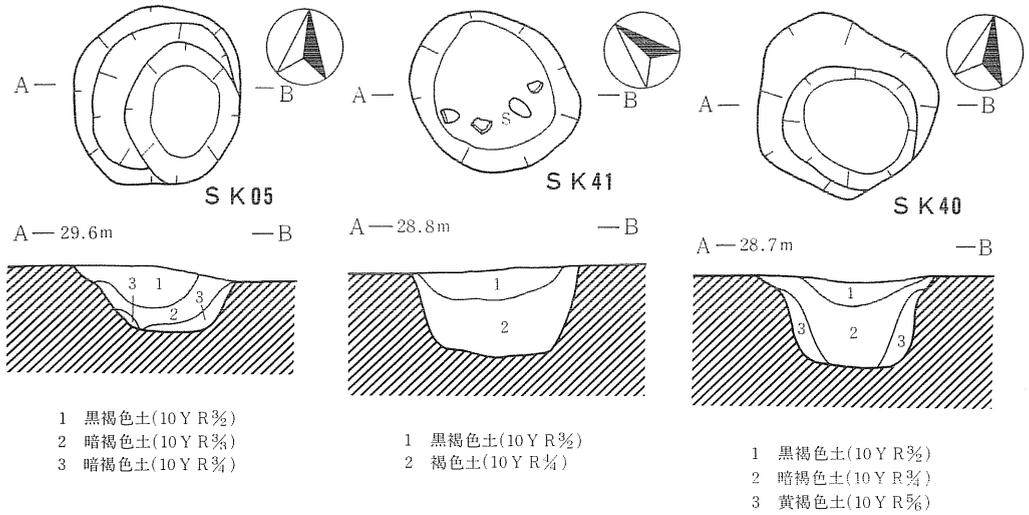


- 1 暗褐色土(10Y R%)
- 2 黒褐色土(10Y R%)

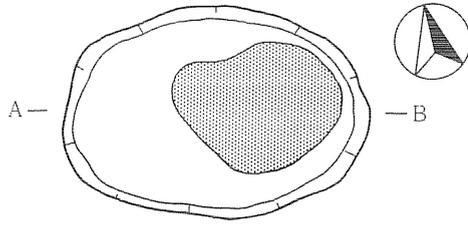


第11図 SK09・10・16・18・32・37・42・43土坑

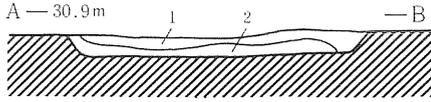
半仙遺跡



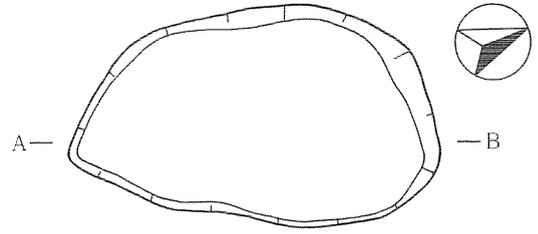
第12図 S K 02・05・06・22・40・41土坑



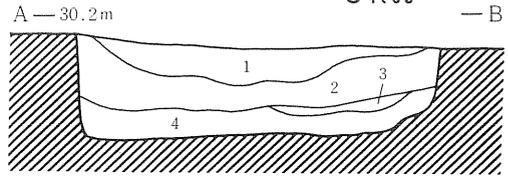
S K 12



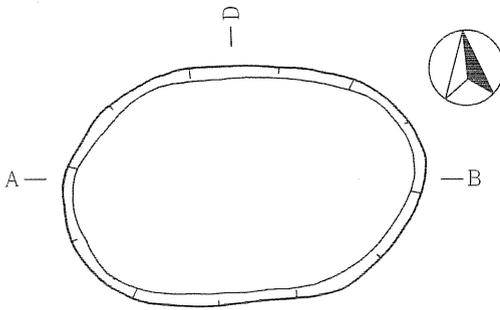
- 1 黒褐色土(10 Y R 2/4)
- 2 暗褐色土(10 Y R 3/4)



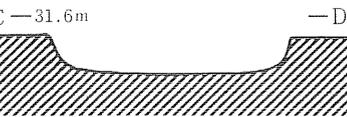
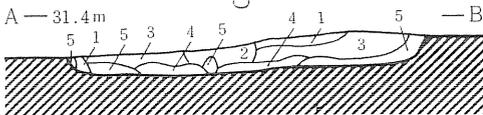
S K 30



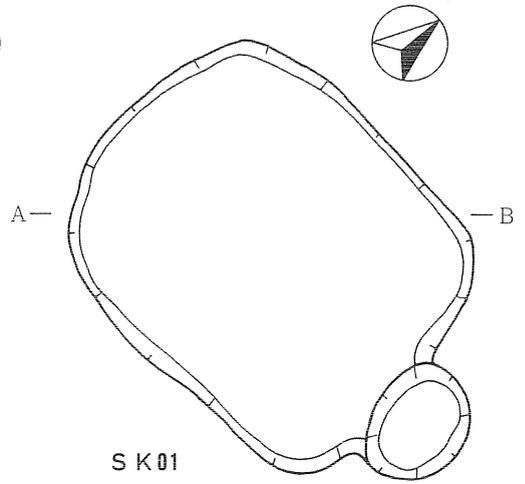
- 1 黒褐色土(10 Y R 2/4)
- 2 褐色土(10 Y R 4/4)
- 3 黒褐色土(10 Y R 3/4)
- 4 褐色土(10 Y R 4/4)



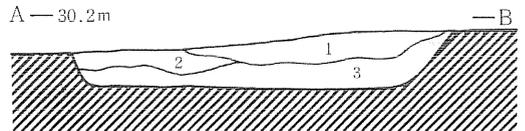
S K 21



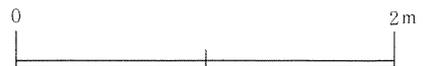
- 1 暗褐色土(10 Y R 3/4)
- 2 黒褐色土(10 Y R 2/4)
- 3 黒褐色土(10 Y R 2/4)
- 4 黒褐色土(10 Y R 2/4)
- 5 暗褐色土(10 Y R 3/4)



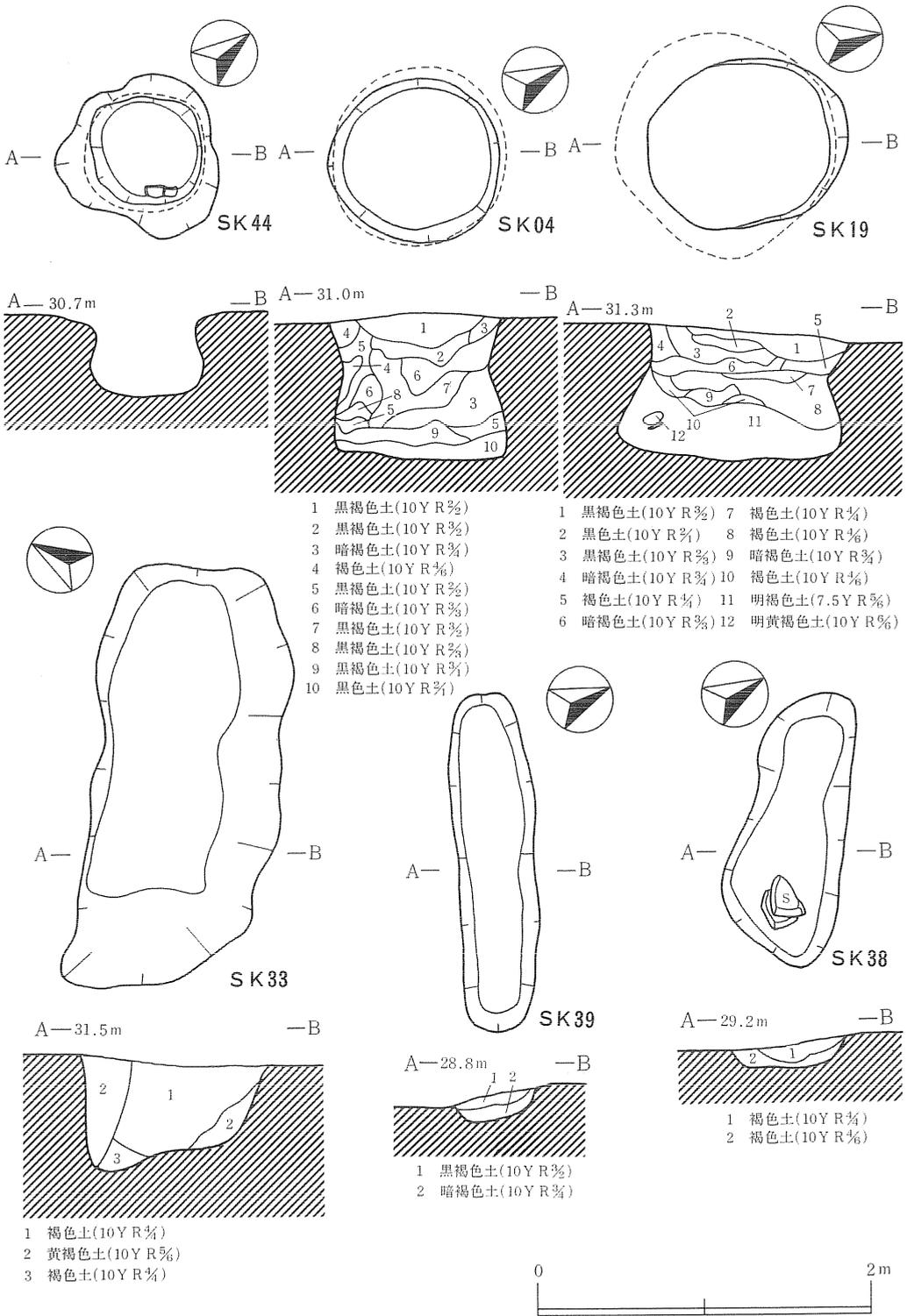
S K 01



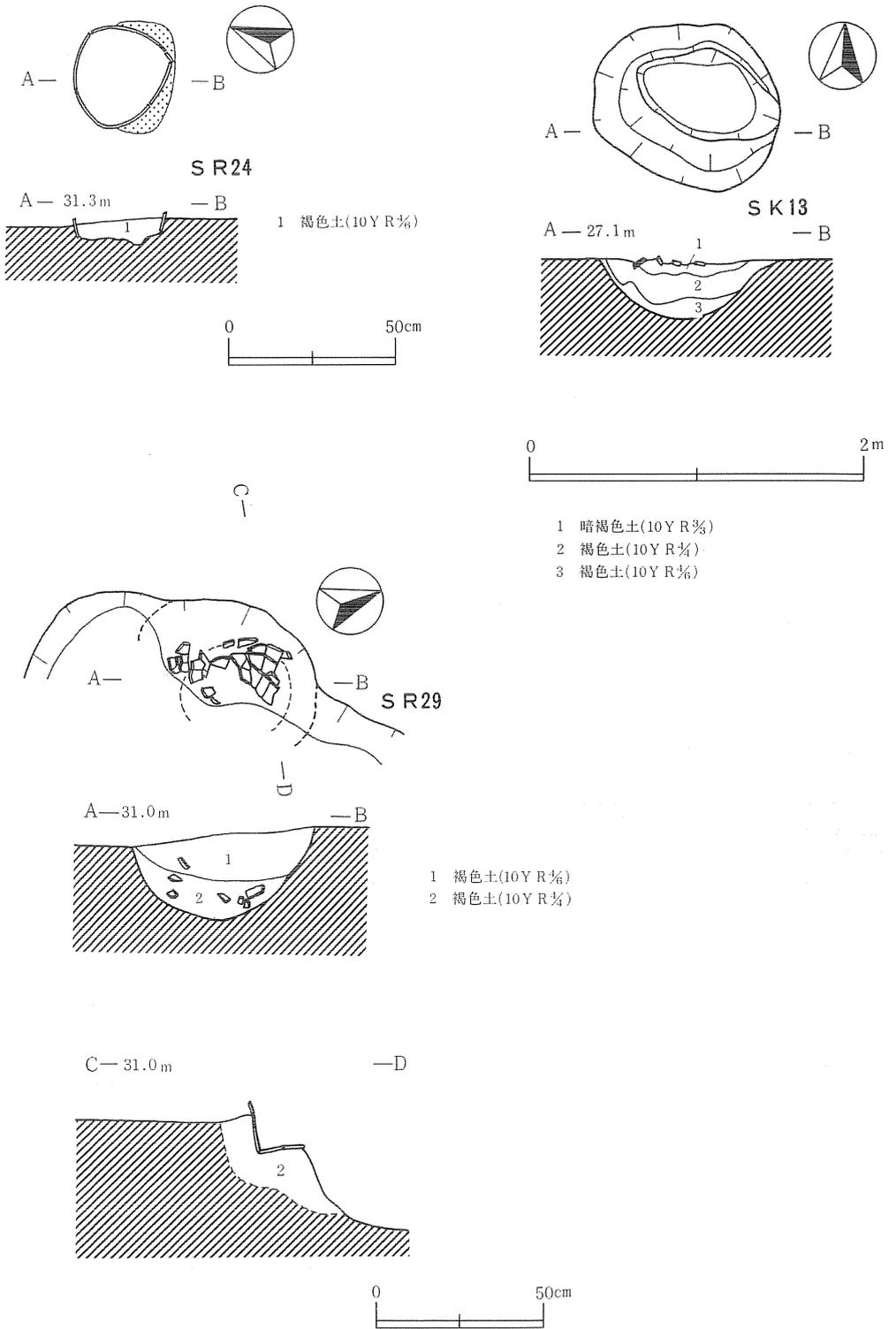
- 1 黒褐色土(10 Y R 2/4)
- 2 暗褐色土(10 Y R 3/4)
- 3 暗褐色土(10 Y R 3/4)



第13図 S K 01・12・21・30土坑



第14图 SK04·19·33·38·39·44土坑

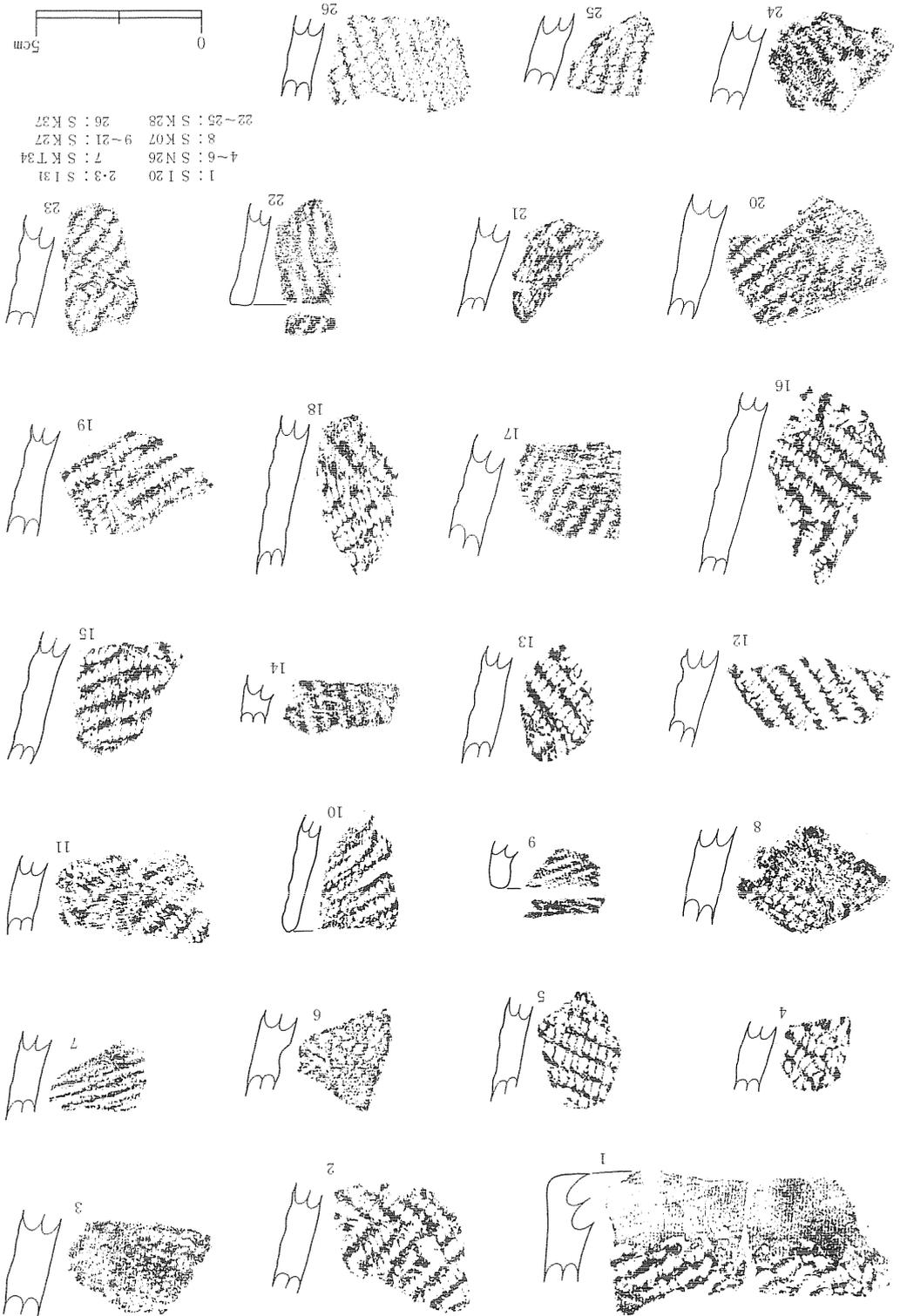


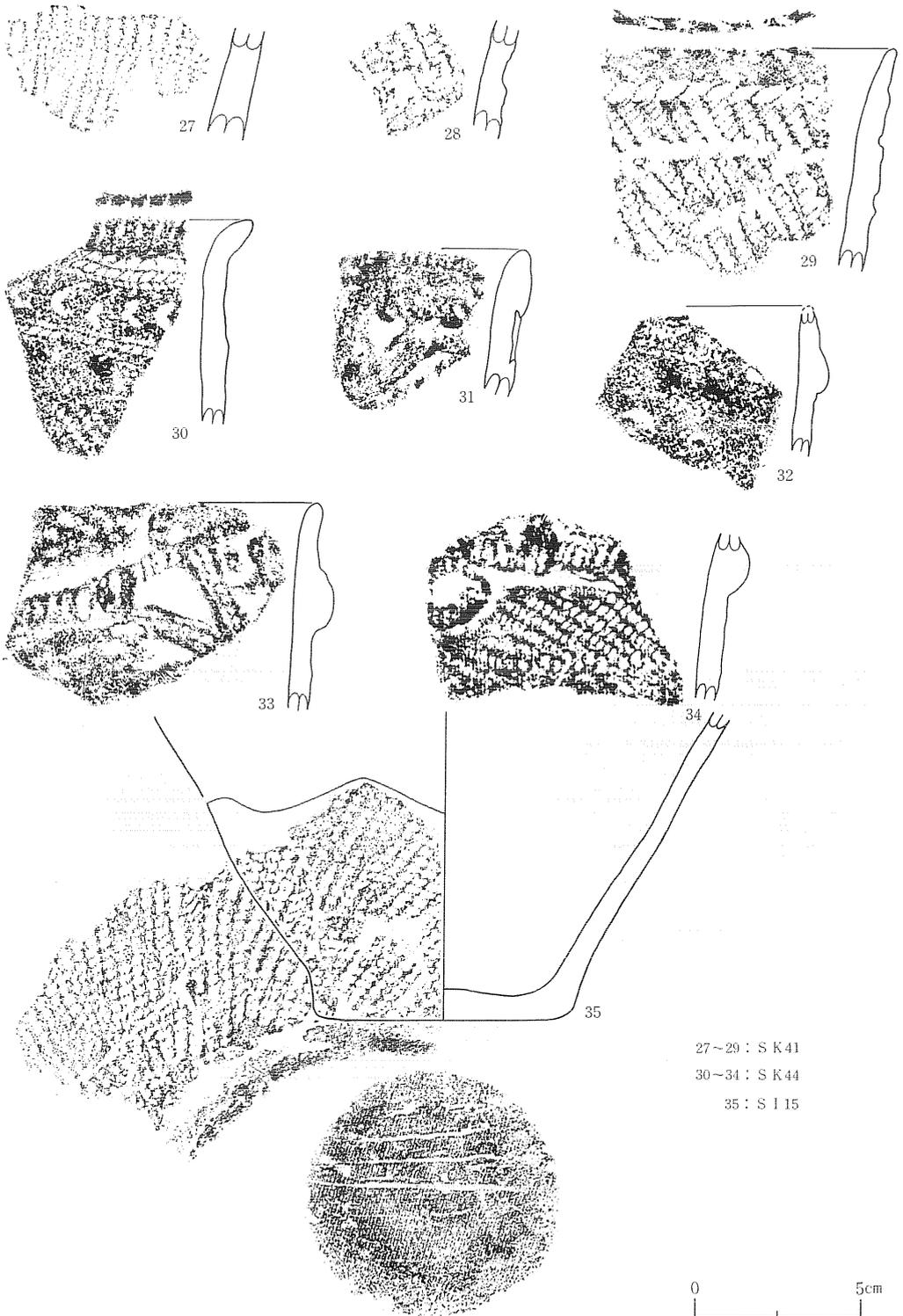
第15図 SK 13土坑, SR 24・29土器埋設遺構

第16图 遺構内出土遺物(1)



1: S 120 2·3: S 131
 4~6: S N26 7: S K T34
 8: S K07 9~21: S K27
 22~25: S K28 26: S K37



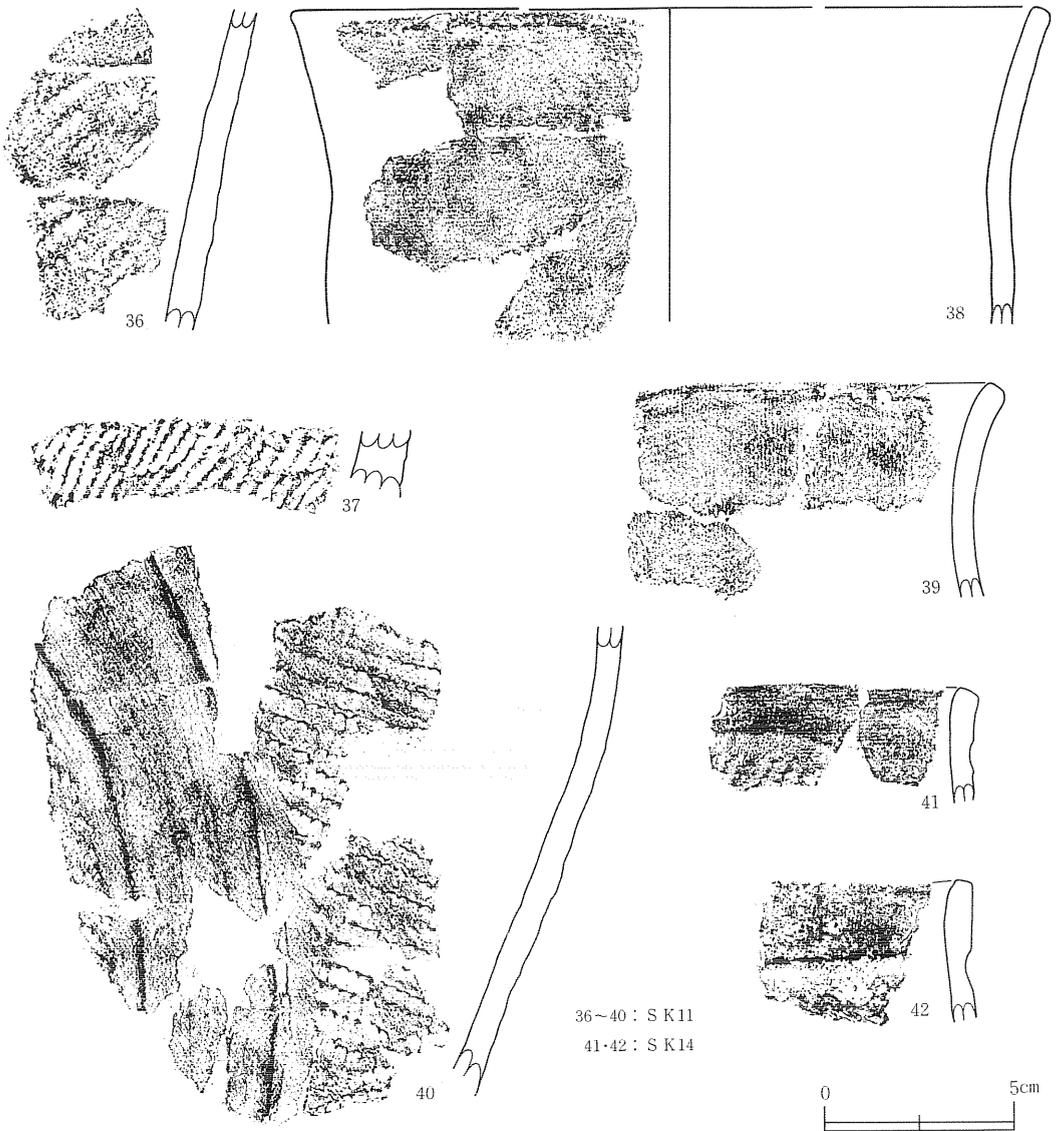


27~29 : S K 41

30~34 : S K 44

35 : S I 15

第17図 遺構内出土遺物(2)

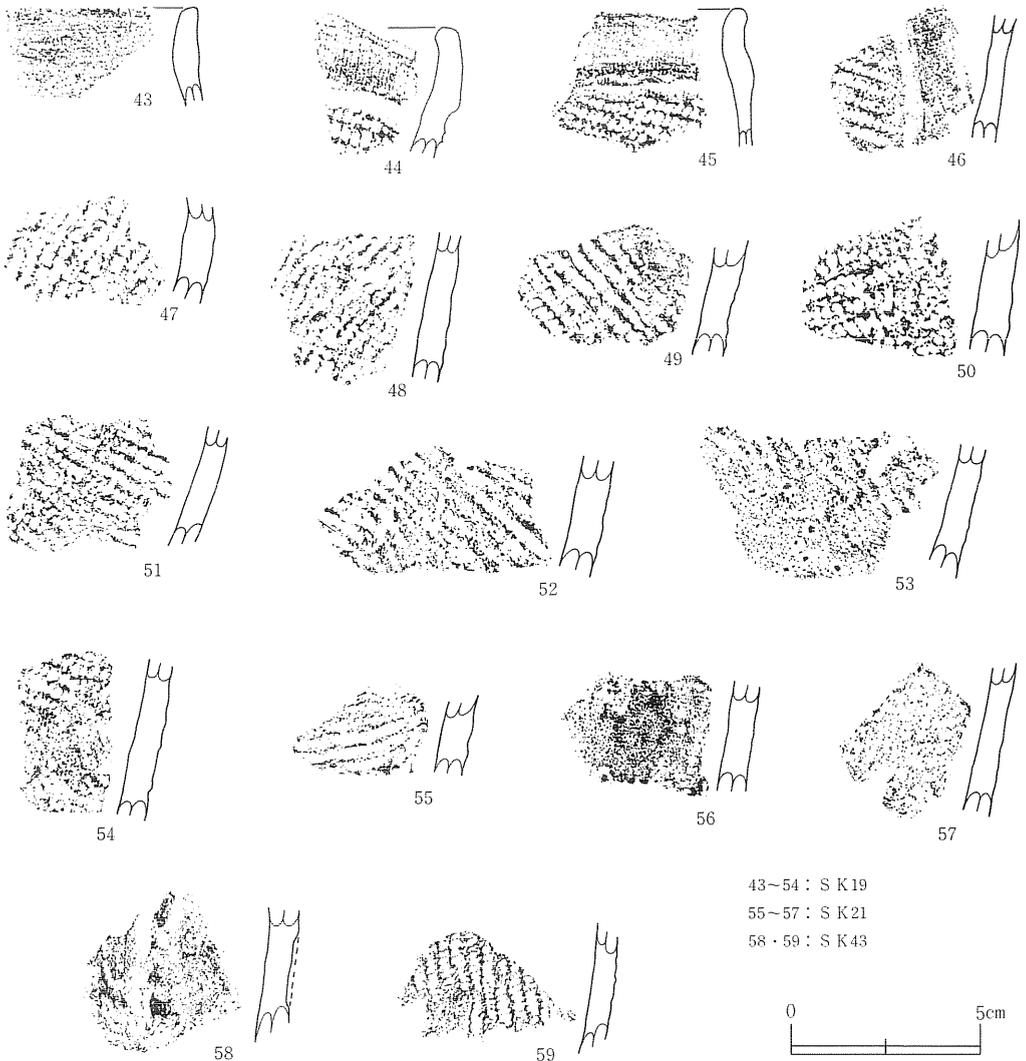


第18図 遺構内出土遺物(3)

88~92は明瞭に繊維を含み、表・裏両面にはR L、もしくはL Rの縄文を施す。胎土は不良。89の口縁部は直線的に外反し、丸みをもつ口唇部には縄文が施されている。色調は、表面がにぶい黄橙色(10YR7/4)、裏面がにぶい黄褐色(10YR5/4)を呈す。

93~95は明瞭に繊維を含み、表・裏両面には細いL R縄文を施す同一個体である。胎土は良好。口縁部は直線的に外反し、薄く丸みをもつ口唇部には縄文が施される。色調は、表面が灰黄褐色(10YR6/2)、裏面が灰黄褐色(10YR4/2)を呈す。

96~98は多量に繊維を含み、96は表裏、97・98は表面に節の細いR L縄文を施す。同一個体と考えられる。胎土は不良。96は湾曲しながら外反する口縁で、平坦な口唇部には縄文が施



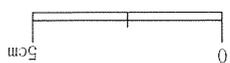
第19図 遺構内出土遺物(4)

される。97は底部付近である。色調は、表面がにぶい黄橙色(10YR7/4)、裏面がにぶい黄橙色(10YR7/4)～灰黄褐色(10YR5/2)を呈す。

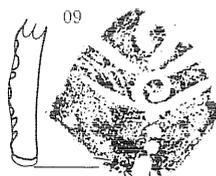
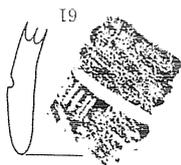
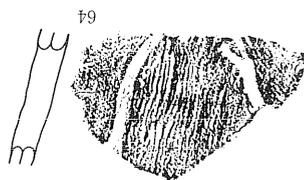
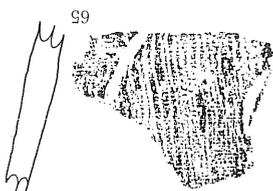
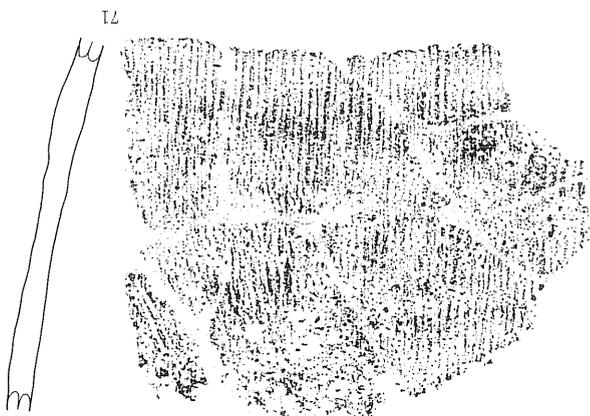
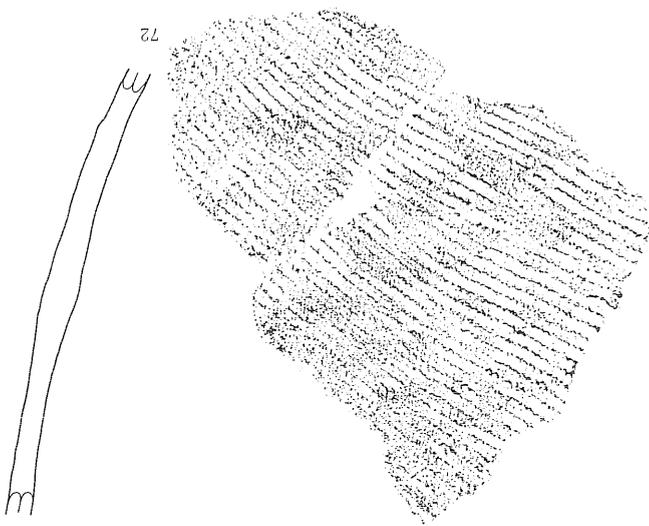
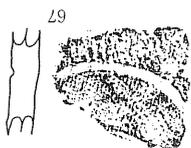
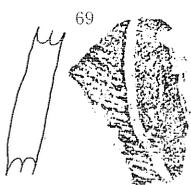
99～109は器壁が窪むほど大量に繊維を含み、99～103は表・裏面に104～109は表面に縄文が施される。104～109は表・裏面に縄文を施す個体の破片のうち、内面に縄文の施されていない部分の破片と考えられる。胎土は良好。99～103は表面にRL、裏面にLRの縄文を施すが、104～109はLR・RLの2種がある。104は羽状縄文を施す。胎土は105を除き良好。色調は表面がにぶい黄橙色(10YR6/4)、裏面が灰黄褐色(10YR5/2)を呈す。

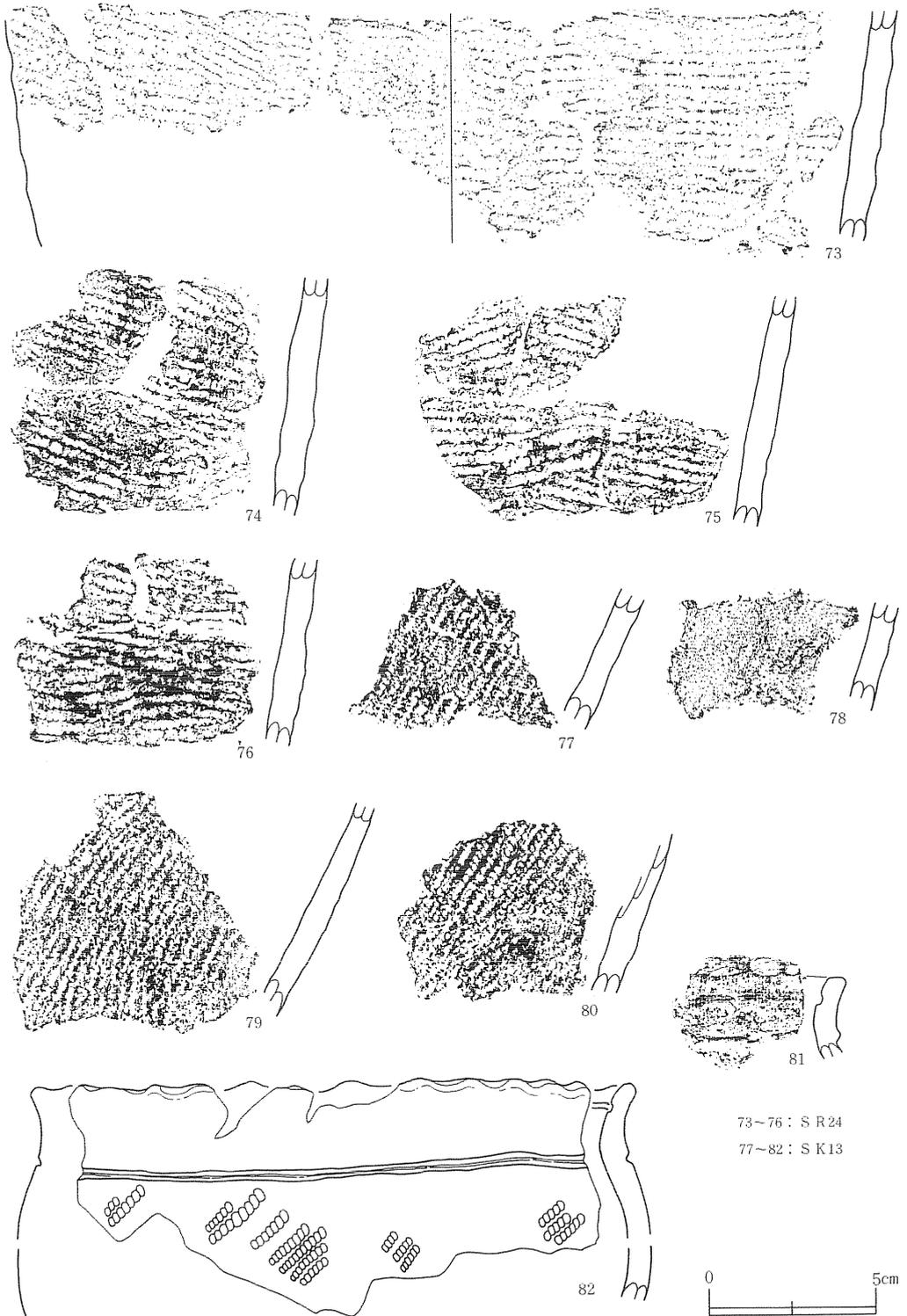
110～143は多量に繊維を含み、表面はLRもしくはRLの縄文を施し、裏面は無文である。内

第20图 遺構内出土遺物(5)



60-72 : S R 29





第21図 遺構内出土遺物(6)

半仙遺跡

面は比較的丁寧に撫でやおさえを施す。胎土は良好。110・111は直線的に外反する口縁で、110は平坦な口縁部に縄文を施し、111はやや丸みを有している。また、111には補修孔がある。114は底部破片で、胴部の最下端は外側に張り出す。また、底面に縄文を施す。色調は、表面が橙色(7.5Y R7/6)～にぶい黄橙色(10Y R7/3)、裏面が灰黄褐色(10Y R4/2)を呈す。

144～149は明瞭に繊維を含み、表面はR Lの縄文を施す。裏面は無文で、工具を用いた撫でを施す。胎土は良好。148には補修孔があり、表・裏面には炭化物が付着している。色調は、表面がにぶい黄橙色(10Y R6/4)、裏面はにぶい黄橙色(10Y R6/4)を呈す。

150～165は不明瞭ながら繊維を含み、表面には前々段反摺りの縄文、裏面は丁寧な撫でを施す。胎土は良好。150・152の口縁は外反して立ち上がり、やや丸みをもつ口縁部には縄文を施す。161は、内面の他に胴部最下位と底部外面を丁寧に撫でている。色調は、表面が浅黄色(10Y R8/3)、裏面が灰黄褐色(10Y R5/2)を呈す。

166～178・181～186は不明瞭ながら繊維を含み、表面には縄文、裏面には丁寧な撫でを施す。胎土は良好。166は口縁で、口唇部には角度の大きな刻みがある。色調は、181・184が内外面とも浅黄橙色(10Y R8/4)、他は表面がにぶい黄橙色(10Y R7/3)裏面が灰黄褐色(10Y R6/2)を呈するのが主である。内外面に炭化物が付着しているものも含む。

179・180は繊維の混入の有無が不明である。沈線とR L縄文(179)による文様構成である。胎土焼成は良好。色調は、褐灰色(10Y R4/1)である。

187～189は不明瞭だが微量の繊維を含むようであり、表面は撚糸文、裏面では丁寧な撫でを施す。胎土は良好。内外面には炭化物が付着している。189の色調は、表面がにぶい橙色(7.5Y R6/4)、裏面が灰褐色(7.5Y R4/2)を示す。

190は不明瞭ながら微量の繊維を含むようであり、表面が羽状縄文、裏面は無文である。胎土は良好。色調は、内外面が浅黄橙色(10Y R8/4)を示す。

縄文時代中期(191～207)

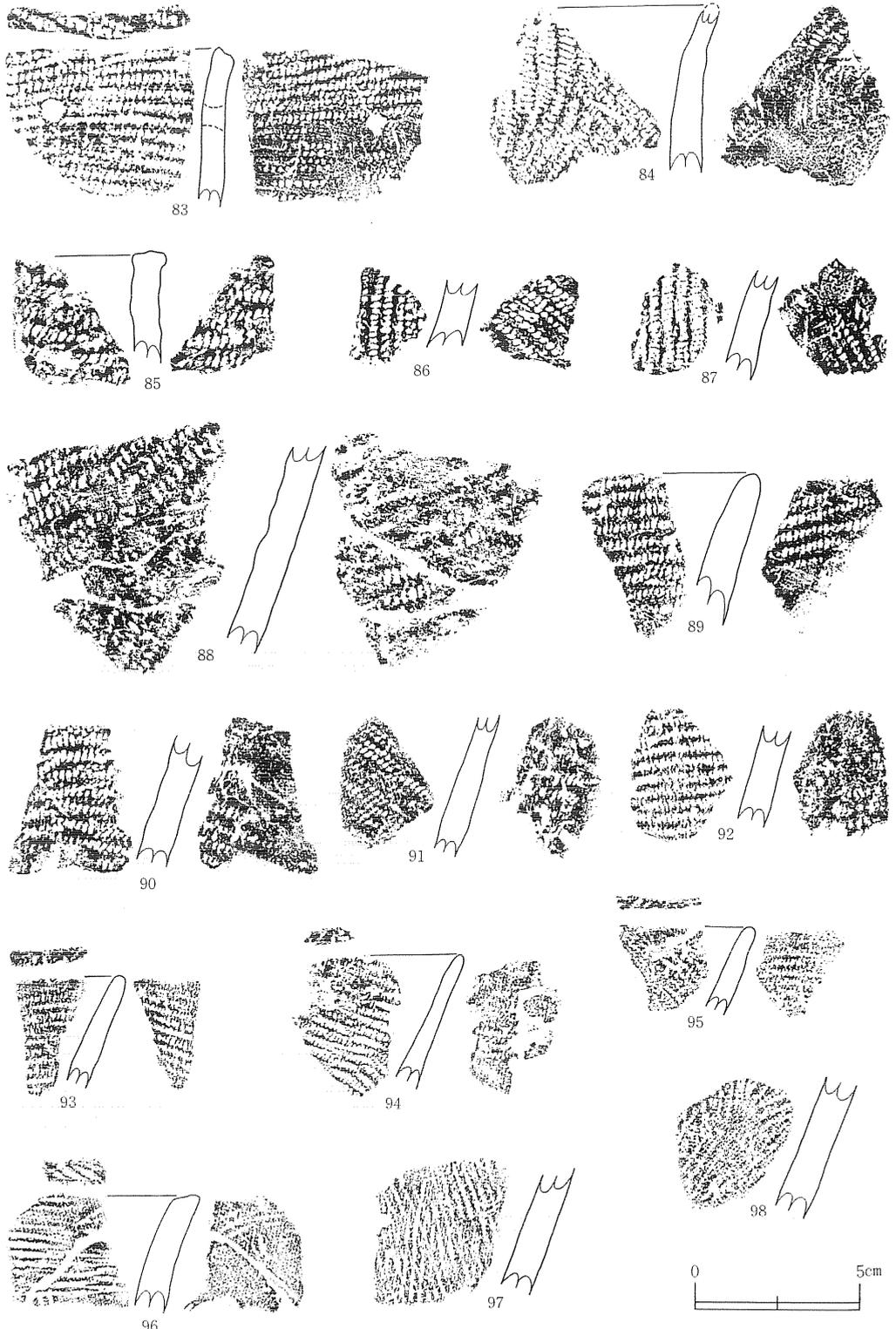
191以降は繊維を含まず、文様は表面に限られる。191～202は、R L縄文・刺突・沈線・無文帯による文様構成である。胎土は良好。

191～195の口縁は外反する。すべて同一個体と思われる。色調は、表・裏面とも灰黄褐色(10Y R6/2)となる。

204～207はR Lの縄文を施し、胎土は良好である。207には無文帯があるが、206と同一個体である。色調は、表・裏面とも浅黄橙色(7.5Y R8/4)を示す。

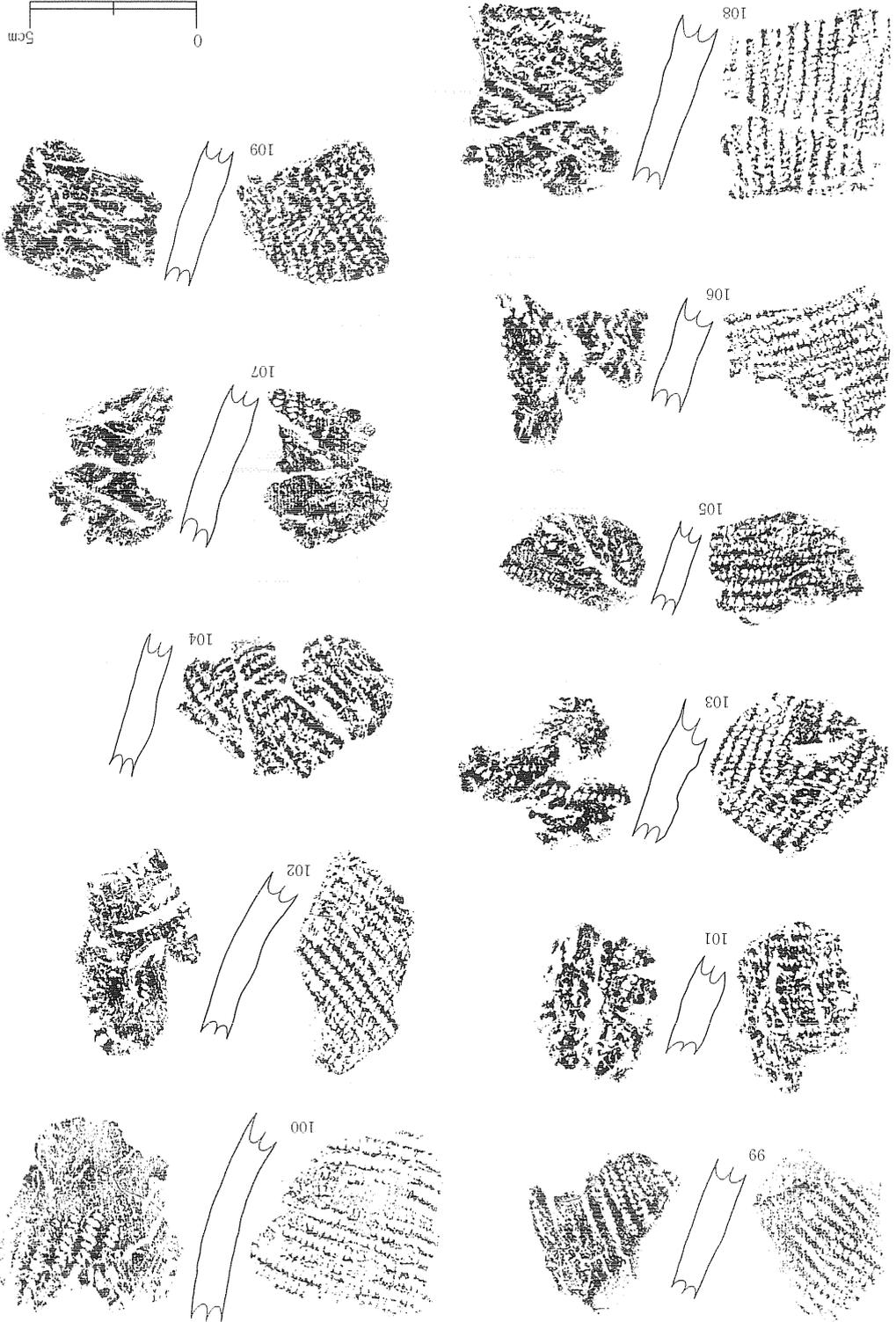
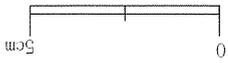
縄文時代後期(208～216)

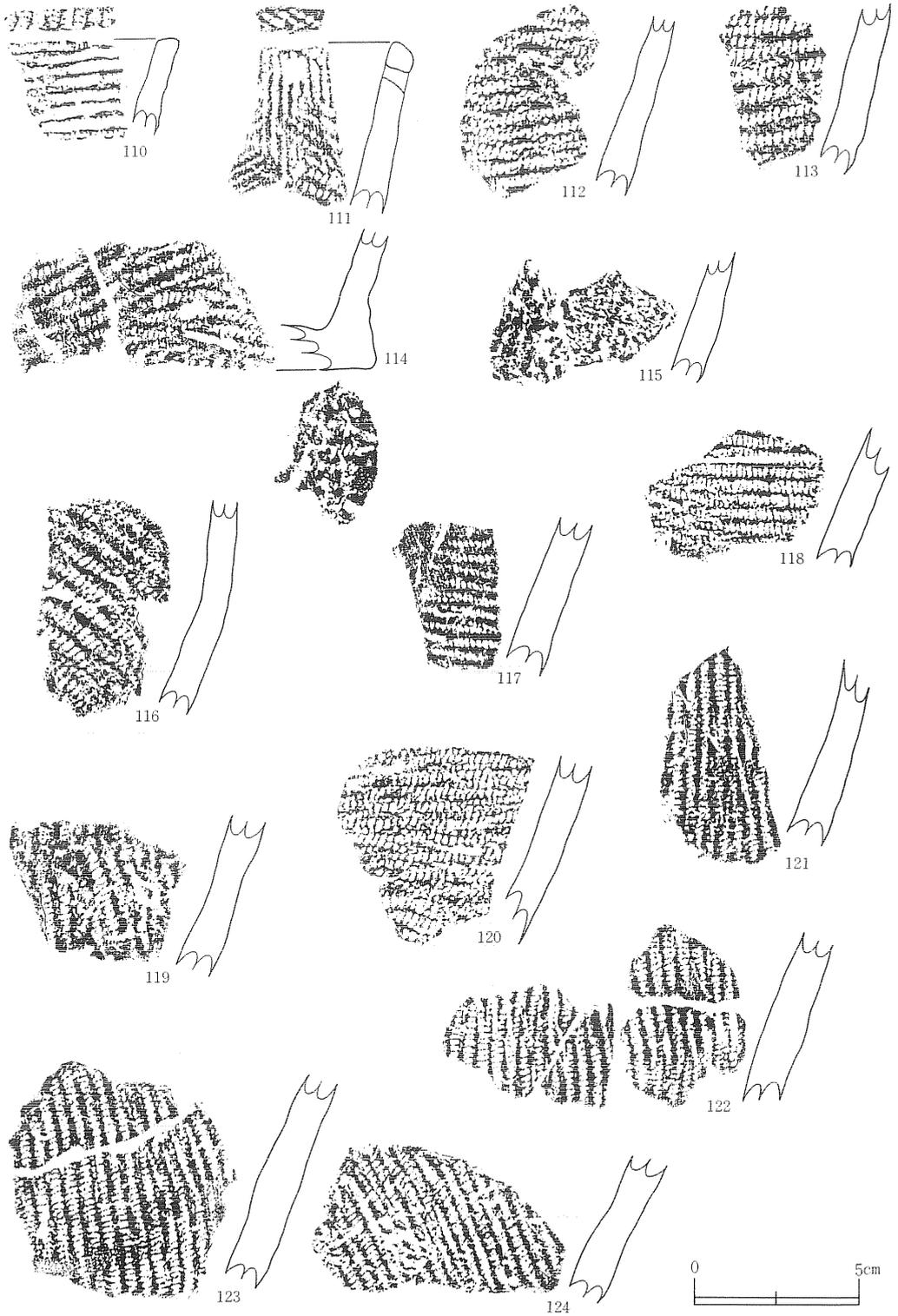
208～210はR LもしくはL Rの縄文・曲線を描く沈線・無文帯による文様構成である。胎土は良好。色調は、表・裏面ともにぶい黄橙色(10Y R6/3)である。210は裏面に煤状炭化物が付着



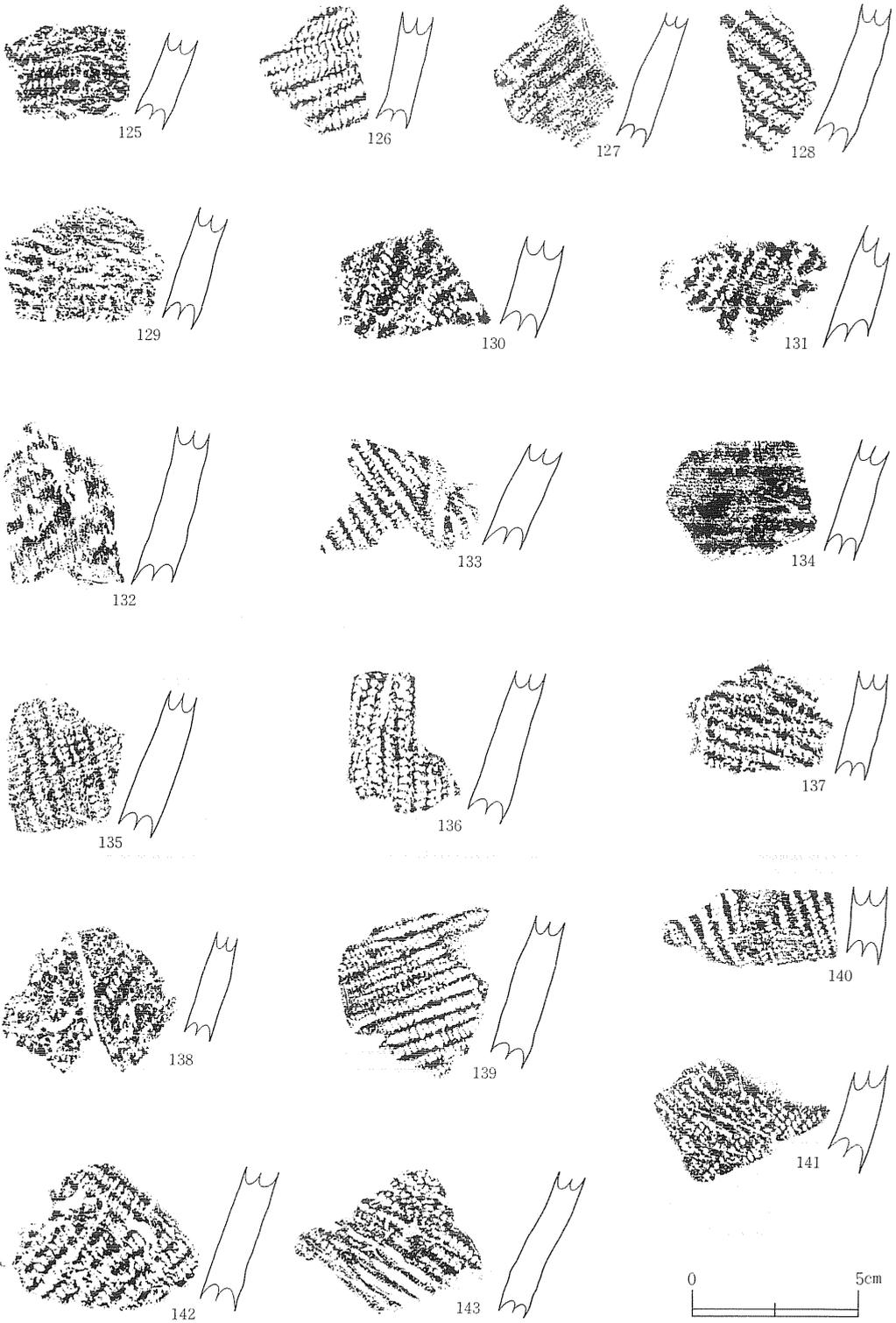
第22図 遺構外出土遺物(1)

第23圖 遺構外出土遺物(2)



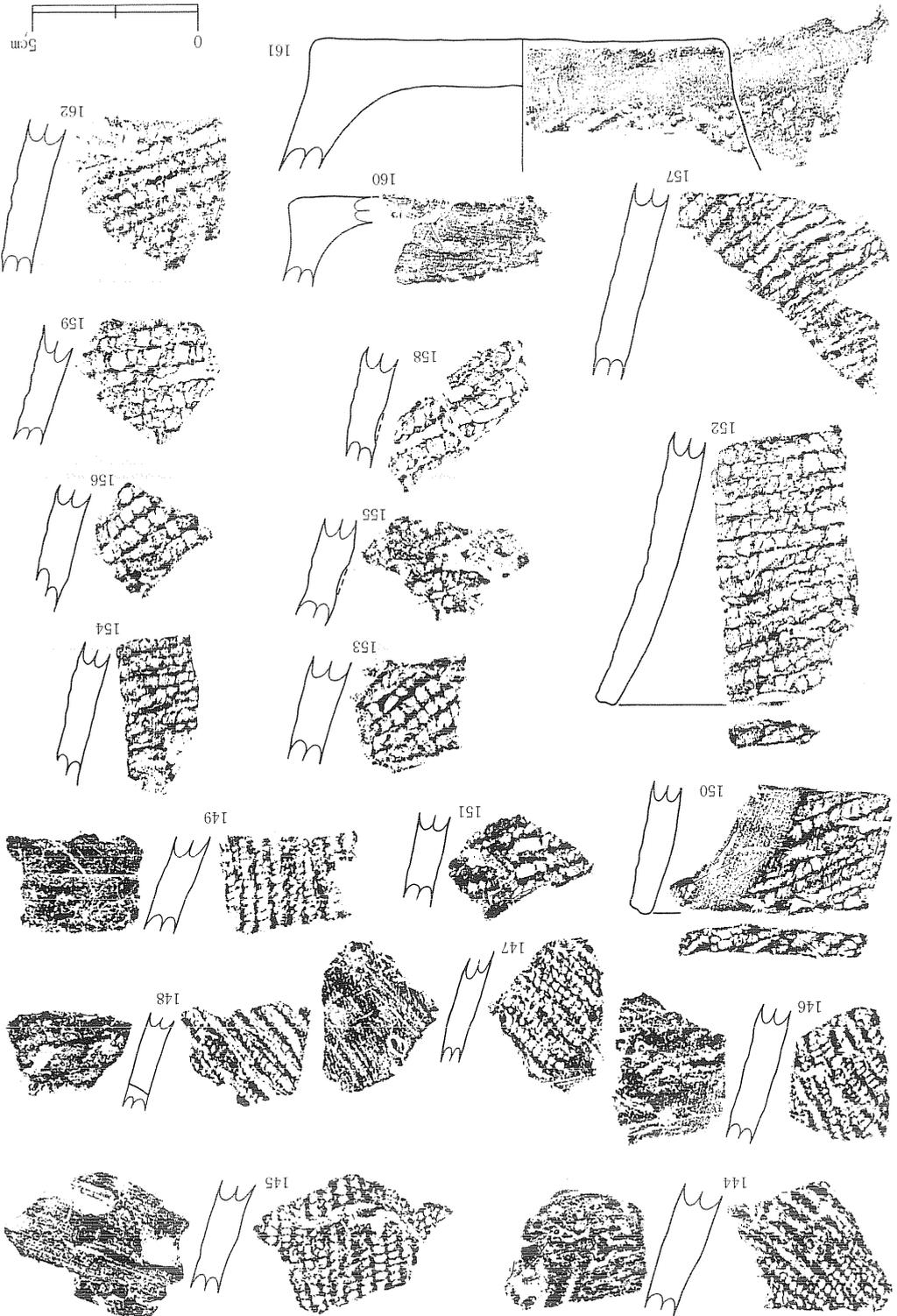


第24図 遺構外出土遺物(3)

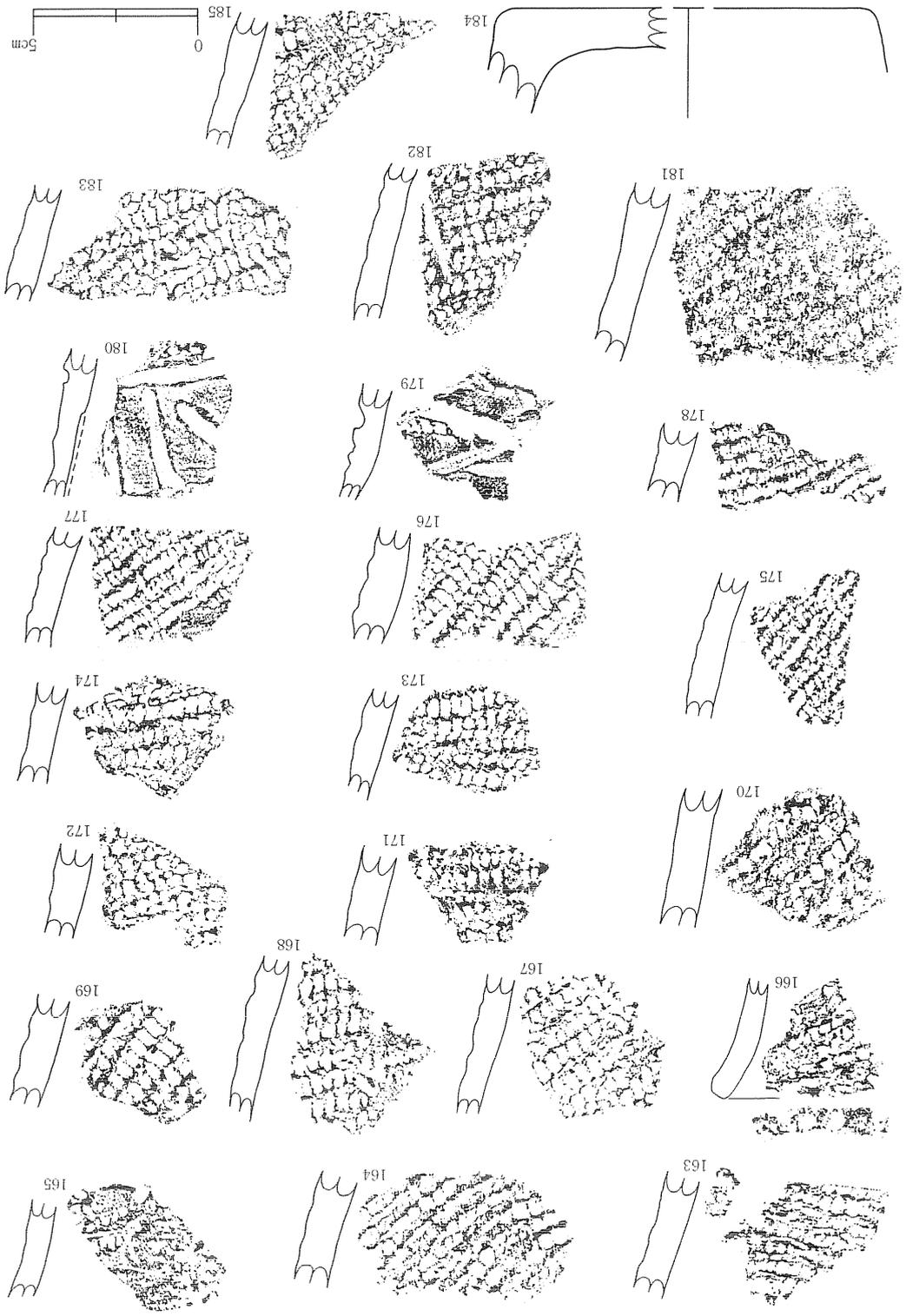


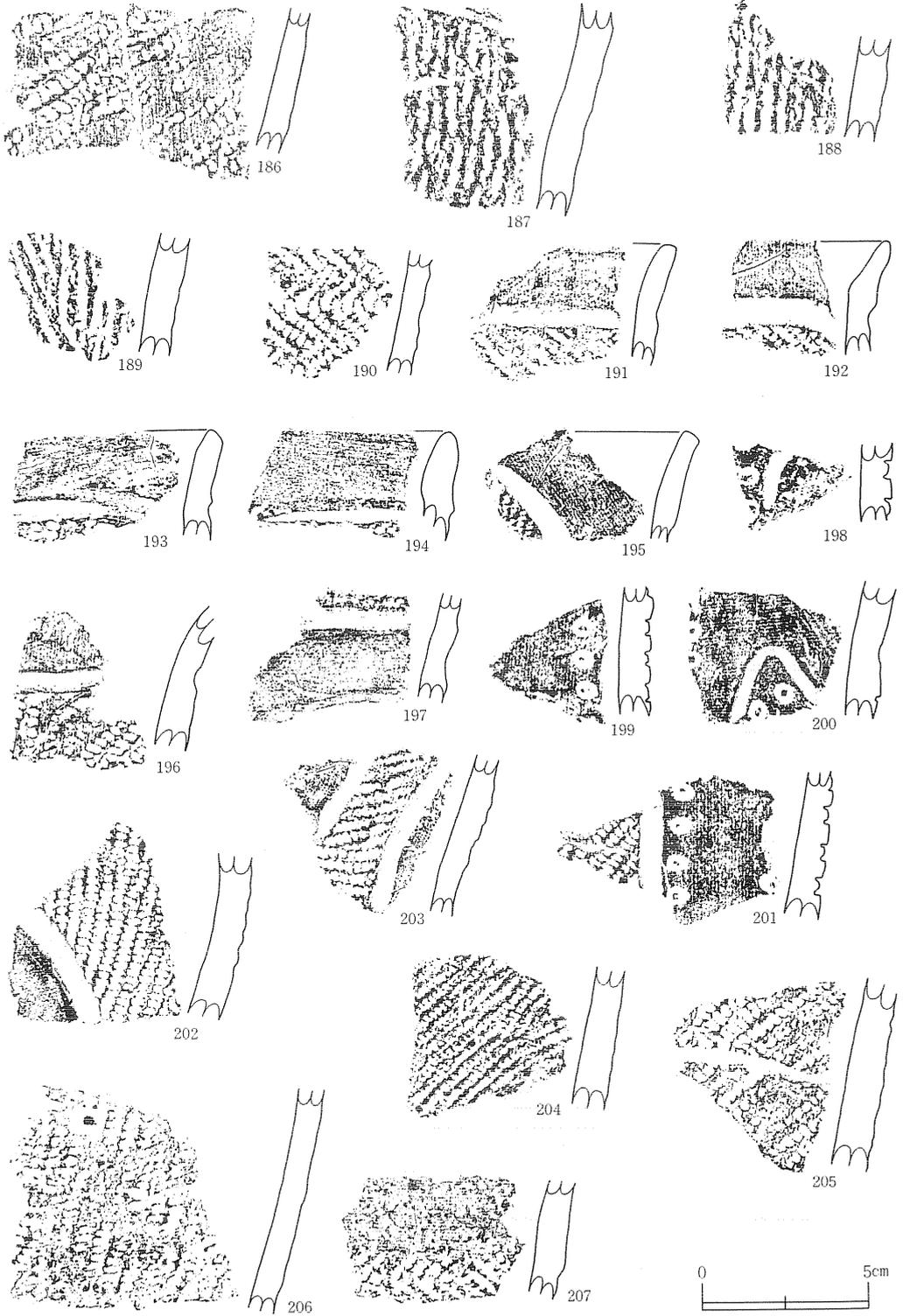
第25圖 遺構外出土遺物(4)

第26図 遺構外出土遺物(5)

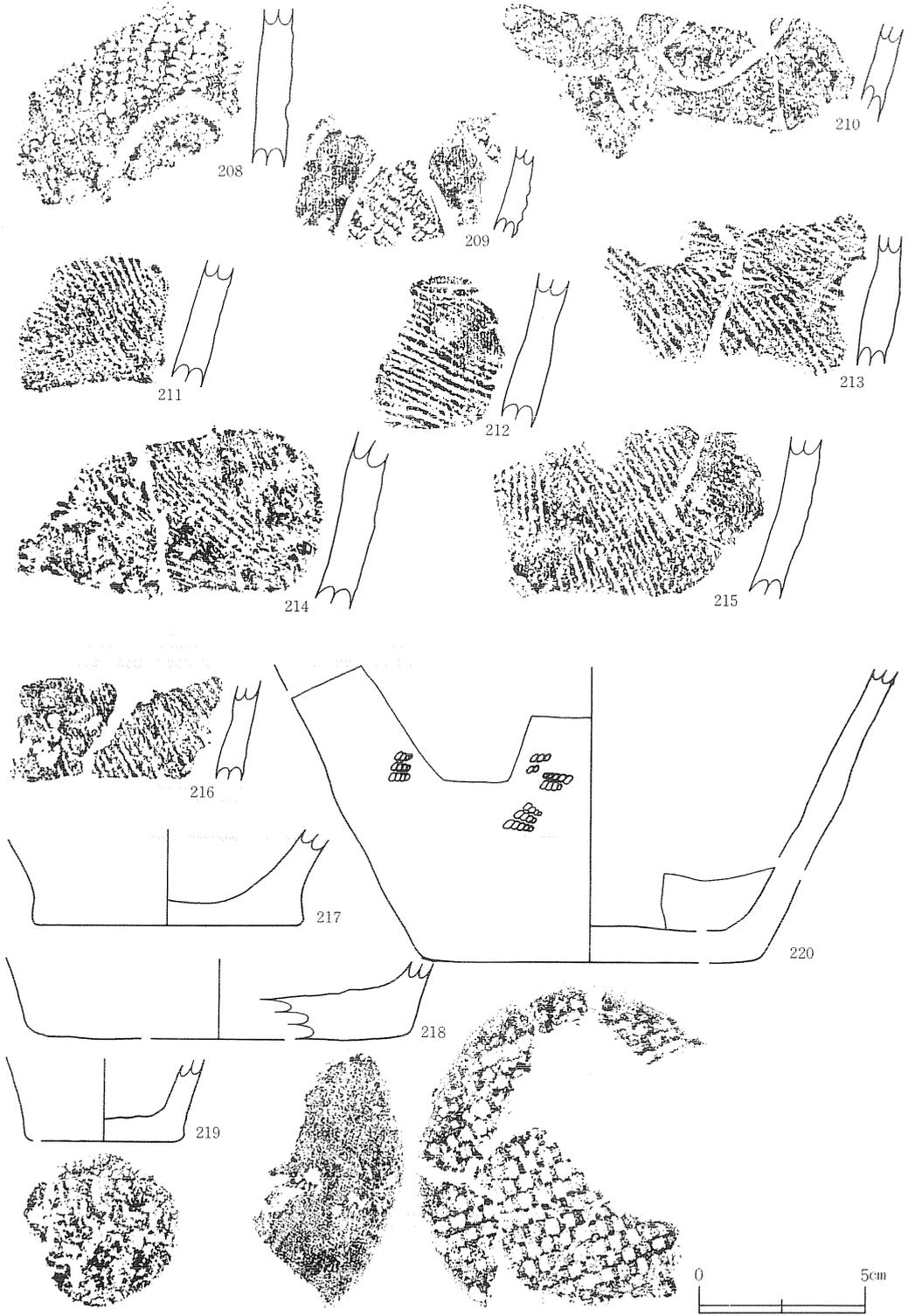


第27圖 遺權外出土遺物(6)





第28図 遺構外出土遺物(7)



第29図 遺構外出土遺物(8)

第1表 縄文土器観察表(1)

遺物番号	挿図番号	図版番号	部位	出土地点	層位	外面文様	内面文様	胎土	焼成	備考
1	16	18-1	底	SI 20	覆土	RL	無文	繊維微量	良	胴部最下位に撫でを施す。
2	"	"	胴	SI 31	"	羽状	"	繊維少量	"	
3	"	"	"	"	"	RL	"	繊維微量	"	
4	"	"	"	SN26	"	"	"	繊維少量	"	
5	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
6	"	"	"	"	"	縄文	"	"	"	
7	"	"	"	SKT34	"	"	"	"	"	
8	"	"	"	SK07	"	RL	"	繊維微砂多量	"	
9	"	"	口縁	SK27	"	縄文	"	繊維少量	不良	口唇部に縄文を施す。
10	"	"	"	"	"	RL	"	"	"	口唇部に弱い縄文を施す。
11	"	"	胴	"	"	"	"	"	"	
12	"	"	"	"	"	"	"	"	良	
13	"	18-2	"	"	"	"	"	"	"	
14	"	"	"	"	"	縄文	"	"	不良	
15	"	"	"	"	"	LR	"	"	良	
16	"	"	"	"	"	羽状	"	"	"	
17	"	"	"	"	"	RL	"	"	不良	
18	"	"	"	"	"	羽状	"	繊維微量	良	
19	"	"	"	"	"	"	"	繊維少量	"	
20	"	"	"	"	"	RL	"	繊維微量	不良	

している。

211～216は捺糸文を施す。胎土は良好。色調は表裏面がにぶい橙色(7.5Y R7/4)となる。

底部資料(217～220)

217～220は底部資料である。219と220は網代底、218は米粒大の大きさの圧痕が認められる。220はLR縄文を施し、胴最下位は約4cm幅で丁寧撫でている。胎土は217を除き良好。色調はにぶい黄橙色(10Y R6/4)であるが、131の表面は橙色(2.5Y R7/6)の鮮やかな色である。

以上のように、縄文時代早期～前期・中期・後期の遺構外出土土器についてそれぞれ共通する特徴を述べてきたが、以下にそれらの平面的な在り方を述べる。

早期～前期の土器は、調査区の南東尾根先端から南東斜面にかけてはほとんどなく、それ以外の地区で均一な広がりを示す。その分布状況のなかでも、北側緩斜面には比較的土器が集中する傾向にある。

中期の土器では、調査区中央より東南西側に希薄な分布状況を示すが、後期の土器においては、南と東側に同じ様な分布がある。当遺跡は遺物の在り方から見て早・前期に中心があったように思われるが、前期竪穴住居跡の周囲が希薄な分布を示しているのに対して、むしろ、遺構がほとんど検出されていない北側緩斜面に濃厚な分布を示しているという結果が得られた。

第2表 縄文土器観察表(2)

遺物番号	挿図番号	図版番号	部位	出土地点	層位	外面文様	内面文様	胎土	焼成	備考
21	16	18-2	胴	S K 27	覆土	縄文	無文	繊維少量	良	
22	"	19-1	口縁	S K 28	"	"	"	"	不良	口唇部に縄文を施す。
23	"	"	胴	"	"	R L	"	繊維微量	"	
24	"	"	"	"	"	縄文	"	繊維少量	"	
25	"	"	"	"	"	R L	"	繊維微量	"	
26	"	"	"	S K 37	"	"	"	繊維少量	良	
27	17	"	"	S K 41	"	"	"	"	"	
28	"	"	"	"	"	RL・LR 原体圧痕	"	"	"	
29	"	"	口縁	"	"	"	"	"	"	口唇部に刺突を施す
30	"	19-2	"	S K 44	"	半月状圧痕	"	砂少量	不良	
31	"	"	"	"	"	隆帯	"	"	"	
32	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
33	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
34	"	"	胴	"	"	隆帯・縄文	"	"	"	
35	"	20-1	底	S I 15	"	R L	"	砂多量	良	底部に沈線を施す。
36	18	20-2	胴	S K 11	"	縄文	"	"	不良	
37	"	"	"	"	"	R L	"	"	良	
38	"	"	"	"	"	無文	"	"	"	
39	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
40	"	"	"	"	"	隆帯・R L	"	砂少量	"	
41	"	21-1	口縁	S K 14	"	沈線	"	砂多量	"	
42	"	"	"	"	"	R L	"	"	"	
43	19	"	"	S K 19	"	無文	"	"	"	
44	"	"	"	"	"	沈線・縄文	"	"	"	
45	"	"	"	"	"	L R	"	"	"	
46	"	"	"	"	"	沈線・縄文	"	"	"	
47	"	"	胴	"	"	縄文	"	"	"	
48	"	"	"	"	"	R L	"	"	"	
49	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
50	"	21-2	"	"	"	"	"	"	"	
51	"	"	"	"	"	L R	"	"	"	
52	"	"	"	"	"	縄文	"	"	"	
53	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
54	"	"	"	"	"	L R	"	"	"	
55	"	"	"	S K 21	"	R L	"	"	"	
56	"	"	"	"	"	縄文	"	"	"	
57	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
58	"	"	"	S K 43	"	隆帯	"	"	"	
59	"	"	"	"	"	R L	"	"	"	
60	20	22-1	口縁	S R 29	"	刺突・沈線	"	砂少量	"	
61	"	"	"	"	"	沈線	"	"	"	
62	"	"	胴	"	"	撚糸・沈線	"	"	"	
63	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
64	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
65	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
66	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
67	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
68	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
69	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
70	"	"	"	"	"	"	"	"	"	

第3表 縄文土器観察表(3)

遺物番号	挿図番号	図版番号	部位	出土地点	層位	外面文様	内面文様	胎土	焼成	備考
71	20	22-2	胴	S R 29	覆土	捺系	無文	砂多量	不良	
72	"	"	"	"	"	縄文	"	"	良	
73	21	23-1	"	S R 24	"	"	"	"	"	
74	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
75	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
76	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
77	"	23-2	"	S K 13	"	"	"	"	"	
78	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
79	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
80	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
81	"	"	口縁	"	"	沈線・縄文	沈線	"	"	口唇部は波状を呈する。
82	"	"	"	"	"	"	"	"	"	口唇部は波状を呈する。
83	22	24-1・2	"	M C 46	V	L R	L R	繊維少量	"	口唇部に縄文を施す。 補修孔をもつ。
84	"	"	胴	M D 57	II	LR・RL	R L	"	"	
85	"	"	口縁	M B 46	V	L R	L R	"	"	口唇部に縄文を施す。
86	"	"	胴	M D 57	II	R L	"	"	"	
87	"	"	"	M E 58	"	"	縄文	"	"	
88	"	"	"	M L 56	IV	L R	L R	繊維少・砂少量	不良	
89	"	"	口縁	M F 56	II	"	"	"	良	口唇部に縄文を施す。
90	"	"	"	M E 56	"	"	縄文	"	不良	
91	"	"	胴	M E 58	"	"	L R	繊維少量	"	
92	"	"	"	M D 56	"	R L	R L	砂少量	"	
93	"	25-1・2	口縁	M F 56	"	L R	L R	繊維少量	良	口唇部に縄文を施す。
94	"	"	"	"	"	"	"	"	"	口唇部に縄文を施す。
95	"	"	"	"	"	"	"	"	"	口唇部に縄文を施す。
96	"	"	"	M E 58	"	"	縄文	"	不良	口唇部に縄文を施す。
97	"	"	胴	M E 45	V	R L	無文	"	良	
98	"	"	"	M J 55	III	"	"	"	不良	
99	23	"	"	M F 56	II	"	L R	繊維多量	良	
100	"	"	"	L O 43	"	"	"	"	"	
101	"	"	"	L R 43	III	"	"	"	"	
102	"	"	"	L O 48	II	"	"	"	"	
103	"	"	"	—	—	"	"	"	"	
104	"	26-1・2	"	M I 57	V	RL・LR	無文	"	"	
105	"	"	"	M D 47	III	L R	"	"	不良	
106	"	"	"	L R 43	"	R L	"	"	良	
107	"	"	"	L O 43	II	"	"	"	"	
108	"	"	"	L R 43	III	"	"	"	"	
109	"	"	"	L R 52	II	"	"	"	"	
110	24	27-1	口縁	M E 56	"	L R	"	繊維少量	"	口唇部に縄文を施す。
111	"	"	"	"	"	R L	"	"	"	口唇部に縄文を施す。 補修孔をもつ。
112	"	"	胴	"	"	L R	"	"	"	
113	"	"	"	L R 43	V	"	"	"	"	
114	"	"	底	M D 56	II	"	"	"	"	底部外面に縄文を施す。
115	"	"	胴	L O 48	"	縄文	"	"	"	
116	"	"	"	M C 45	V	L R	"	"	不良	
117	"	"	"	M D 56	II	R L	"	"	良	
118	"	"	"	M I 56	V	"	"	"	"	
119	"	27-2	"	M F 56	II	"	"	"	不良	
120	"	"	"	M D 49	表土	L R	"	"	良	

第4表 縄文土器観察表(4)

遺物番号	挿図番号	図版番号	部位	出土地点	層位	外面文様	内面文様	胎土	焼成	備考
121	24	27-2	胴	MD56	II	R L	無文	繊維少量	良	
122	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
123	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
124	"	"	"	MD55	"	"	"	"	"	
125	25	"	"	MD57	"	縄文	"	"	不良	
126	"	28-1	"	MD56	"	L R	"	"	良	
127	"	"	"	ME56	"	縄文	"	"	不良	
128	"	"	"	MD56	"	L R	"	"	良	
129	"	"	"	MA54	"	縄文	"	"	不良	
130	"	"	"	ME58	"	L R	"	"	"	
131	"	"	"	ME57	"	縄文	"	"	"	
132	"	"	"	ME58	"	"	"	"	"	
133	"	"	"	MD56	"	R L	"	"	良	
134	"	"	"	ME56	"	縄文	"	"	不良	
135	"	28-2	"	MB46	V	R L	"	"	"	
136	"	"	"	LQ44	IV	"	"	"	良	
137	"	"	"	MF48	"	"	"	"	"	
138	"	"	"	MC45	V	縄文	"	"	不良	
139	"	"	"	MD55	II	R L	"	"	良	
140	"	"	"	MF56	表土	"	"	"	"	
141	"	"	"	LQ44	IV	L R	"	"	不良	
142	"	"	"	MC45	V	縄文	"	繊維少・砂少量	良	
143	"	"	"	ME56	II	R L	"	繊維少量	"	
144	26	29-1	"	MD57	"	"	"	繊維微量	"	
145	"	"	"	LQ44	IV	"	"	"	"	
146	"	"	"	ME48	V	"	"	"	"	
147	"	"	"	ME50	III	"	"	"	"	
148	"	"	"	MF56	II	"	"	繊維少・砂少量	"	
149	"	"	"	MC49	III	"	"	繊維少量	"	
150	"	"	口縁	LN51	II	L R	"	繊維微量	"	口唇部に縄文を施す。
151	"	"	胴	LK45	"	縄文	"	"	"	
152	"	"	口縁	"	"	L R	"	"	"	口唇部に縄文を施す。
153	"	"	胴	LO47	不明	"	"	"	"	
154	"	"	"	LN51	II	"	"	"	"	
155	"	29-2	"	LK46	"	縄文	"	"	"	
156	"	"	"	LK45	"	L R	"	"	"	
157	"	"	"	LN50	"	"	"	"	"	
158	"	"	"	LO47	"	"	"	"	"	
159	"	"	"	"	不明	"	"	"	"	
160	"	"	底	LO51	II	無文	"	"	不良	胴部最下位に撫でを施す。
161	"	"	"	LK45	"	L R	"	"	良	"
162	"	"	胴	LO47	不明	"	"	"	"	
163	27	"	"	LN50	II	"	"	"	"	
164	"	"	"	LK45	"	"	"	"	"	
165	"	"	"	LQ51	"	縄文	"	"	"	
166	"	30-1	口縁	LK15	"	L R	"	"	"	口唇部に刻みを施す。
167	"	"	胴	LK45	"	"	"	"	"	
168	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
169	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
170	"	"	"	LK46	"	"	"	"	"	

第5表 縄文土器観察表(5)

遺物番号	挿図番号	図版番号	部位	出土地点	層位	外面文様	内面文様	胎土	焼成	備考
171	27	30-1	胴	LO52	II	不明	無文	繊維微量	良	
172	"	"	"	LK45	"	"	"	"	"	
173	"	"	"	"	"	L R	"	"	"	
174	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
175	"	"	"	—	—	"	"	"	"	
176	"	"	"	LK46	II	"	"	"	"	
177	"	30-2	"	—	—	"	"	"	"	
178	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
179	"	"	"	LO50	II	RL・沈線	"	"	"	
180	"	"	"	LK45	"	"	"	"	"	
181	"	"	"	"	"	L R	"	繊維微・砂多量	不良	
182	"	"	"	"	"	"	"	繊維微量	良	
183	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
184	"	"	底	"	"	縄文	"	繊維微・砂多量	不良	
185	"	"	胴	"	"	不明	"	繊維微量	良	
186	28	31-1	"	"	"	LR・捺糸	"	"	不良	
187	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
188	"	"	"	LK46	"	LR・RL	"	"	良	
189	"	"	"	LK45	"	木目捺糸	"	砂多量	"	
190	"	"	"	LQ44	表土	縄文	"	"	"	
191	"	"	口縁	LR43	V	沈線・縄文	"	"	"	
192	"	"	"	"	III	"	"	"	"	
193	"	"	"	LL43	II	"	"	"	"	
194	"	"	"	LP46	"	沈線	"	"	"	
195	"	"	胴	LR43	III	沈線・RL	"	"	"	
196	"	"	口縁	LR43	"	"	"	"	"	
197	"	"	胴	LK42	II	沈線	"	"	"	
198	"	31-2	"	LR51	"	沈線・縄文	"	"	"	
199	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
200	"	"	"	LO46	"	"	"	"	"	
201	"	"	"	LQ50	"	沈線・RL 刺突	"	"	"	
202	"	"	"	LQ40	不明	沈線・RL	"	"	"	
203	"	"	"	LR43	III	沈線・縄文	"	"	"	
204	"	"	"	LQ40	不明	R L	"	"	"	
205	"	"	"	表採	—	"	"	"	"	
206	"	"	"	LN52	II	"	"	砂少量	"	
207	"	"	"	"	"	不明	"	砂多量	"	
208	29	32-1	"	LR43	III	沈線・RL	"	"	"	
209	"	"	"	LQ45	"	沈線・LR	"	"	"	
210	"	"	"	"	"	沈線・縄文	"	"	"	
211	"	"	"	"	"	捺糸	"	"	"	
212	"	"	"	LR43	"	"	"	"	"	
213	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
214	"	"	"	LQ43	"	"	"	"	"	
215	"	32-2	"	LQ45	"	"	"	"	"	
216	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
217	"	"	底	LR43	III	無文	"	"	"	
218	"	"	"	—	—	"	"	"	"	
219	"	"	"	"	II	"	"	"	"	
220	"	33-1	"	—	—	L R	"	"	"	

②石 器(第30～46図、図版33～51、第6～9表)

当遺跡から出土した定型的な剥片石器および礫石器は131点を数え、その内訳は石鏃4点、石槍2点、石匙8点、石錐1点、石篋13点、スクレイパー14点、石刀2点、石斧2点、半円状扁平打製石器9点、石錘7点、凹石49点、磨石13点、石皿3点、打製石器1点、刻線石器1点、砥石1点、礫器1点、となる。なお、ここに取り上げた礫石器のうち、石錘には磨面や敲打による凹みをもち、磨石や凹石としても使用されたものを、凹石には磨面をもち、磨石としても使用されたものをそれぞれ含めている。

石鏃(S1～4) S3とS4の先端がわずかに欠損するほかは完形である。S1は基部に若干の抉りを有し、S2・4は平基、S3は凸基の形態をとる。S1～3の片面の一部を除いた部分に、S4は両面すべてに剥離を施す。器厚はS1・2・4は薄く、S3は厚い。

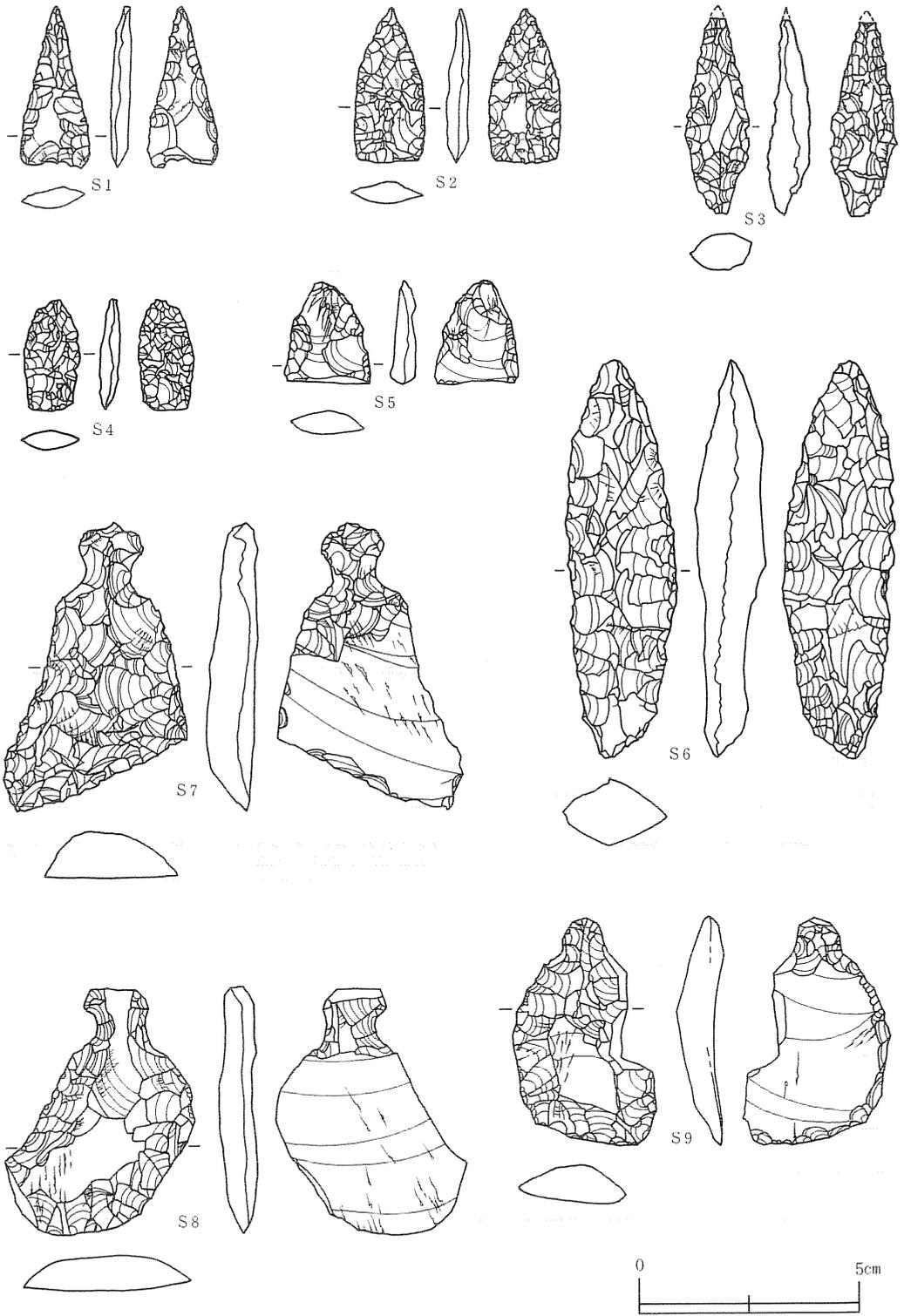
石槍(S5・6) S5では先端部のみを残存し、S6は完形である。S6は柳葉形で、基部に未調整部分を残す。器厚はS5は薄く、S6は厚い。

石匙(S7～14) すべて縦長剥片を利用し、S7・8・10が完形、S13・14が未成品、S9・11・12は欠損部をもつ。S10のつまみは全体からして大きな割合を占め、S9のつまみ基部は抉りをもたない特徴がある。

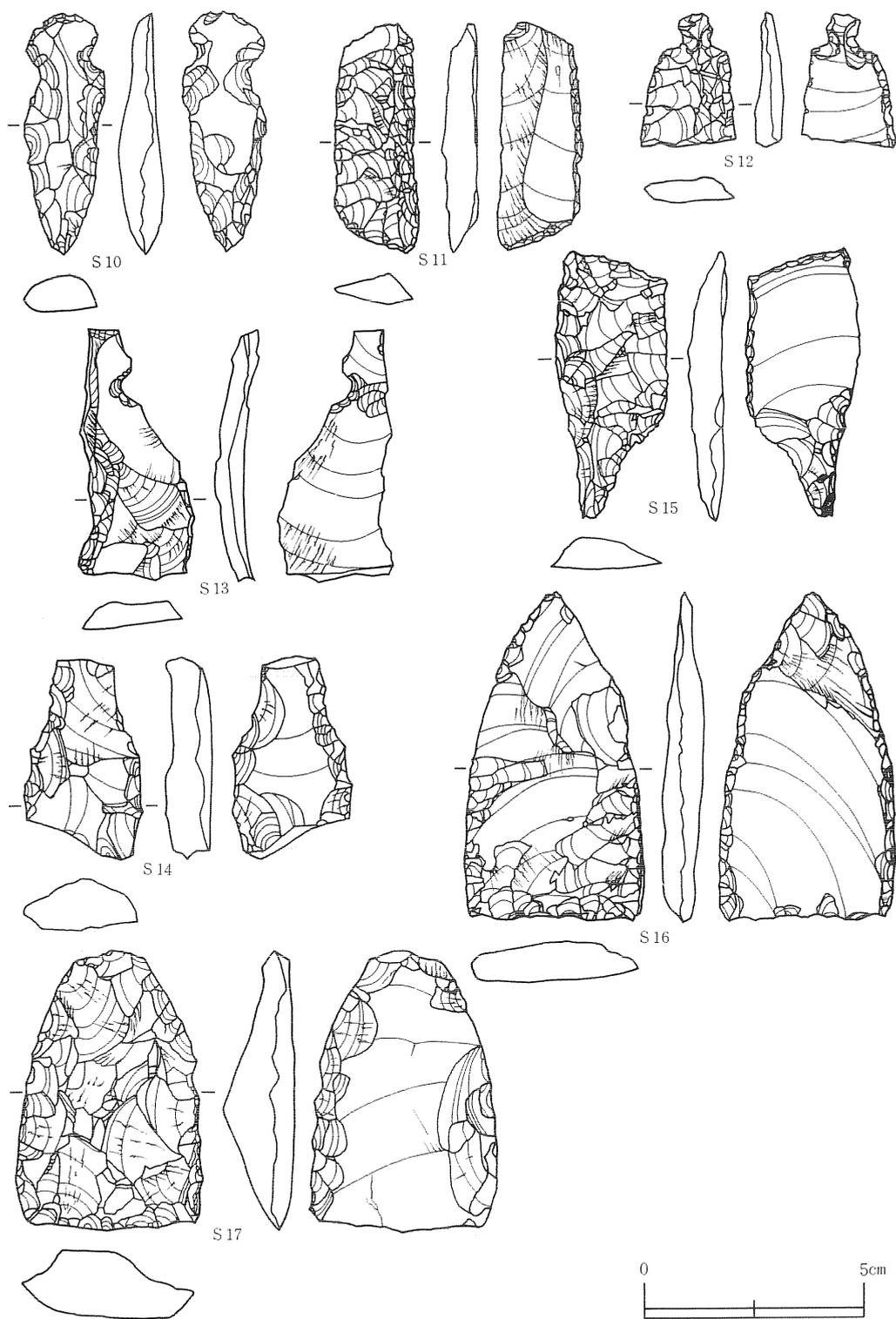
石錐(S15) 錐部の先端が欠損している。つまみ部の3つの縁辺は、腹面の右側縁を除いて、細かい調整が施される。この丁寧なつまみ部は、スクレイパーとして機能した可能性もある。

石篋(S16～28) S16～23においてほぼ完形、S24～28は欠損している。S16～19の刃部は水平で、S20～27では丸みを有している。二次加工の特徴として、主要剥離面・背面のほぼ全面に剥離を施すもの(S22・23・25～27)と背面に限るもの(S16～20・24・28)がある。前者は刃部に丸みを有するものに多く、後者は刃部が水平なものに多い。S16は基部が尖がり、刃部側縁ともに細かい調整を施す。S22は素材に瑪瑙を用いている。

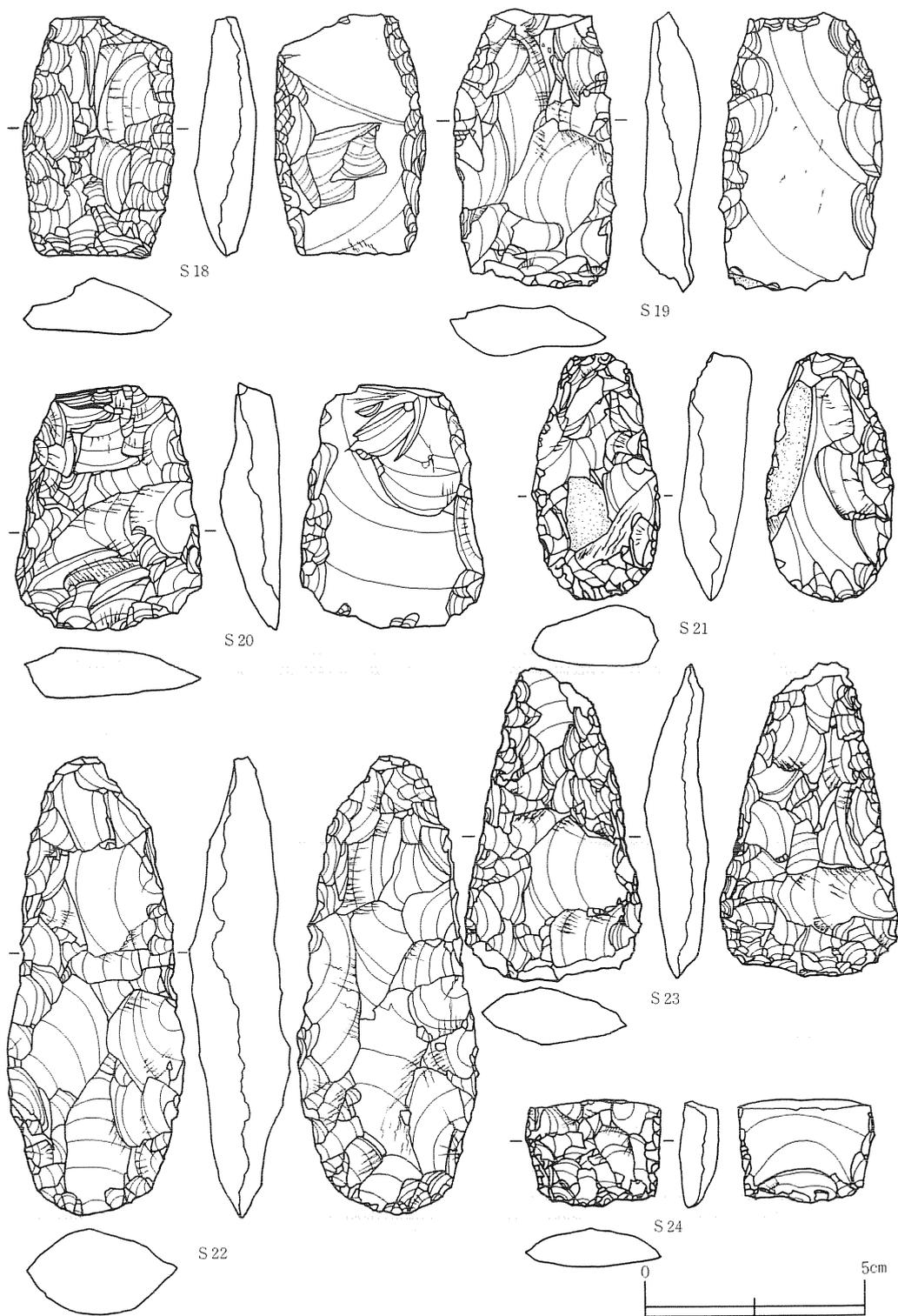
スクレイパー(S29～42) 横長剥片を利用したもの(S34・36・42)、縦長の剥片を利用したもの(S29～33・35・37～39・41)、両者の識別がつかないもの(S40)に分けられる。縦長剥片を利用したもののうち、末端部を利用したものにS31・35・39があり、S35とS39はさらに側縁部にも剥離が及ぶ。S29・30・32・38・41は側縁に剥離をもつが、S29が一側縁である他は両側縁にある。また、S30とS41は、末端を意識的に尖がらせてある。横長剥片利用のS34・36・42のうち、S42は末端を利用したと考えられる。S34は一側縁の調整である。S36は末端と両側縁に調整があり側縁部は両面から、末端部は片面だけで背面からのみの調整である。S33は石篋の刃部が再利用されたと考えられる。S37は一側縁に調整痕が認められるので、一応スクレイパーとした。S40はラウンドスクレイパーで、その断面は低い二等辺三角形となり、縁辺には粗い剥離が施される。



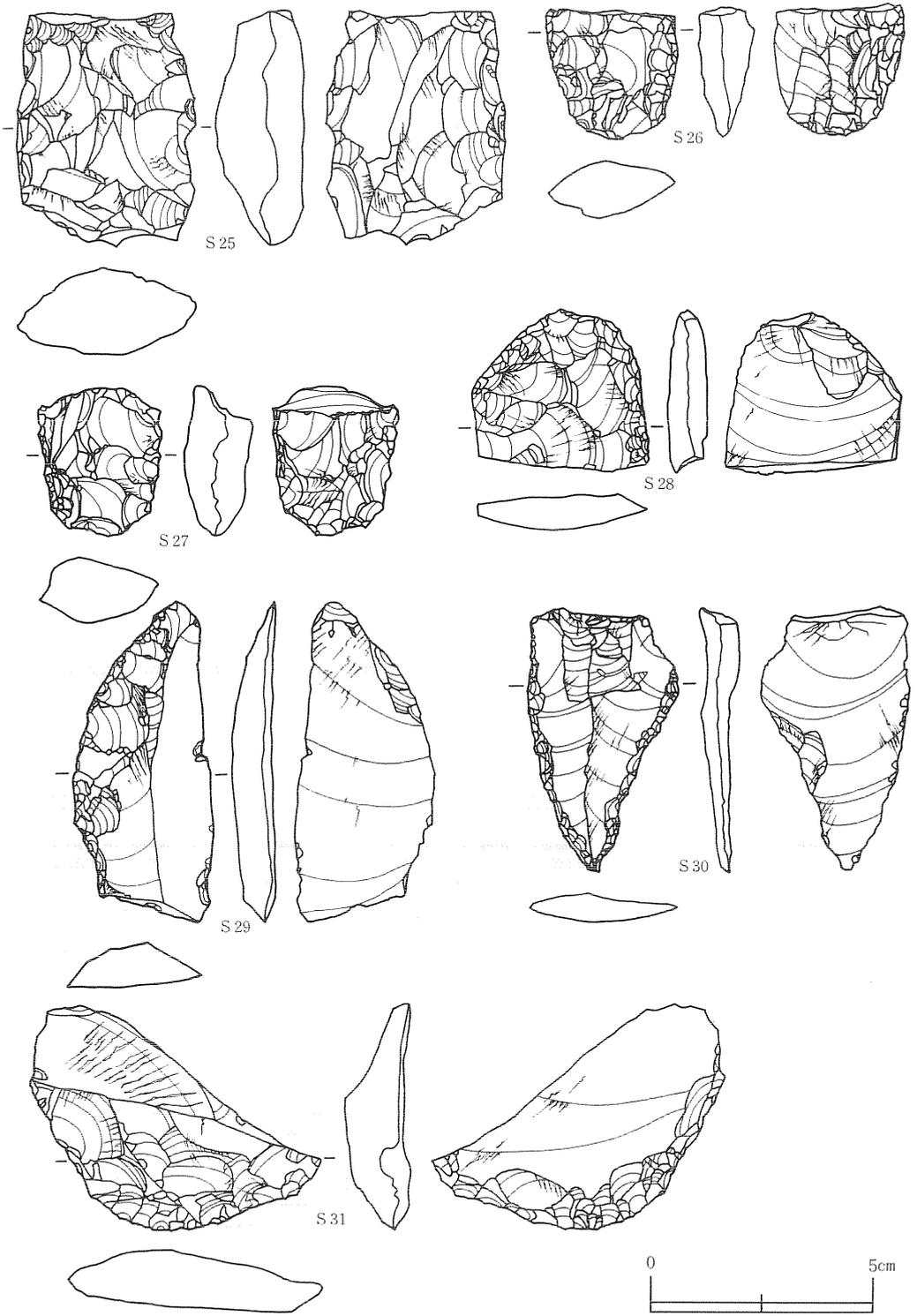
第30図 遺構外出土遺物(9)



第31圖 遺構外出土遺物(10)

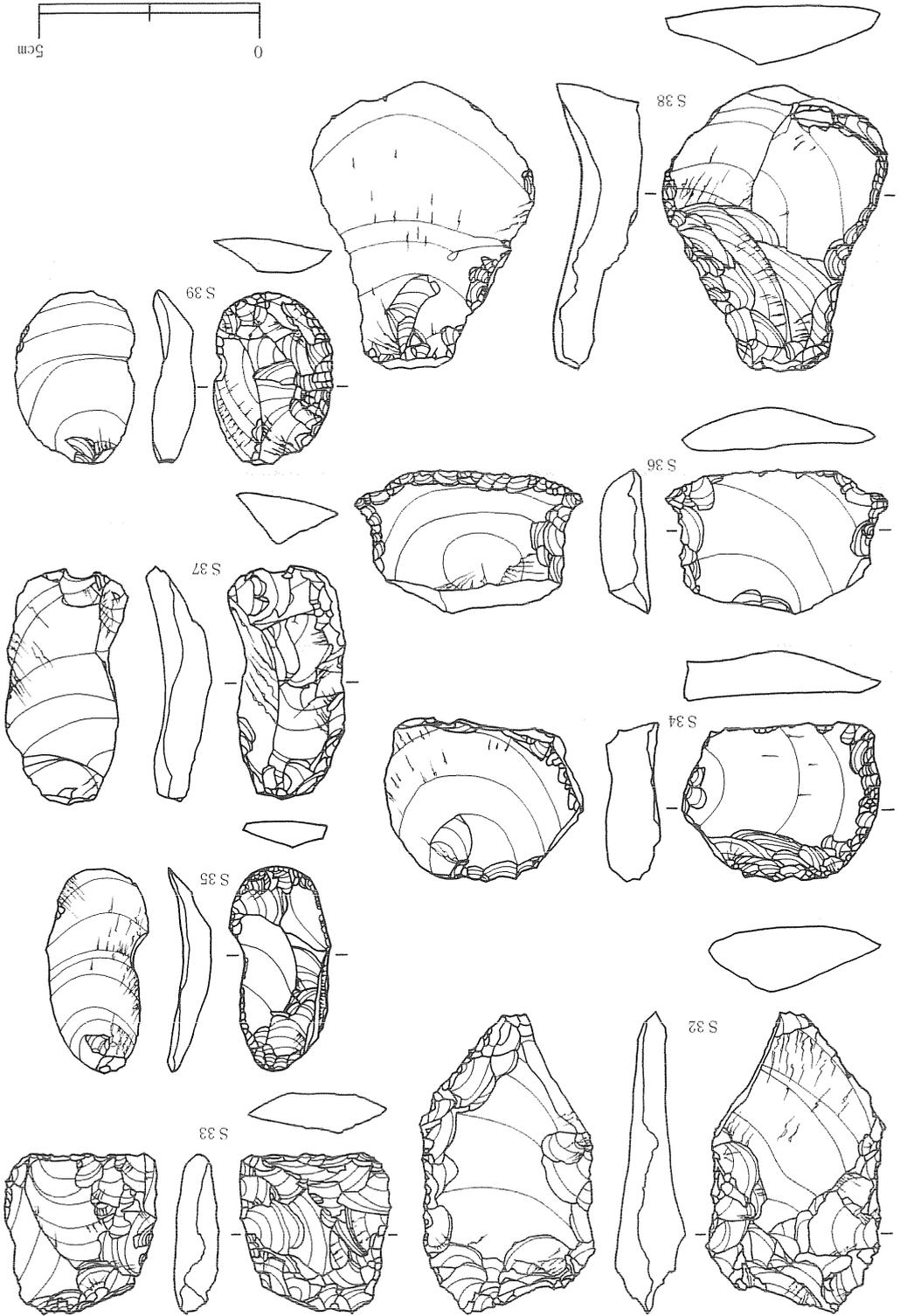


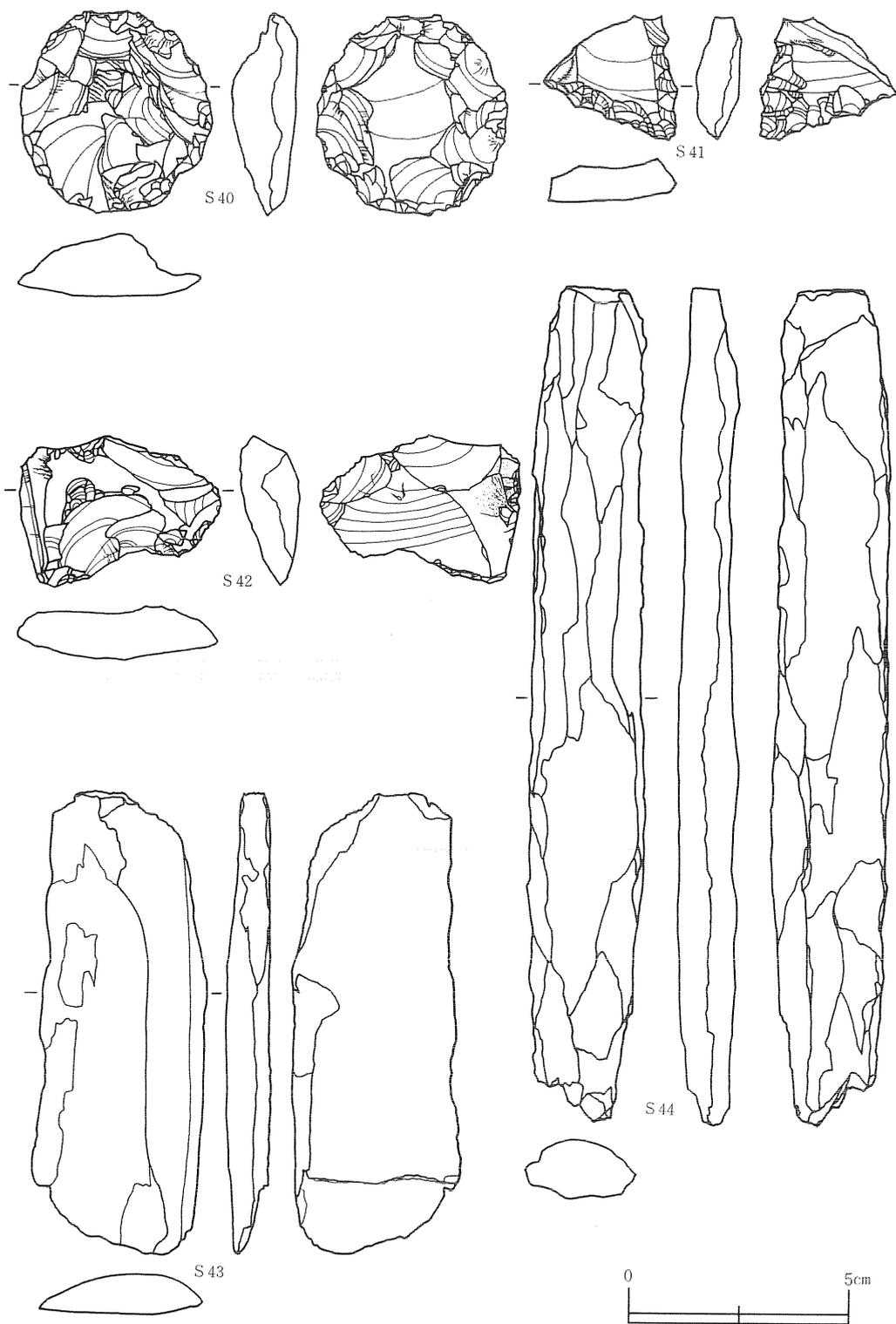
第32図 遺構外出土遺物(11)



第33図 遺構外出土遺物(12)

第34図 遺構外出土遺物(13)





第35図 遺構外出土遺物(14)

石剣(S43・44) S43は正面が磨られているが、裏面は剝離面となる。S44は両面ともに剝離面を残し、上先端は水平に完結し下位では折損している。S43・44はともに刃部背面が不明瞭であり、この意味では石刀としがたく、断面が細みの楕円形を呈することから石剣と推定しておく。

石斧(S45・46) S45が磨製石斧、S46が片刃の打製石斧で、どちらも完形である。S45の刃部は片側から加工され、その面の基部近くには長軸方向に緩やかな凹みを示している。柄の装着に関連すると思われる。S46は表面の一部に礫皮面を残し、刃部の剝離は粗い。基部付近の挟り部分は、比較的丁寧な調整を施す。

半円状扁平打製石器(S47~55) S53~55を除くほかは完形である(S47~52)。S47は、刃部の対辺のみに挟りをもつ。S48・50・51も刃部の対辺に挟りをもち、かつ、両側縁にも挟りをもつ。また、S55の一侧縁にも挟りがある。S49は刃部を除く縁辺は半円状を呈し、縁の全面には握り易いように打撃を加えてある。S53の刃部は磨減が少なく、刃部は鋭い角度をなすが、硬質な石材が影響していると考えられる。

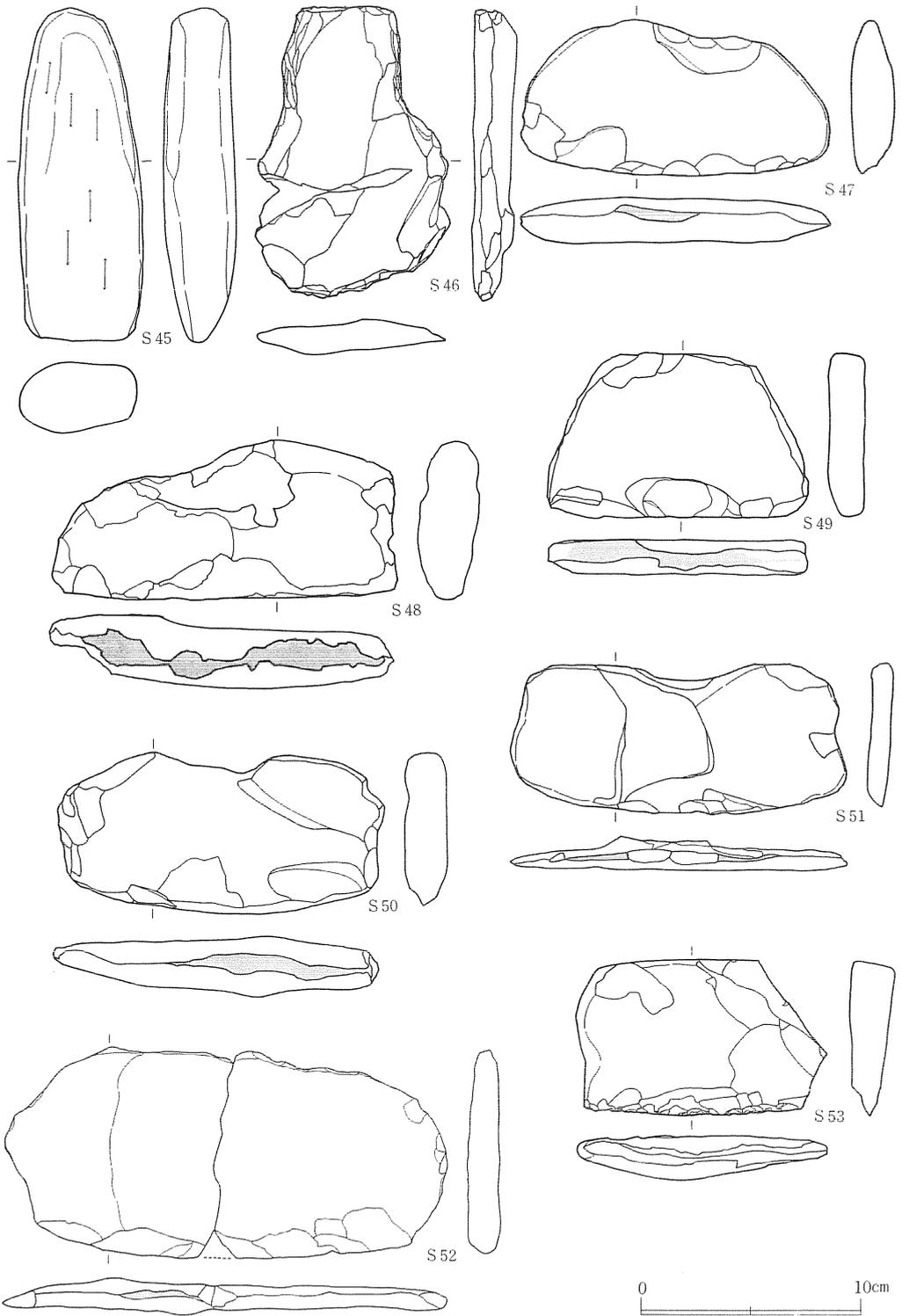
石錘(S56~62) S60とS62を除いたほかは完形である(S56~59・61)。このうち、S56~58・60は円形に近い楕円形を示し、S59・61・62は長楕円形である。S58・60は凹石としての機能もあり、S58においては磨石としても使用されている。

凹石(S63~111) 両面に凹みを有するもの(S63~76・78~80・82~89・91~99・101・103・105~108・111)と片面に凹みを有するもの(S77・81・90・100・102・104・109・110)とがある。また、S63~77などの凹みの深いものやS102~111などの凹みの浅いものなど様々である。凹みの深いものは、厚みのある扁平な石で、卵形に近い楕円形を示す傾向にあり、凹みの浅いものはやや扁平で楕円形を示す傾向にある。中間のタイプは、比較的扁平な楕円形、ずんぐりした不整形、棒状の楕円形など様々である。これらのなかには磨痕を有するものもある(S65~71・73~75・77~81・83・85・86・91~93・96・99・101・104~108・110・111)。S100は片面に凹み部分を有し、凹み部の周辺に5~6個の大小様々な小円形の穴があいている。

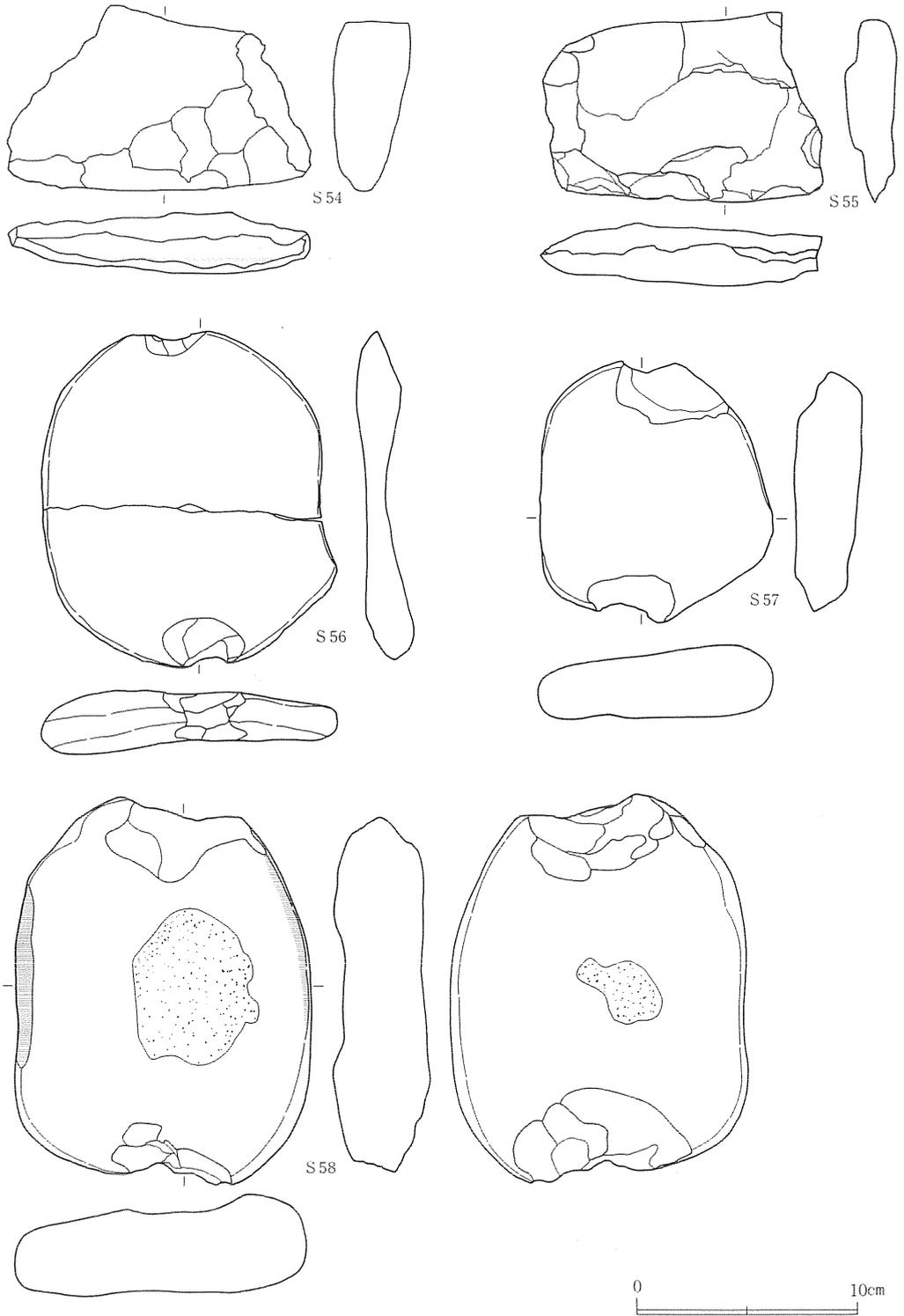
磨石(S112~124) 磨面が表裏いずれかの面にあるもの(S112~115・117~124)、側面だけにあるもの(S116)、両者をふくむもの(S113・115・120)などがある。形態は、円形に近いもの(S116・122・123)、楕円形のもの(S112・113・120)、細長い楕円形のもの(S114・117・118)、方形状を示すもの(S121・124)などがある。

石皿(S125~127) 使用面の凹みが緩やかでありS125は火を受けて赤変している。S125とS126は比較的小ぶりだが、S127は大型の破片である。

打製石器(S128) 片面半分では粗く大きな剝離を施し、反対面では礫皮面を残す。長軸に沿う側縁の一方には、磨面が認められる。



第36図 遺構外出土遺物(15)

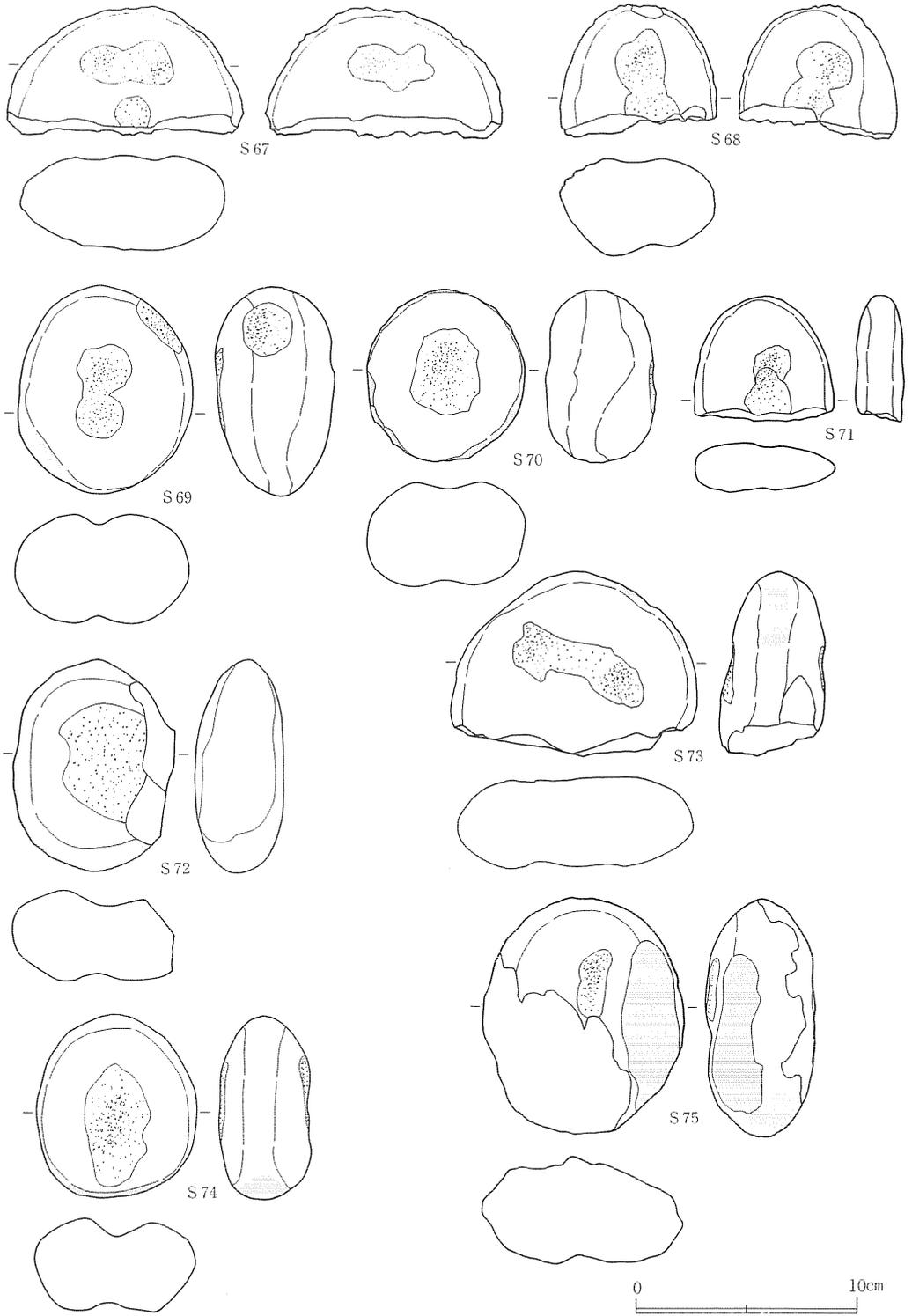


第37図 遺構外出土遺物(16)

半仙遺跡



第38図 遺構外出土遺物(17)



第39図 遺構外出土遺物(18)



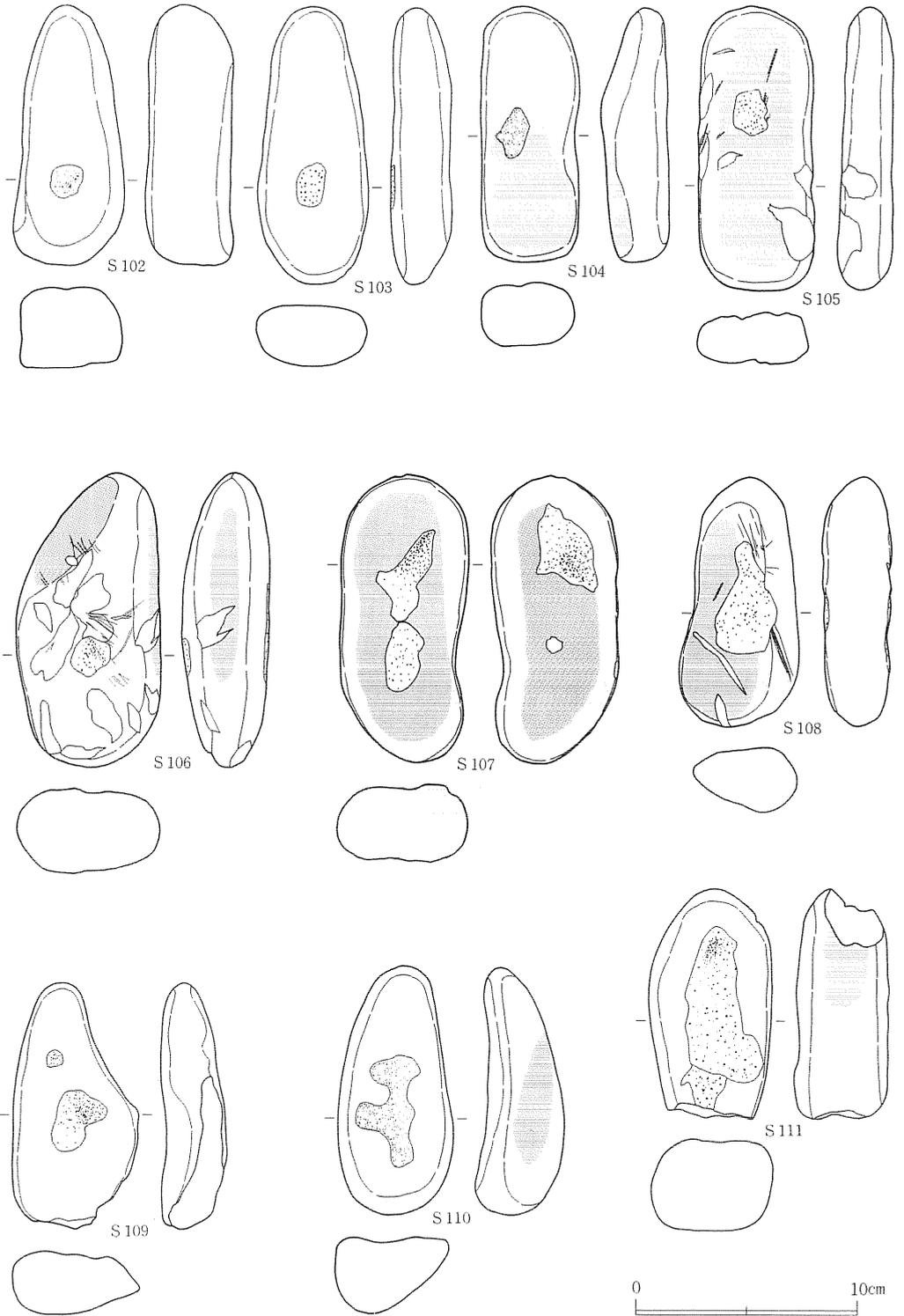
第40図 遺構外出土遺物(19)



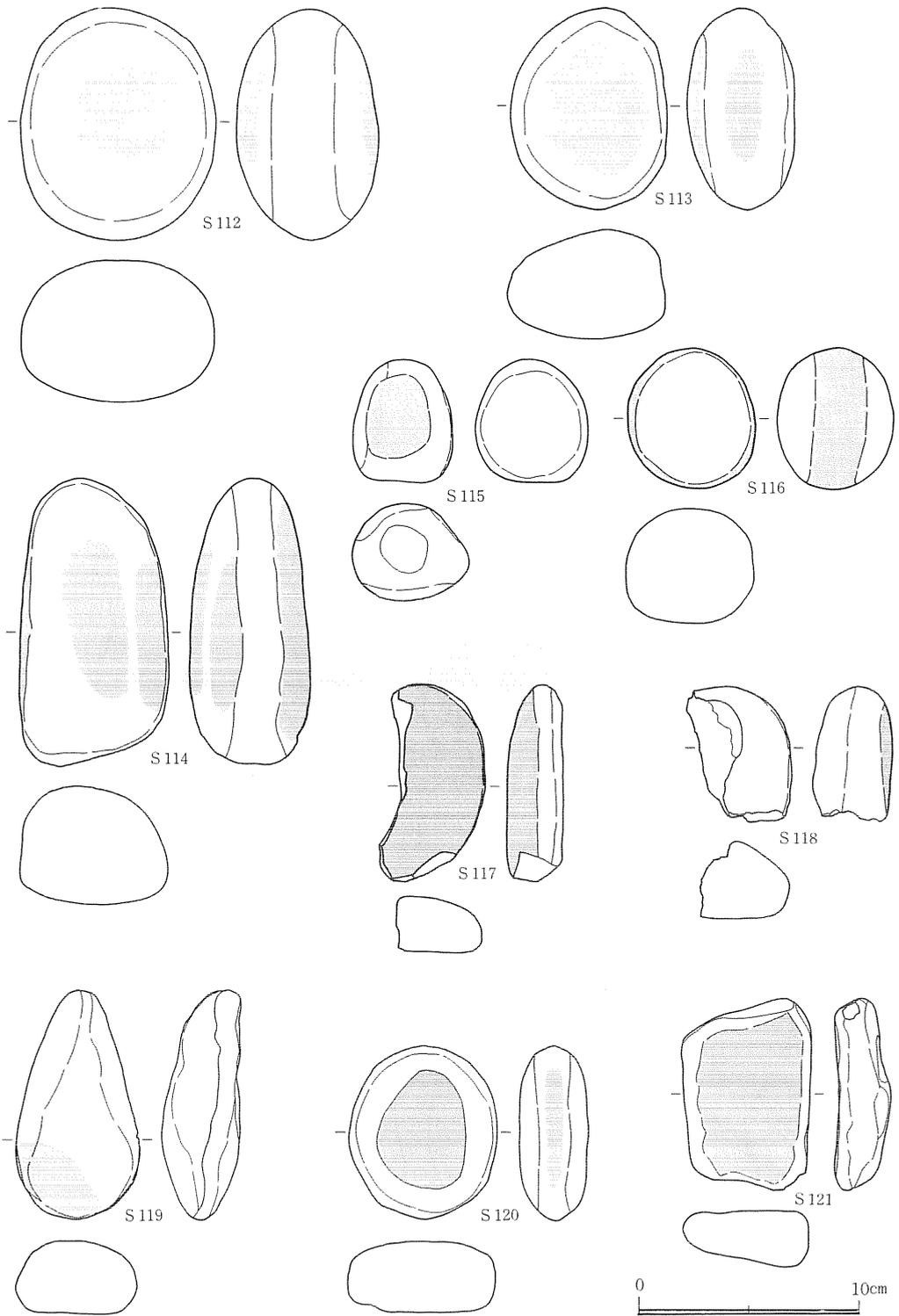
第41図 遺構外出土遺物(20)



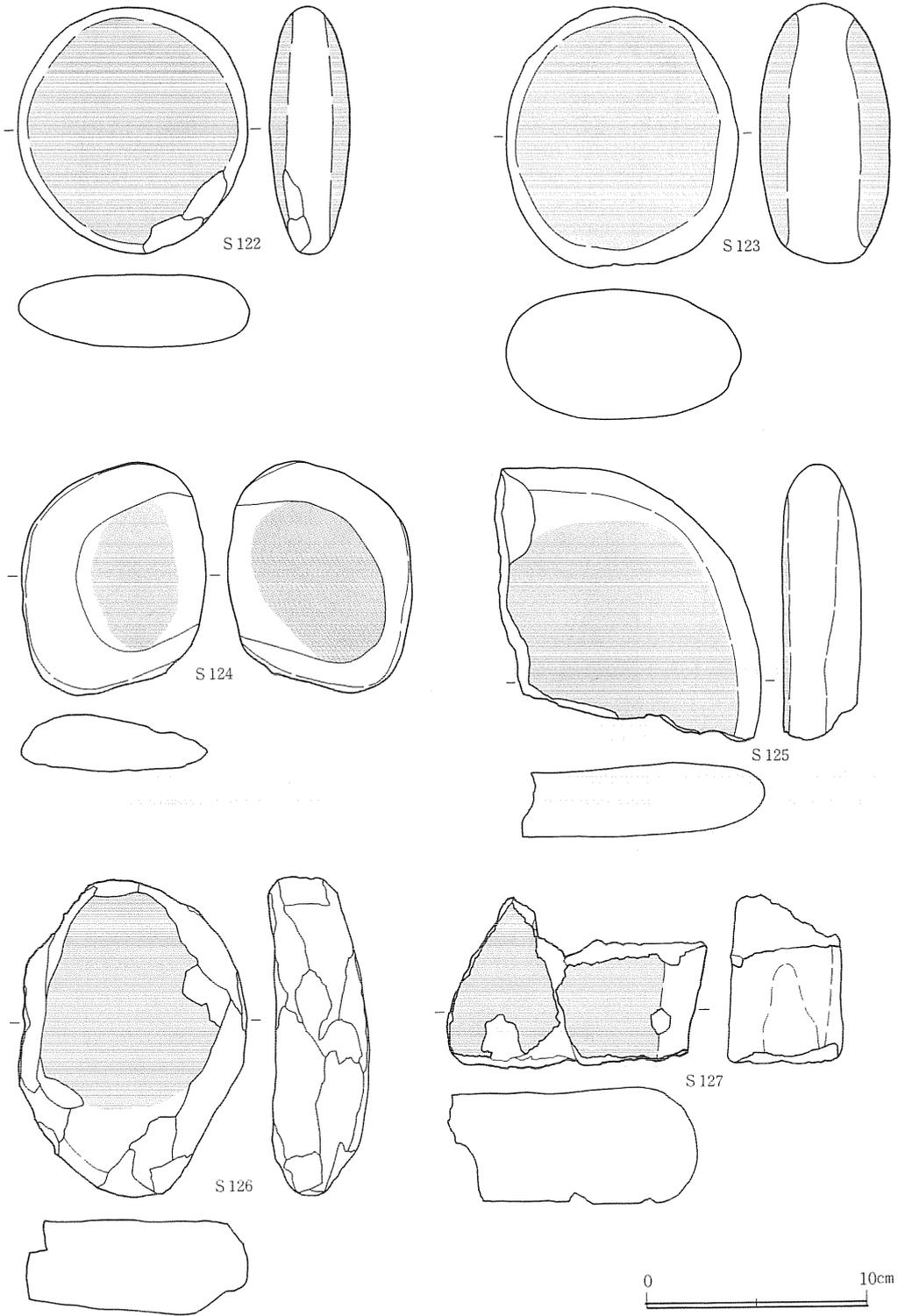
第42図 遺構外出土遺物(21)



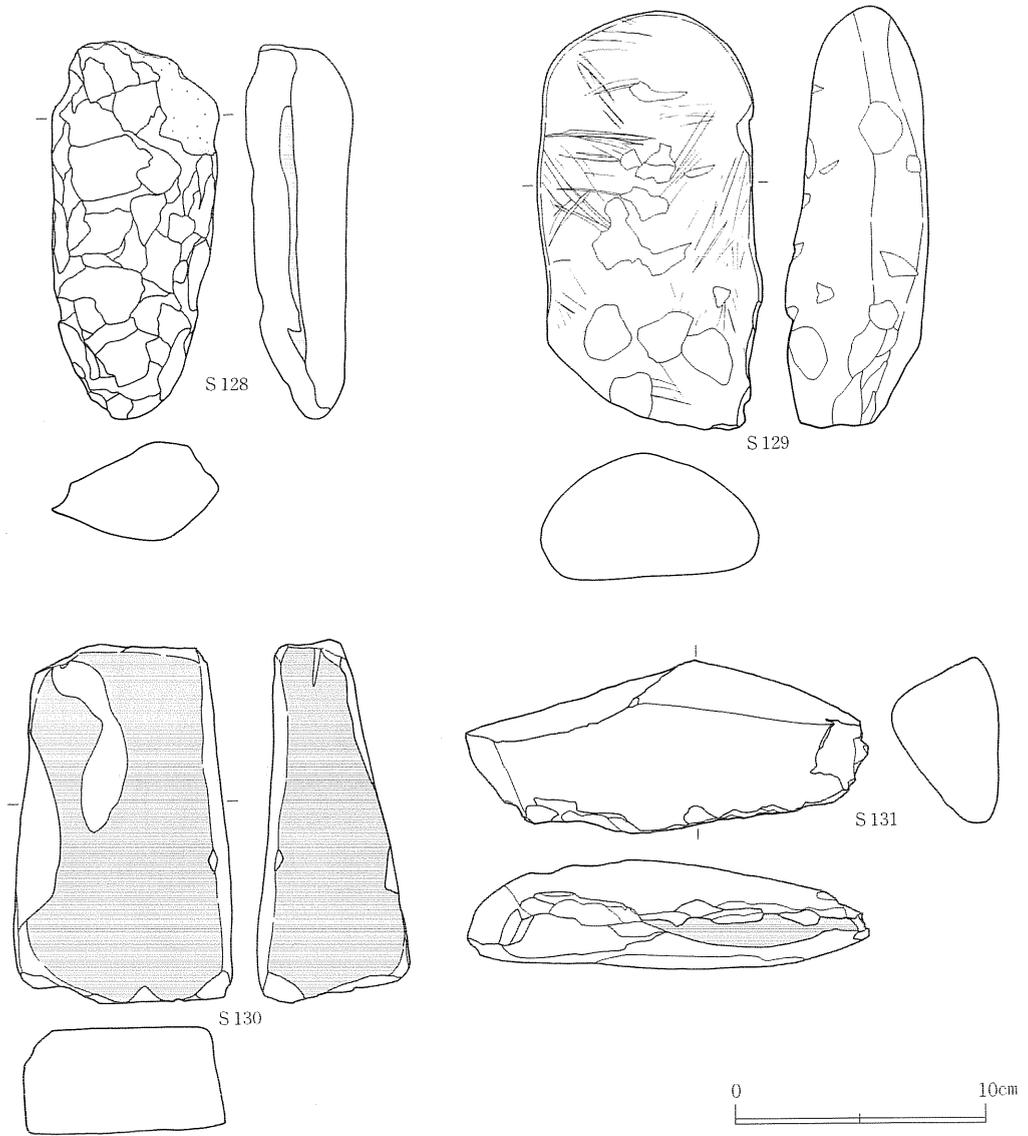
第43図 遺構外出土遺物(22)



第44図 遺構外出土遺物(23)



第45図 遺構外出土遺物(24)



第46図 遺構外出土遺物(25)

線刻礫(S129) 表・裏両面に不定方向の刻線を有している。一方の凸面側には、窪み痕を有する。

砥石(S130) 表・裏両面と縦長の両側面が磨面として使用されている。この砥石が縄文時代とする確たる理由はない。

礫器(S131) 長軸に垂直となる横断面が三角形状を呈し、その頂点となる線に磨滅した使用痕が認められる。

③剥片と接合資料(第47～53図、図版51～57、第9表)

ここでは、石核2点、剥片石器40点、それにA～Hまでの接合資料を図示してある。石核を除く剥片はほとんどが縦長の剥片であるが、横長の剥片(S146・153・154・172)も含む。S150～154は出土地点不明で、S132はLQ44グリッド、S135はLP49グリッドの出土であるが、これらを除く剥片はMK56グリッドを中心とした周辺からの出土である。この剥片の集中する地区を点数で示せば、MK56グリッド18点、MK57グリッド7点、MJ57グリッド5点となる。ほとんどが第Ⅲ層から第Ⅳ層にかけての出土である。この集中する地区は標高30～32mで、調査区北西部の緩斜面にあたっている。

剥片石器は、二次加工痕のある剥片と、二次加工かどうか判断できない剥離痕をもつ剥片(微小剥離痕のある剥片)、それ以外の剥離痕をもたない剥片とに分類したが、以下これに基づいて説明していく。

二次加工痕のある剥片『挿図中の←→印』には、S132・135・137・158・163がある。これらは出土地点を異にするS132・135とS137・158・163に分けられるが、S132・135の調整痕は比較的そのタッチは粗い。S132の調整は背面右側縁(以下背面を基準にして位置を述べていく)から右末端まで連続し、S135では左側縁下方にある。また、同側縁上方には、微小剥離痕(ここでは後述する不明瞭な微小剥離痕)をみとめる。S137・158・163の調整痕はきめ細かい連続したタッチで鈍角となる。S137は右側縁下方、S163は左側縁下方、S158は末端に施される。また、S158は左側縁に2箇所のかかり状の痕跡があり、S163は左側縁上方に二次加工痕よりも細かく連続した剥離(後述する明瞭な微小剥離痕)をみとめる。

微小剥離痕のある剥片は、微小剥離痕の明瞭なもの『←→』(S147・156・159・162～164・172)と、その不明瞭なもの『←----→』(S133・135・136・142・143・145・146・155・166・170)に分けられ前者は使用痕と考えられるものである。S147は右側縁にあつて、中央にはかかり状の痕跡がある。また、不明瞭な微小剥離痕が右側縁上方にある。S156は右側縁下方にあり明瞭。S159は右側縁にあり、中央にかかり状の痕跡がある。S162は左下方の側縁にあり、不明瞭な微小剥離痕もその上方側縁と右側縁中央部にある。S164は左下方の側縁にある。S172は左上方の側縁にある。

不明瞭な微小剥離痕のある剥片は前述の二次加工のある剥片1点と明瞭な微小剥離痕のある剥片2点の他に9点あるが、S143とS155を除きすべてに礫皮面を有している。S133は右側縁と左側縁中央にある。S136は左側縁中央やや上方にある。S142は左側縁にある。S143は右側縁上方と左側縁にある。S145は左側縁にある。S146は左側縁上方にある。S155は右側縁にある。S166は右側縁上方にある。S170は左側縁中央と右側縁にある。

接合資料はA～Hまで8点あるが、各々の接合資料となる剥片の剥離先後関係は、AがS153

→S154→S152→S151→S150、BがS158→S156→S157→S155、CがS159→S161→S160、DがS163→S164→S162、EがS165→S166、FがS167→S168、GがS169→S170、HがS172→S171となる。以下、接合資料ごとの説明を加えていく。

Aはまずa・bの打撃によってS153・S154の剥片が得られる。後に、折断して石核S152と石核(S150+S151)を得る。石核S152は、折り面を打面として小さな剥片を取っている。一方、石核(S150+S151)は、折断によって得られた折り面と平行する方向に打面調整を連続させ、結果として石核(S150+S151)の長軸に沿う長い打面調整をもつ。ところがこの後、打面から剥片がとられていない。打面調整の後、折断面を打面としたcによってS151を剥離している。ここで得られた剥離面を打面として石核S150から1枚の剥片を得ている。

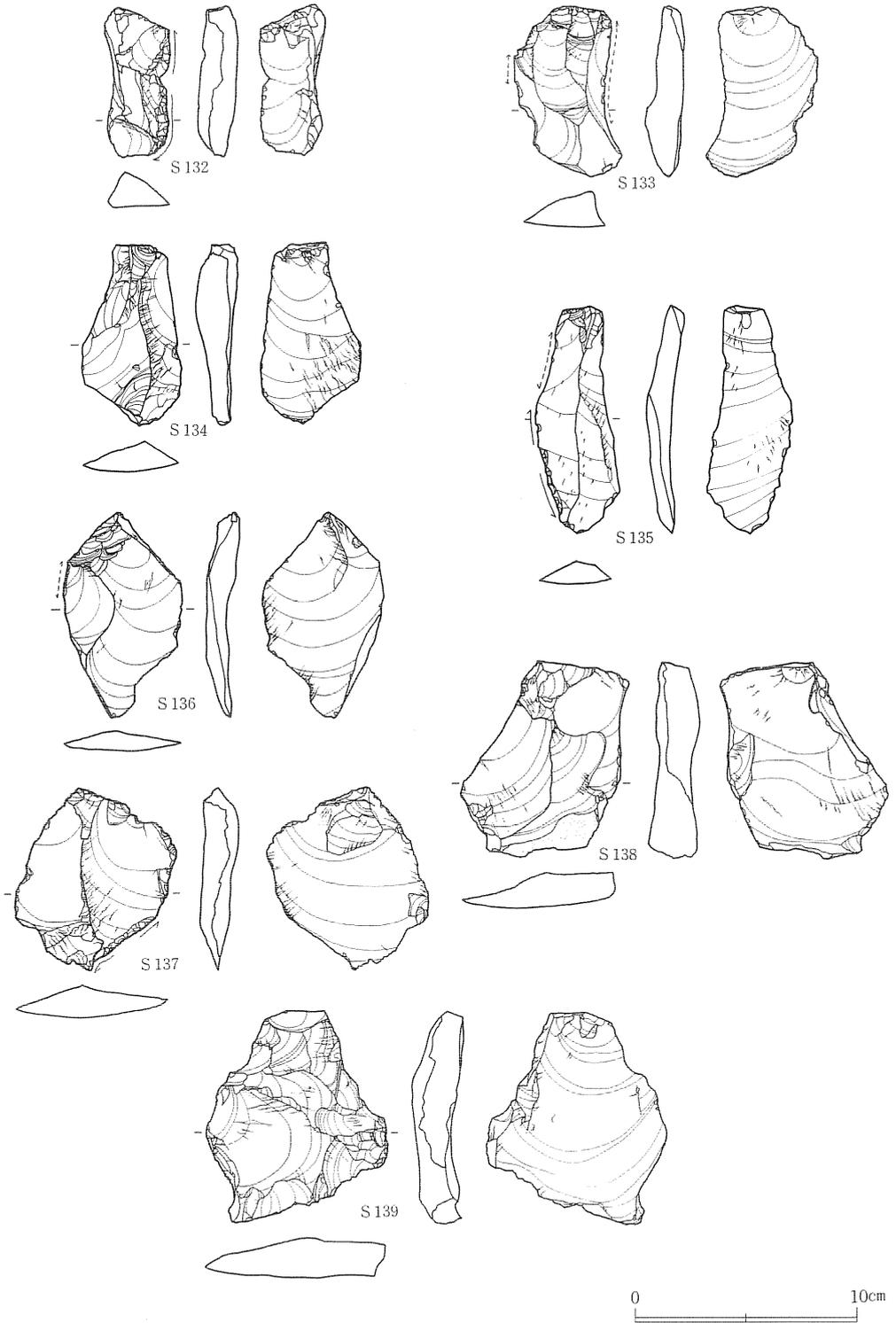
Bは、節理で割れた面を利用して、一方向から縦長の剥片を剥離している。接合状態にある3つの剥片S155・156・158の背面の観察から、aの打撃から得られるS158の前に、4cm以上の長さをもつ縦長剥片4枚が剥離されている。この後aによるS158が得られ、次にbによるS156、その次がcによるS157(おそらくaの脇に打点があったとおもわれる)となる。その後S157から、dによって得られるS155の剥片が得られる間に、打点を上にもつ縦長剥片の得られることが想定できる。すなわち、この資料からは、打点方向を同じくして長さ4cm以上の縦長剥片が9枚得られたことが分かる。

Cは、調整打面からaの打撃によって縦長剥片S159を得てから、bによる縦長剥片を得ている。その後は、同じ打撃方向によって2枚の剥片の得られたことが想定できる。これは1つの剥片の端部がヒンジフラクチャーとなることが分かり、その部分の剥離面が同時にS161の背面にあたること、さらにS164の背面に一枚の剥離面を残していることによる。これらの後、cによってS160の剥片を得ている。この資料では、5枚の剥片を得ていることが分かりcの段階で打面を180°転移している。

Dは、調整打面からaの打撃によって末端がヒンジフラクチャーとなる縦長剥片S163を得る。後に、S164の左側面上からの打撃によって、主要剥離面が、S164とS162の背面に接合していた小さい剥片を得たことが想定できる。次にbによるS164、cによるS162とともに縦長の剥片を得ている。この資料では打点位置が左→右→左へと移動している。

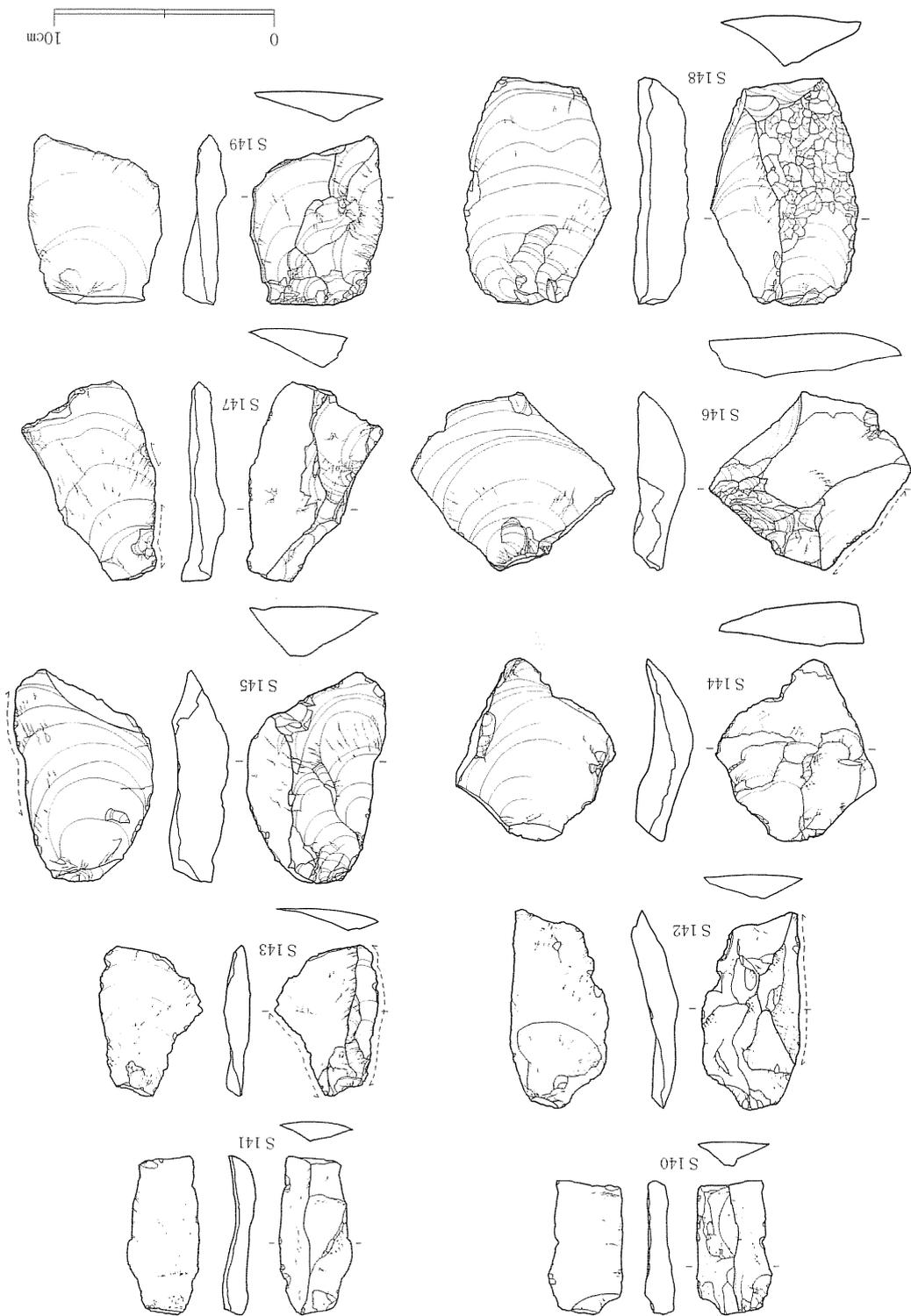
Eは、aの打撃によってS166の剥片を得る前に、S166・S165の背面と接合していた主要剥離面をもつ縦長剥片(打撃方向はS166の右上からS165の左下)を得、次にS165の背面と接合していた主要剥離面をもつ縦長剥片(打撃方向はS166上から下)を得ている。その後にaによってS165、bによってS166の縦長剥片が得られる。よってこの資料では、打点位置が右→左(S165)→右(S166)と移動している。

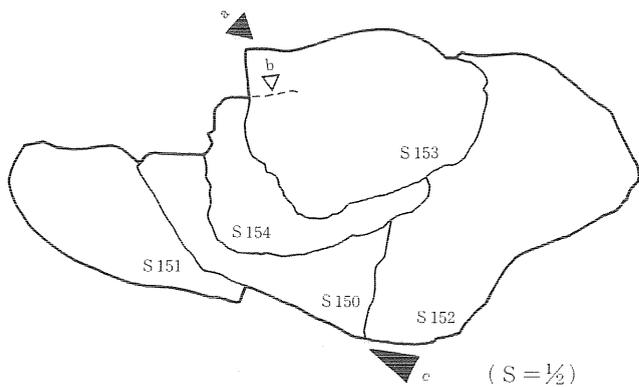
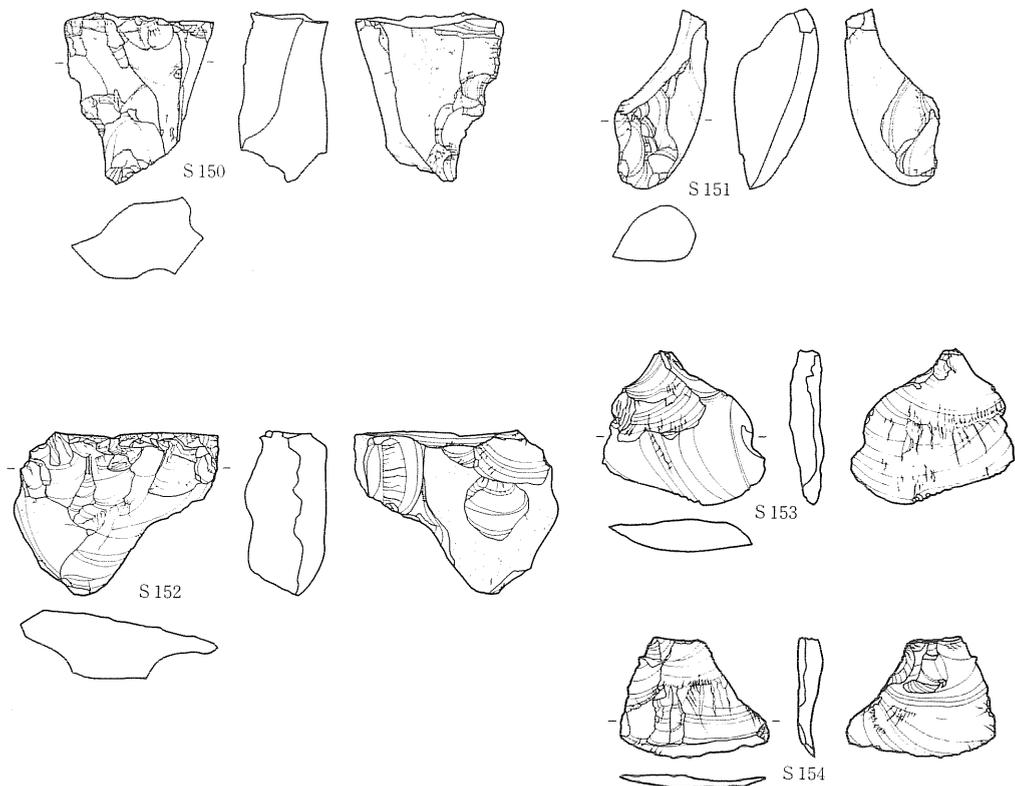
Fは、aの打撃によってS167を得る前にまずaとbの間から打撃を加え、これによってS167



第47図 遺構外出土遺物(26)

第48圖 遺構外出土遺物(27)



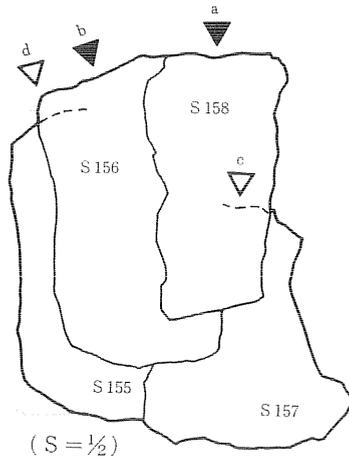
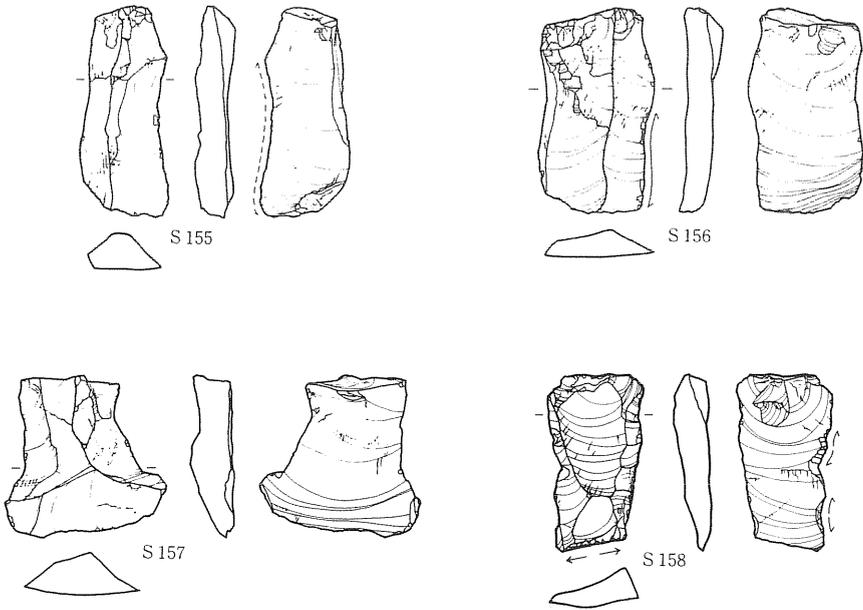


S 153→ S 154→ S 152→ S 151→ S 150

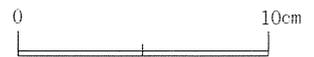
接合資料A(背面)



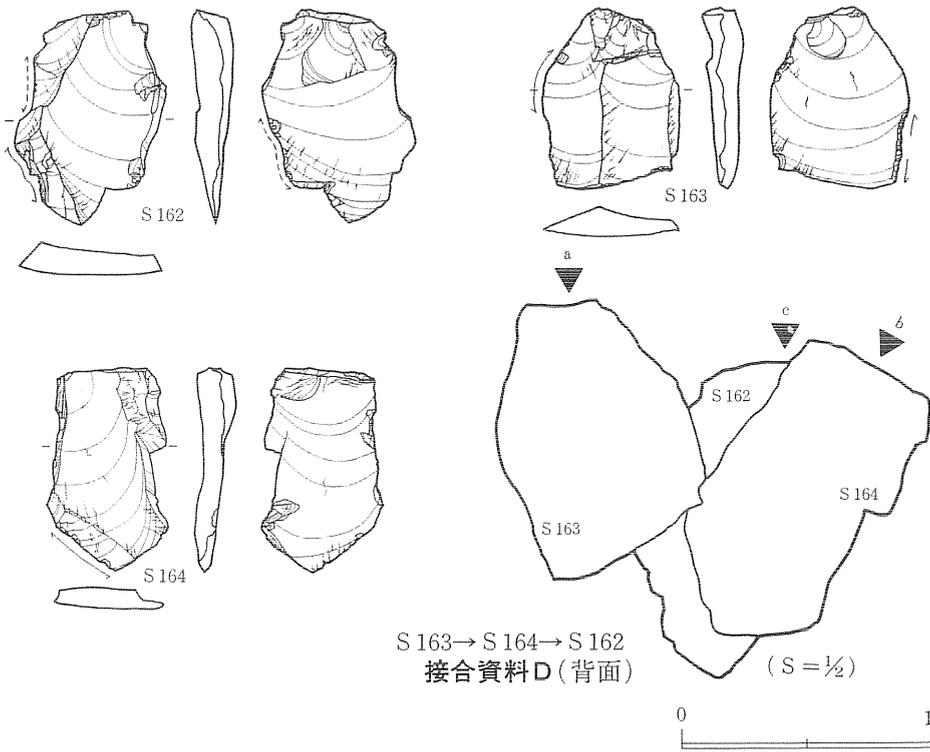
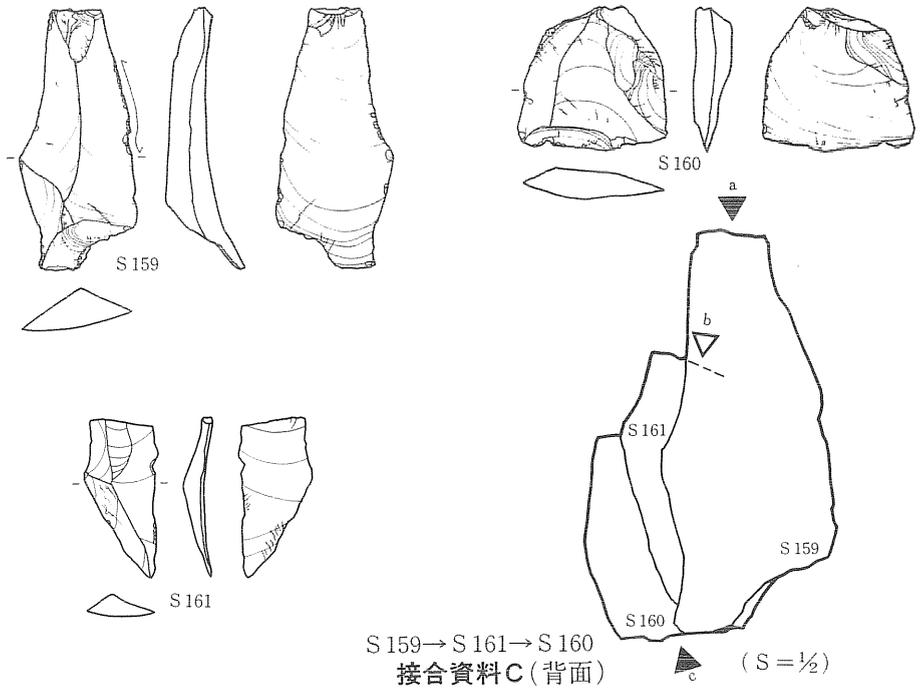
第49図 遺構外出土遺物(28)



S 158 → S 156 → S 157 → S 155
 接合資料B (背面)

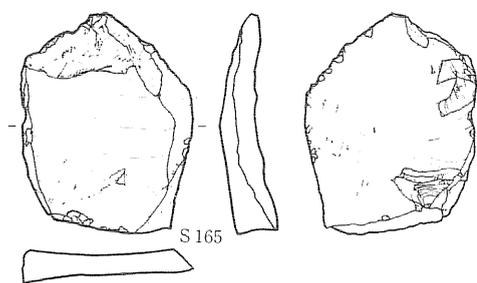


第50図 遺構外出土遺物(29)

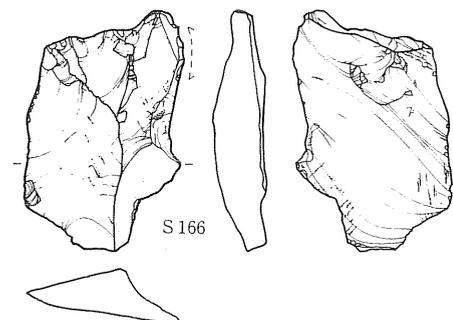


第51図 遺構外出土遺物(30)

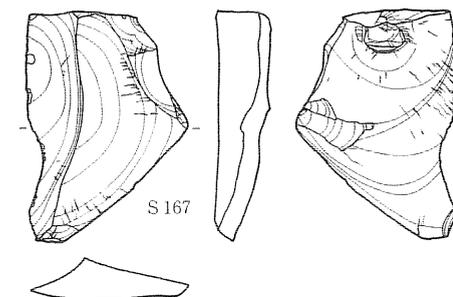
半仙遺跡



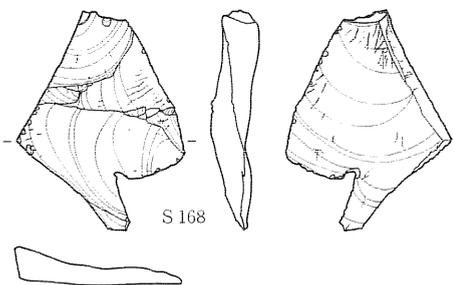
S 165



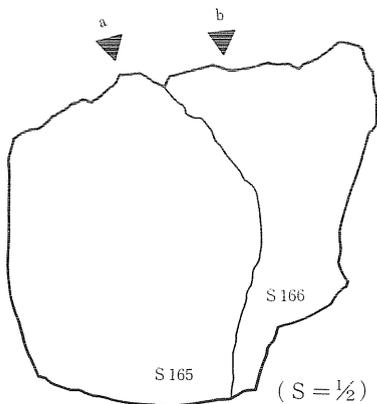
S 166



S 167

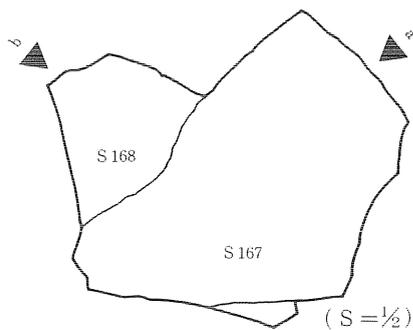


S 168



S 165 → S 166

接合資料E (背面)



S 167 → S 168

接合資料F (背面)



第52図 遺構外出土遺物(31)

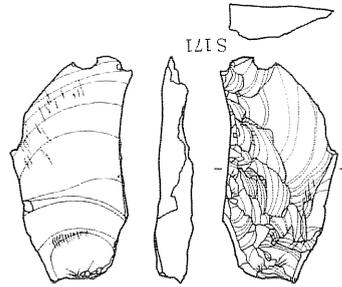
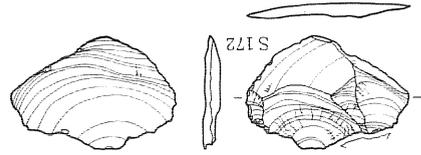
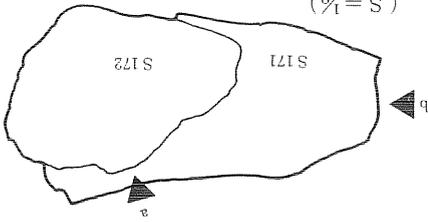
第53図 遺構外出土遺物(32)



接合資料H (背面)

S 172→S 171

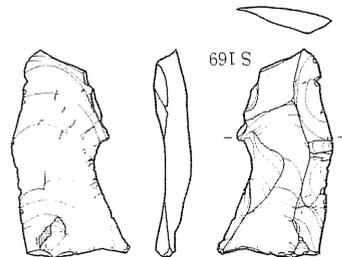
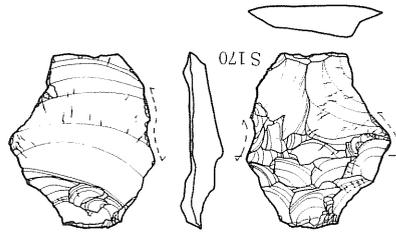
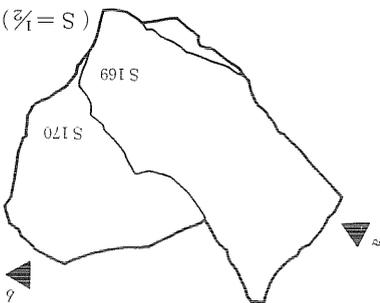
(S = 1/2)



接合資料G (背面)

S 169→S 170

(S = 1/2)



第6表 石器観察表(1)

(単位cm)

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	出土地点	層位	長さ(推定)	幅(推定)	厚さ	石質	備考
S 1	30	33-2	石鏃	L P 48	II	3.2	1.6	0.45	頁岩	
S 2	"	"	"	M E 42	V	3.55	1.6	0.5	"	
S 3	"	"	"	表採	—	(4.45)	1.4	0.8	"	
S 4	"	"	"	M N 56	V	2.5	1.3	0.4	"	
S 5	"	"	石槍	M C 46	"	2.4	1.9	0.55	"	
S 6	"	"	"	S I 20	I	9.0	2.5	1.5	"	
S 7	"	34-1	石匙	L N 50	II	6.6	4.2	1.1	"	
S 8	"	"	"	L S 52	"	5.7	3.9	0.85	"	
S 9	"	"	"	L P 49	I	5.2	3.1	0.9	"	
S 10	31	"	"	L O 41	II	5.5	1.7	0.85	"	
S 11	"	"	"	L Q 46	I	5.2	1.85	0.7	"	
S 12	"	"	"	M D 48	"	3.1	2.2	0.55	"	
S 13	"	"	"	L O 52	II	5.72	2.5	0.6	"	
S 14	"	"	"	L M 28	"	4.65	2.7	1.2	"	
S 15	"	34-2	石錐	M F 50	I	6.10	2.6	0.72	"	
S 16	"	"	石筥	M H 52	"	7.50	3.75	0.9	"	
S 17	"	"	"	L P 56	II	6.4	3.8	1.50	"	
S 18	32	"	"	M D 57	"	5.5	2.6	1.3	"	
S 19	"	"	"	M E 44	"	6.4	3.2	1.2	"	
S 20	"	"	"	L R 46	"	5.6	4.2	1.2	"	
S 21	"	35-1	"	L S 50	"	5.7	2.9	1.4	"	
S 22	"	"	"	L T 50	"	10.5	4.05	2.0	瑪瑙	

の背面と接している主要剥離面をもつ剥片(おそらく横長)を得、次にbのあたりからの同じ方向から、S 167とS 168の主要剥離面に接した主要剥離面をもつ剥片(おそらく横長)を得ていることが想定できる。この後、aによってS 167を得る。さらに、bからの小さな横長剥片を取り、次にbによってS 168を得ている。よって大小6枚の剥片が得られることになる。打点位置は左→右(S 167)→左(S 168)となり、打面が90°転移していることがわかる。

Gは、調整打面から、aの打撃によってS 169を得、次に、bによってS 170を得ている。打面が90°転移しているのが分かる。

Hはフラットな剥離面からaの打撃方向に3枚の剥片(おそらく横長)を取る。その後aによりS 172が得られ、次にbによる剥片が得られる。この資料は、aによって横長の薄い剥片を取り、打面調整のためにbからS 171を剥離した可能性がある。

2 弥生時代

(1) 検出遺構と出土遺物

① 土坑

S K 13(第15・21図、図版17・23)

調査区の南東端、L O 40グリッドに位置している。平面形は上面が長軸1.1×1mの不整楕円形、底面も70×40cmの不整楕円形を呈し、深さは約30cmである。長軸はN-70°-Wの方向を指す。底面は湾曲しており、立ち上がりは全体的にすり鉢状となる。遺物は覆土上面から出土した。出土土器77~78は同一個体で、波状の口縁部内外に沈線をもつ。色調は赤色を示す。

第7表 石器観察表(2)

(単位cm)

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	出土地点	層位	長さ(推定)	幅(推定)	厚さ	石質	備考
S 23	32	35-1	石 筥	—	—	7.2	4.1	1.3	頁 岩	
S 24	"	"	"	L Q43	Ⅳ	(2.5)	2.7	0.9	"	
S 25	33	"	"	L P48	Ⅱ	(5.3)	4.0	2.0	"	
S 26	"	"	"	L S44	Ⅴ	(3.0)	2.9	1.3		
S 27	"	"	"	—	—	3.4	2.8	1.5	真 岩	
S 28	"	35-2	"	—	—	3.7	3.8	0.8	"	
S 29	"	"	スクレイパー	L O49	—	7.3	3.1	1.0	"	
S 30	"	"	"	L S44	Ⅲ	6.0	3.3	0.7	"	
S 31	"	"	"	ME56	Ⅱ	4.8	5.8	1.3	"	
S 32	34	"	"	ME48	Ⅴ	6.9	3.8	1.5	泥 岩	
S 33	"	"	"	S R44	—	3.7	3.4	0.9	真 岩	
S 34	"	36-1	"	L Q44	Ⅳ	3.7	4.5	1.0	"	
S 35	"	"	"	L G44	"	4.7	2.2	0.6	"	
S 36	"	"	"	L Q43	"	3.3	5.1	1.0	"	
S 37	"	"	"	M J56	"	5.4	2.6	1.1	"	
S 38	"	"	"	L N50	Ⅱ	6.5	5.0	1.4	"	
S 39	"	"	"	S K43	—	4.0	2.7	0.8	"	
S 40	35	"	"	M L55	Ⅴ	4.6	4.3	1.5		
S 41	"	"	"	L P44	Ⅱ	2.9	3.0	0.9	真 岩	
S 42	"	"	"	L T53	"	4.5	3.2	1.20	"	
S 43	"	36-2	石 刀	L T51	"	10.1	3.8	0.9		
S 44	"	"	"	"	"	28.6	3.8	2.0		
S 45	36	37-1	磨製石斧	MB52	"	15.2	5.6	3.2	玄武岩	
S 46	"	"	打製石斧	—	—	13.2	8.6	1.4	安山岩	
S 47	"	37-2	半円状扁平打製石器	L P52	Ⅱ	7.0	14.1	2.0		
S 48	"	"	"	L S51	"	7.2	15.7	3.0		
S 49	"	"	"	L T52	"	7.5	11.9	1.7		
S 50	"	38-1	"	"	"	7.0	14.8	2.8		
S 51	"	"	"	L L47	"	6.6	15.3	1.5		
S 52	"	38-2	"	L T51	"	9.3	20.2	1.5		
S 53	"	38-1	"	L O54	"	7.1	9.9	2.0	凝灰質 シルト岩	
S 54	37	38-2	"	L O48	"	8.4	(13.8)	2.8		
S 55	"	"	"	L S52	"	8.7	(12.8)	2.6		
S 56	"	39-1	石 錘	M G56	"	13.4	15.1	2.1		
S 57	"	"	"	ME56	"	10.6	11.6	3.0	安山岩	
S 58	"	39-2	"	L R52	"	16.2	13.4	4.4	"	凹石・磨石と兼用
S 59	38	40-1	"	—	—	13.8	7.4	2.1		
S 60	"	"	"	ME65	Ⅱ	5.6	(9.5)	3.2	安山岩	凹石と兼用
S 61	"	"	"	—	—	15.9	5.9	2.2		
S 62	"	40-2	"	L O48	—	19.8	8.1	3.3		
S 63	"	"	凹 石	MA52	Ⅱ	9.3	6.7	4.5	安山岩	
S 64	"	"	"	L T51	"	(10.6)	6.5	3.3		
S 65	"	41-1	"	MB53	"	11.2	8.2	4.5		磨石と兼用
S 66	"	"	"	MD56	"	10.6	8.6	3.5	安山岩	"
S 67	39	"	"	L T51	"	(5.9)	(10.7)	4.3	"	"
S 68	"	41-2	"	L R51	"	(6.0)	(7.1)	4.4	"	"
S 69	"	"	"	MA41	Ⅲ	9.5	7.9	5.0	"	"
S 70	"	"	"	MM56	Ⅴ	7.9	7.1	4.8	"	"
S 71	"	"	"	MD44	Ⅱ	(5.8)	6.4	2.2	"	"
S 72	"	"	"	MD52	Ⅰ	9.8	7.3	4.1	"	"

第8表 石器観察表(3)

(単位cm)

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	出土地点	層位	長さ(推定)	幅(推定)	厚さ	石質	備考
S73	39	42-1	凹石	L D53	II	(8.4)	(11.1)	4.1	安山岩	磨石と兼用
S74	"	"	"	M F56	"	8.3	7.2	4.2	"	"
S75	"	"	"	L N52	"	(10.9)	(9.2)	4.5	"	"
S76	40	42-2	"	—	—	(8.3)	6.7	4.0	"	"
S77	"	"	"	L N48	I	(9.7)	(5.2)	3.2	火崗岩	磨石と兼用
S78	"	"	"	M F56	"	10.7	7.1	4.6	安山岩	"
S79	"	"	"	L N49	II	7.0	8.7	4.7	火崗岩	"
S80	"	43-1	"	—	—	(8.3)	(8.6)	(4.7)	安山岩	"
S81	"	"	"	L O52	II	12.6	7.2	5.6	"	"
S82	"	43-2	"	M D52	I	10.1	8.9	4.9	"	"
S83	"	"	"	—	—	12.9	10.0	6.4	安山岩	磨石と兼用
S84	41	44-1	"	—	—	8.4	5.9	4.1	火崗岩	"
S85	"	"	"	M B53	II	9.2	7.2	4.7	"	磨石と兼用
S86	"	"	"	M C57	"	9.2	7.6	4.8	"	"
S87	"	"	"	M C56	"	9.0	7.3	5.1	"	"
S88	"	44-2	"	M L56	V	9.8	5.4	5.2	火崗岩	"
S89	"	"	"	L T47	I	9.9	8.5	4.6	安山岩	"
S90	"	"	"	L O48	II	10.8	6.8	4.8	玄武岩	"
S91	"	"	"	L P48	"	9.2	10.2	6.4	安山岩	磨石と兼用
S92	42	45-1	"	M I57	V	9.8	6.5	3.1	"	"
S93	"	"	"	M D52	I	8.9	6.6	3.0	火崗岩	"
S94	"	"	"	M C54	II	(6.5)	(6.9)	3.3	安山岩	"
S95	"	"	"	L R52	"	11.6	(6.7)	4.0	火崗岩	"
S96	"	"	"	M E44	III	(7.8)	4.1	3.5	"	磨石と兼用
S97	"	45-2	"	L S52	II	(6.7)	(9.1)	3.6	安山岩	"
S98	"	"	"	M F56	"	(5.2)	(5.6)	3.6	火崗岩	"
S99	"	"	"	M D55	"	6.7	6.5	3.3	安山岩	磨石と兼用
S100	"	"	"	—	—	12.6	9.1	2.2	"	"
S101	"	"	"	M C56	II	(8.0)	(6.1)	2.8	安山岩	磨石と兼用
S102	43	46-1	"	M F56	"	11.8	4.5	3.6	凝灰質 シレット岩	"
S103	"	"	"	M K57	I	12.6	5.0	2.8	"	"
S104	"	"	"	M F50	"	11.6	4.3	2.9	安山岩	磨石と兼用
S105	"	"	"	M N59	III	12.9	5.1	2.3	"	"
S106	"	46-2	"	—	—	13.5	6.5	3.8	"	"
S107	"	"	"	L Q53	II	13.2	5.8	3.6	"	"
S108	"	"	"	L S53	"	11.4	5.2	3.0	凝灰質 玄武岩	"
S109	"	47-1	"	M K57	I	(11.2)	(5.7)	2.4	"	"
S110	"	"	"	M I56	IV	11.4	5.1	3.4	"	"
S111	"	"	"	L K45	II	10.5	5.6	4.1	火崗岩	"
S112	44	47-2	磨石	M E56	"	10.5	8.9	6.5	安山岩	"
S113	"	"	"	L N45	"	9.2	7.2	5.0	"	"
S114	"	48-1	"	—	—	13.2	6.7	5.4	玄武岩	"
S115	"	"	"	M I56	IV	5.7	5.2	4.4	火崗岩	"
S116	"	"	"	M D51	I	6.5	5.8	5.3	"	"
S117	"	"	"	M D52	"	(9.0)	(3.9)	2.5	"	"
S118	"	48-2	"	M I56	IV	6.2	4.2	3.6	安山岩	"
S119	"	"	"	M H52	V	10.5	5.5	3.3	玄武岩	"
S120	"	"	"	M J56	IV	8.0	6.7	3.2	安山岩	"
S121	"	"	"	—	—	8.8	5.9	2.6	"	"
S122	45	49-1	"	L Q44	表土	11.3	10.5	3.3	火崗岩	"

第9図 石器観察表(4)

(単位cm)

遺物番号	挿図番号	図版番号	器種	出土地点	層位	長さ(推定)	幅(推定)	厚さ	石質	備考
S123	45	49-1	磨石	—	—	11.9	10.6	5.9	安山岩	
S124	"	49-2	"	LQ53	II	10.7	8.5	2.6	玄武岩	
S125	"	"	石皿	MK54	—	(12.7)	(10.6)	3.2	安山岩	
S126	"	50-1	"	LL41	II	14.6	10.1	4.2		
S127	"	"	"	—	—					
S128	46	50-2	打製石器	LP49	II	6.7	15.1	4.3	玄武岩	
S129	"	"	刻線磔	LN43	"	(16.8)	8.7	5.0	安山岩	
S130	"	51-1	砥石	—	—	14.5	8.6	4.2	砂岩	
S131	"	"	打製石器	LP52	II	16.1	6.6	"	玄武岩	
S132	47	51-2	剥片石器	LQ44	IV	6.8	2.8	1.6	頁岩	二次加工あり
S133	"	"	"	MK56	"	7.8	4.2	"	"	
S134	"	"	"	"	"	8.2	4.5	1.3	"	
S135	"	"	"	LP49	II	10.3	3.3	1.1	"	二次加工あり
S136	"	"	"	MK54	I	9.3	5.4	0.9	"	
S137	"	"	"	MK56	IV	8.3	6.9	1.5	"	二次加工あり
S138	"	"	"	MK57	I	8.9	7.0	1.6	"	
S139	"	52-1	"	MK56	IV	9.6	7.7	1.8	"	
S140	48	"	"	"	"	6.2	3.4	1.2	"	
S141	"	"	"	"	"	7.3	3.4	0.9	"	
S142	"	"	"	"	"	9.1	4.5	1.1	"	
S143	"	"	"	"	"	7.0	4.7	0.8	"	
S144	"	"	"	MK57	I	8.4	6.5	2.0	"	
S145	"	52-2	"	"	"	9.7	5.8	2.3	"	
S146	"	"	"	MJ57	"	8.2	8.7	1.9	"	
S147	"	"	"	"	"	9.2	5.0	1.6	"	
S148	"	"	"	"	"	10.0	6.7	2.3	"	
S149	"	"	"	MK56	"	7.8	5.9	1.4	"	
S150	49	53	"	—	—	10.5	5.9	3.0	"	接合資料A
S151	"	"	"	—	—				"	"
S152	"	"	"	—	—	6.6	7.9	2.6	"	"
S153	"	"	"	—	—	6.2	6.5	1.3	"	"
S154	"	"	"	—	—	4.9	5.9	0.5	"	"
S155	50	54	"	MK56	IV	8.5	3.3	1.5	"	接合資料B
S156	"	"	"	"	"	8.2	4.4	1.1	"	"
S157	"	"	"	MK57	I	6.6	6.1	1.7	"	"
S158	"	"	"	"	"	7.1	3.5	1.3	"	接合資料B 二次加工あり
S159	51	55-1	"	MK56	IV	10.5	4.4	1.6	"	接合資料C
S160	"	"	"	"	"	5.8	6.1	1.1	"	"
S161	"	"	"	"	"	6.4	2.8	0.9	"	"
S162	"	55-2	"	MJ57	I	8.6	5.7	1.2	"	接合資料D
S163	"	"	"	MK57	"	7.3	5.5	1.3	"	接合資料D 二次加工あり
S164	"	"	"	"	"	8.2	4.4	0.9	"	"
S165	52	56-2	"	MK58	IV	8.8	6.8	1.4	"	接合資料E
S166	"	"	"	MJ57	I	9.7	6.1	1.9	"	"
S167	"	57-1	"	MJ56	IV	9.3	6.3	1.7	"	接合資料F
S168	"	"	"	MK56	"	8.8	6.7	1.2	"	"
S169	53	57-2	"	"	"	8.4	4.1	0.9	"	接合資料G
S170	"	"	"	"	"	7.1	5.5	1.3	"	"
S171	"	52-1	"	"	"	9.1	4.2	1.4	"	接合資料H
S172	"	"	"	MK56	IV	4.5	5.1	0.5	"	"

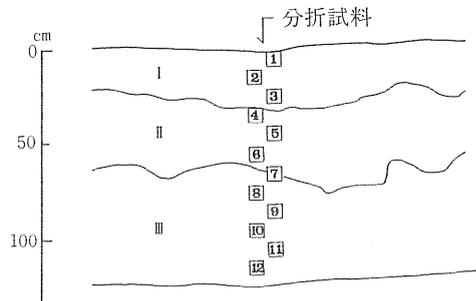
第3章 自然科学的分析

第1節 鉍物分析

1 分析の目的と試料

半仙遺跡は、雄物川中流部、右岸に位置している。本分析では、遺跡の標式断面にあらわれた堆積物について示標テフラを発見し、その降灰層準から堆積年代を知ることを目的とする。分析試料はⅠ～Ⅲ層にかけて採取された12点である。当初これらの試料について重鉍物分析と屈折率測定を行う予定であったが、分析の過程で火山ガラスの濃集部が認められず、屈折率測定を実施しても有効なデータが得られないと判断された。むしろ各堆積物の軽鉍物組成を明らかにしておく方が、各堆積物の特徴把握や他のデータとの対比に有効であろうと考え、軽鉍物分析を実施することにした。分析試料数は重鉍物・軽鉍物両分析とも12点ずつであった。

土層の断面及び分析試料の採取層位を(第54図)に示す。



第54図 半仙遺跡の土層断面図

2 分析の方法

以下の手順で分析を行った。

- (1) 比較的砂分が少ないNo. 1～3については100 g, No. 4、5については150、砂が非常に少ないNo. 6～12については250 gずつ秤量を行った。
- (2) 超音波洗浄と1/16mm分析篩によって、粘土分を除去。
- (3) 80°Cで恒温乾燥。
- (4) 1/4～1/8mmの粒子を分析篩によって篩別。
- (5) テトラプロモエタン(比重2.96)によって重液分離。
- (6) 重鉍物・軽鉍物各々250粒以上を偏光顕微鏡下で同定し、重鉍物組成、軽鉍物組成を求めた。

3 分析結果

重鉱物組成を(第10表・第55図)に、軽鉱物組成を(第11表・第56図)にそれぞれ示した。

【重鉱物組成】

全体として砂分に乏しく、また重鉱物の割合も小さい。とくにNo.7以下の試料については、250gの試料中、重鉱物は数10個以下で、重鉱物組成を示すに至らなかった。

斜方輝石は、No.3で最大で、全体の36.9%を占める。角閃石は、No.5で最大で54.4%に達する。磁鉄鉱は、いずれの試料も10数%~20数%含まれている。単斜輝石は数%ずつ含まれている。

第10表 半仙遺跡テフラ試料の重鉱物組成

	OL	OPX	CPX	HO	BI	OPQ	OTHERS	TOTAL
1		41	13	101		48	19	222
2		49	11	74		57	14	205
3		83	9	62	1	62	8	225
4		76	16	79	2	34	6	213
5		43	1	112	1	39	10	206
6	3	33	10	38	1	26	11	122

OL:カンラン石 OPX:斜方輝石 CPX:単斜輝石 HO:角閃石
BI:黒雲母 OPQ:磁鉄鉱

【軽鉱物組成】

広域テフラの指標となる火山ガラスは、大部分の試料にごく少量ずつ含まれているが、顕著な濃集部は認められない。石英は、No.10で最大(48.9)となるが、全体を通して20数%~30数%含まれている。また、斜長石も数%含まれている。

第11表 半仙遺跡テフラ試料の軽鉱物組成

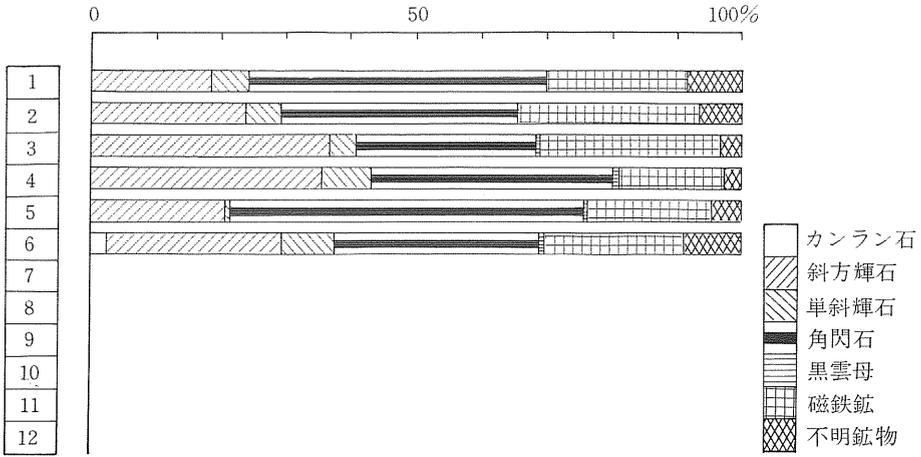
	BW	INT	PM	QZ	FELD	OTHERS	TOTAL
1	5	5	4	57	8	162	241
2	2	6	4	45	16	139	212
3	2	4	2	95	4	145	252
4		6	6	73	9	135	229
5				76	1	158	235
6		2	2	60	2	147	213
7	2	2	3	70	2	151	229
8		1	1	75	7	134	218
9	6	4	2	68	4	143	227
10	3	3	5	110	8	96	225
11		1	1	74	4	144	224
12	1	1		83	2	157	244

4 考察

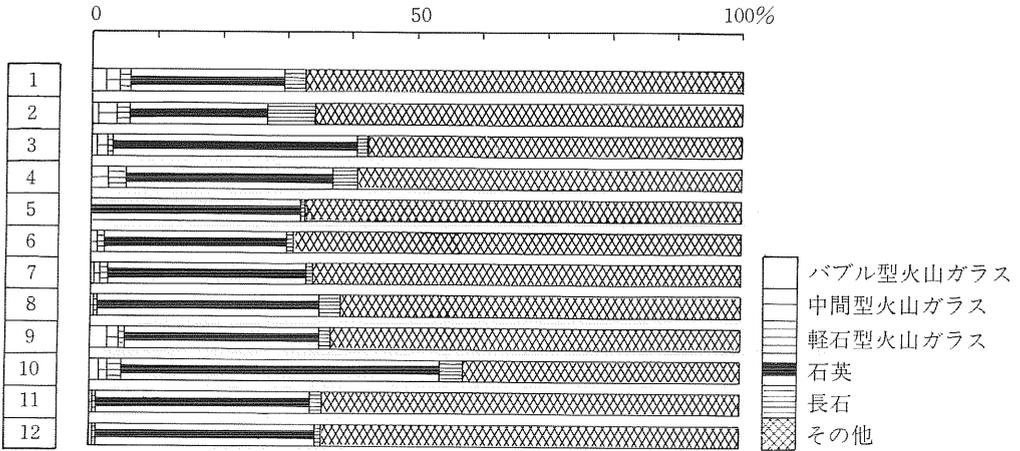
重鉱物組成、軽鉱物組成とも、指標テフラの存在を示すような傾向は認められなかった。したがって、上野台遺跡の基本層序との対比も困難であった。

BW:バブル型火山ガラス INT:中間型火山ガラス
PM:軽石型火山ガラス QZ:石英 FELD:長石

基本層序を確立するためには鉱物組成や屈折率測定を積み重ねることも重要であるが、詳細な野外観察も必要である。また、当地域の段丘編年は、東北地方でも遅れている地域の一つである。今後、テフロクロノジストや地形研究者との共同調査が望まれる。



第55図 半仙遺跡における重鉱物組成



第56図 半仙遺跡における軽鉱物組成

第4章 まとめ

本文では、縄文時代から弥生時代における遺跡の調査成果とその特色を述べ、さらに県内では調査例の少ない縄文時代早期～前期の繊維を含む土器について分類し、遺跡における位置づけを行いたい。遺跡から検出された遺構は、堅穴住居跡3軒、焼土遺構2基、陥し穴状遺構3基、土坑35基、土器埋設遺構2基である。

堅穴住居跡はS I 20が縄文時代前期、S I 15・31が中期と考えられ、焼土遺構S N 26も堅穴住居跡の可能性がある。これらの堅穴住居跡の立地は、舌状地形の尾根筋に集中する共通性がある。また、同じく、尾根上に位置する遺構には墓と考えられるS R 24・29があり、縄文時代後期であることが分かっている。

次に、陥し穴と考えられる遺構は、本遺跡では2つの種類が認められた。^(註1)1つは、平面が溝状を呈し、横断面が漏斗状の所謂Tピットの形態(A類)。もう1つは、平面が円形もしくは方形で壁が筒状を呈し、さらに、底面に1個のピットを有する形態(B類)とである。

A類(S K T 34～36)は南西緩斜面に集中するが、長軸が斜面に沿うもの(S K T 36)と同じく等高線に沿うもの(S K T 34・35)とに分けられる。

B類は西側平坦部(S K 45)、尾根筋の平坦部(S K 27・28)、東側斜面(S K 07)と様々な立地をしているが、この立地の相違が土坑の形態を規定している可能性がある。すなわち、S K 45のように中央のピットが深いタイプ(B類1)、S K 27・28のように中央のピットが短いタイプ(B類2a)、S K 07のように中央に浅いピットをもち土坑外部に付属するピットをもつタイプ(B類2b)に分けられよう。A・B類の相違は、狩猟対象動物の大きさに起因すると考えられる。

次に、土坑についてはどうであろうか。土坑の形態には、小さく袋状を呈するタイプ、フラスコ状を呈するタイプ、すり鉢形を呈するタイプなどさまざまあり、ここで分類することは、土坑の内容を煩雑化するだけと思われるので避けた。ここでは貯蔵穴とみられるもの(S K 19)や墓と想定されるもの(S K 38)が存在することを指摘するにとどめたい。ただし、比較的大型の定型化した土坑は、すべて尾根筋より東側に集中しており、北西平坦部は利用されていない。これら陥し穴状遺構もふくむ土坑のあり方は、時代の相違による場合、同時代における機能の違いによる場合、また同じ機能をもちながらその効率の違いによる場合などによって、さまざまな有り方・分布の様相を示す。本遺跡はこれらの複合体としての内容となっている。また、確たる切り合い関係を示していないことも特色としてあげられる。

一方、石器に目を転じれば、剥片石器では狩猟を主たる目的とする石鏃・石槍をはじめ石斧・石筥・スクレイパー・石錐・石匙があり、礫石器は、漁具と考えられる石錘をはじめ、凹石・磨石・半円状扁平打製石器など実に多種の石器が出土している。特に礫石器が大量に出土しており、当遺跡の一特色と言えよう。そのなかでも、出土点数の多い凹石・磨石・半円状扁平打製石器などは、尾根筋に分布の中心がある。この分布は住居跡のそれと重なり、居住空間との結び付きが強く認められる。また、北西区域から集中した剥片資料は石器製作技法上注目される。

以上、検出された遺構や出土遺物から本遺跡が縄文時代早期から弥生時代前期までは断続的に生活の舞台として利用されていたことが判明した。その土地利用の在り方は、相矛盾する行動様式を反映している住居跡と陥し穴状遺構が同一空間に併存しているように、時期によって一様でなかったものと推定できる。縄文時代早期から断続的に様々な形で土地が利用されてきたことが半仙遺跡の一つの特徴と言えよう。

次に、半仙遺跡出土の繊維を含む土器について、若干の考察を行う。

遺構から出土した遺物は、遺構内外の小片を除いてすべて図示してあるが、これらの遺物から、繊維の混入が不明瞭なものは除外した。その説明は、報告書の図版に照らして述べていく(1~29・83~178・181~189)。

繊維を含む土器は、縄文のあり方によって二分することができる。すなわち、表・裏両面に縄文を施すグループ(I群)と表面だけ縄文を施すグループ(II群)である。そして、群別の下に縄文の種類や、無文帯の調整、繊維の多寡などによってさらに類別を行ってみた。

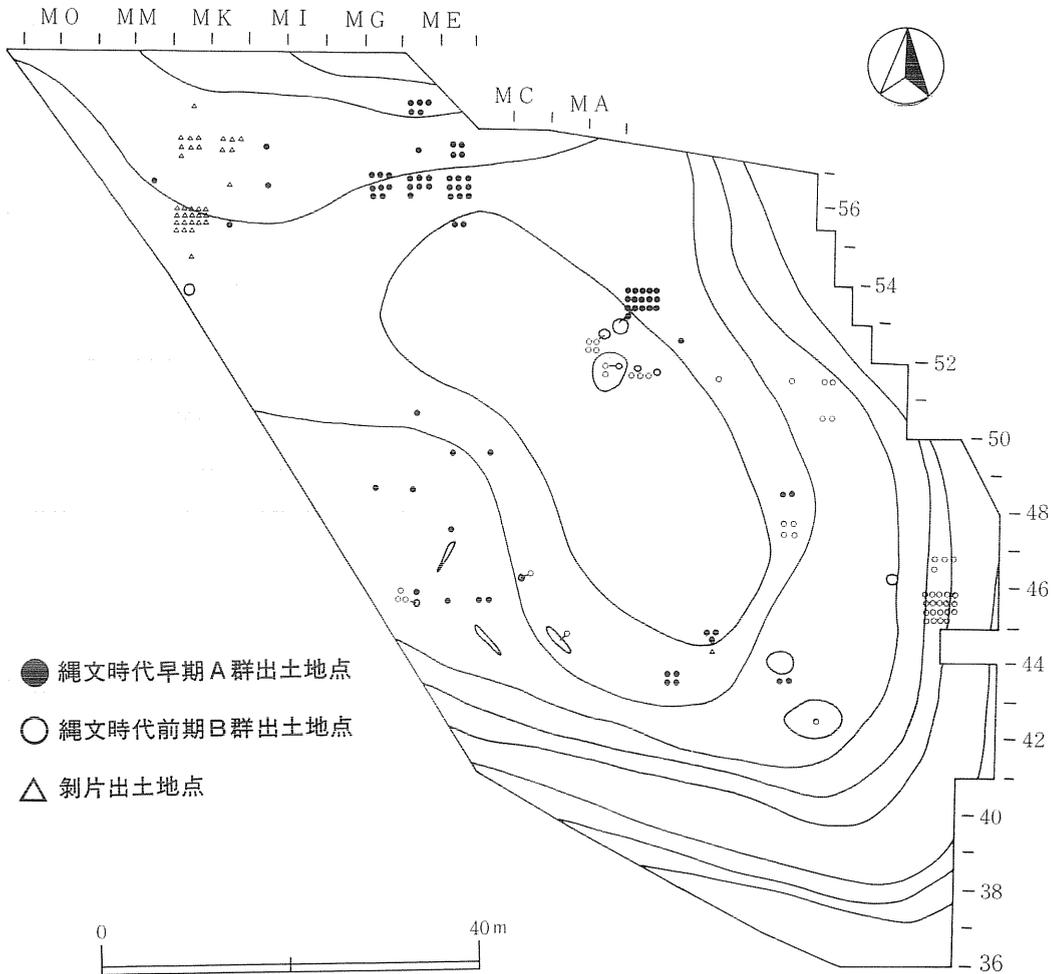
I群a類(83~87)は多量の繊維を含み、表・裏両面に縄文を施す。焼成の極めて良好な土器である。83・85の平坦な口唇部には縄文を施す。b類(88~92)は多量の繊維を含み、表・裏両面に縄文を施すが、胎土・焼成の違いからa類とは区別される。89の口唇部は丸みを有し、縄文が施されている。c類(93~95)は多量の繊維を含み、表・裏両面に極めて細かい縄文を施す薄手の土器である。口縁部が直線的に外反する94は、口唇部が丸みを有し、細かい縄文を施す。d類(96~98)は多量の繊維を含み、表・裏両面に極めて細かい縄文を施す。口縁部が外湾する96は、平坦気味の口唇部にやはり細かい縄文を施す。97・98の裏面は無文となるが、96と同一個体である。e類(99~103・105~109)は極めて多量の繊維を含み、表・裏両面に縄文を施す。105~109は裏面が無文となるが、99~103と同一個体もしくは類似する土器である。

II群a類(2~27・104・110~143)は多量の繊維を含み、表面に縄文を施す。裏面は指による撫でを施し、凹凸となる。底部は突出して表底面にも縄文を施す。13・14・18・19・104は

羽状縄文を有する。b類(144~149)は多量の繊維を含み、表面に縄文を施す。裏面は指おさえを施した後、工具を用いて横位の撫でを施す。c類(150~165)は少量の繊維を含み、表面には前々段反燃りの縄文を施す。裏面には丁寧な撫でを施し、平滑な面にしてある。152は外反し、口唇部には縄文を施す。161は裏面底部と部最下位に撫でによる平滑な面をつくっている。d類(166~178・181~186)は少量の繊維を含み、表面に縄文を施す。裏面は丁寧な撫でを施すが、166の口縁部は外湾し口唇部に刻目を施す。e類(187~189)は少量の繊維を含み、表面に燃糸の縄文を施す。裏面には丁寧な撫でを施す。

以上、I群は5類に、II群も5類に分類してみた。一応、表・裏両面の縄文を基準にすれば、上記のような分類となる。以下においては既知の土器群との比較によって、これらの土器群の時間的位置を検討したい。

I群a類からe類までは、表・裏両面に縄文を施しているが、II群a・b類の土器も、I群の土器と、繊維の含み方・胎土・調整などが非常に類似する。さらに、どちらにも、0段多条と考え



第57図 縄文時代早期・前期の繊維土器と剝片出土分布図

られる縄文を施しているものが多く、両者には強い類似性が認められる(A群)。一方Ⅱ群c~f類は繊維が少なく、内面を丁寧な撫でによって仕上げる特徴はA群とは明確に異なる(以下これらをB群とする)。

さて、これらのA群・B群の時間的位置付けを考えてみよう。A群の土器は、繊維を多量に含み、表・裏両面に縄文を施す。そして、0段多条の縄文が認められ、口唇部に縄文を施すなどの特色をもつ土器を含んでいる。さらに、114の底部は、平底の底部が張り出し、底面にも縄文を施す。これらの特色は、長七谷地貝塚Ⅱ群b類の土器と共通する要素である。^(註2) よってA群には、おおむね縄文時代早期末葉の年代が与えられよう。

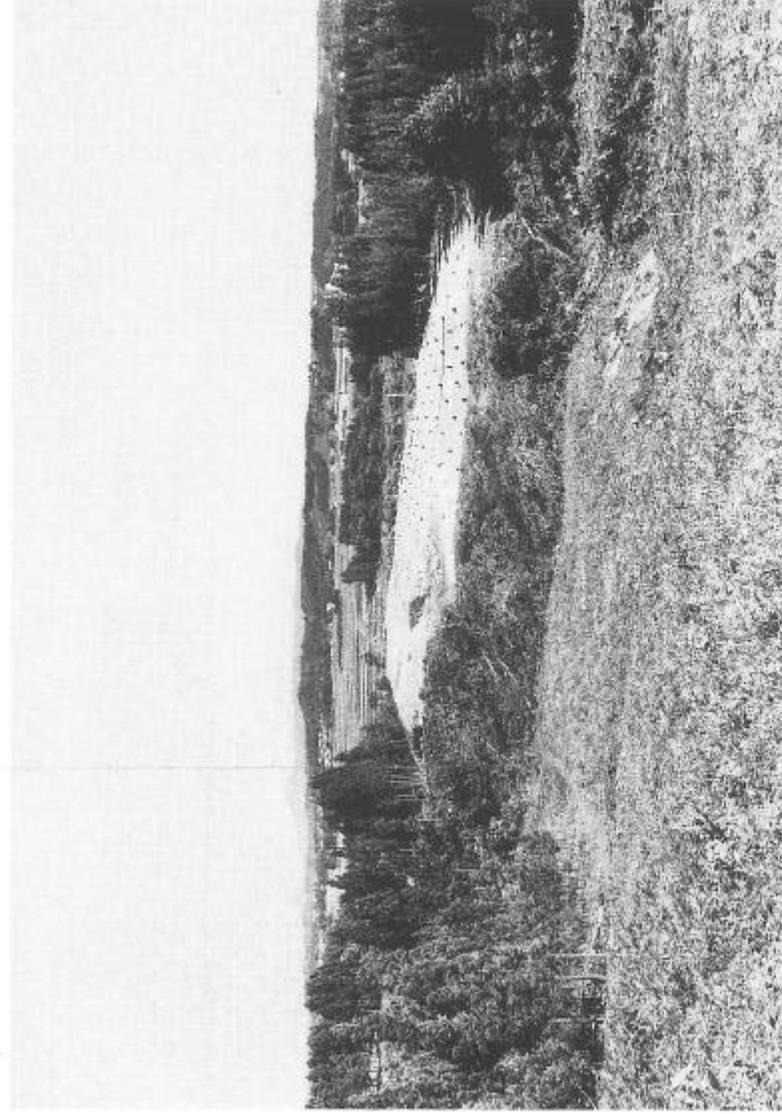
次に、B群の時期についてはどうであろうか。B群の土器は、少量の繊維を含む、口唇部には縄文や刻みを施す、表面の底部・胴部最下位や裏面に丁寧な撫でが施される、前々段反ったりや撚糸の縄文を含むなどの特色がある。これらB群の土器は縄文時代前期前葉とされる表館式土器の範中にも該当しない。ここで、肉眼では繊維を含まないと判断され(手にもった感じでは軽く、繊維を含むと思われる)、今回の分類の対象から除外した179・180の土器について検討してみると、これらは裏面に丁寧な撫でを施しB群に類似する要素をもつ。かつ、また表面には原体圧痕文の可能性のある縄文や沈線が施され、大木4式・5式の時期に比定できると考えられる。^(註3) これらの事実から、B群の土器を縄文時代前期中葉を前後する時期と、幅をもたせて考えておきたい。

最後に、上記ではA群からB群への変遷を示してみたが、これらが遺跡の中でどのような分布を示すのかを検討してみたい。Ⅰ群a~c類、Ⅱ群a類の土器は、MD~MG55~59グリッドの範囲に集中し、Ⅰ群d・e類、Ⅱ群b・e類は全域に点在するのみである。また、Ⅱ群c・d類はLK45・46グリッドに集中している。この状況は、A群は北西緩斜面周辺に、B群は尾根東側に生活領域の中心があったと考えられる。さらに発展して考えれば、B群の土器群はS I 20に関連した可能性がある。また、A群の土器群は、剥片やその接合資料が集中した地点と至近距離にあり、その関連性がうかがわれるのである。とすると、A群の土器と、先の剥片剥離の技法が対応する可能性がある。

註1 秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ』 秋田県文化財調査報告書第150集 1986(昭和60年)

註2 青森県教育委員会 『長七谷地貝塚遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第57集 1980(昭和54年)

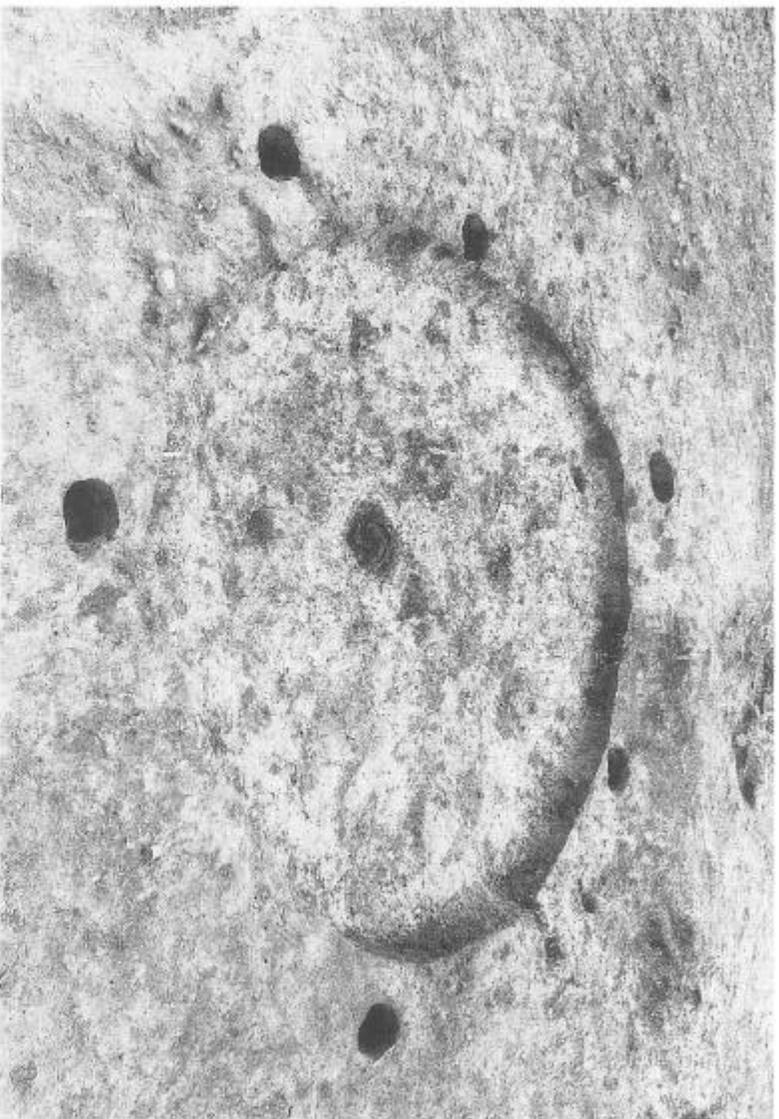
註3 秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ』 秋田県文化財調査報告書第166集 1988(昭和62年)



1 遺跡全景(北西▷南東)



2 S I 20 竪穴住居跡(東▷西)



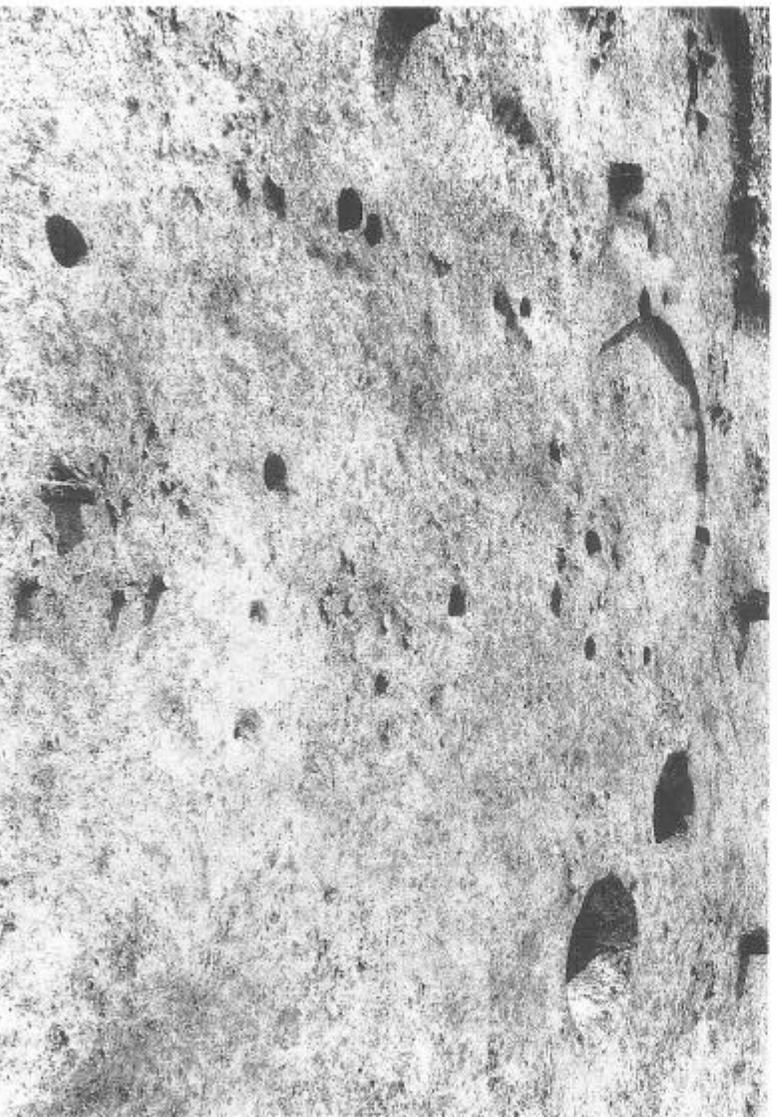
1 S I 15 竪穴住居跡(東▷西)



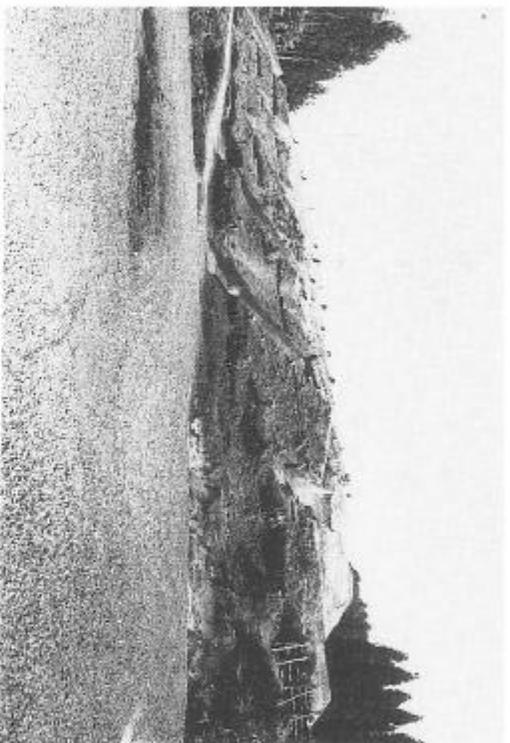
2 S I 15 竪穴住居跡土器埋設炉(南▷北)



1 S I 31 竪穴住居跡 (西◇東)



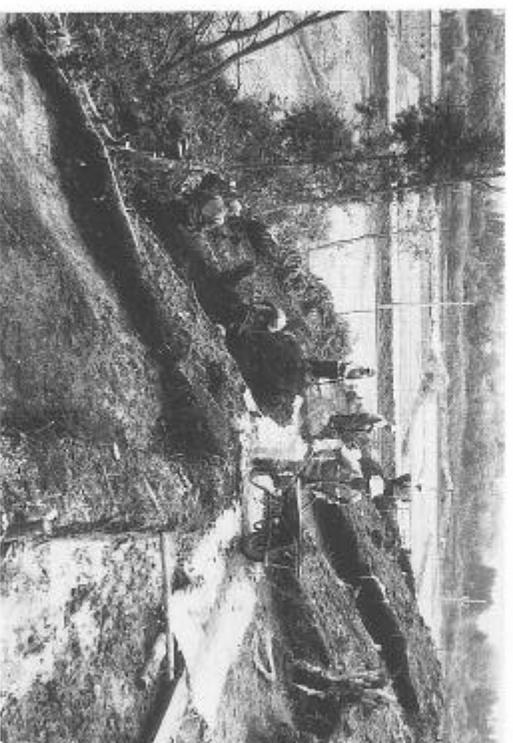
2 S I 31 竪穴住居跡・S N 26 A・B 焼土遺構 (東◇西)



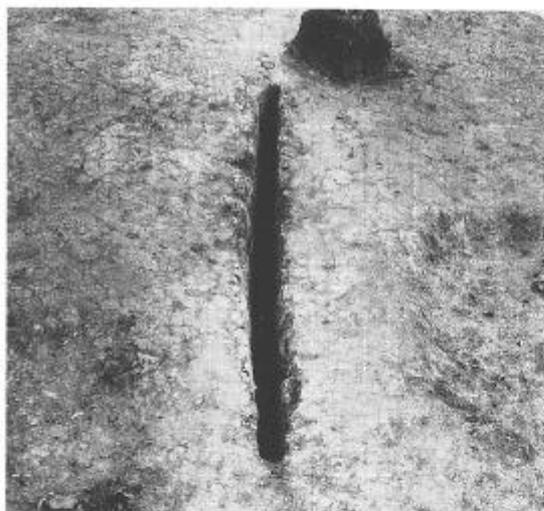
1 遺跡近景(南>北)



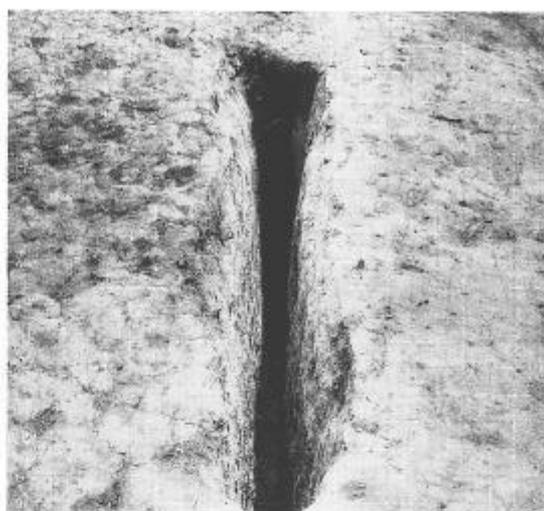
2 調査区全景(北西>南東)



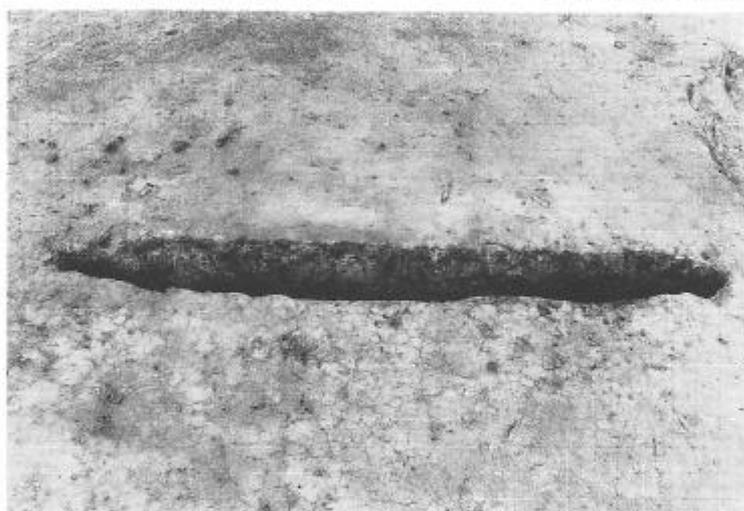
3 作業風景(北西>南東)



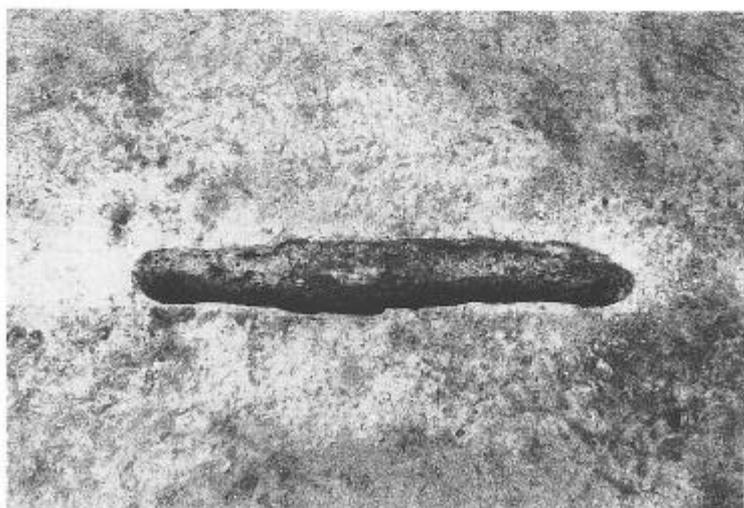
1 SKT34陥し穴状遺構(北西▷南東)



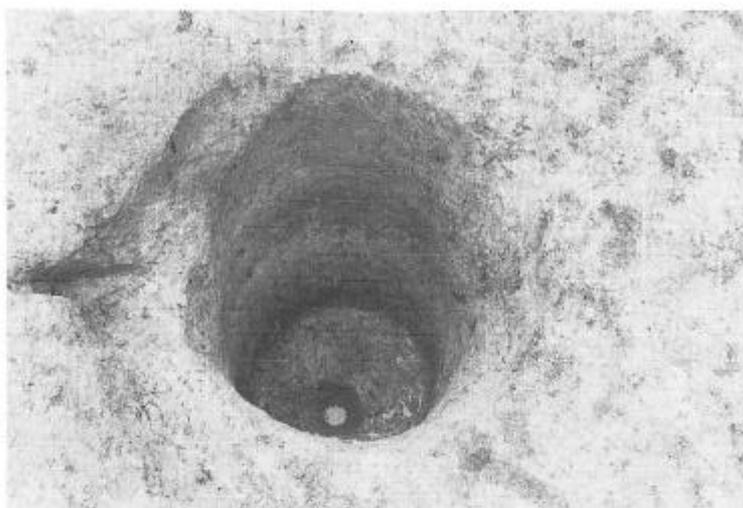
2 SKT34陥し穴状遺構断面(北西▷南東)



3 SKT35陥し穴状遺構(南西▷北東)



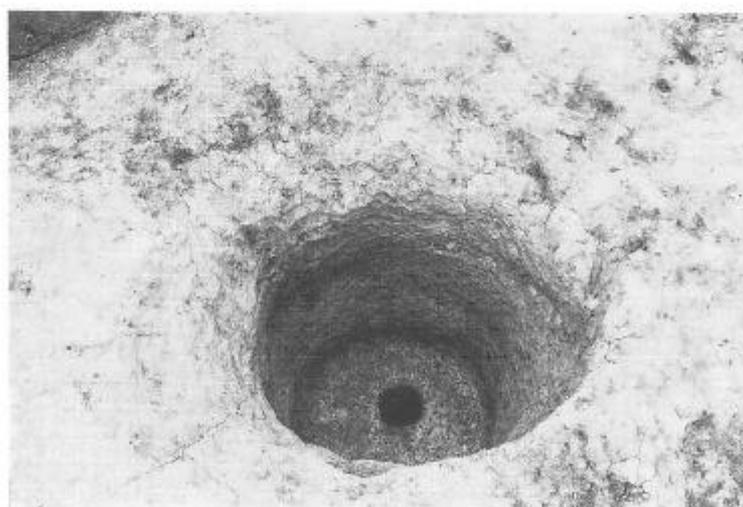
4 SKT36陥し穴状遺構(西▷東)



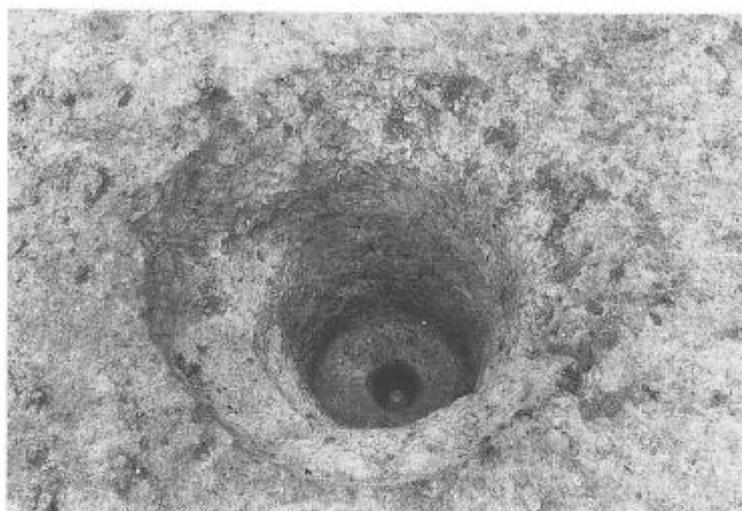
1 SK28土坑(東▷西)



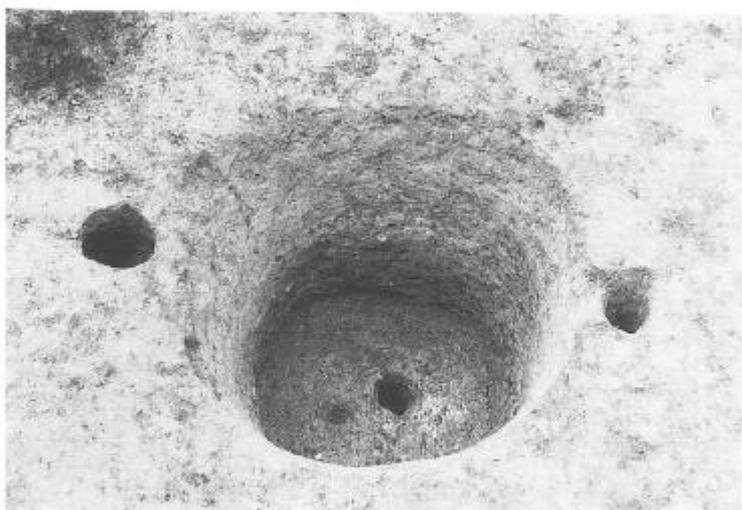
2 SK28土坑土層断面(東▷西)



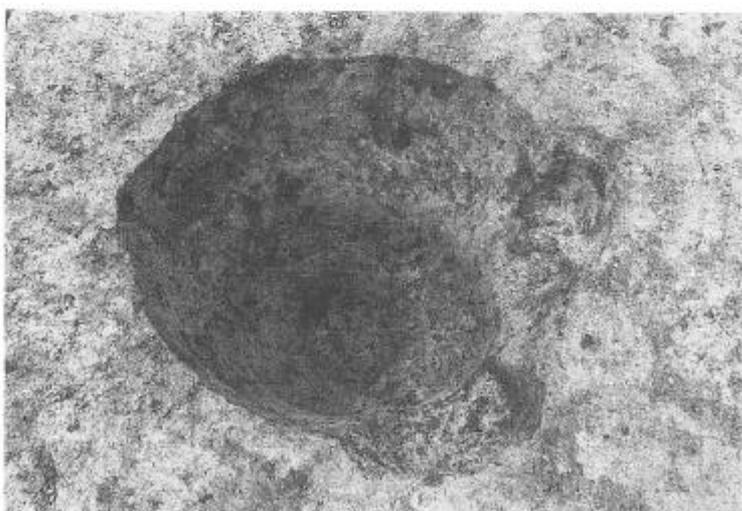
3 SK45土坑(東▷西)



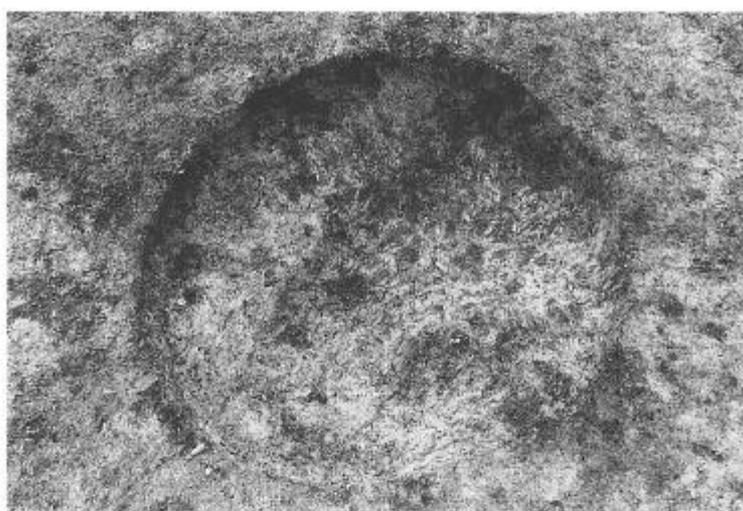
1 SK27土坑(東▷西)



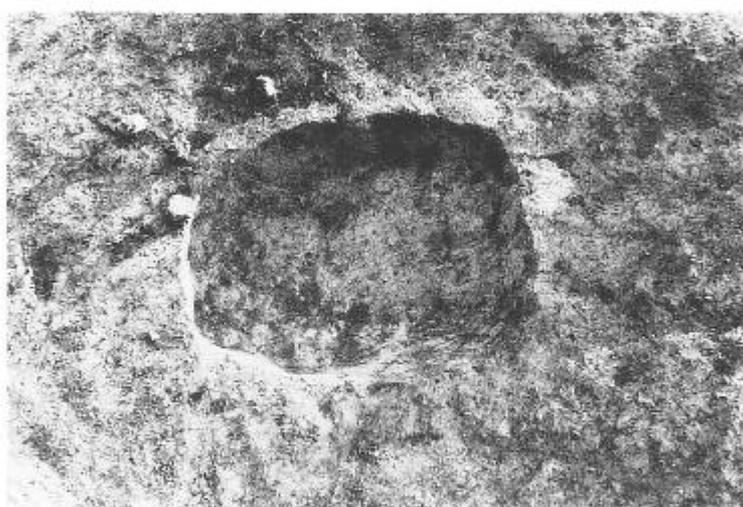
2 SK07土坑(南▷北)



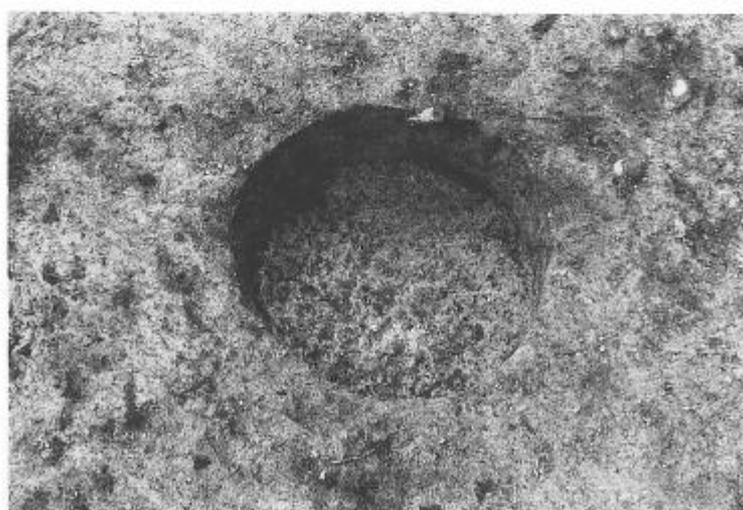
3 SK23土坑(東▷西)



1 SK03土坑(西▷東)



2 SK08土坑(北▷南)



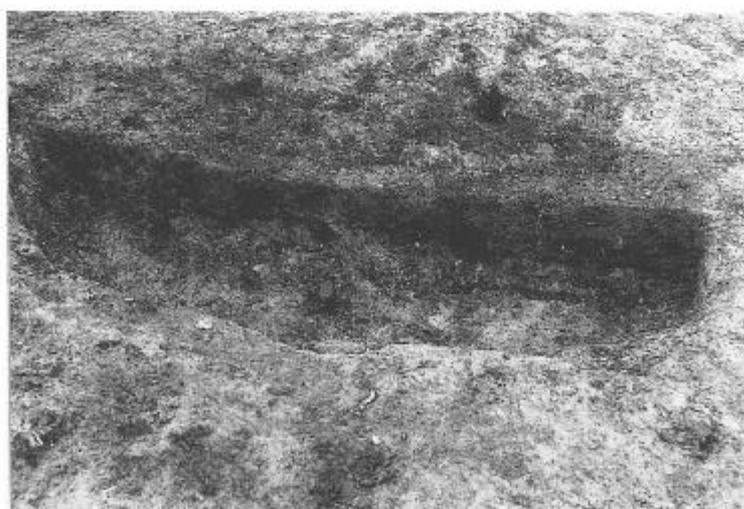
3 SK11土坑(南▷北)



1 S K14・32土坑(東▷西)



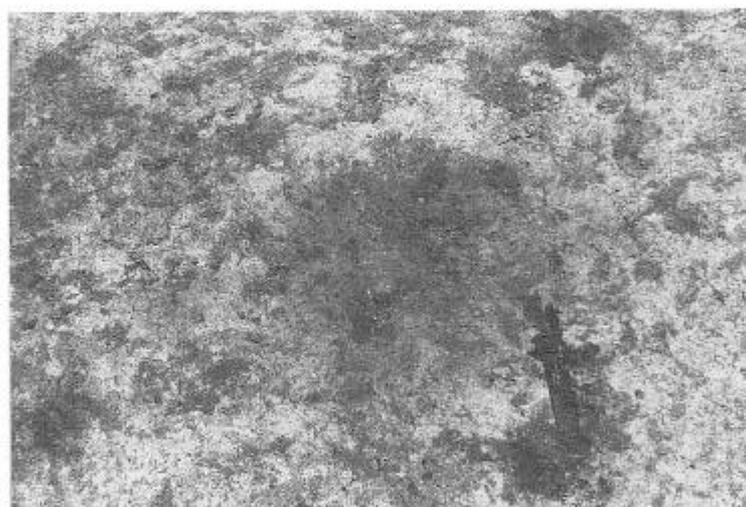
2 S K17土坑(南▷北)



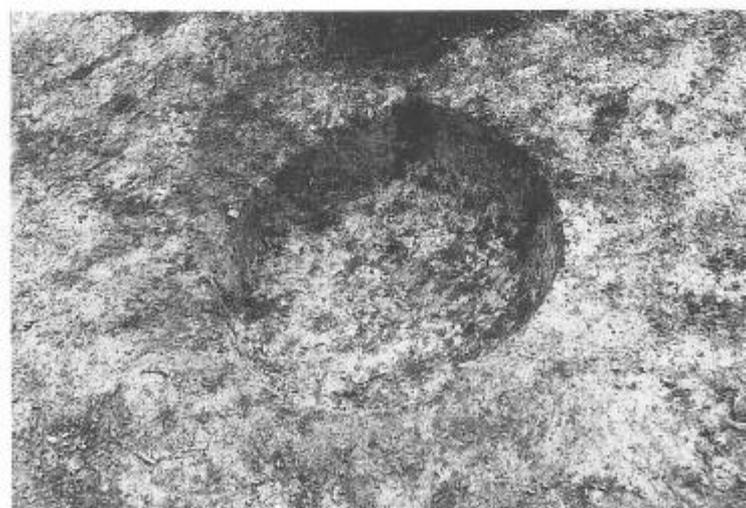
3 S K25土坑土層断面(南▷北)



1 S K 37土坑(北▷南)



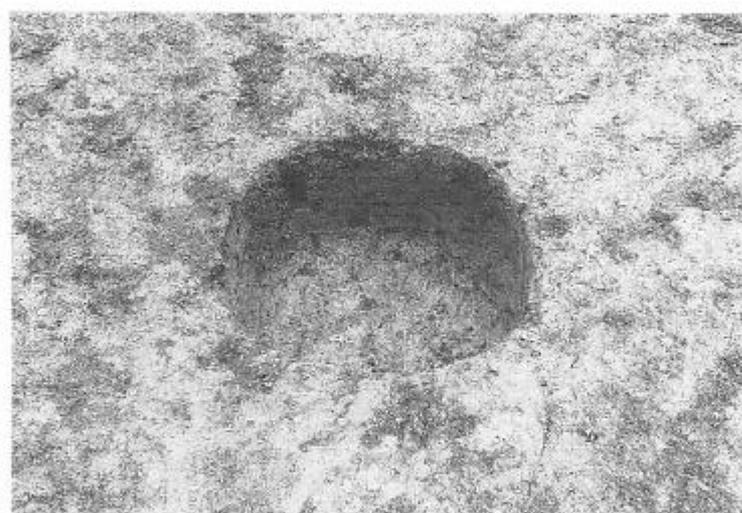
2 S K 43土坑確認状況(南▷北)



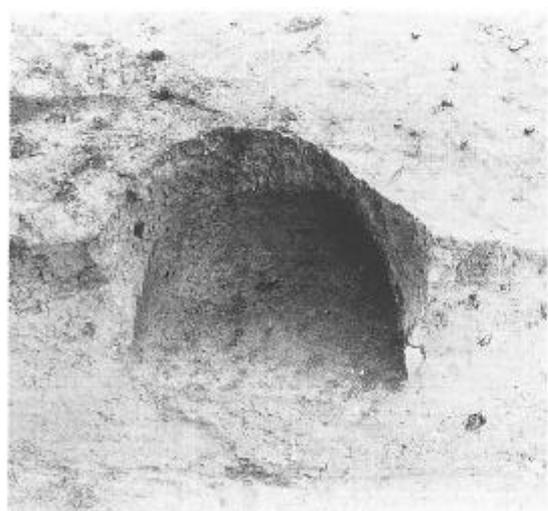
3 S K 10土坑(東▷西)



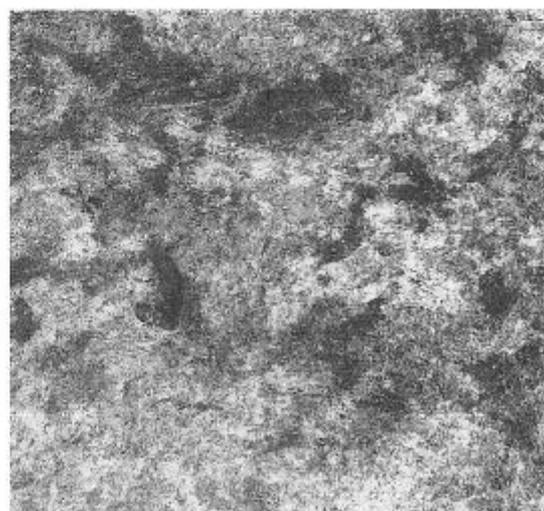
1 SK09土坑(南▷北)



2 SK18土坑(南▷北)



3 SK42土坑(南▷北)



4 SK16土坑確認状況(西▷東)



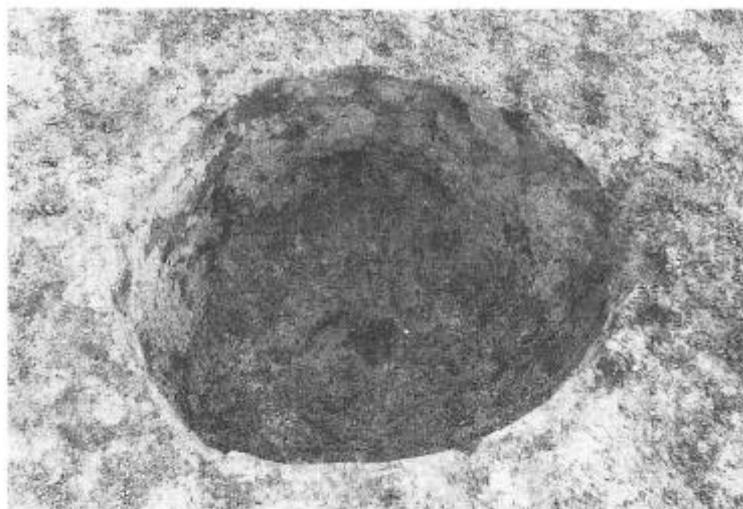
1 SK05土坑(西▷東)



2 SK41土坑(東▷西)



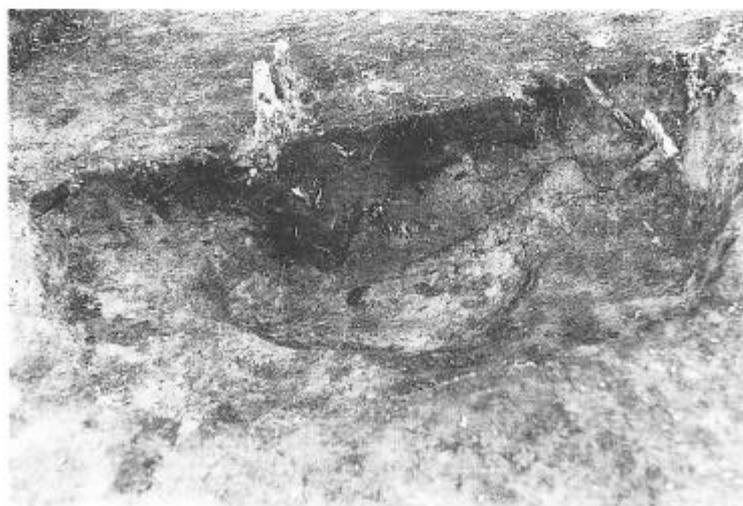
3 SK40土坑(東▷西)



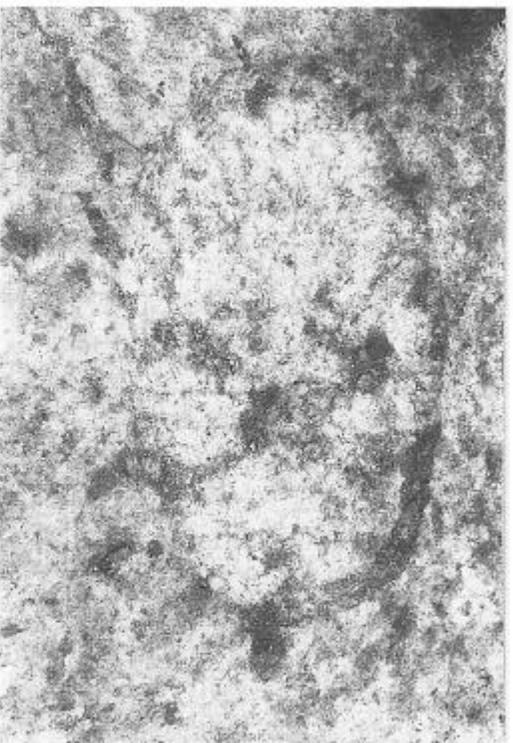
1 SK02土坑(西▷東)



2 SK22土坑(西▷東)



3 SK06土坑土層断面(南東▷北西)



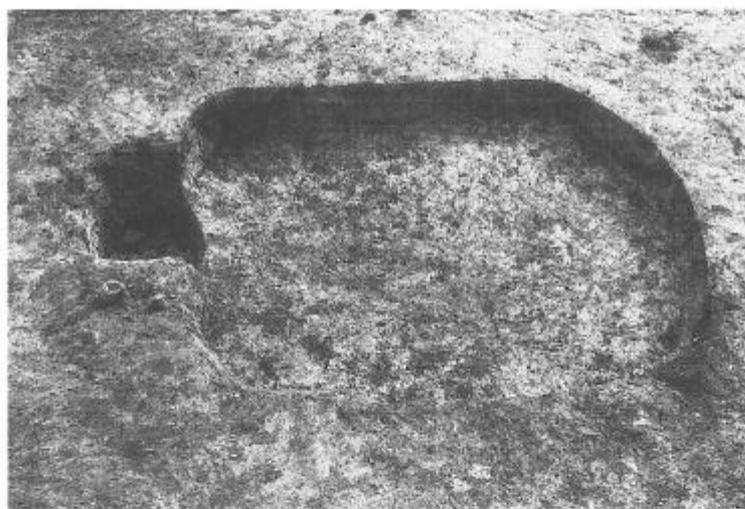
1 S K 12土坑(西△東)



2 S K 30土坑土層断面(北△南)



3 S K 21土坑(南△北)



1 SK01土坑(北▷南)



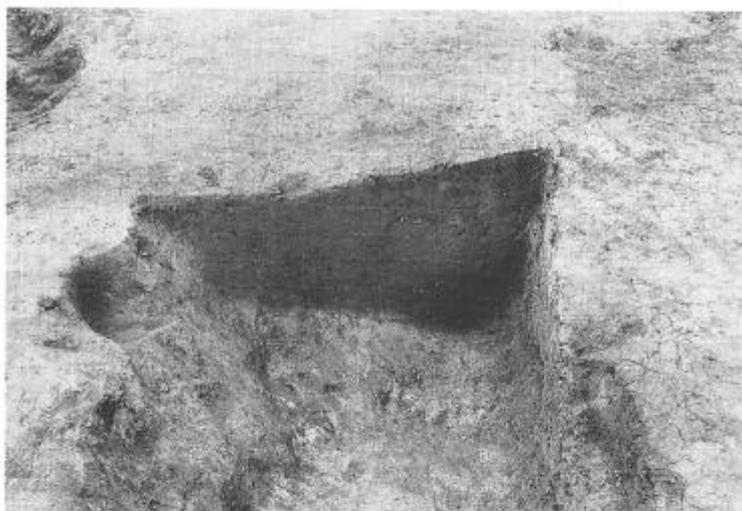
2 SK44土坑(北西▷南東)



3 SK04土坑(南▷北)



4 SK19土坑(南▷北)



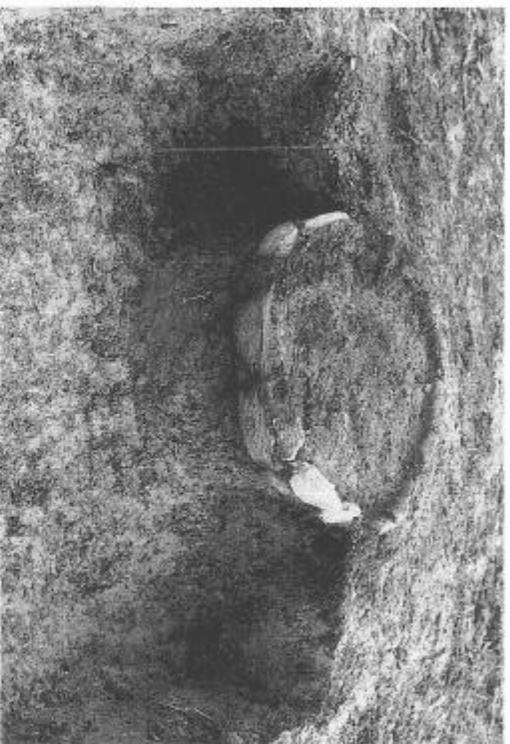
1 SK33土坑土層断面(北東▷南西)



2 SK39土坑土層断面(北東▷南西)



3 SK38土坑(南西▷北東)



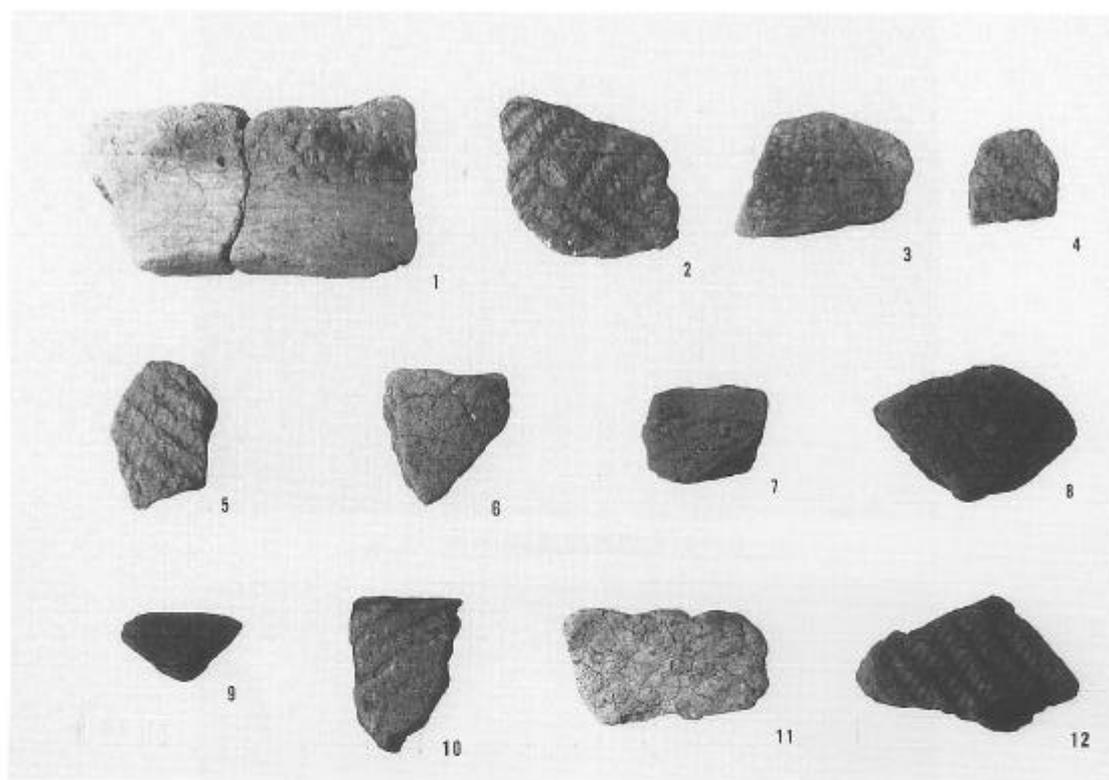
1 S R 24土器埋設遺構(南西▷北東)



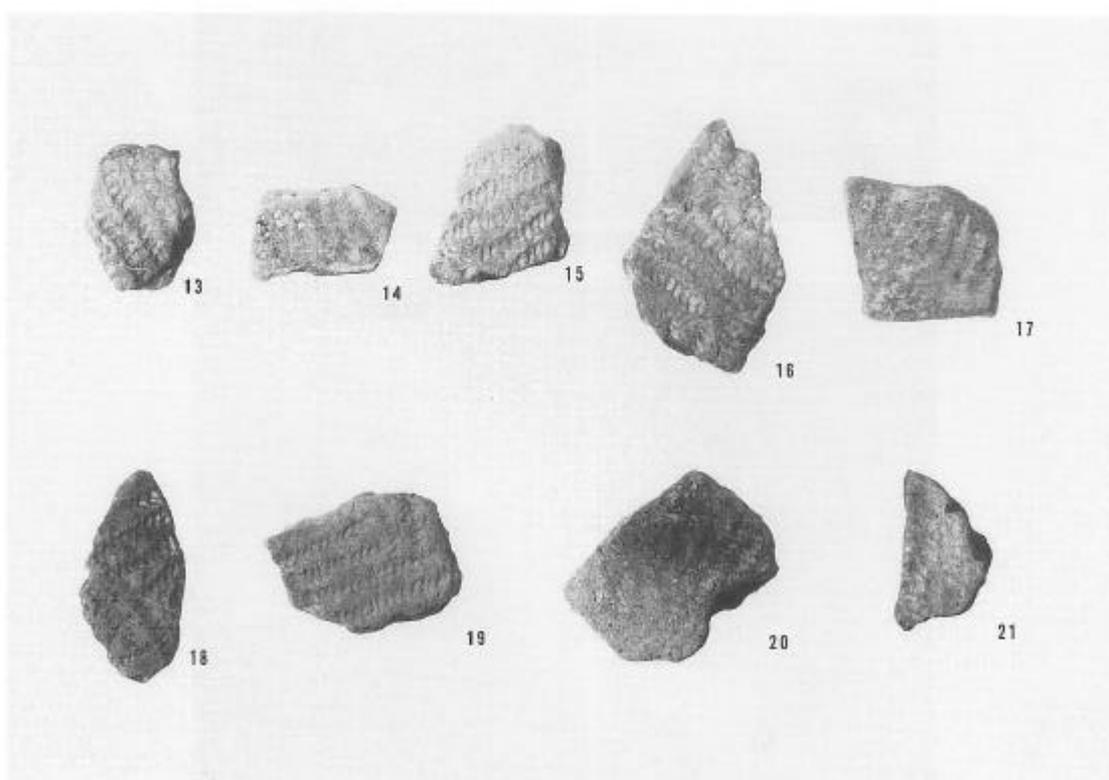
2 S R 29土器埋設遺構(東▷西)



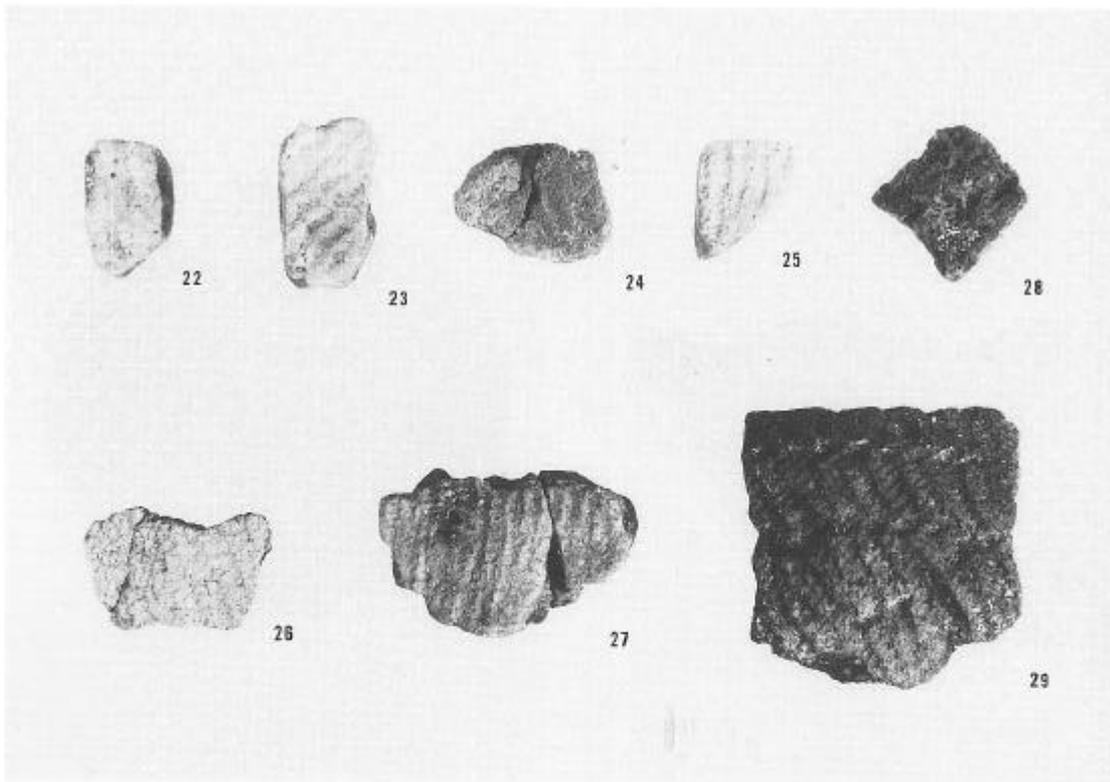
3 S K 13土坑土層(南西▷北東)



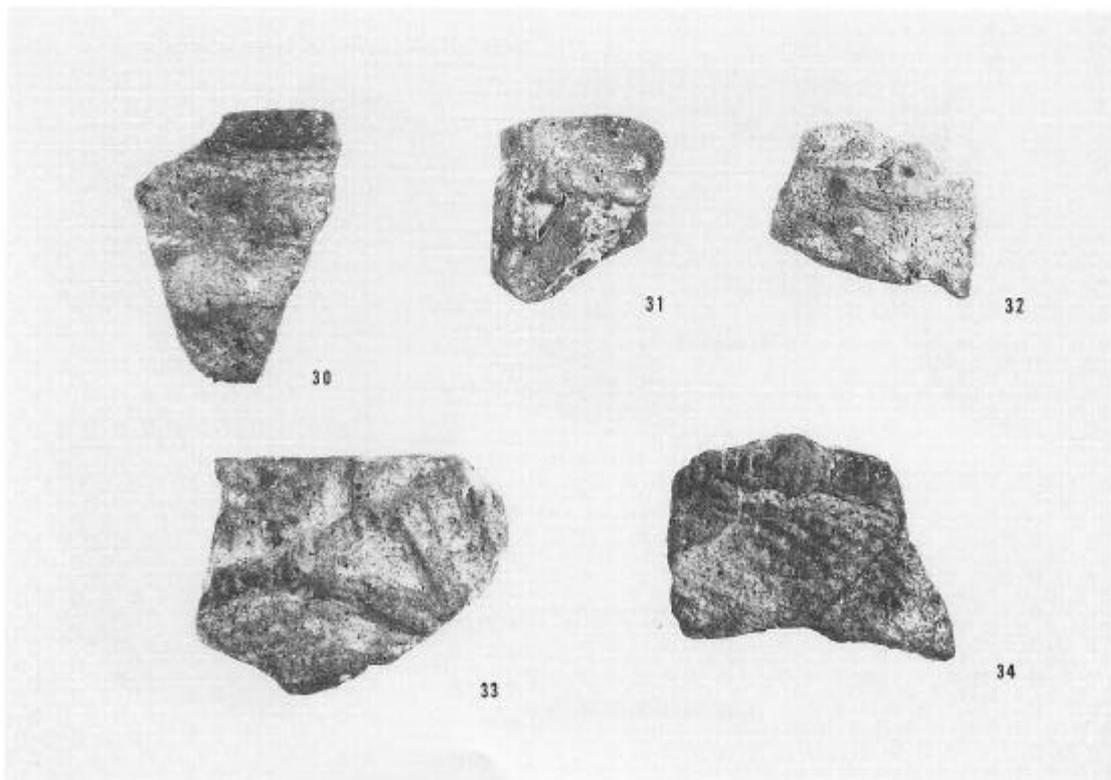
1 遺構内出土遺物(1)



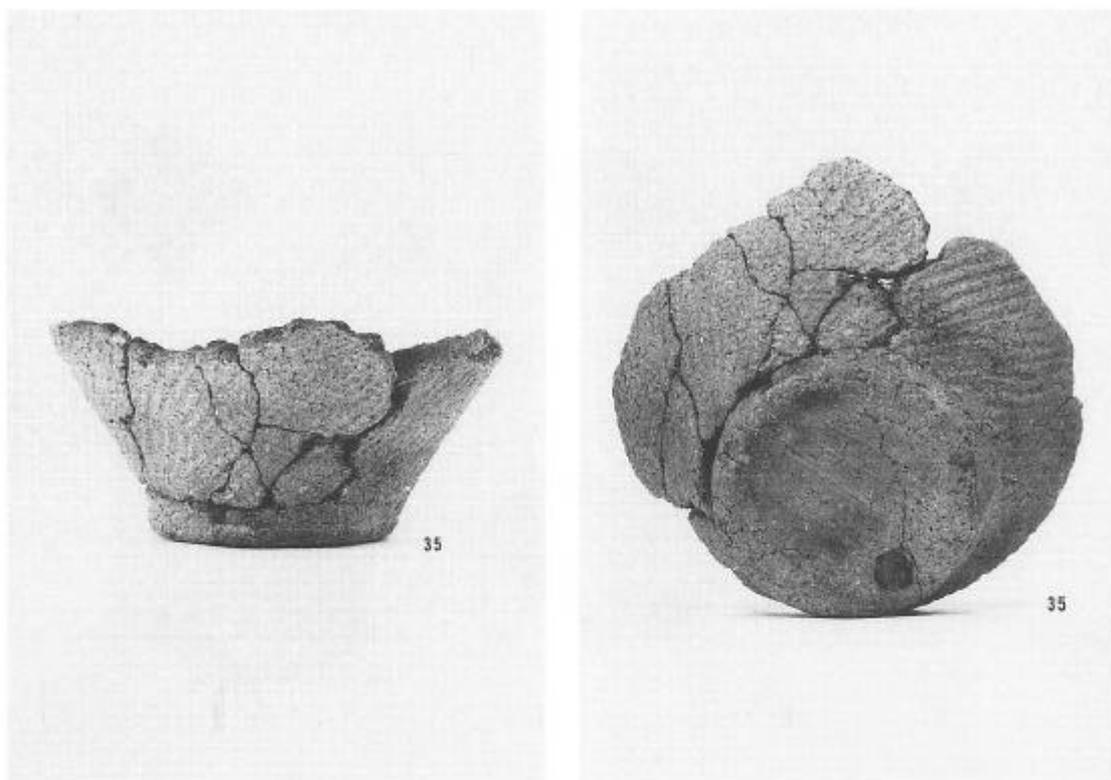
2 遺構内出土遺物(2)



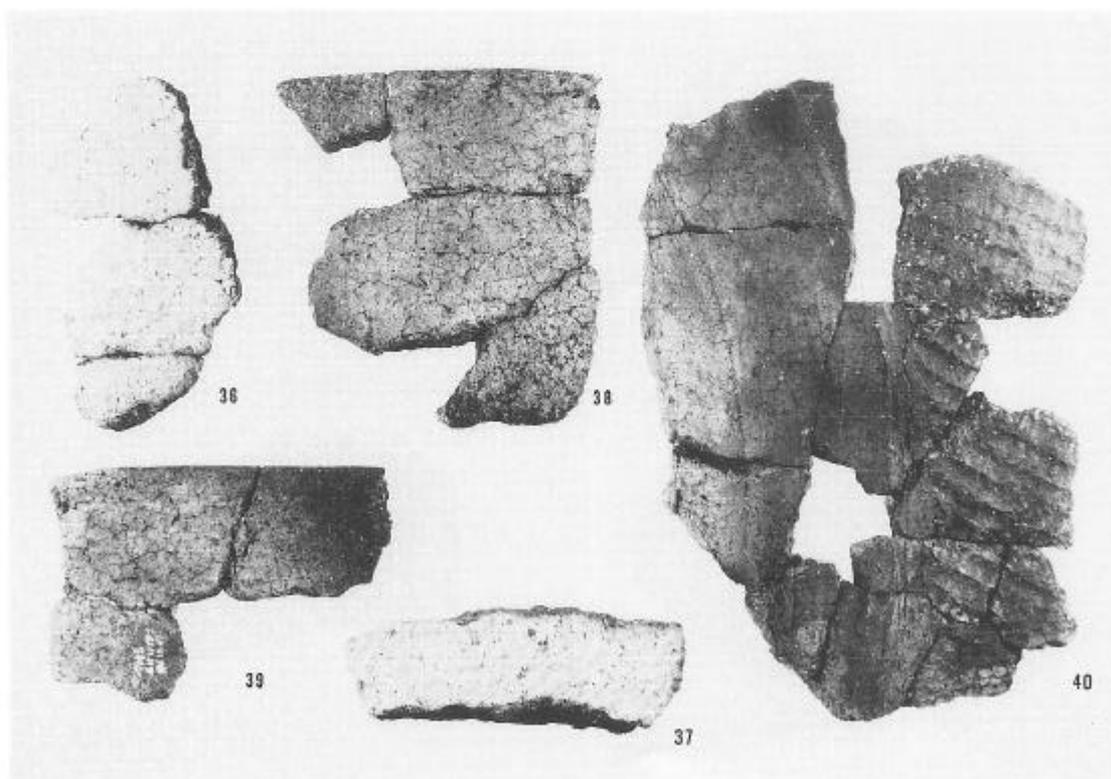
1 遺構内出土遺物(3)



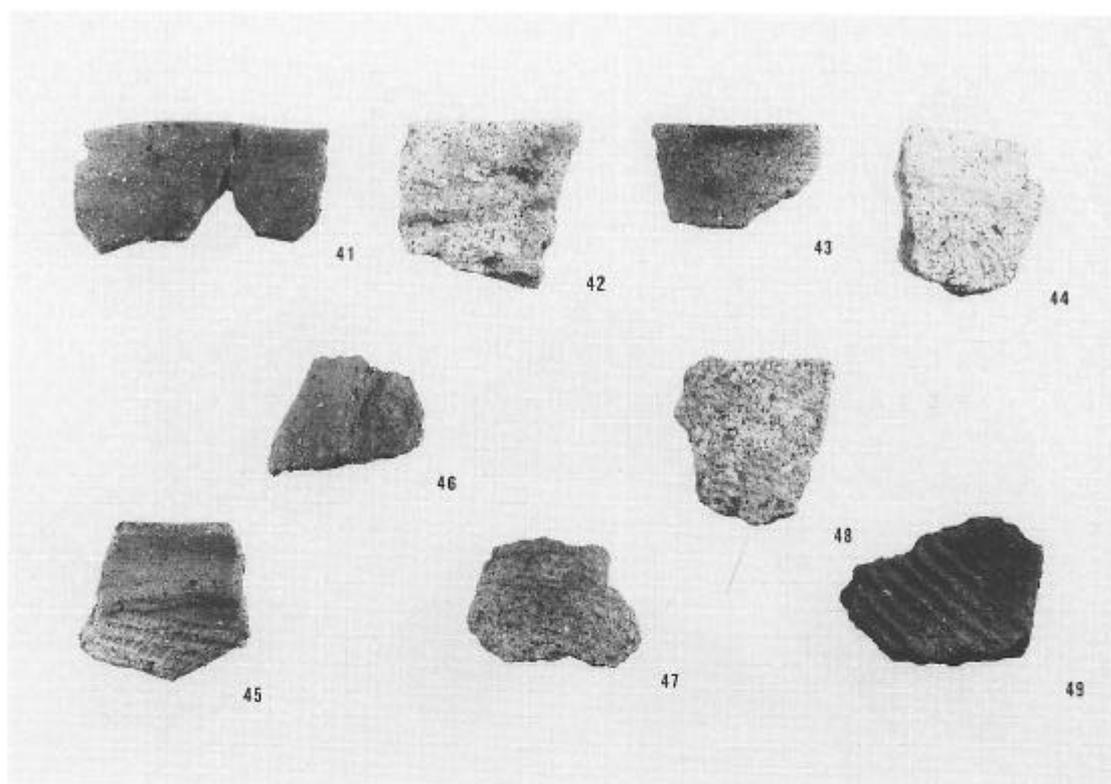
2 遺構内出土遺物(4)



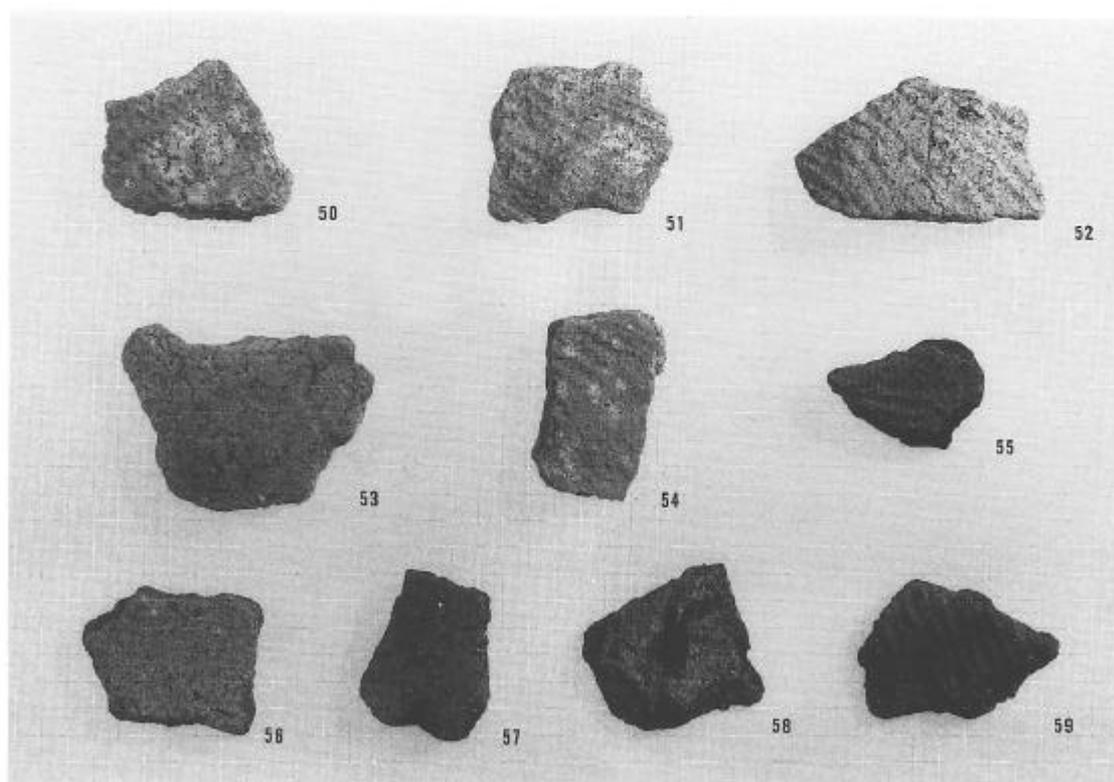
1 遺構内出土遺物(5) 左・正面 右・底面



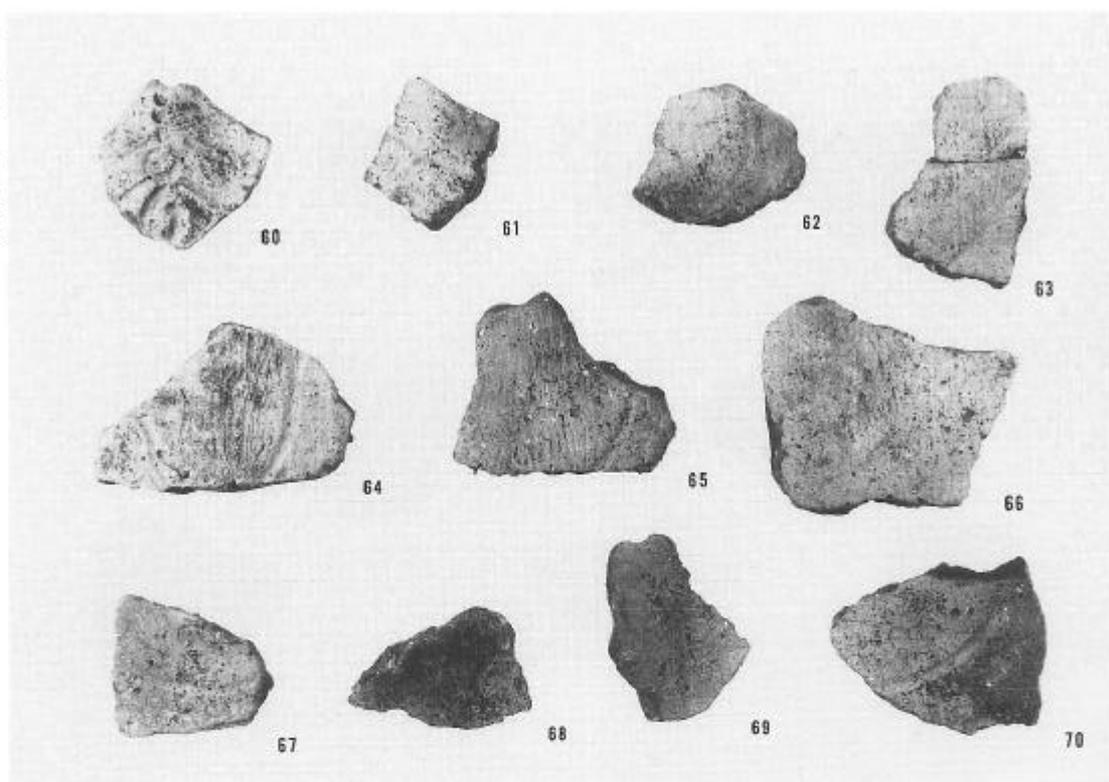
2 遺構内出土遺物(6)



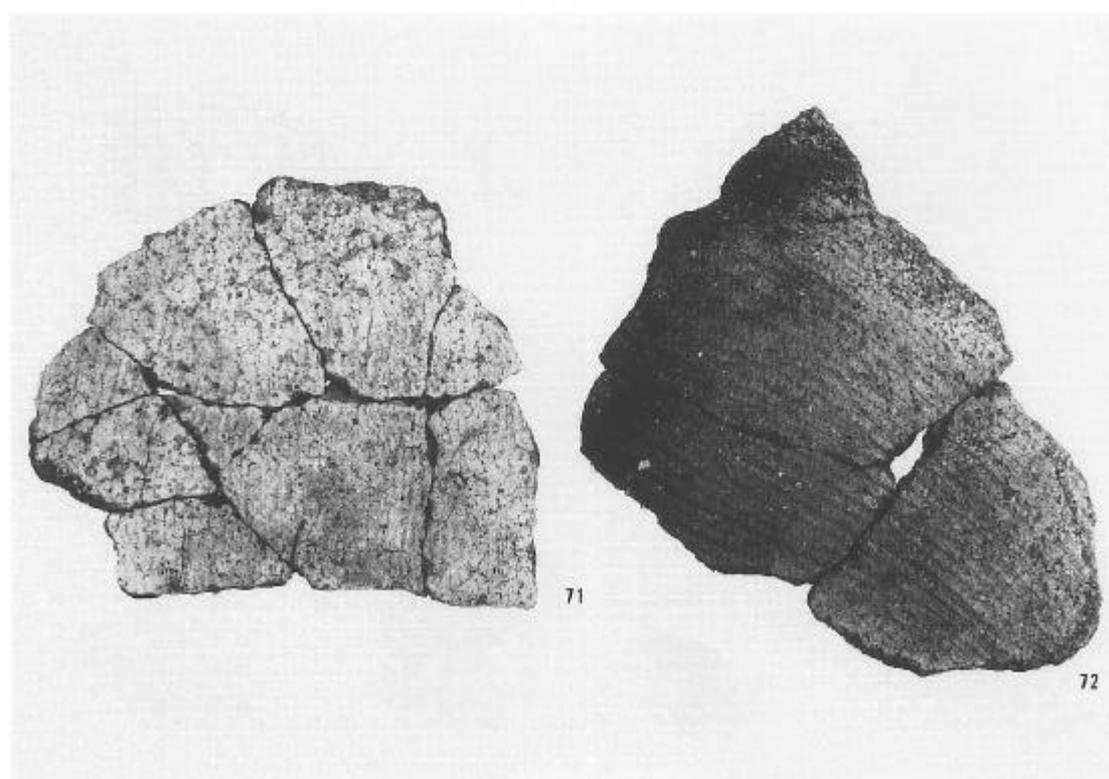
1 遺構内出土遺物(7)



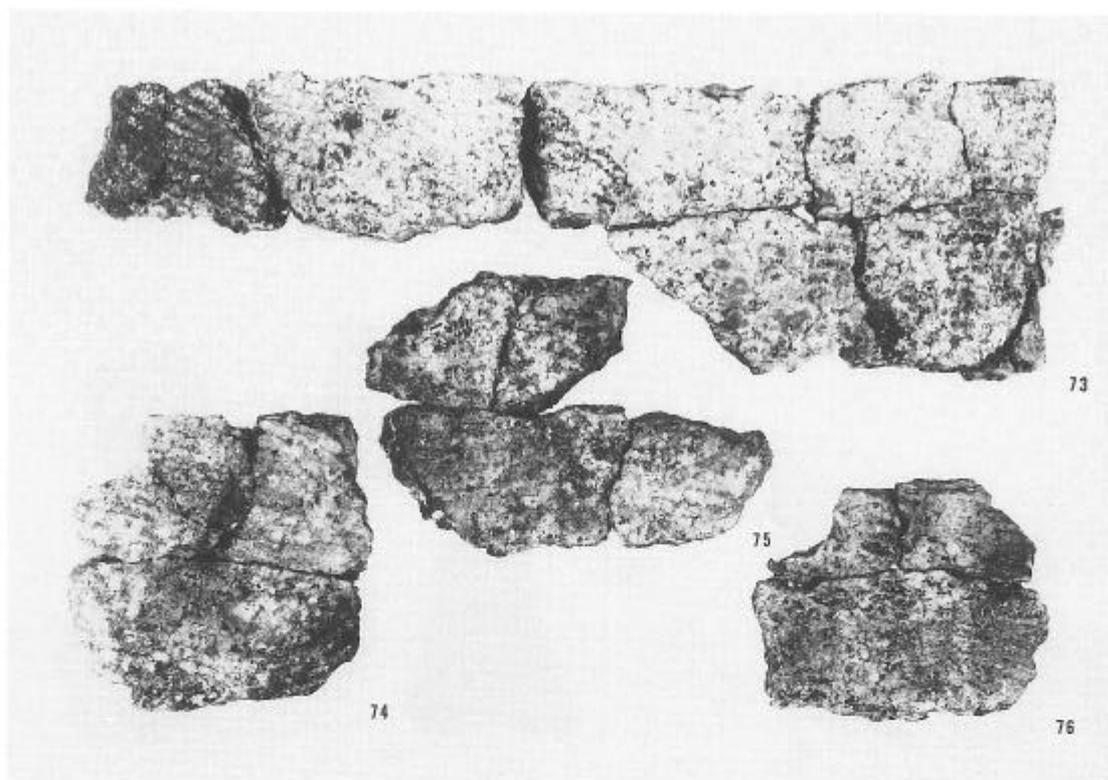
2 遺構内出土遺物(8)



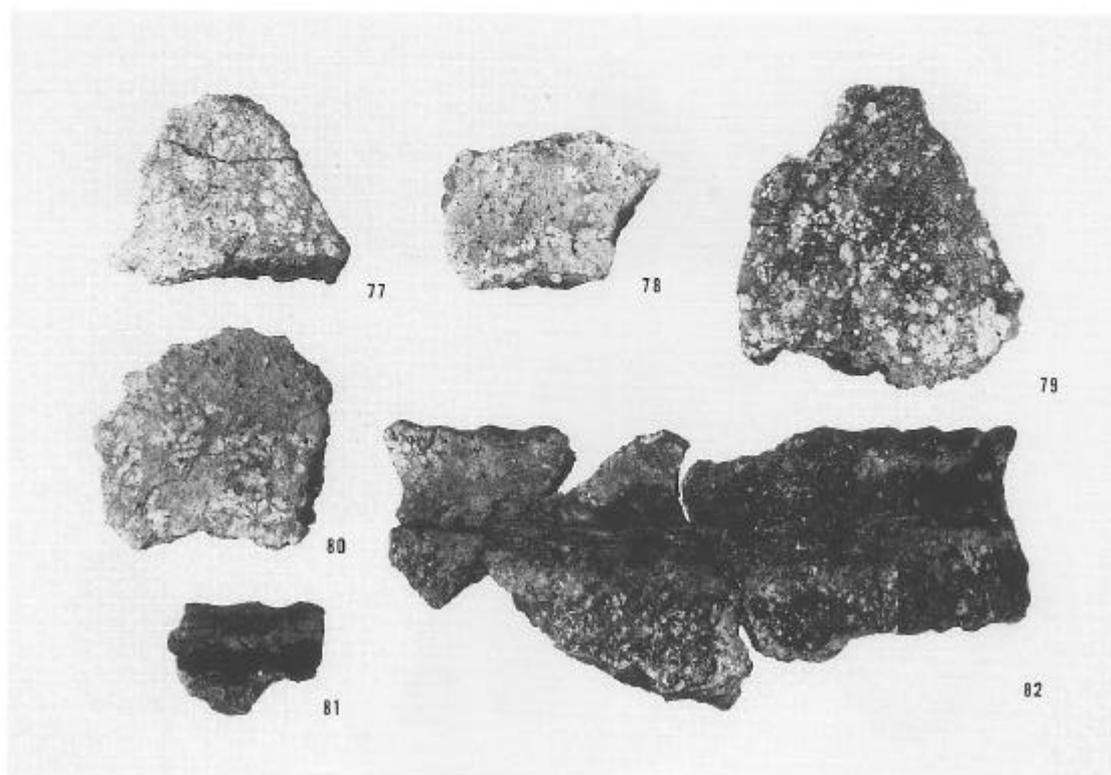
1 遺構内出土遺物(9)



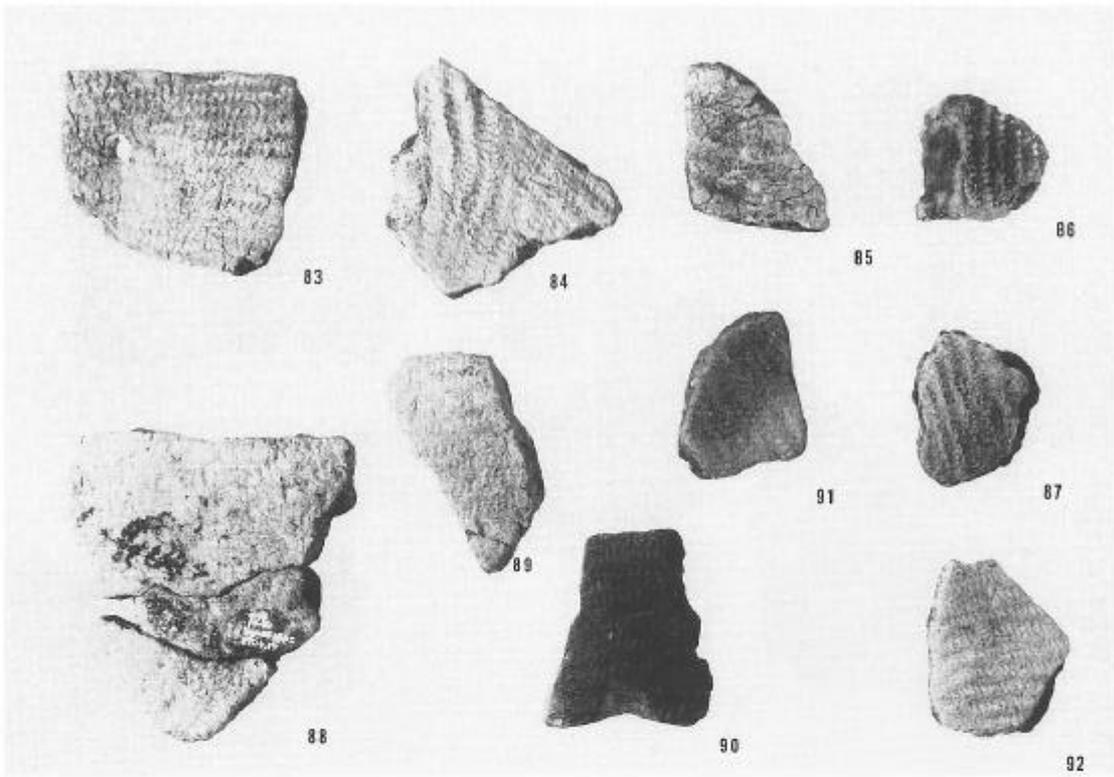
2 遺構内出土遺物(10)



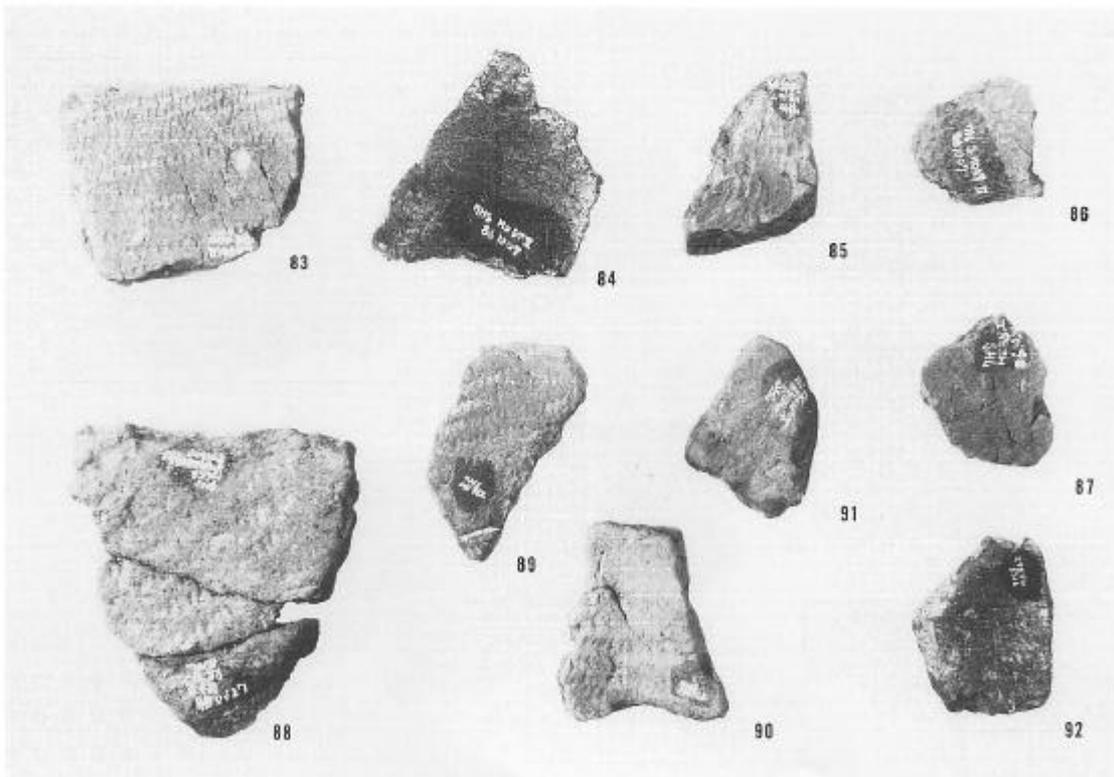
1 遺構内出土遺物(11)



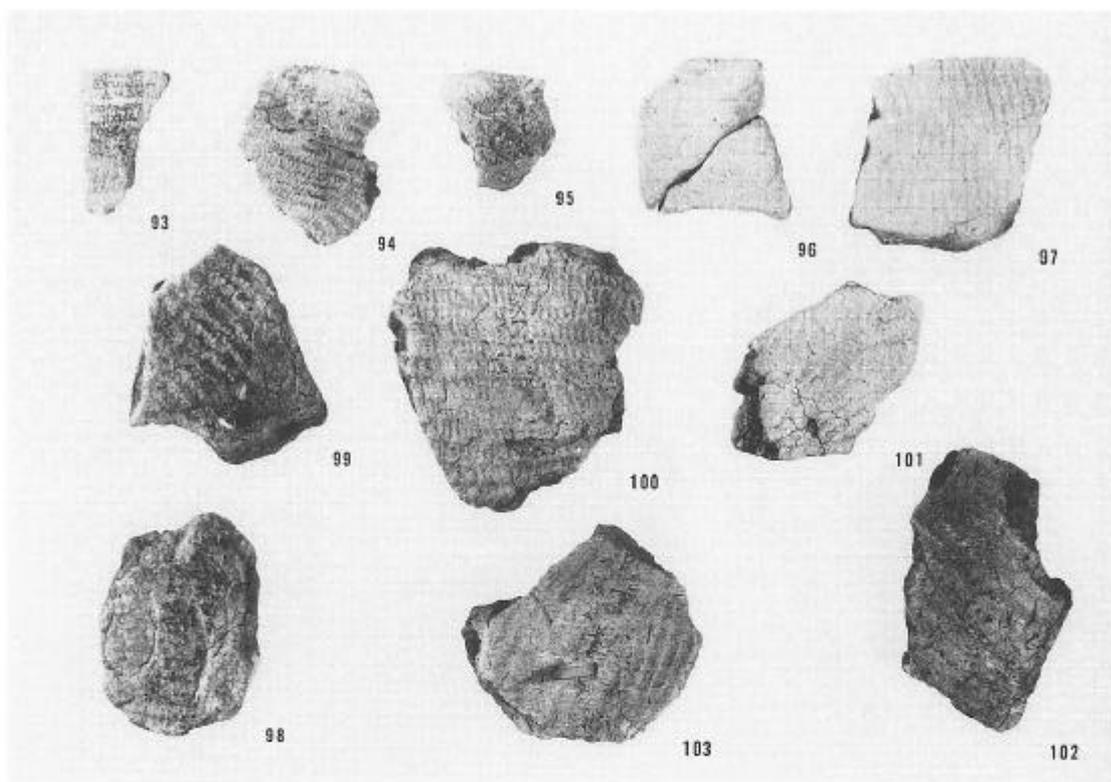
2 遺構内出土遺物(12)



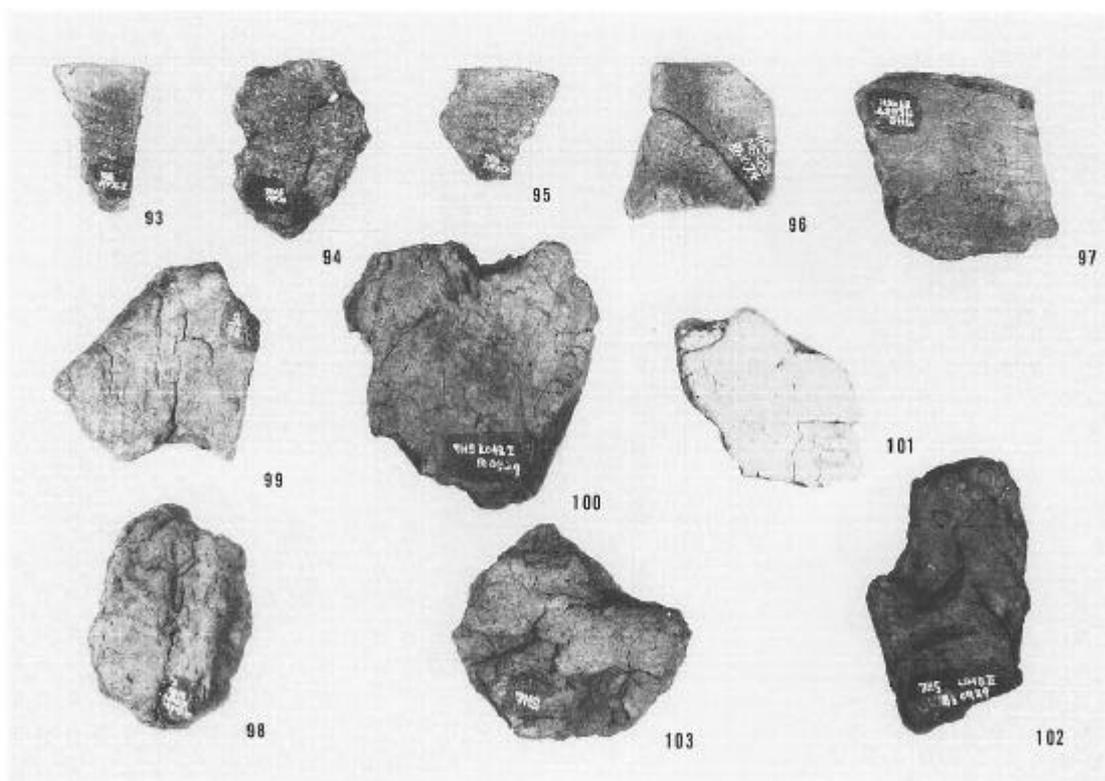
1 遺構外出土遺物(1) 外面



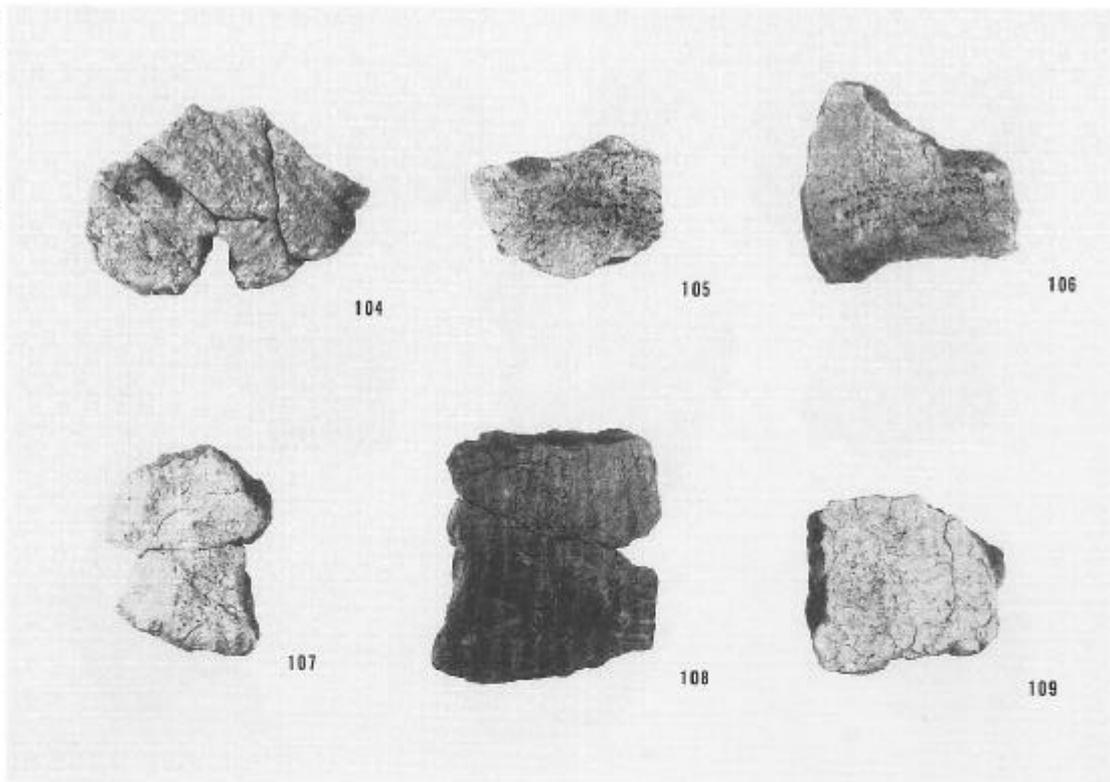
2 同上 内面



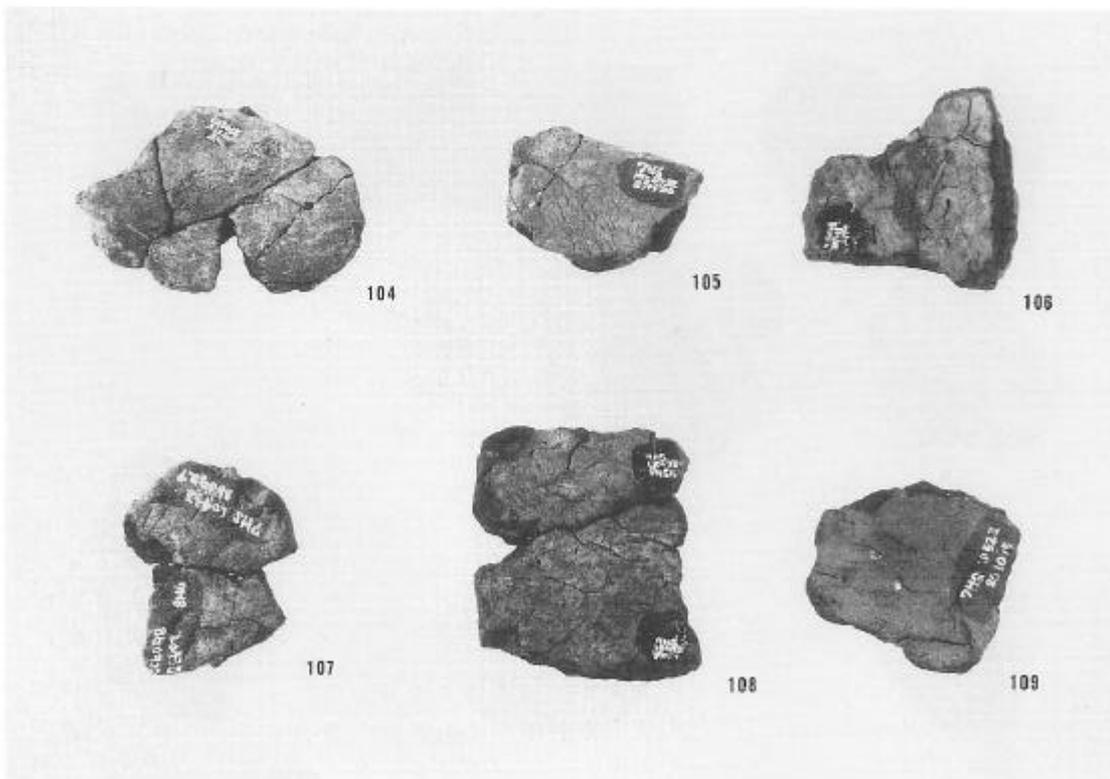
1 遺構外出土遺物(2) 外面



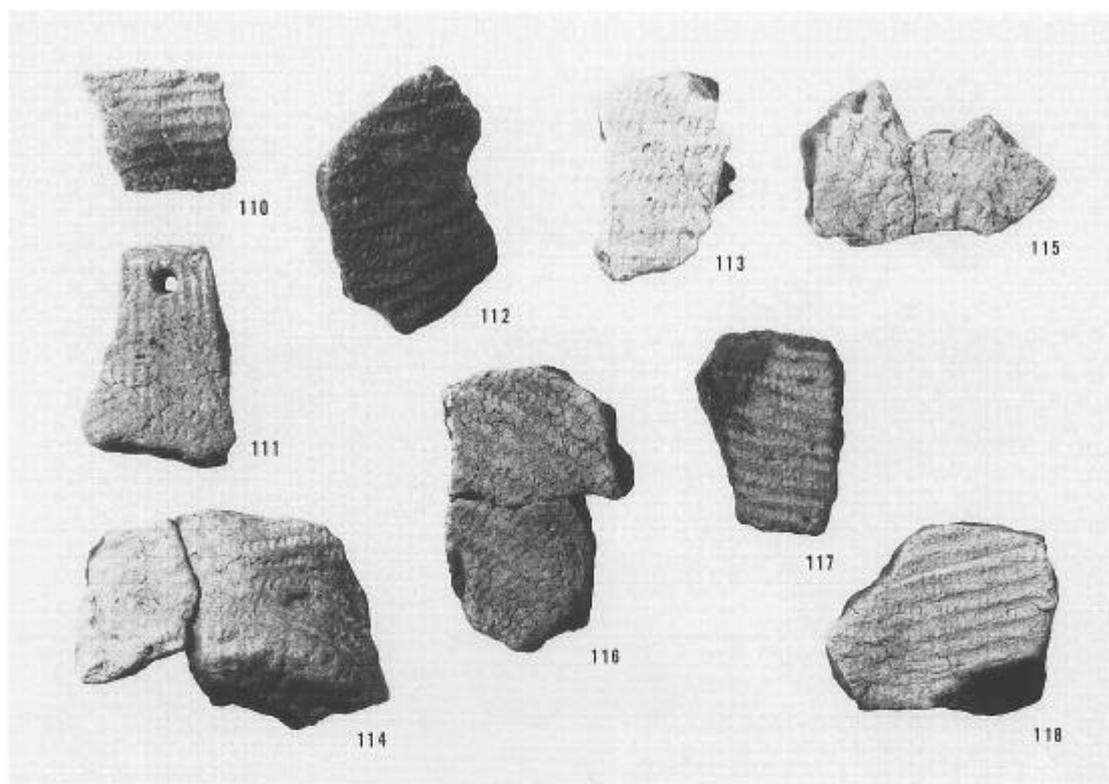
2 同上 内面



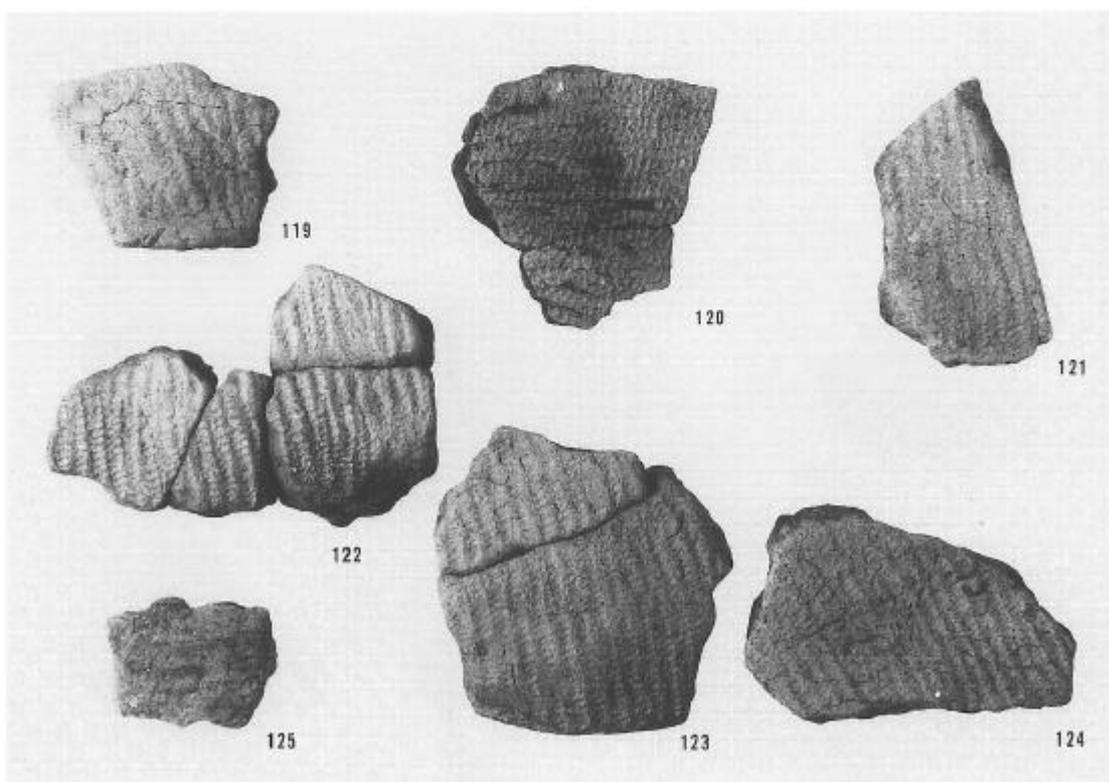
1 遺構外出土遺物(3) 外面



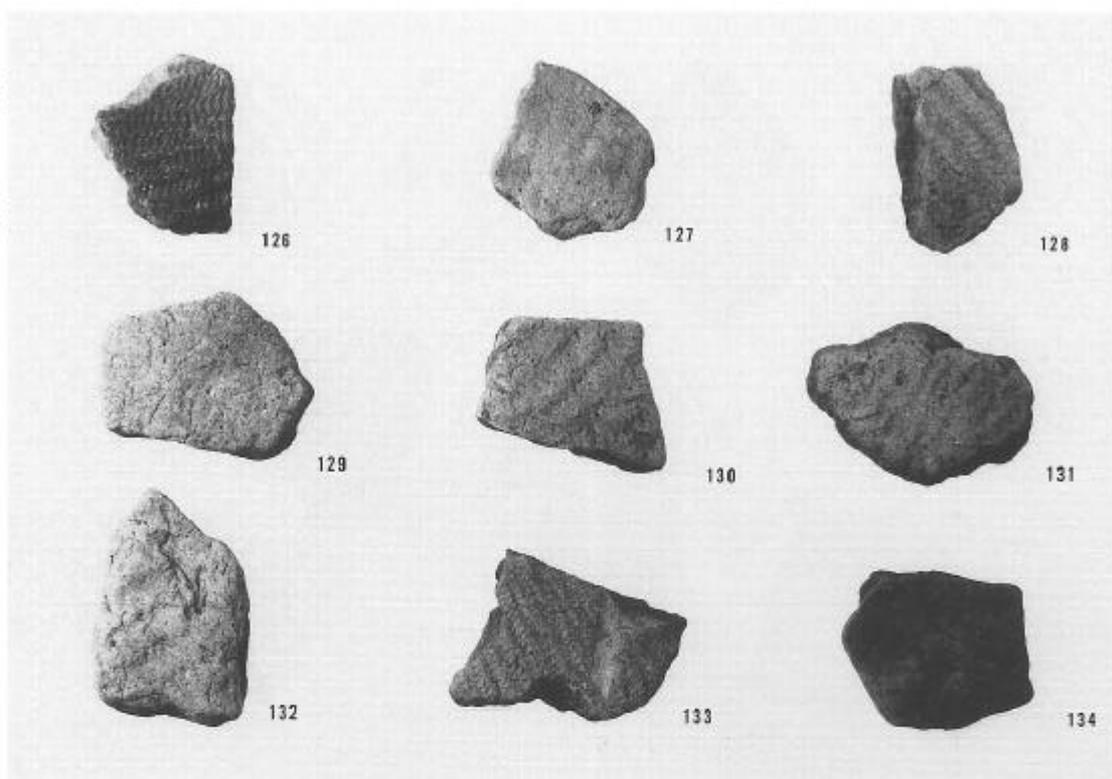
2 同上 内面



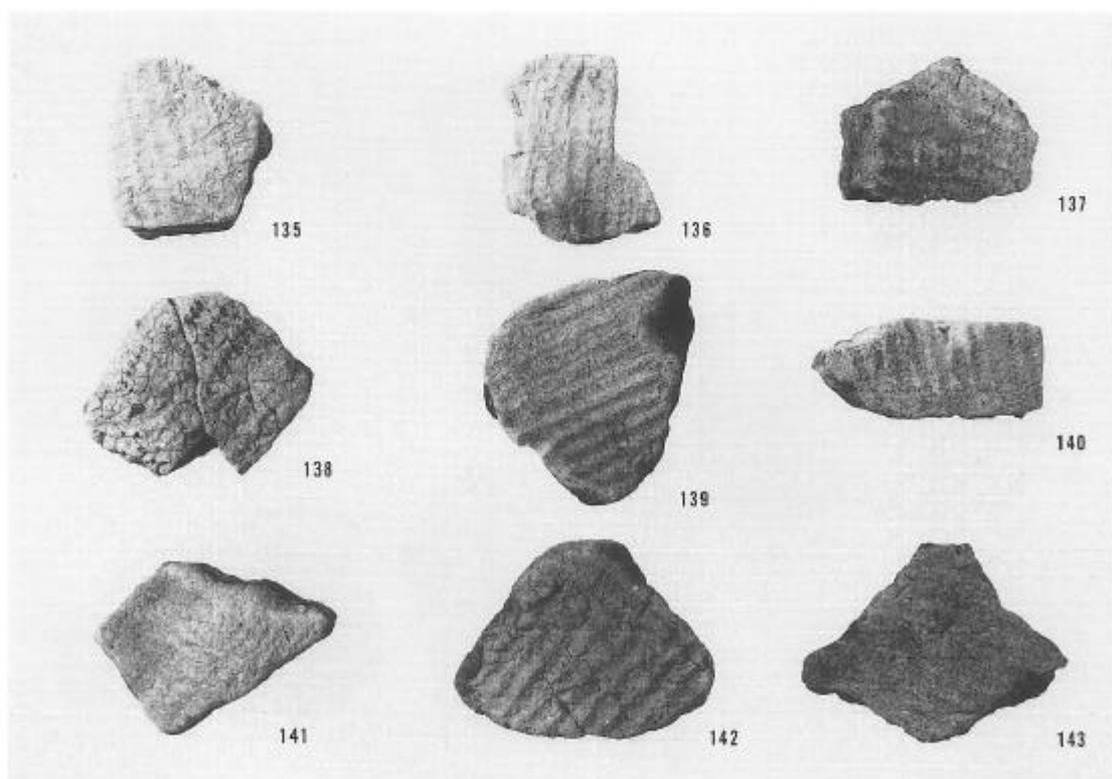
1 遺構外出土遺物(4)



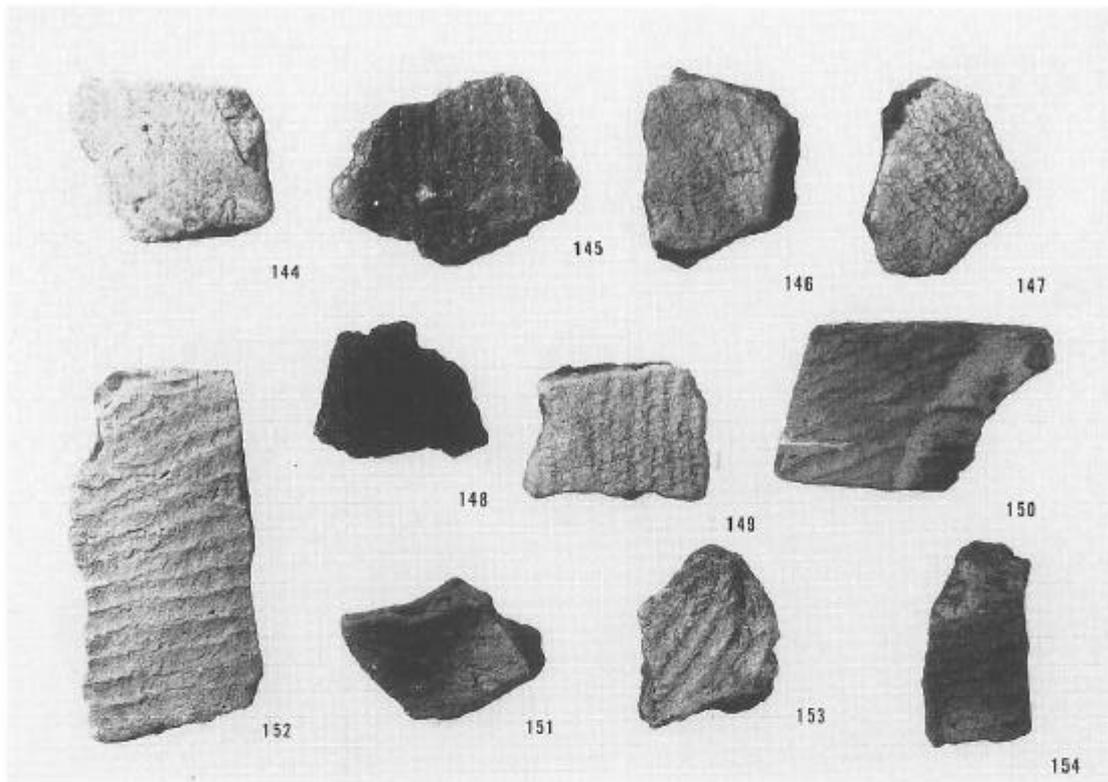
2 遺構外出土遺物(5)



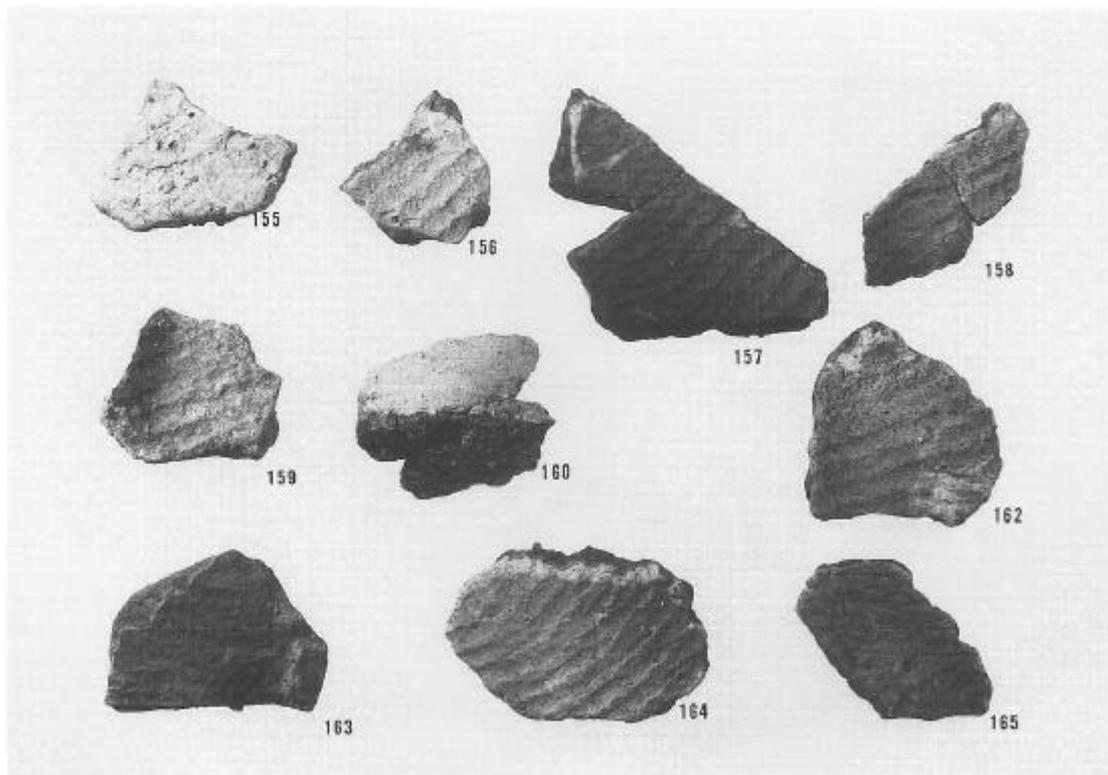
1 遺構外出土遺物(6)



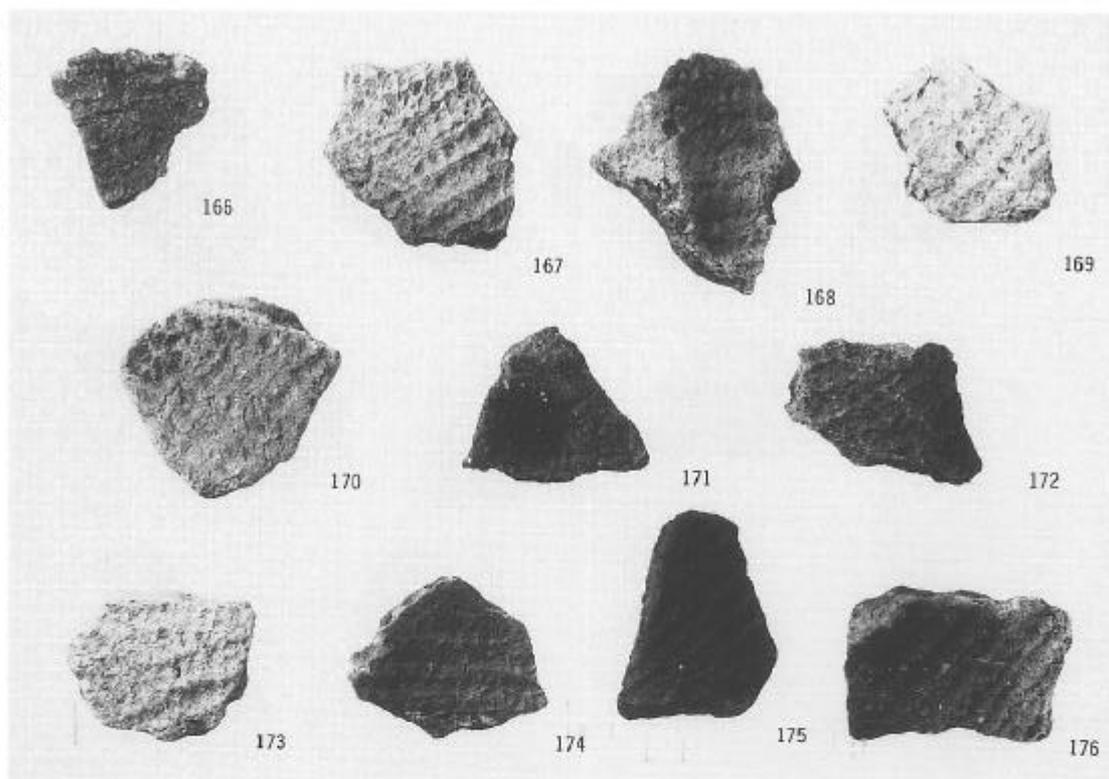
2 遺構外出土遺物(7)



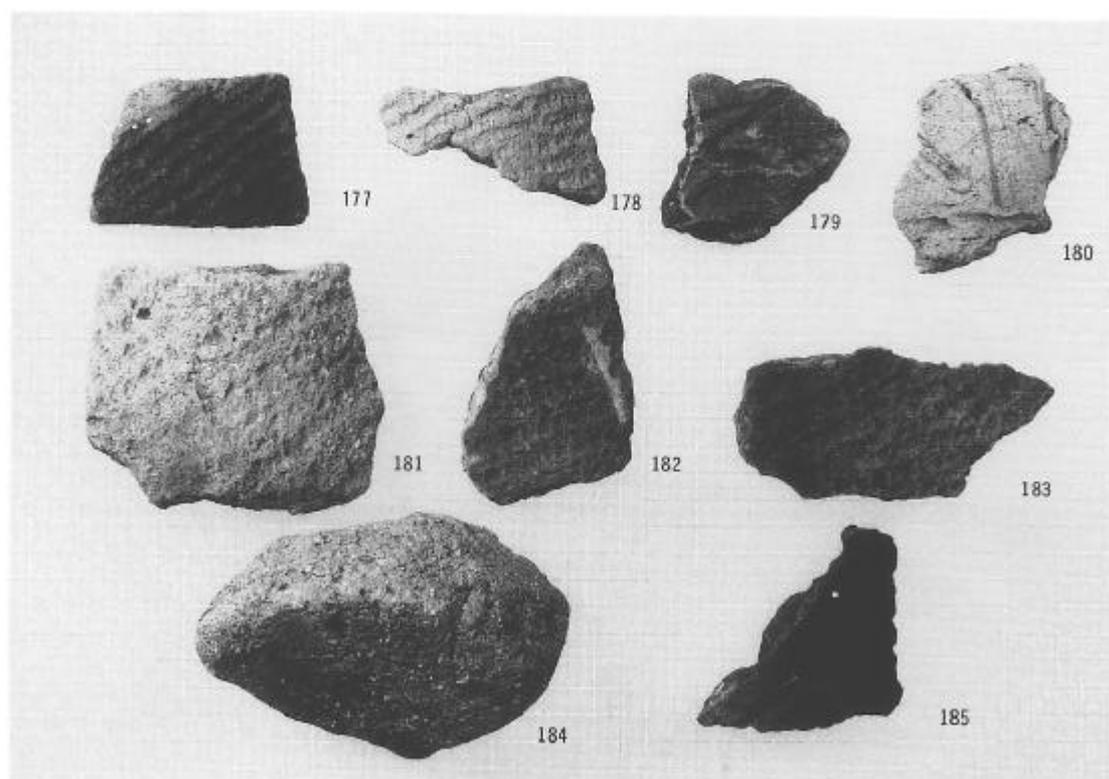
1 遺構外出土遺物(8)



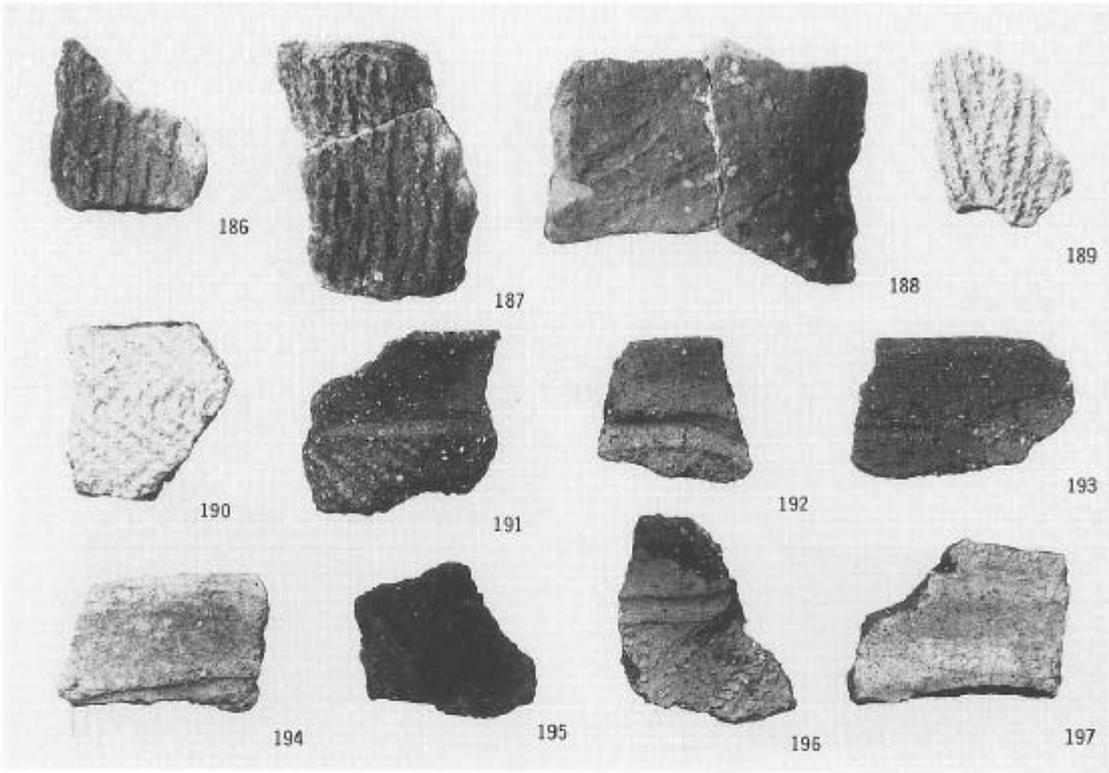
2 遺構外出土遺物(9)



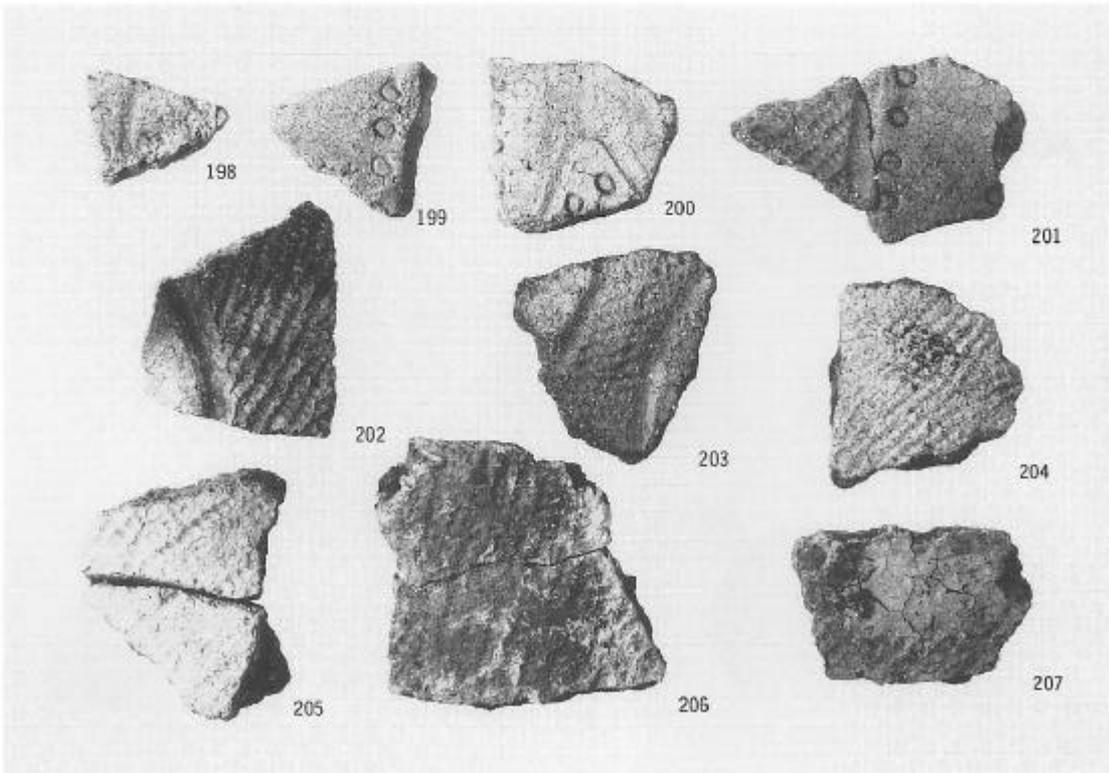
1 遺構外出土遺物(10)



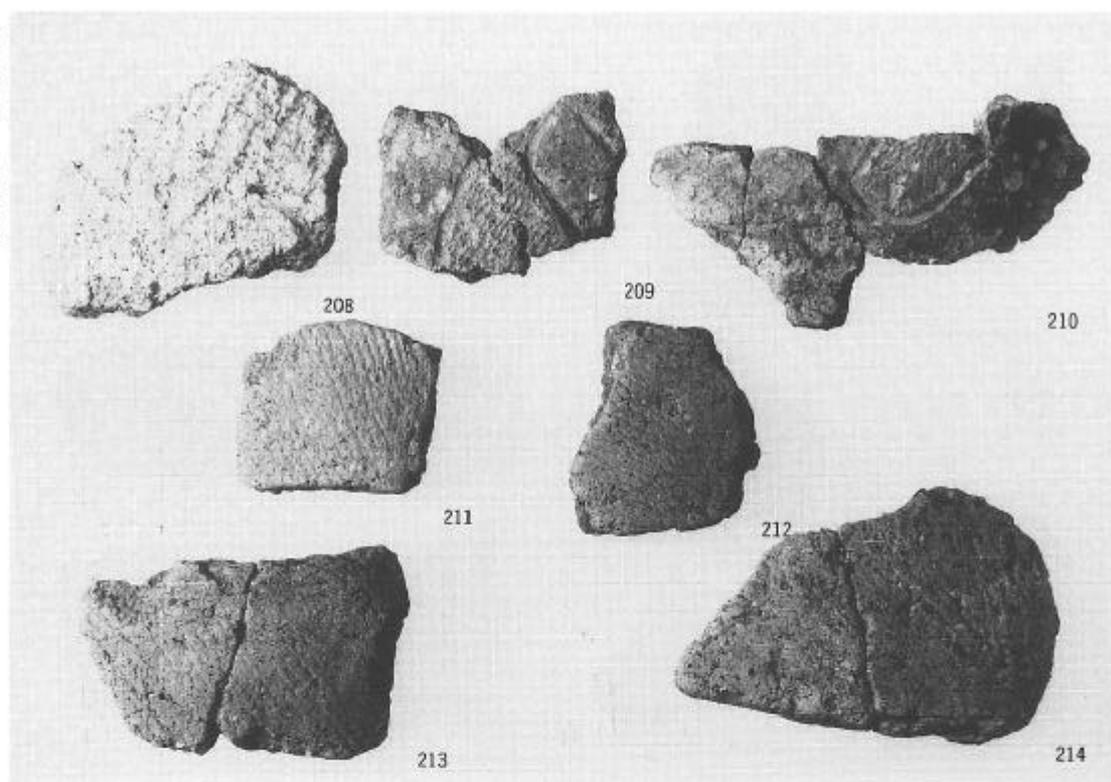
2 遺構外出土遺物(11)



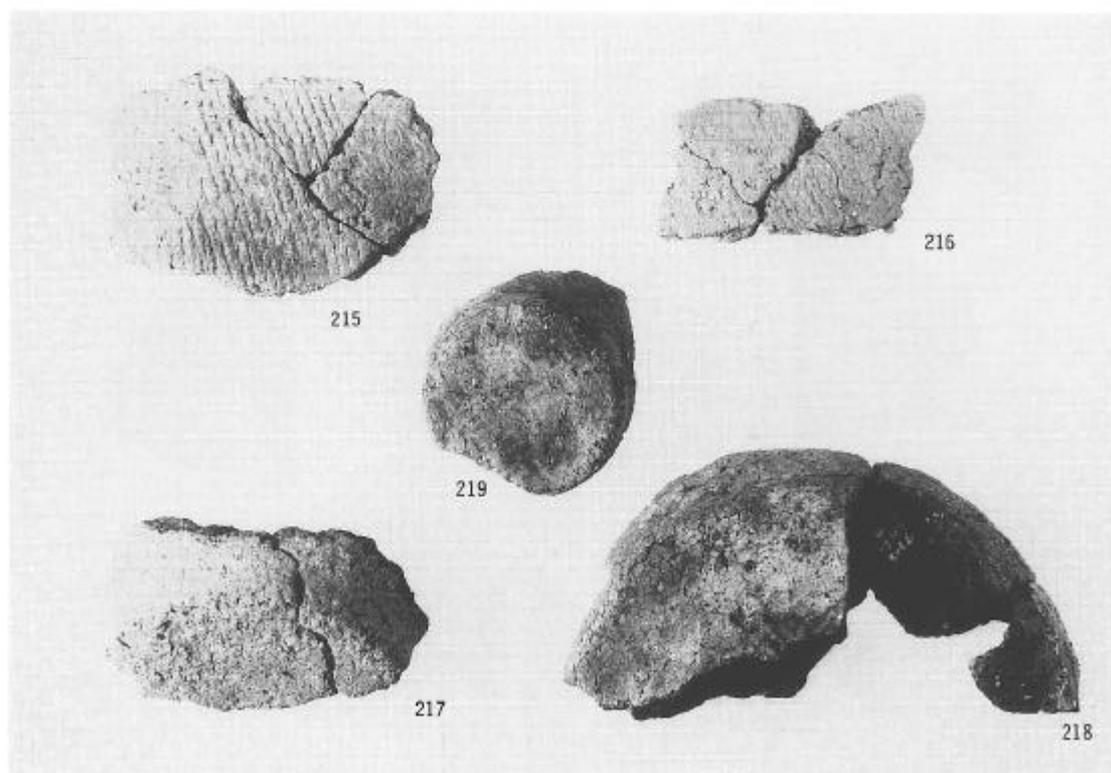
1 遺構外出土遺物(12)



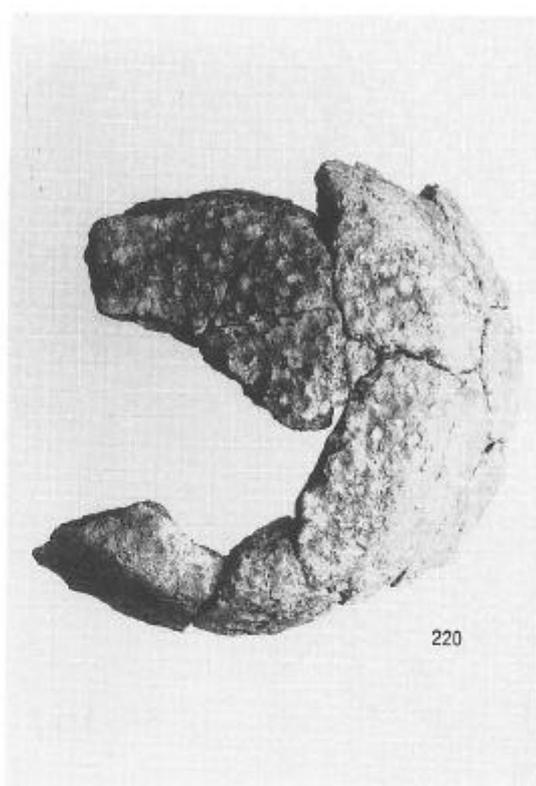
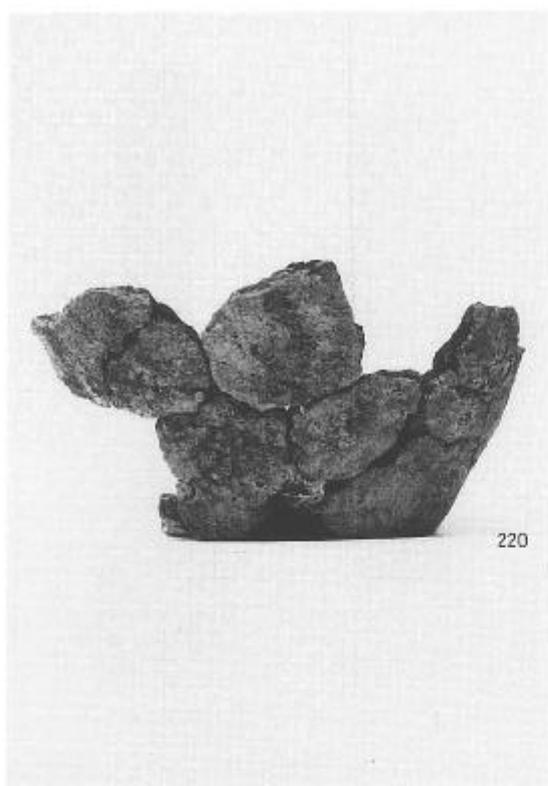
2 遺構外出土遺物(13)



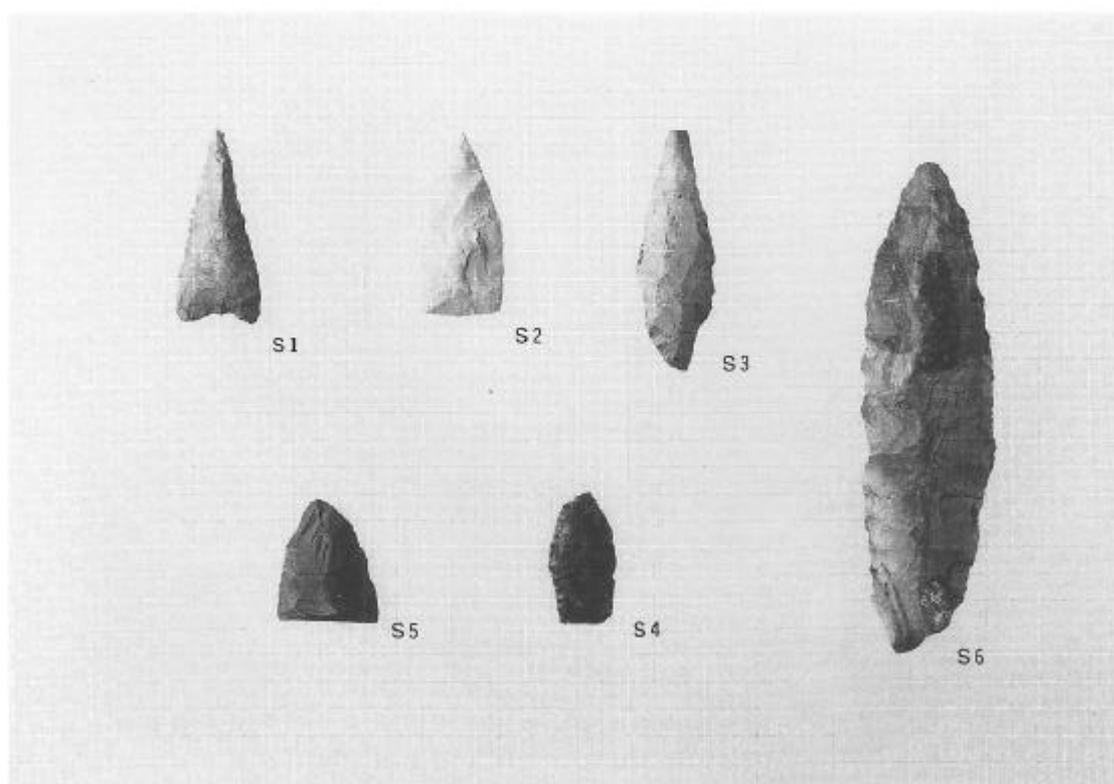
1 遺構外出土遺物(14)



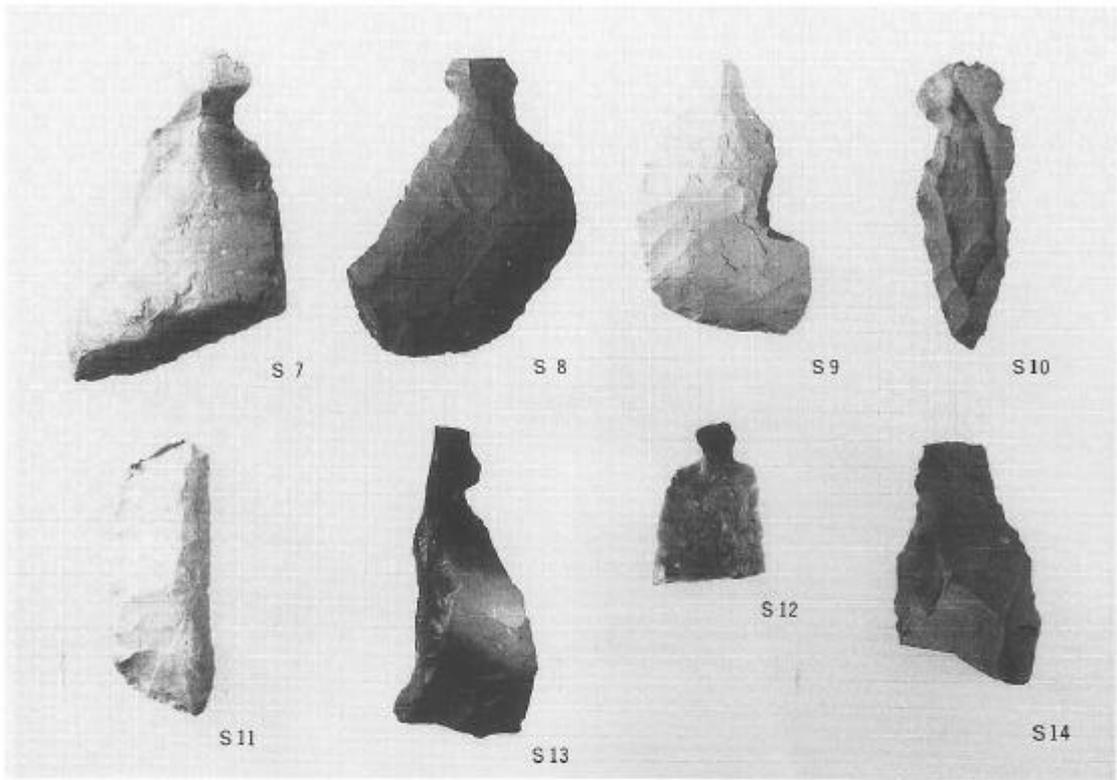
2 遺構外出土遺物(15)



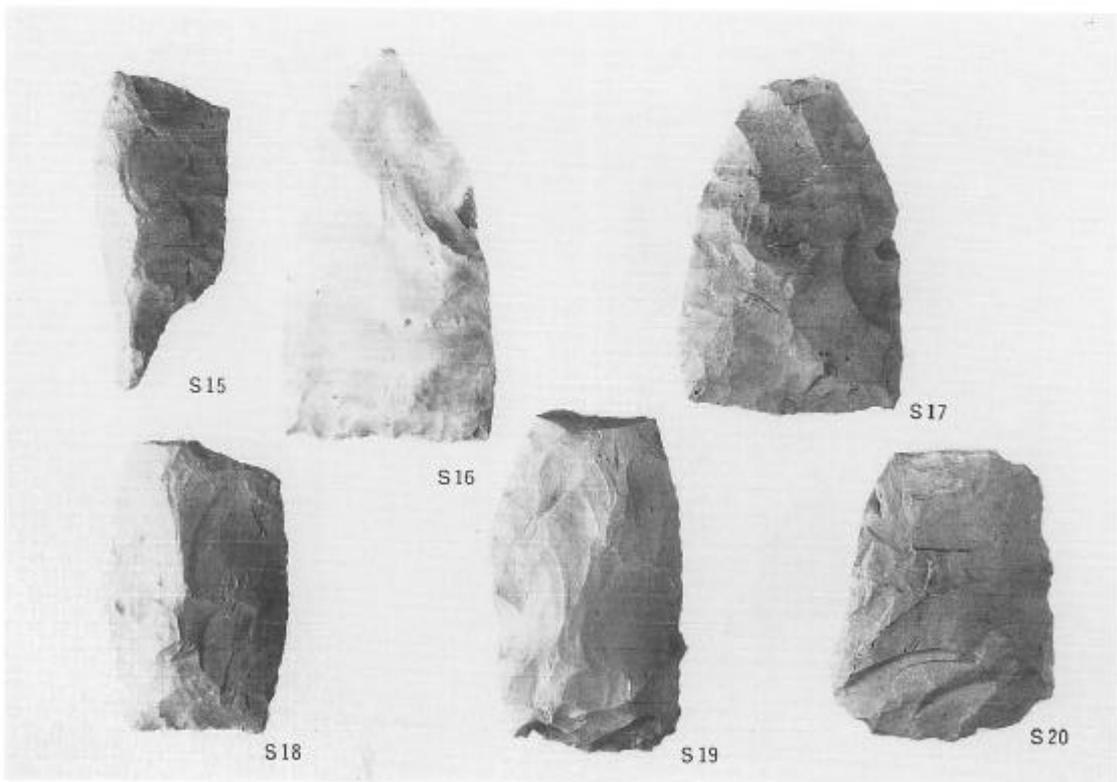
1 遺構外出土遺物(16) 左・正面 右・底面



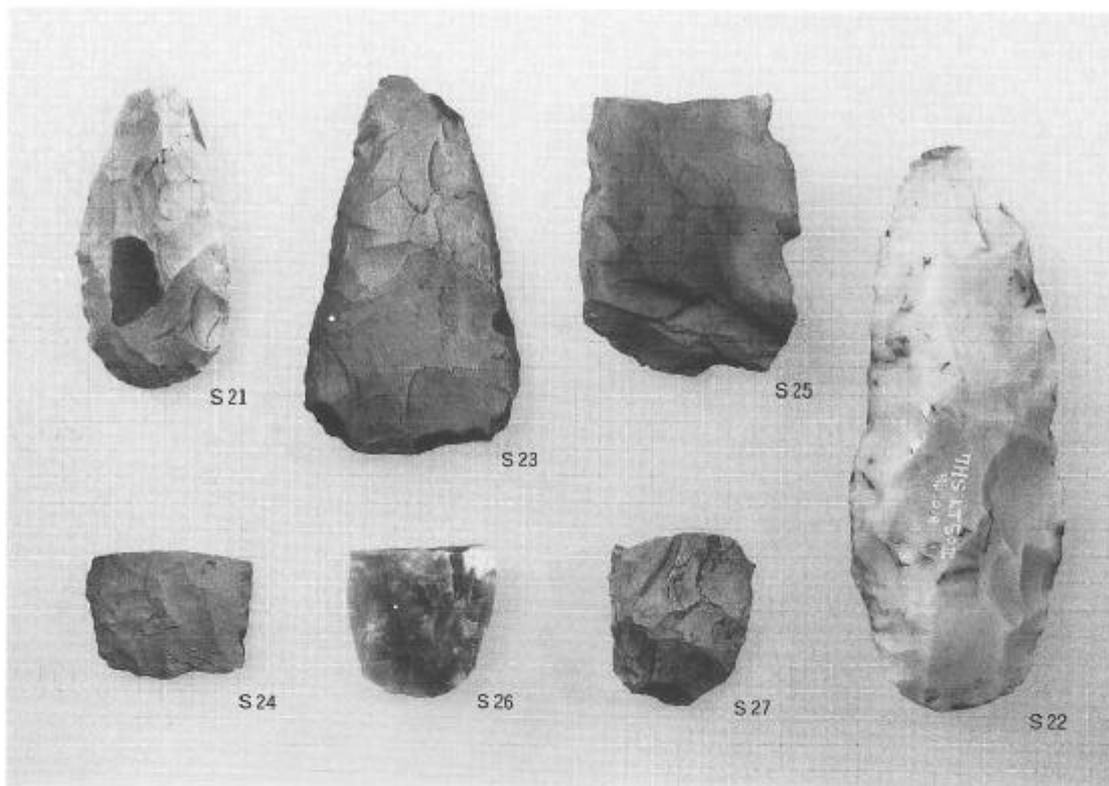
2 遺構外出土遺物(17)



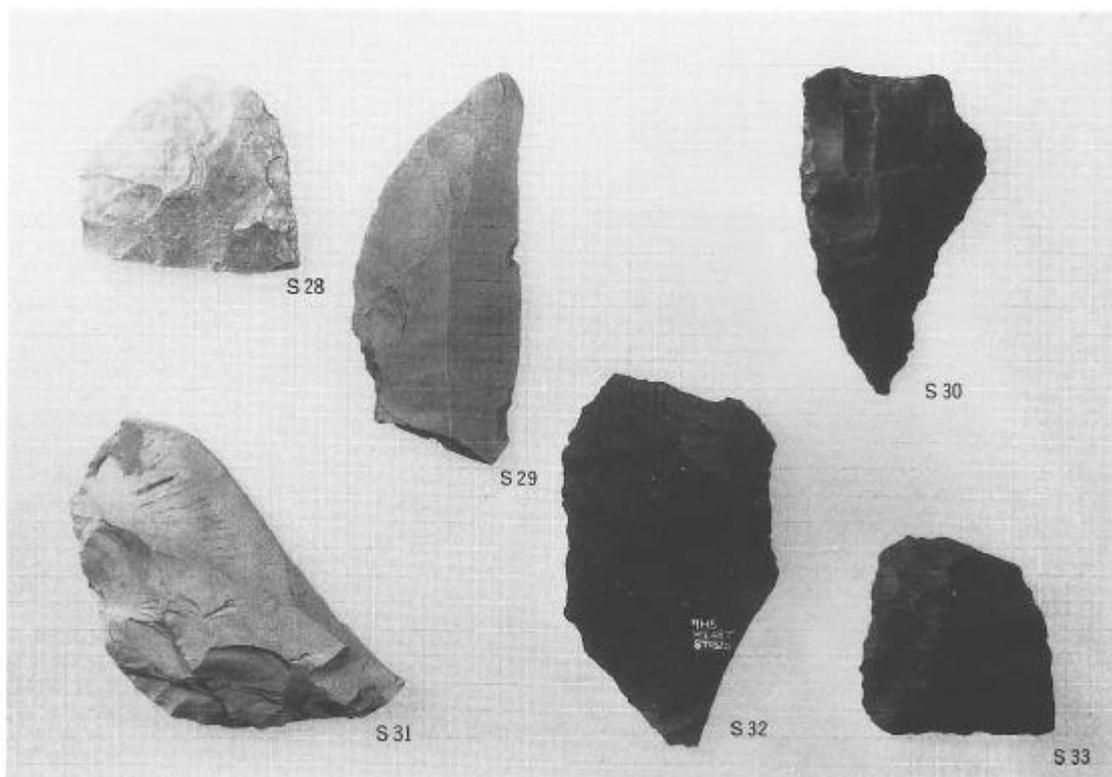
1 遺構外出土遺物(18)



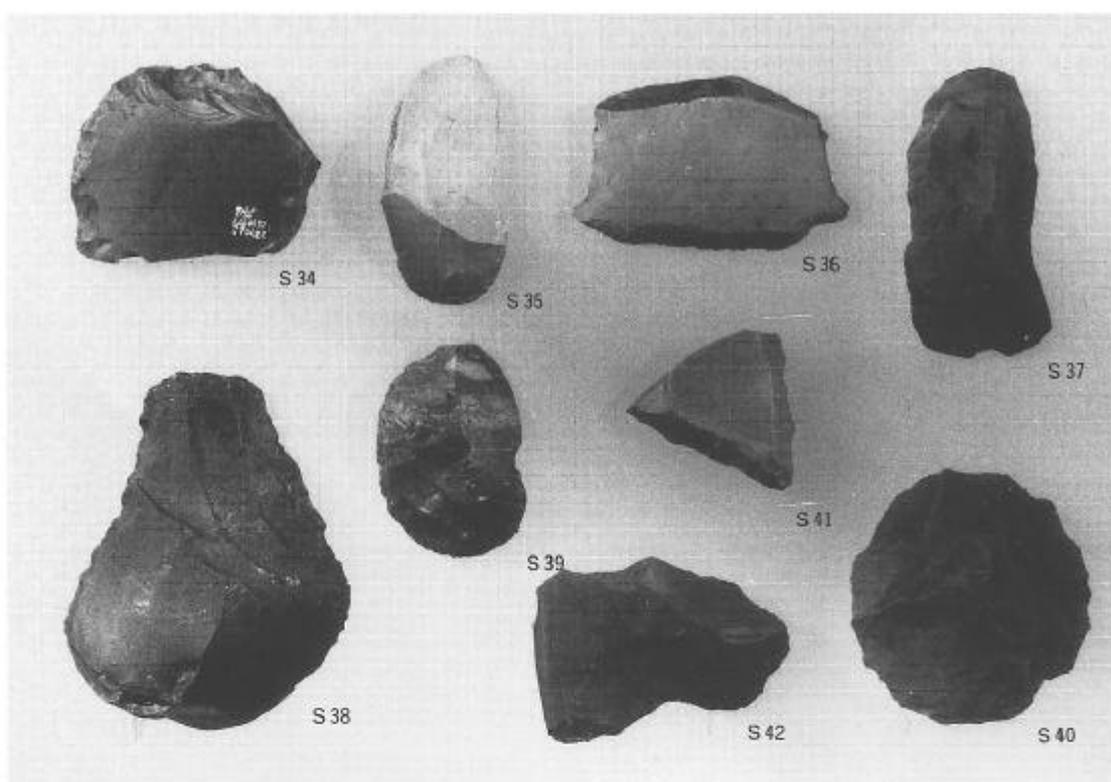
2 遺構外出土遺物(19)



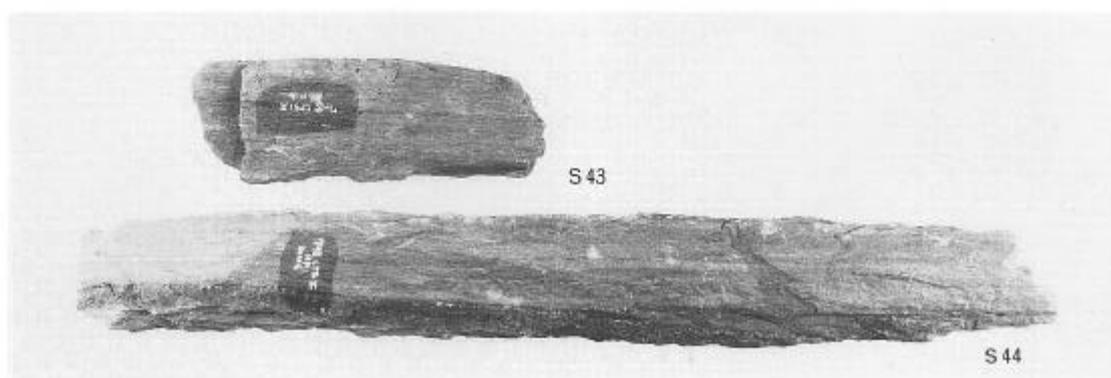
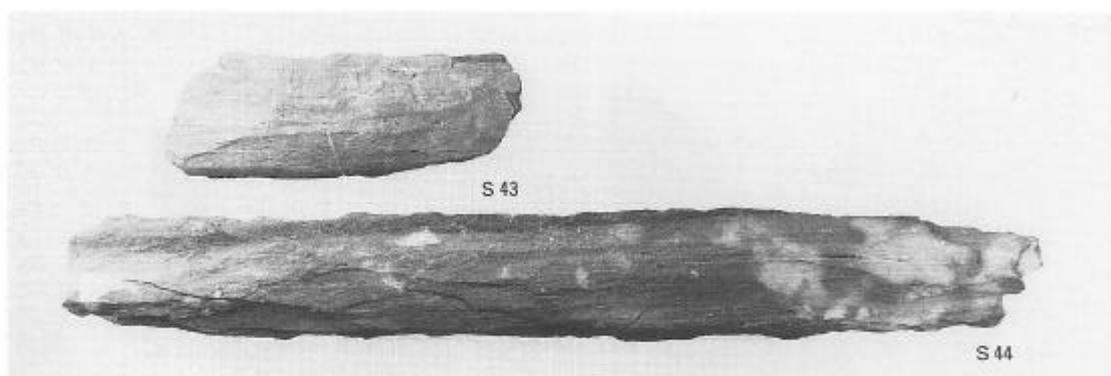
1 遺構外出土遺物(20)



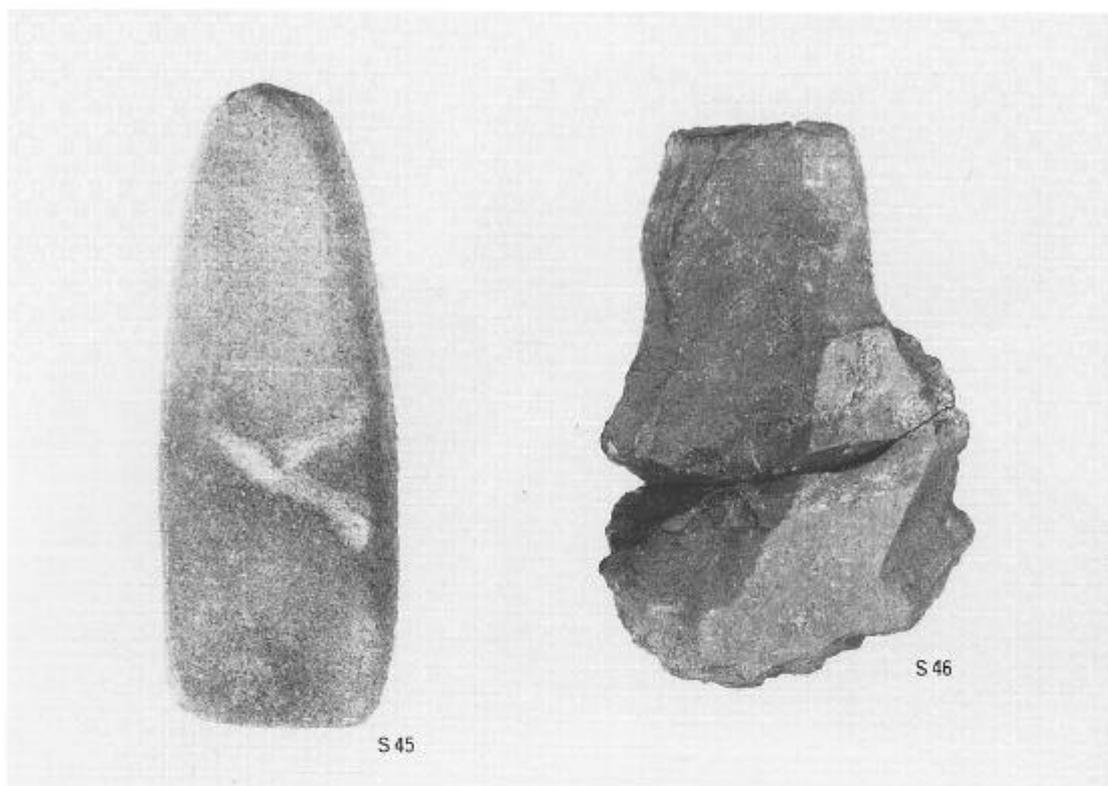
2 遺構外出土遺物(21)



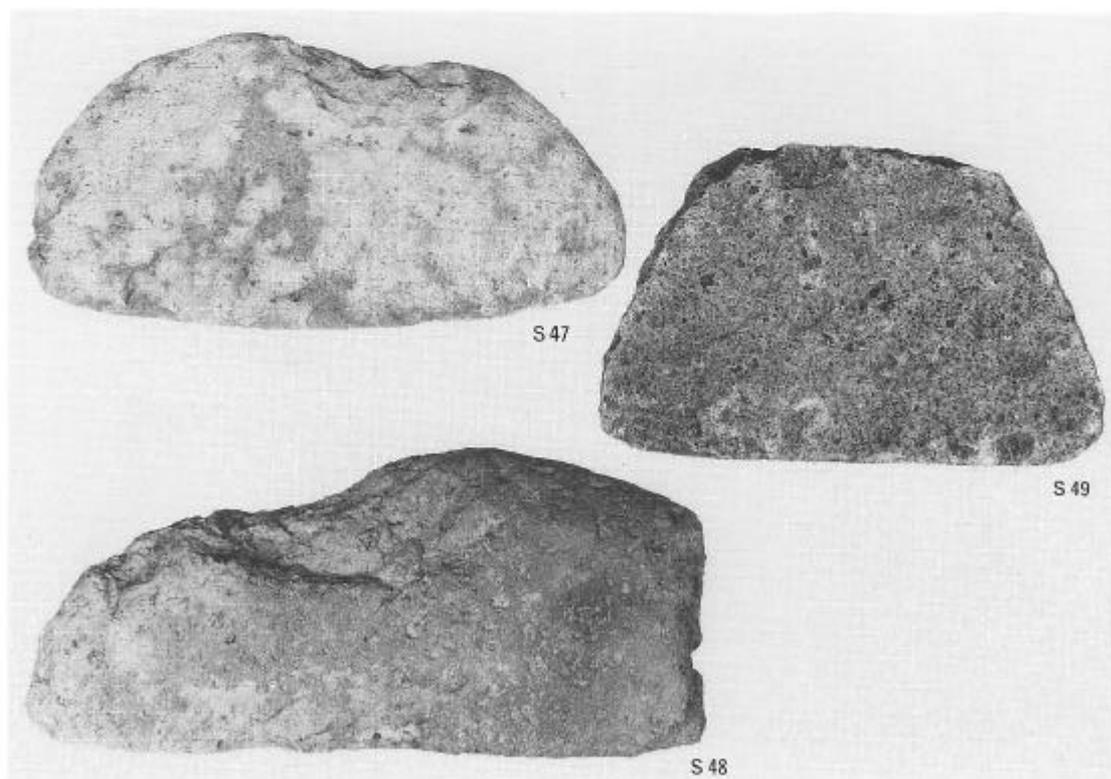
1 遺構外出土遺物(22)



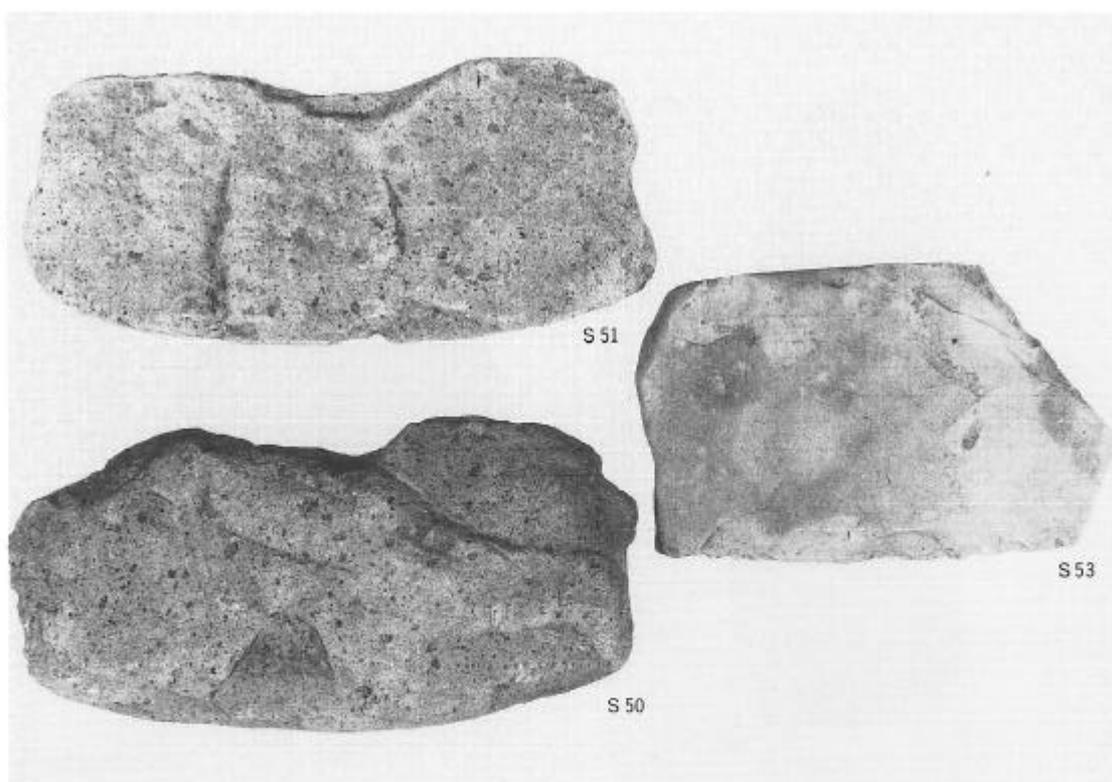
2 遺構外出土遺物(23) 上・表面 下・裏面



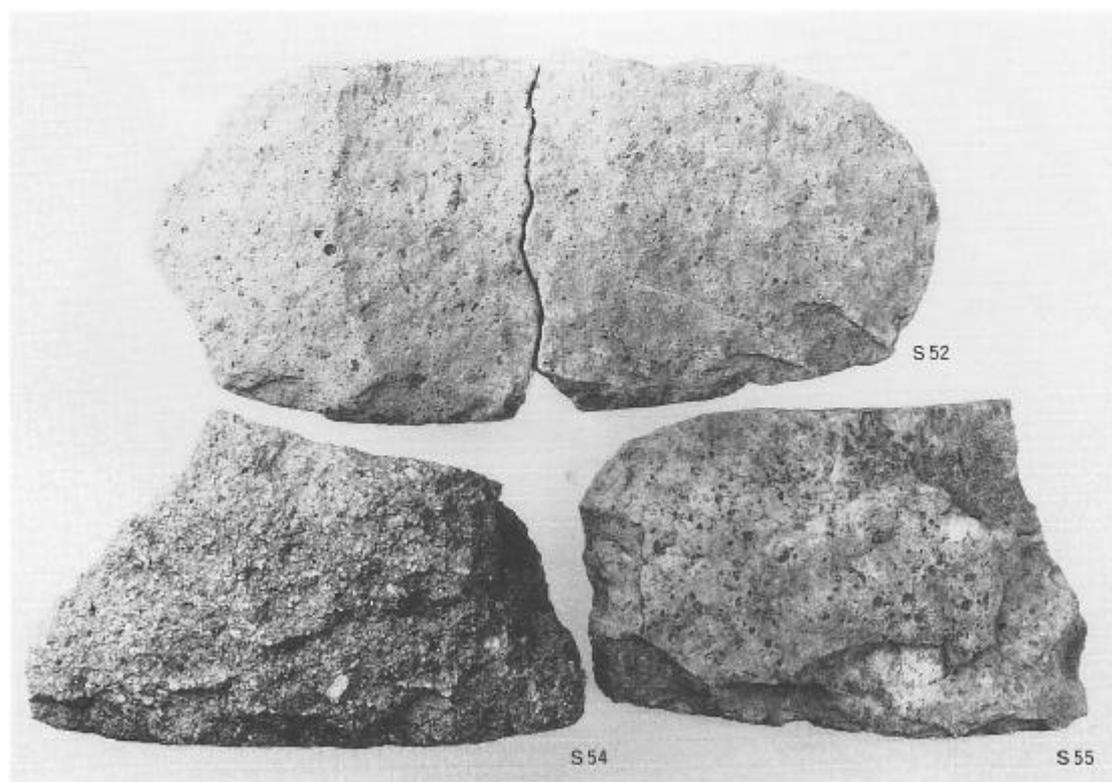
1 遺構外出土遺物(24)



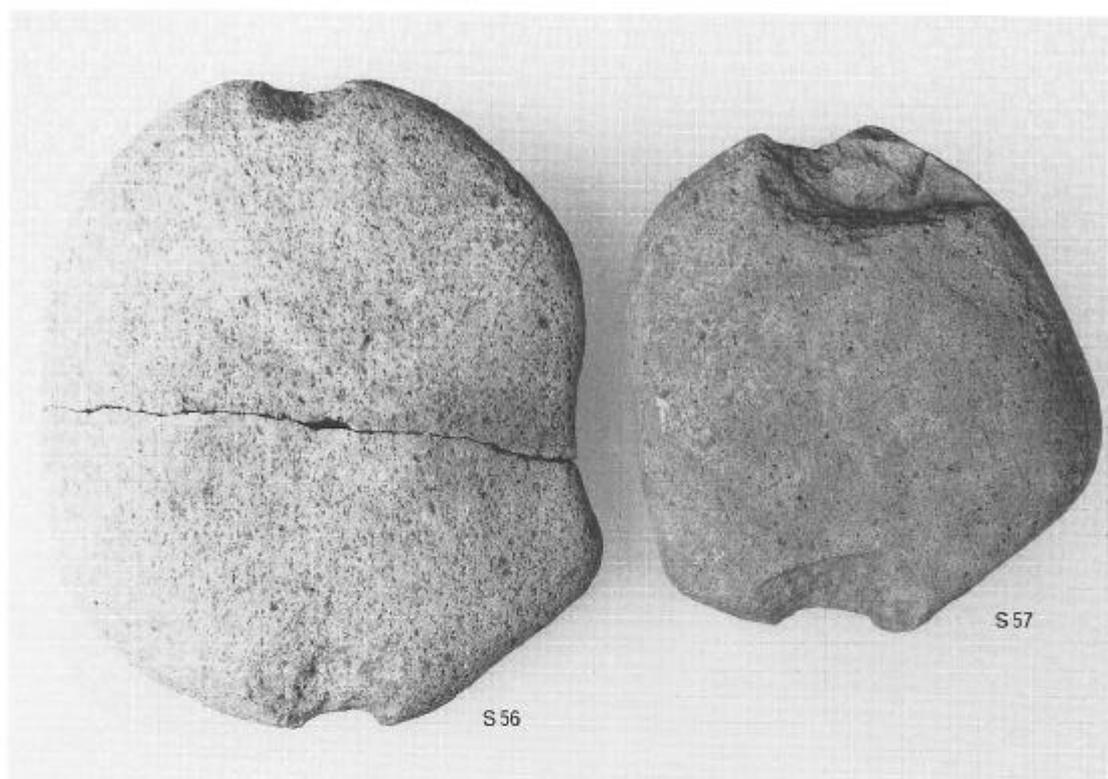
2 遺構外出土遺物(25)



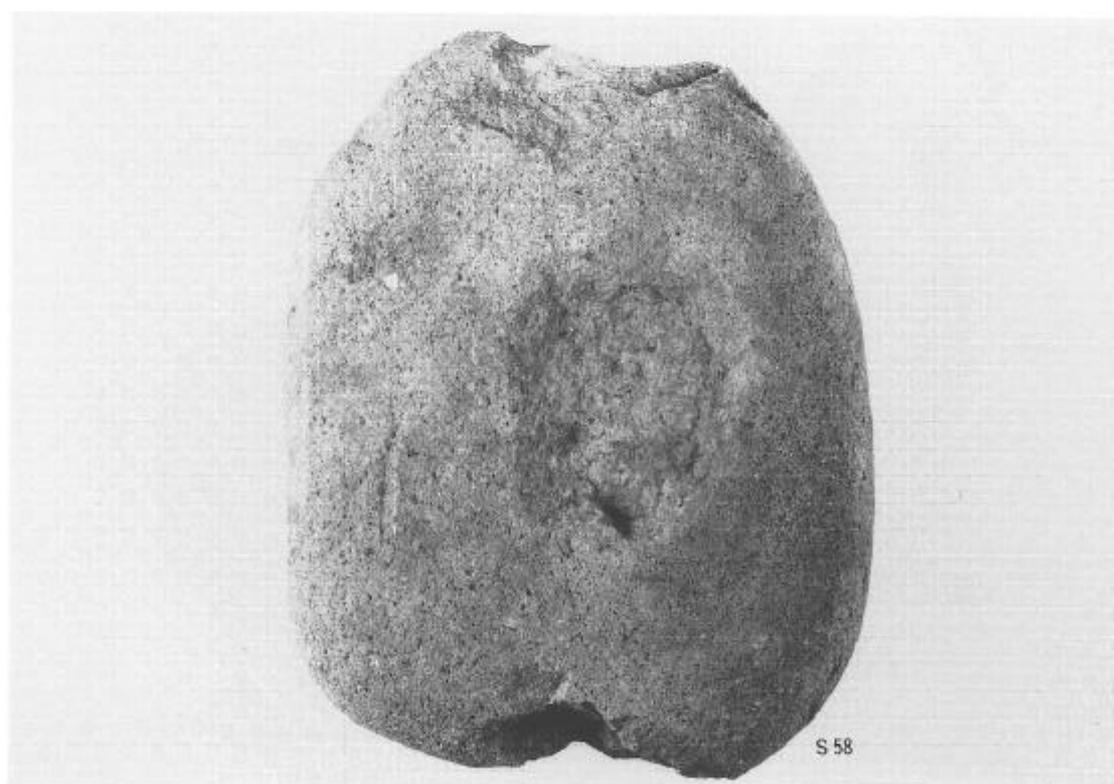
1 遺構外出土遺物(26)



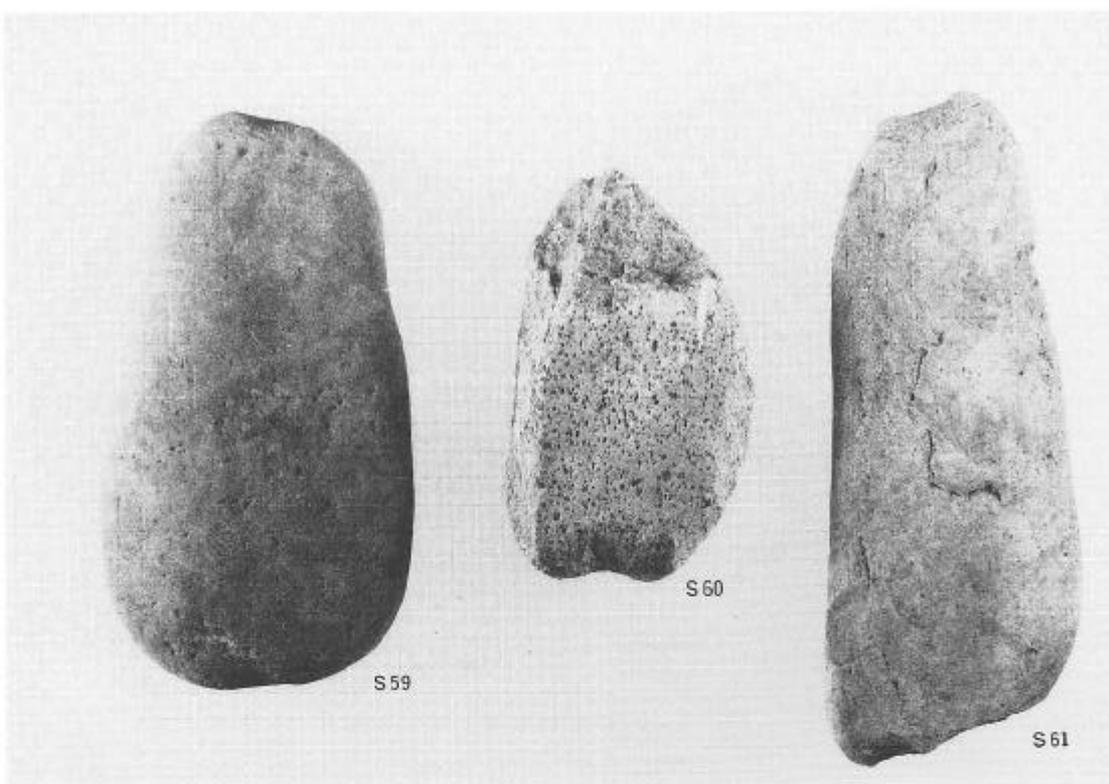
2 遺構外出土遺物(27)



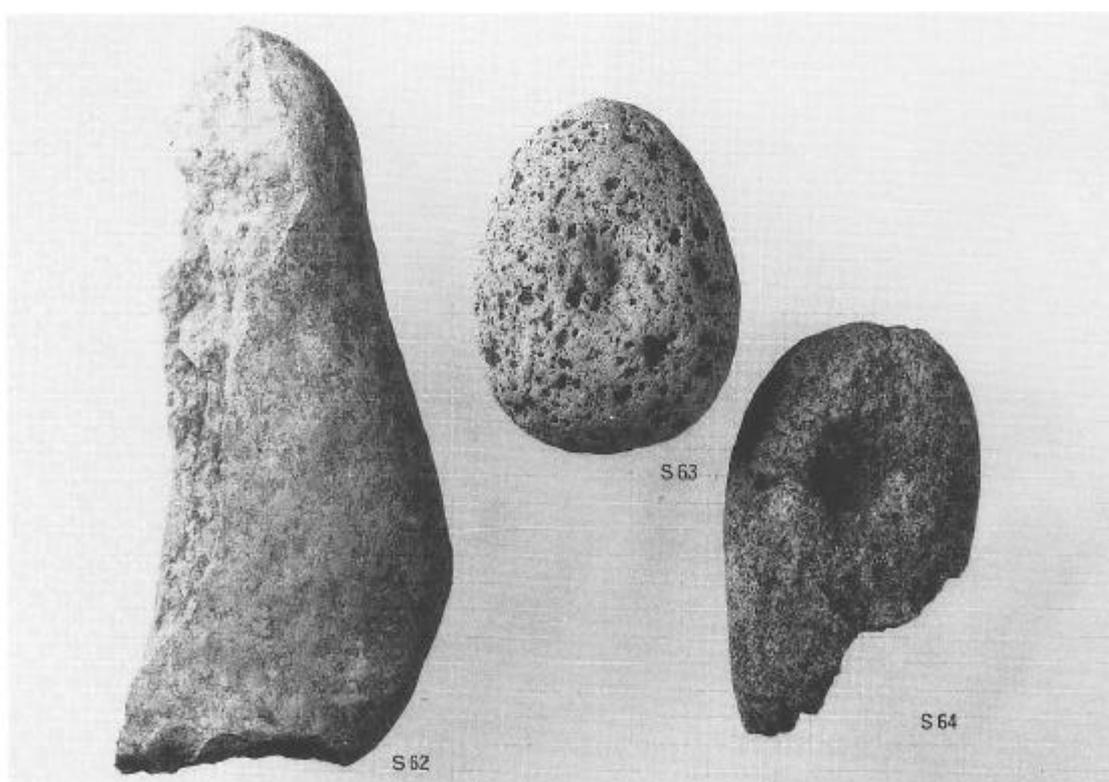
1 遺構外出土遺物(28)



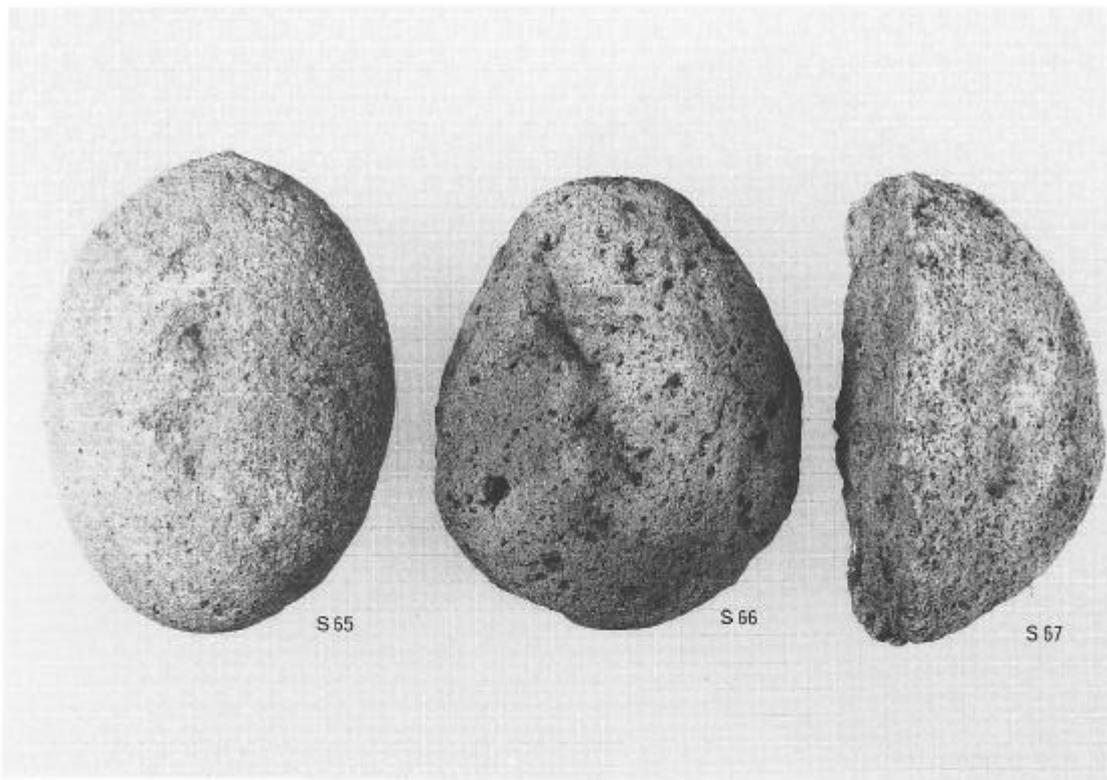
2 遺構外出土遺物(29)



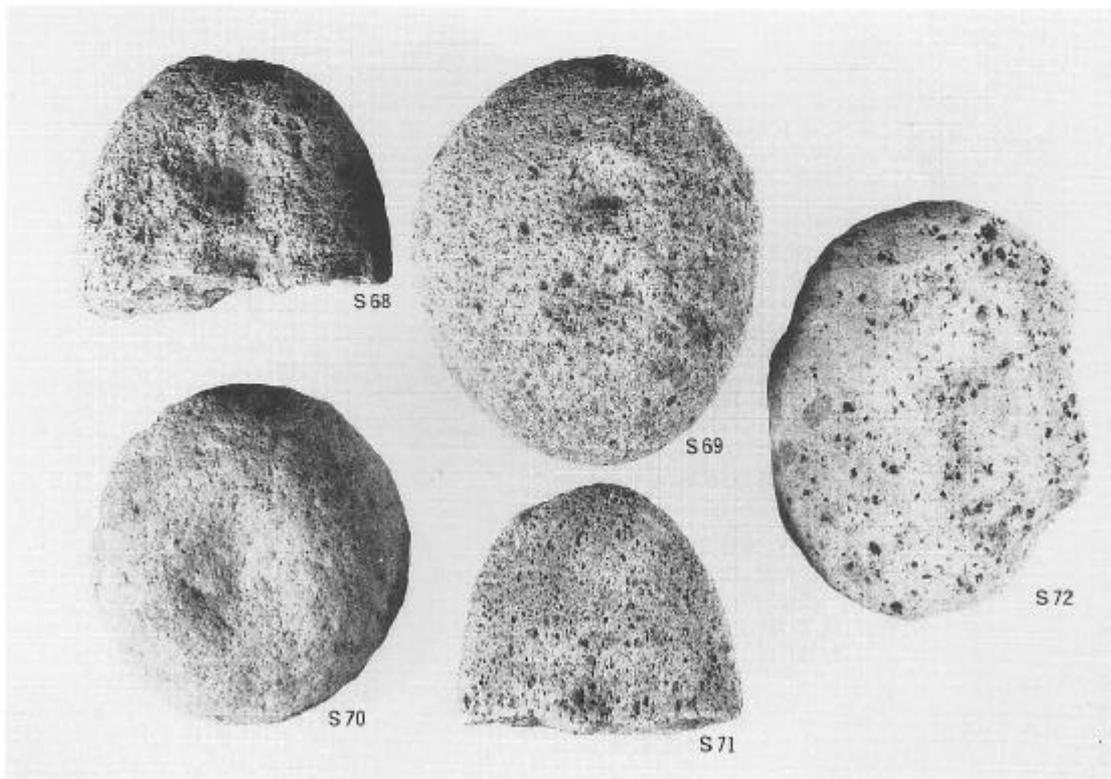
1 遺構外出土遺物(30)



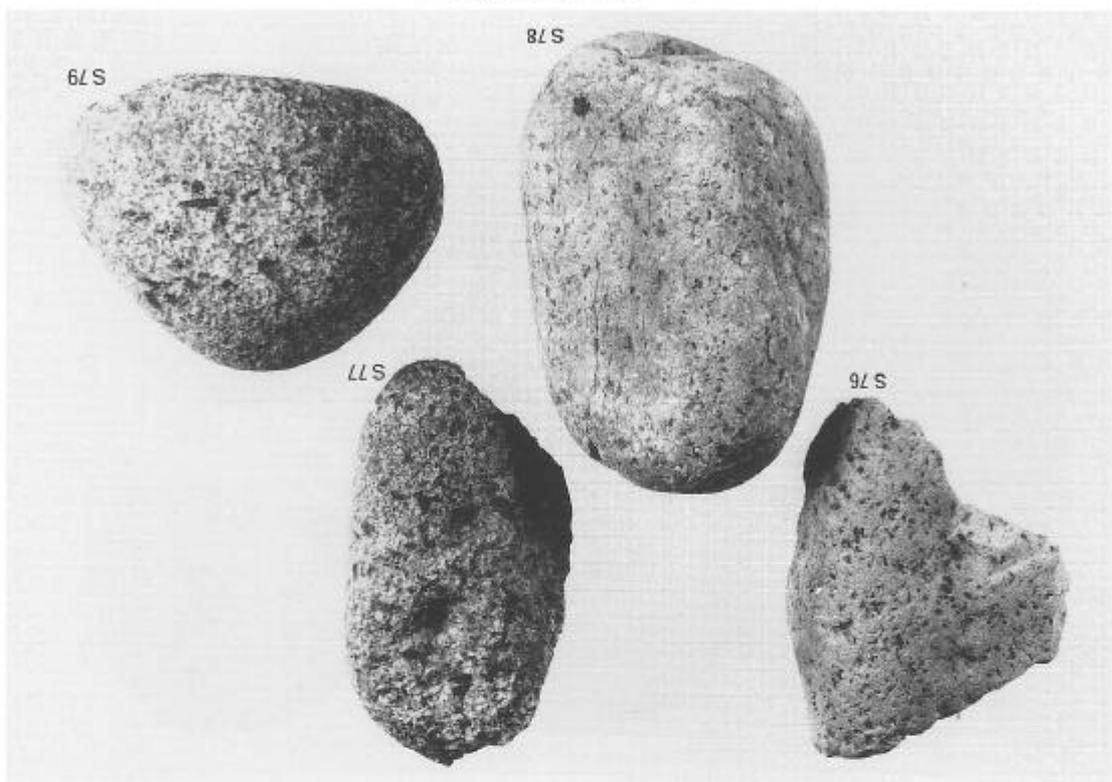
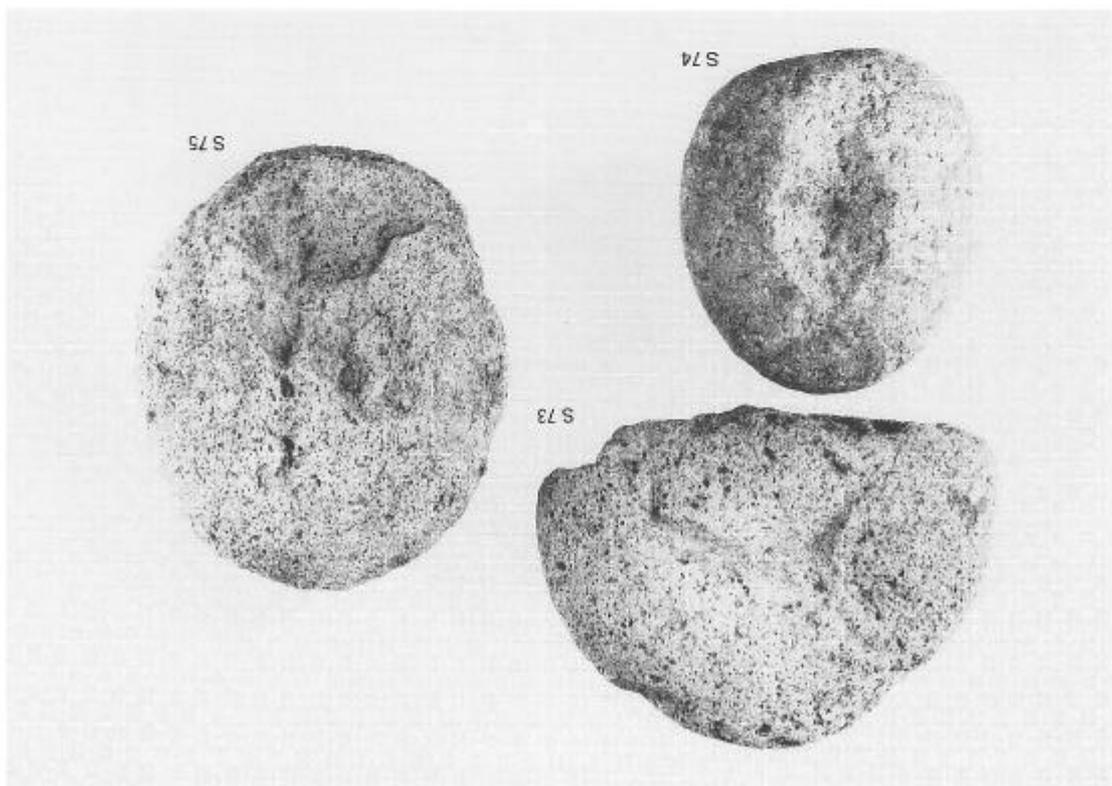
2 遺構外出土遺物(31)

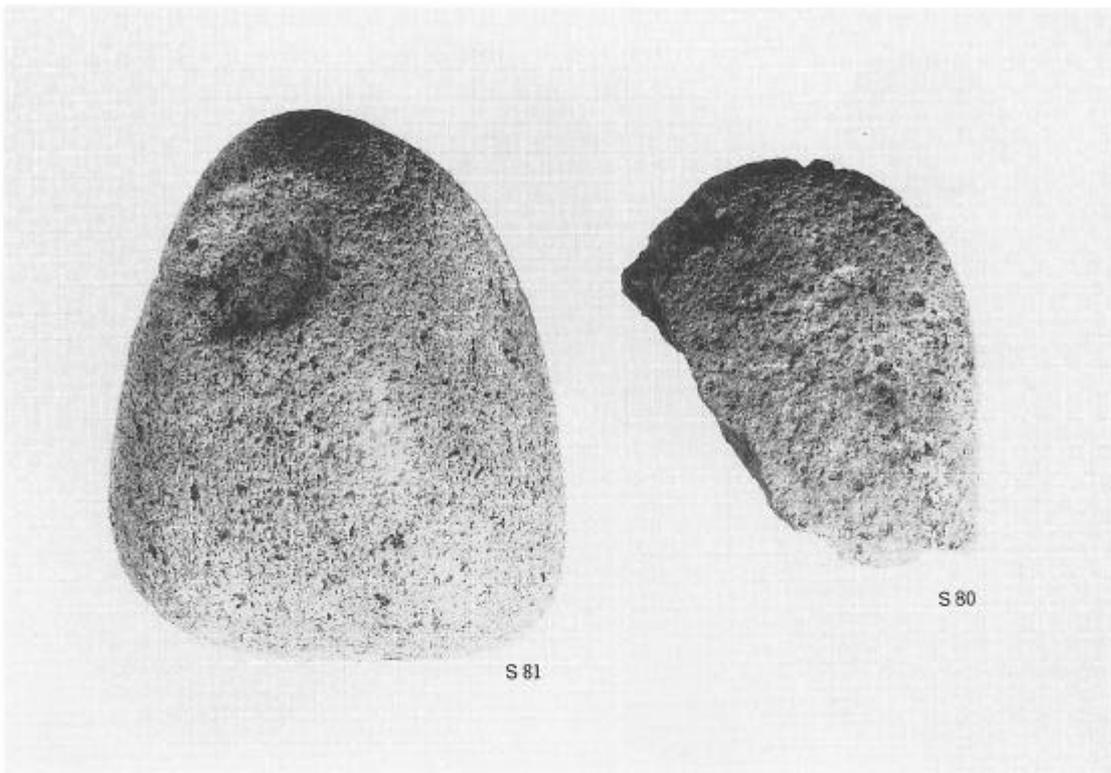


1 遺構外出土遺物(32)

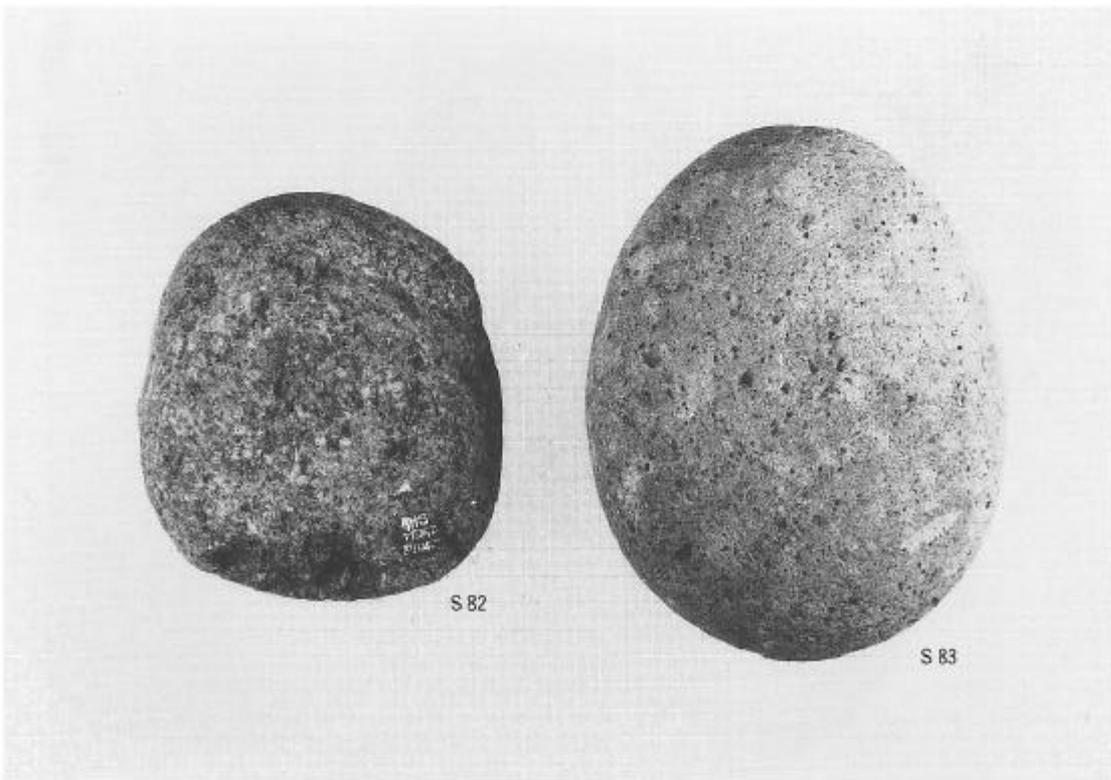


2 遺構外出土遺物(33)

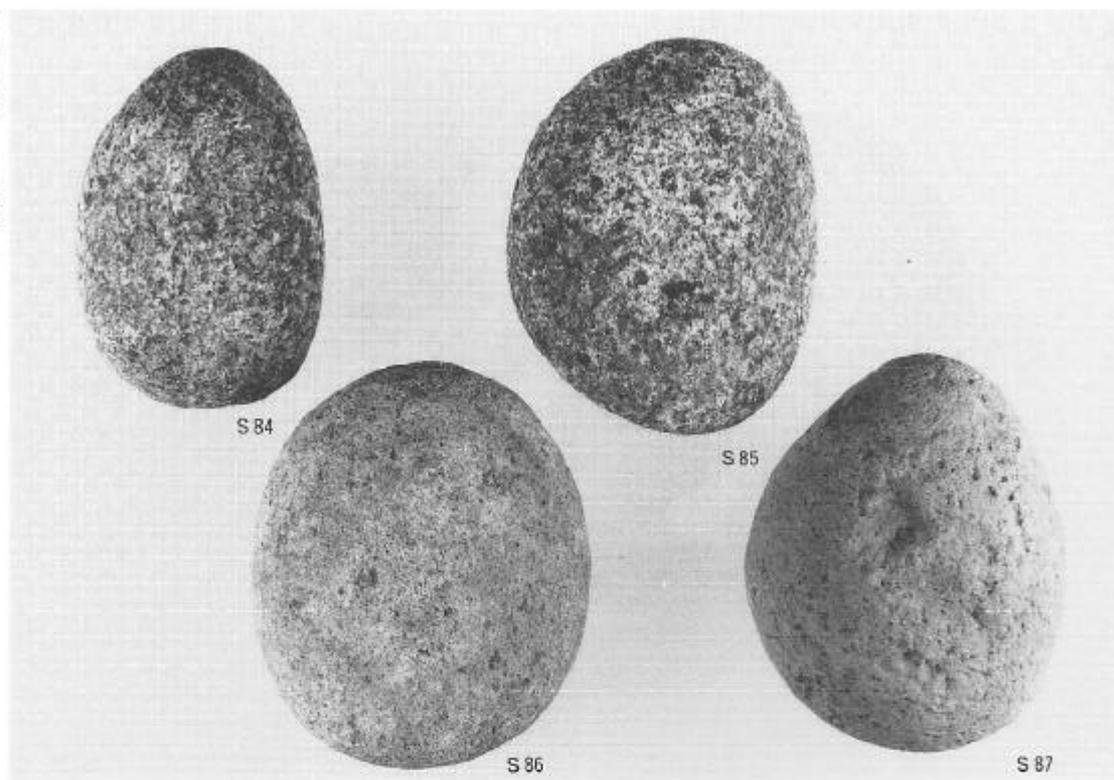




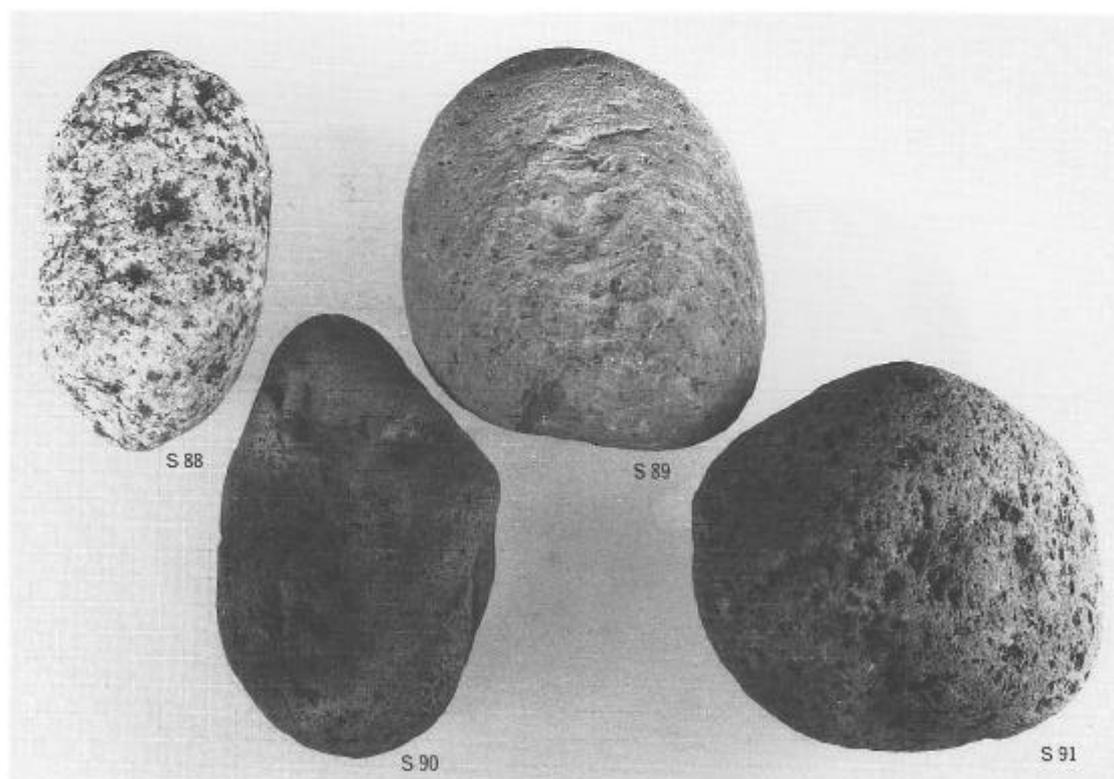
1 遺構外出土遺物(36)



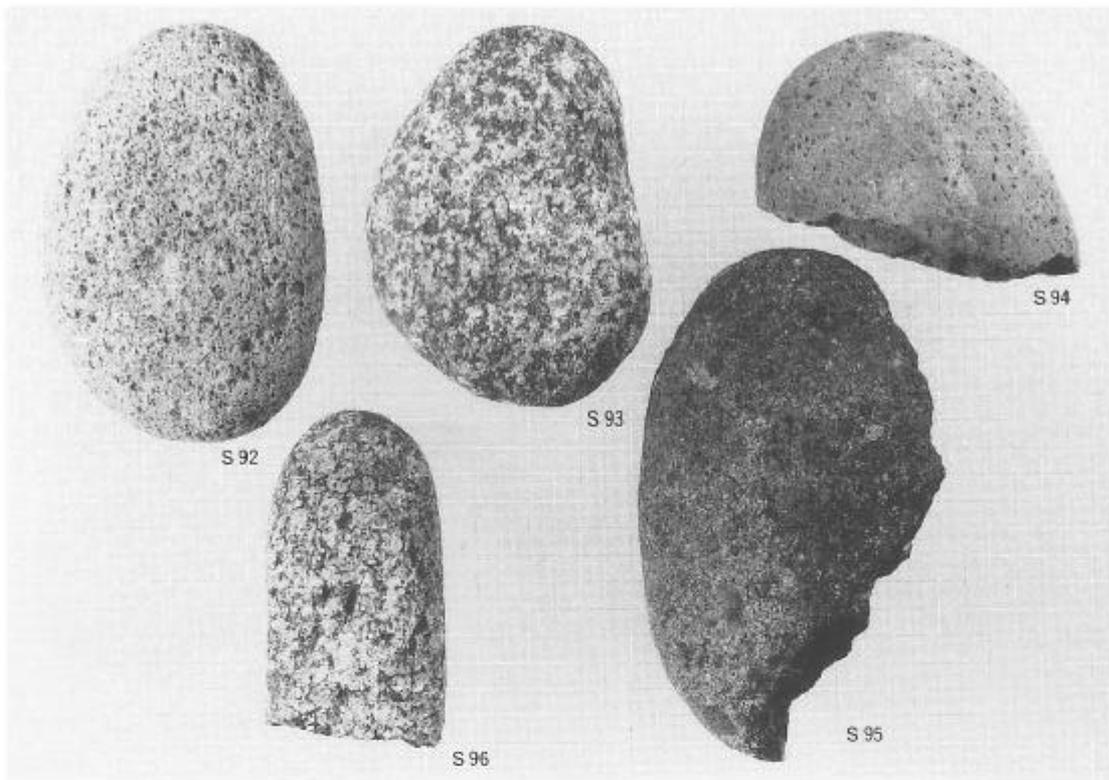
2 遺構外出土遺物(37)



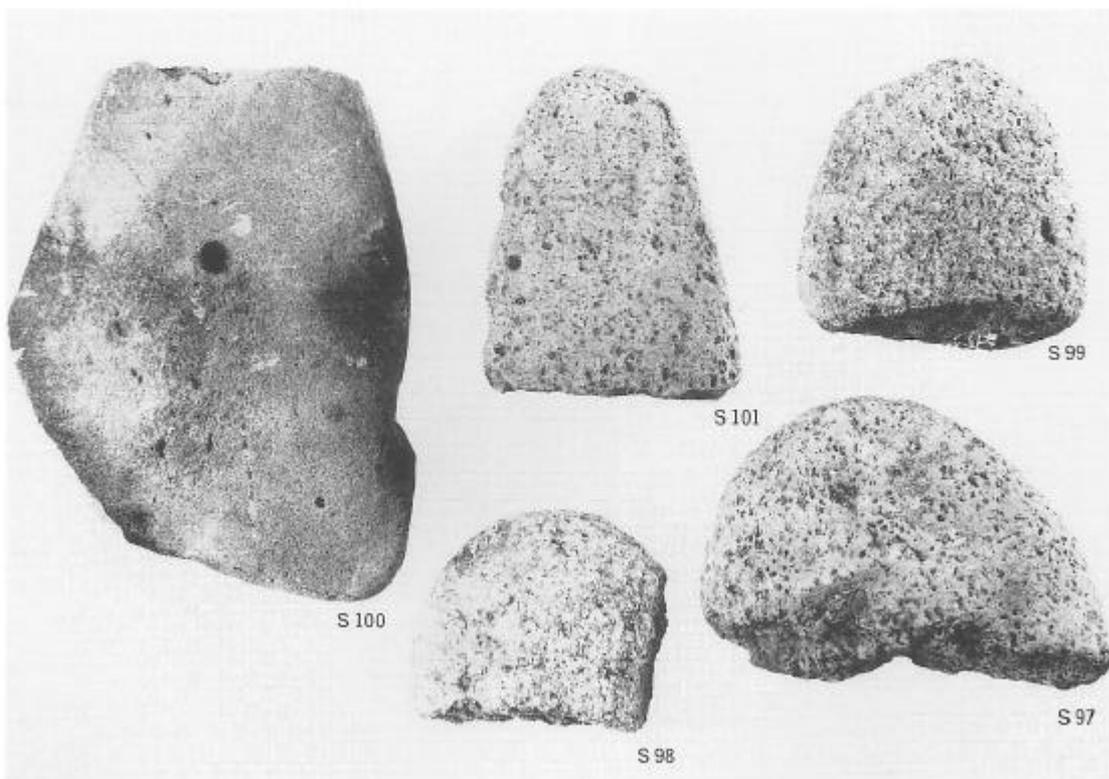
1 遺構外出土遺物(38)



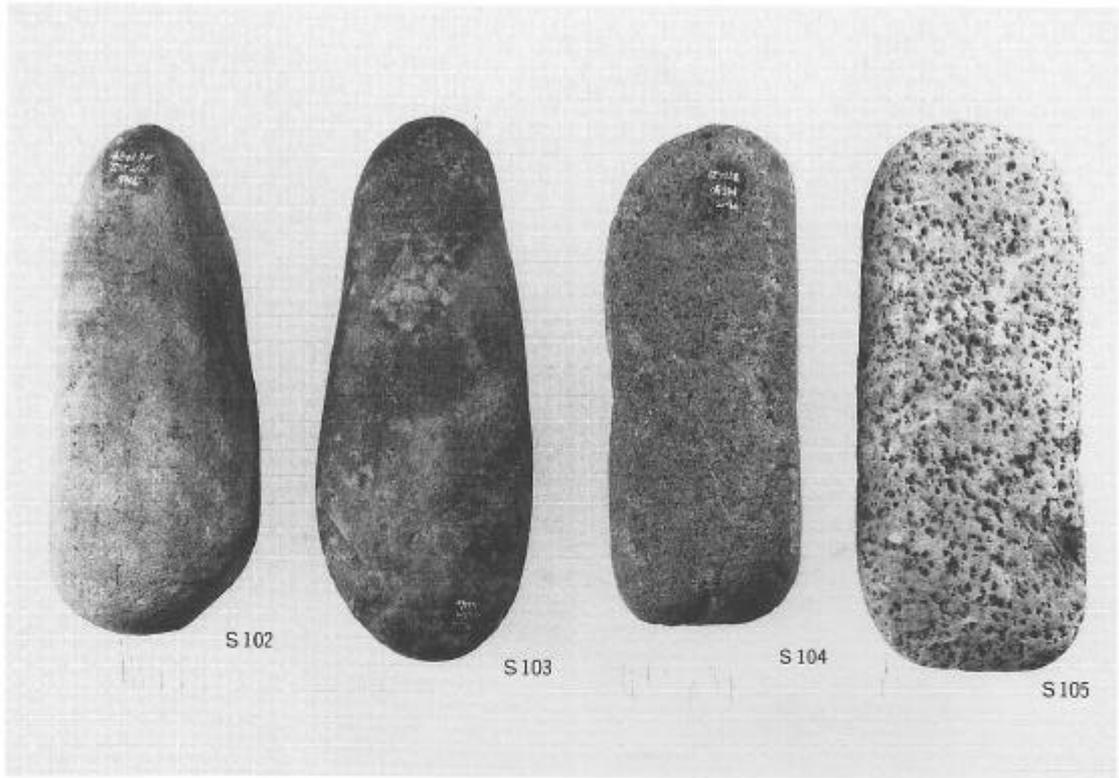
2 遺構外出土遺物(39)



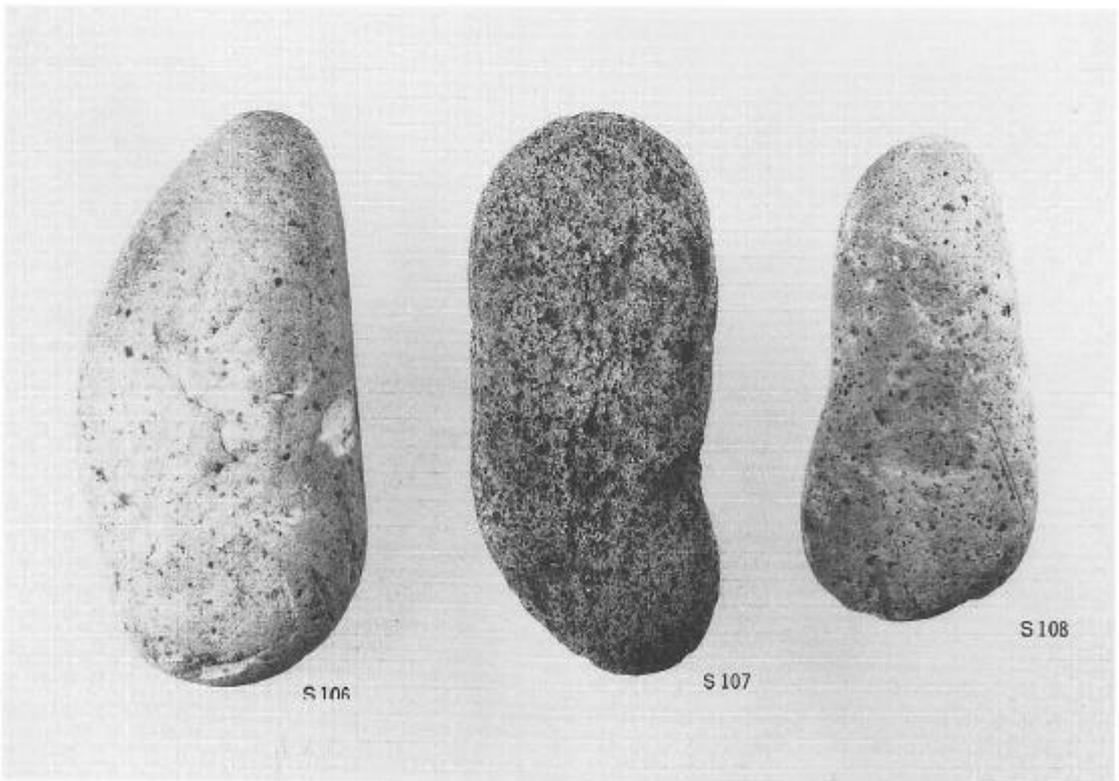
1 遺構外出土遺物(40)



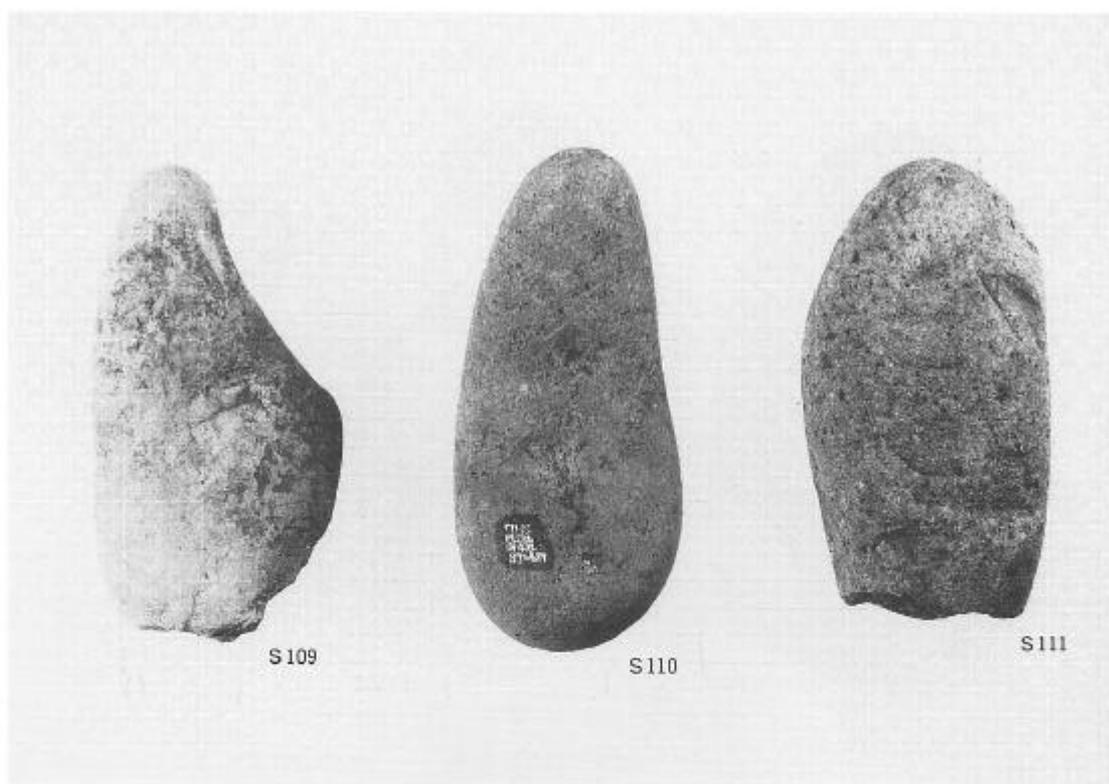
2 遺構外出土遺物(41)



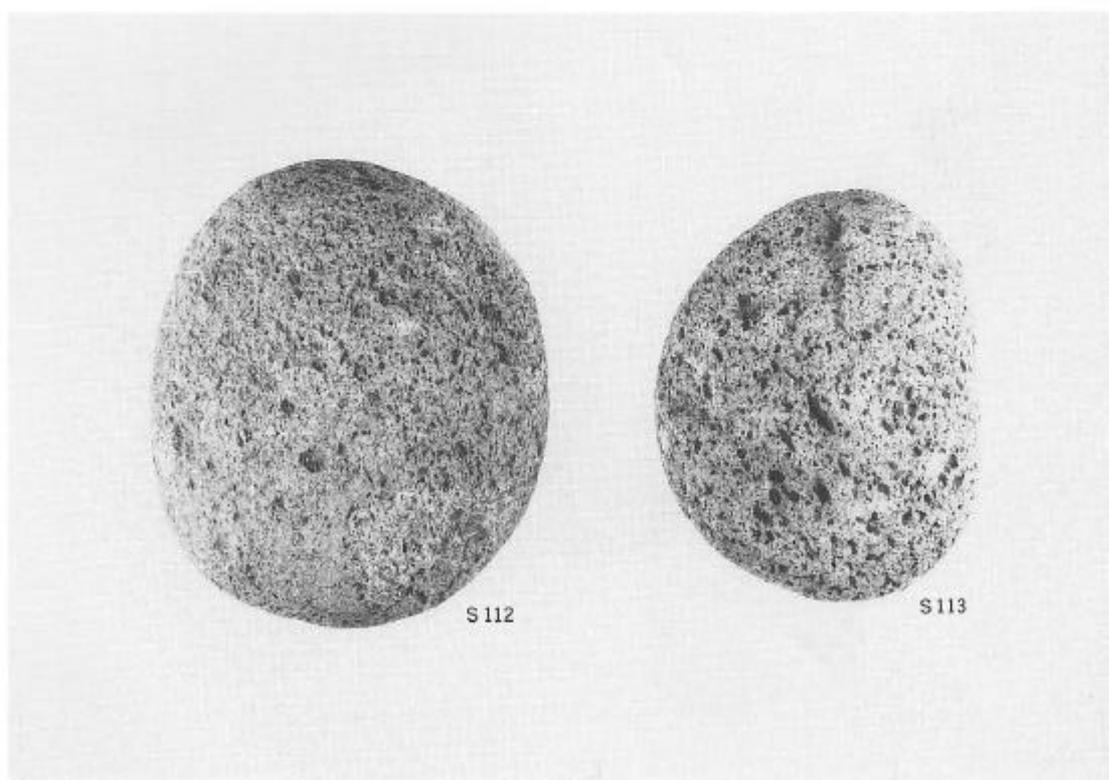
1 遺構外出土遺物(42)



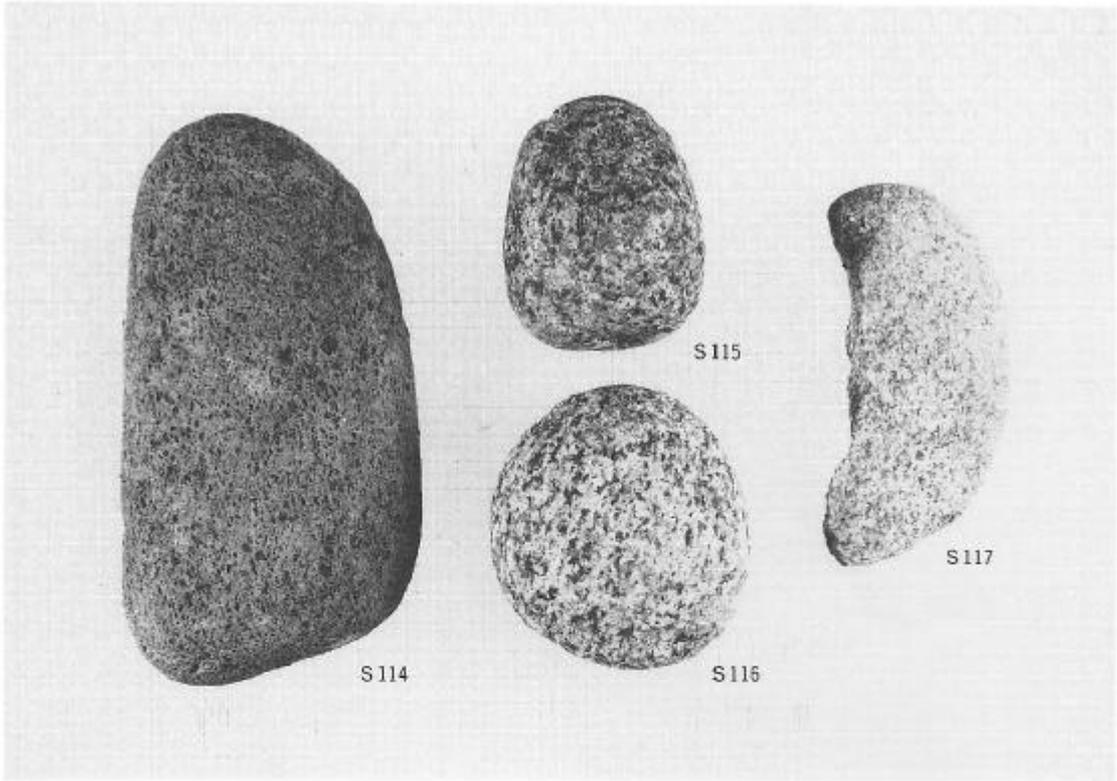
2 遺構外出土遺物(43)



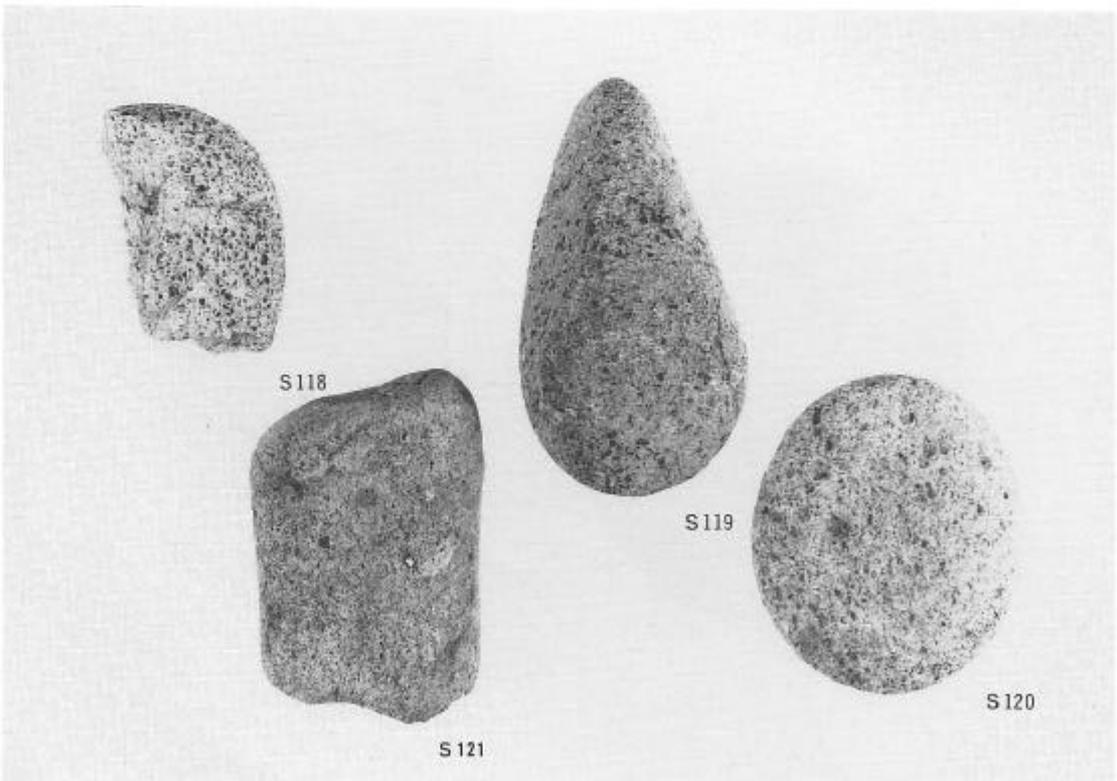
1 遺構外出土遺物(44)



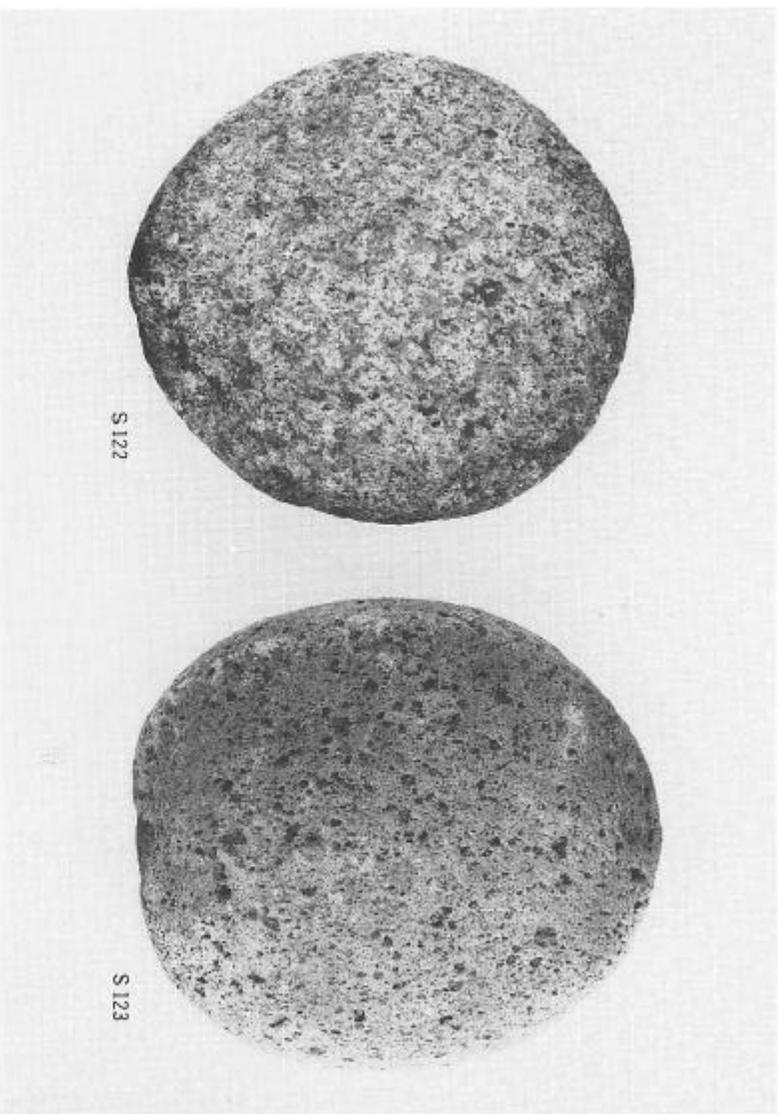
2 遺構外出土遺物(45)



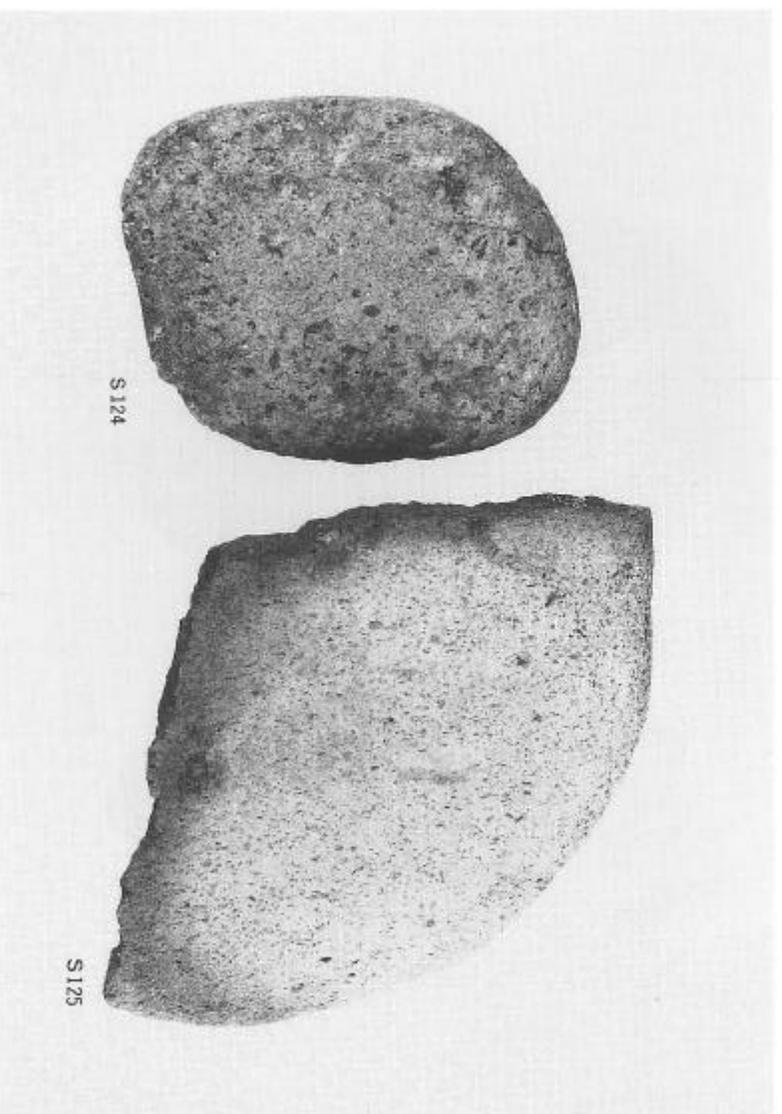
1 遺構外出土遺物(46)



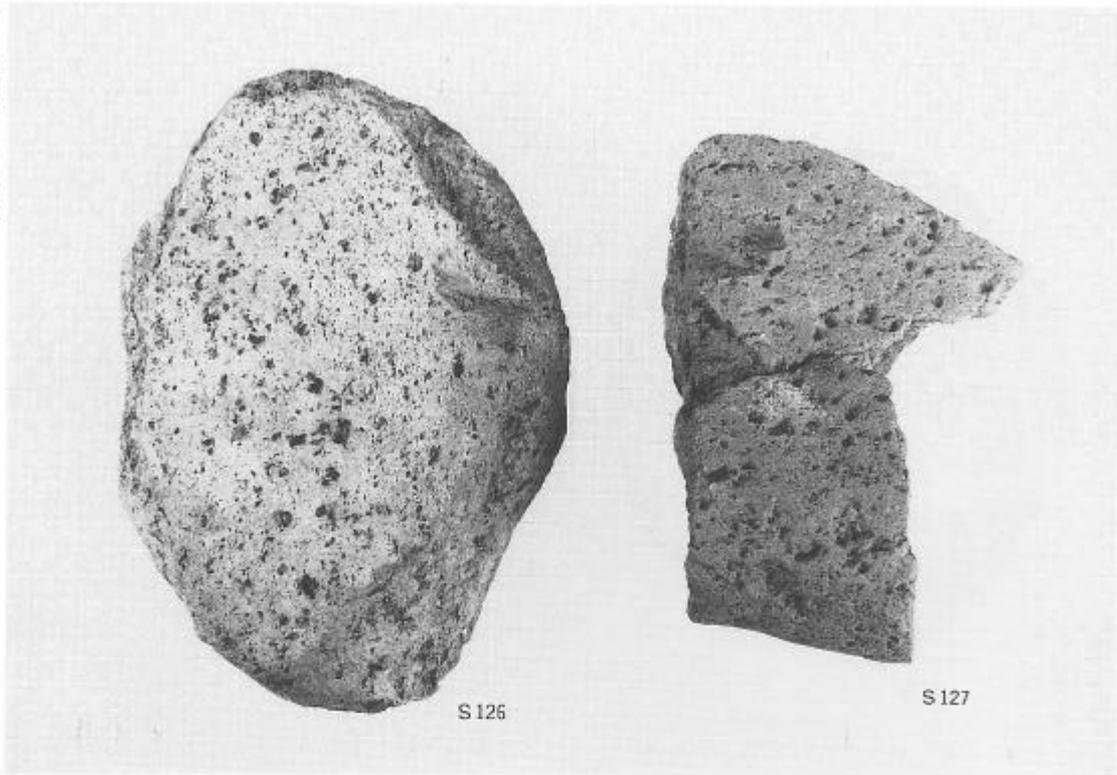
2 遺構外出土遺物(47)



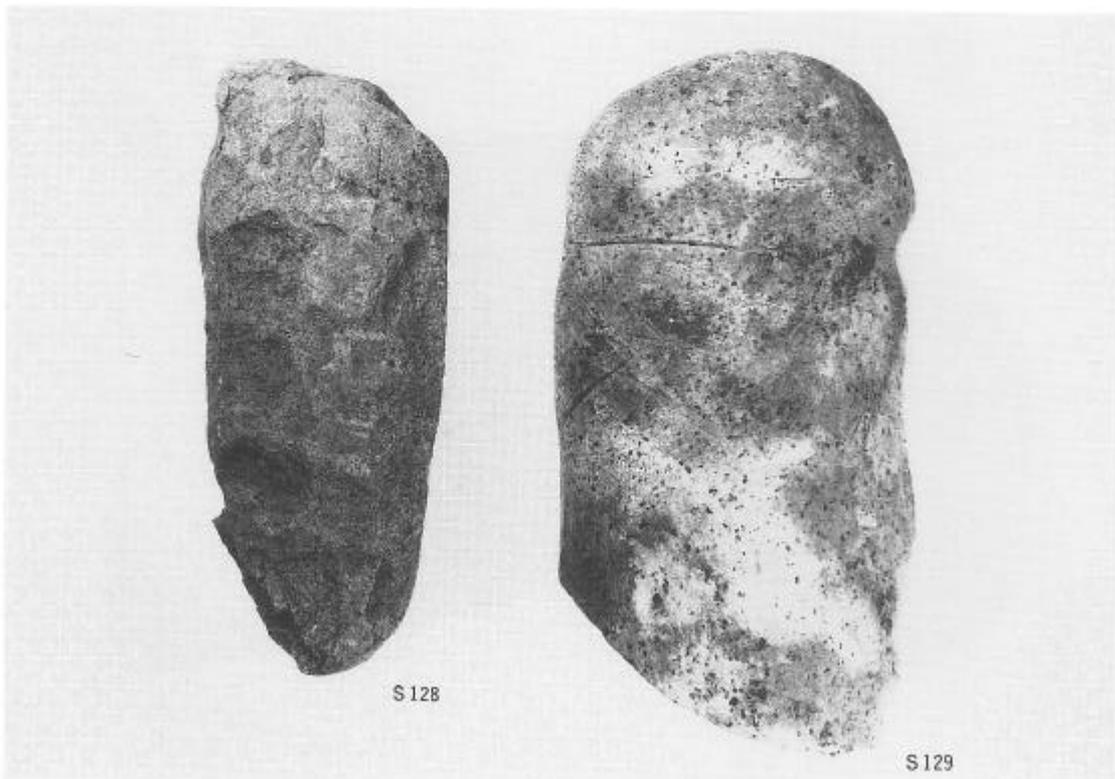
1 遺構外出土遺物(48)



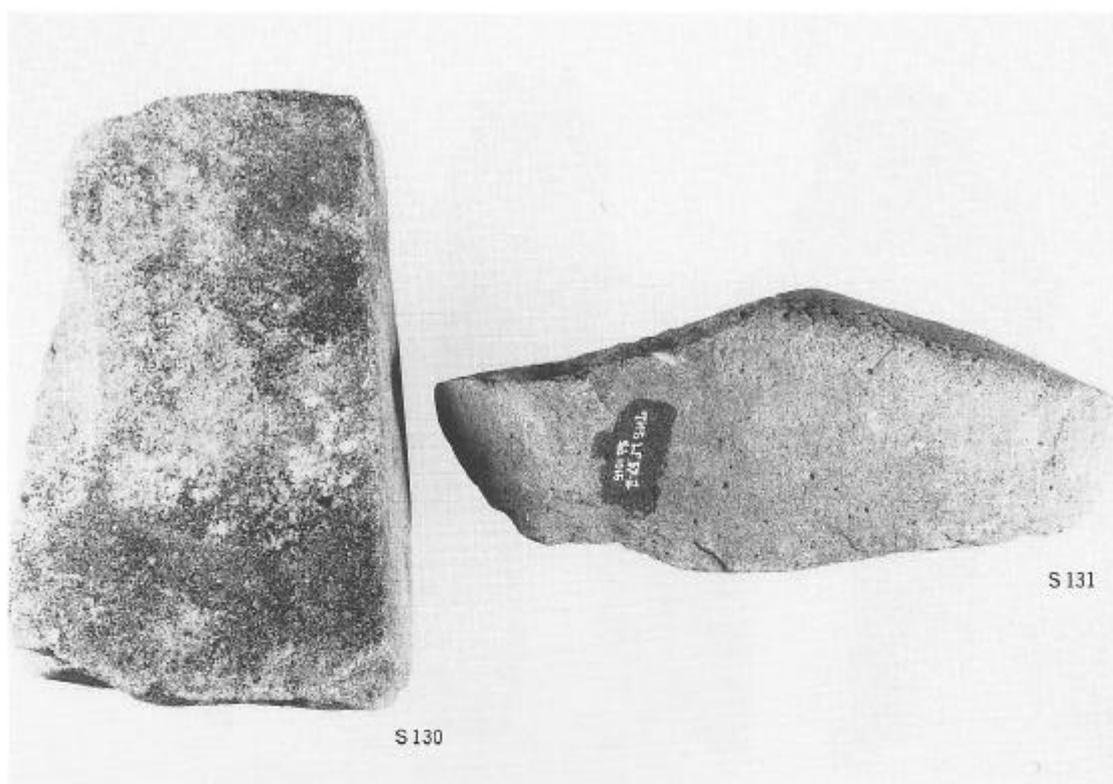
2 遺構外出土遺物(49)



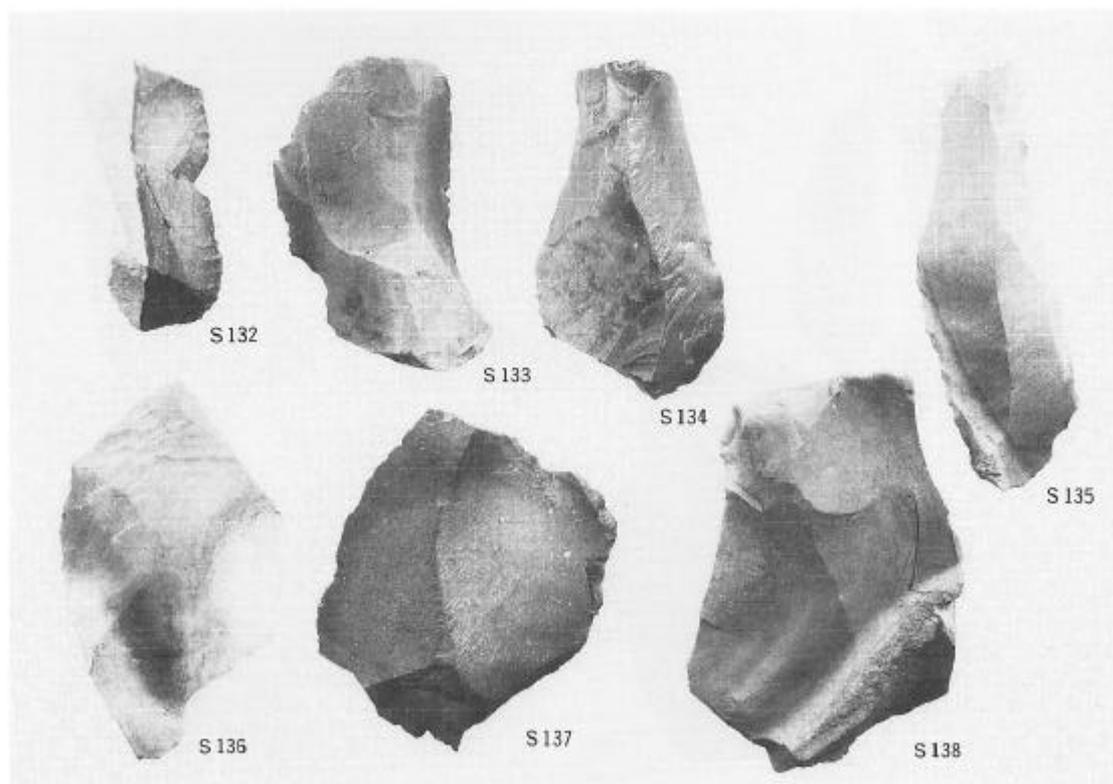
1 遺構外出土遺物(50)



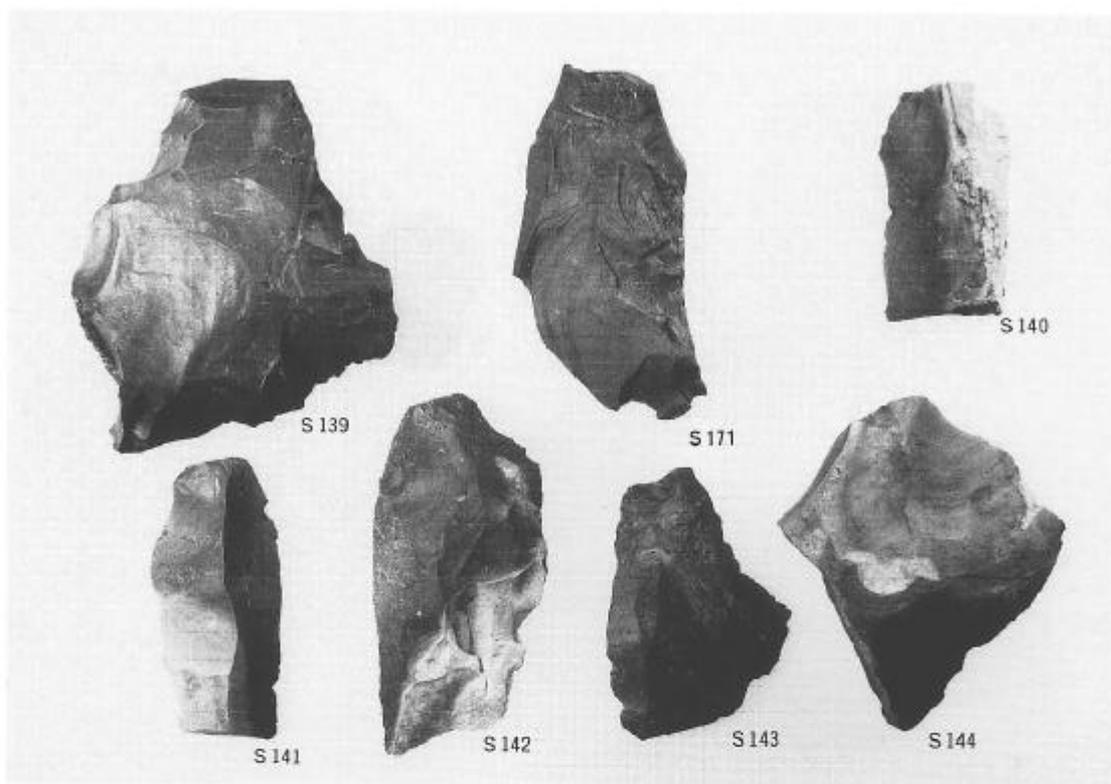
2 遺構外出土遺物(51)



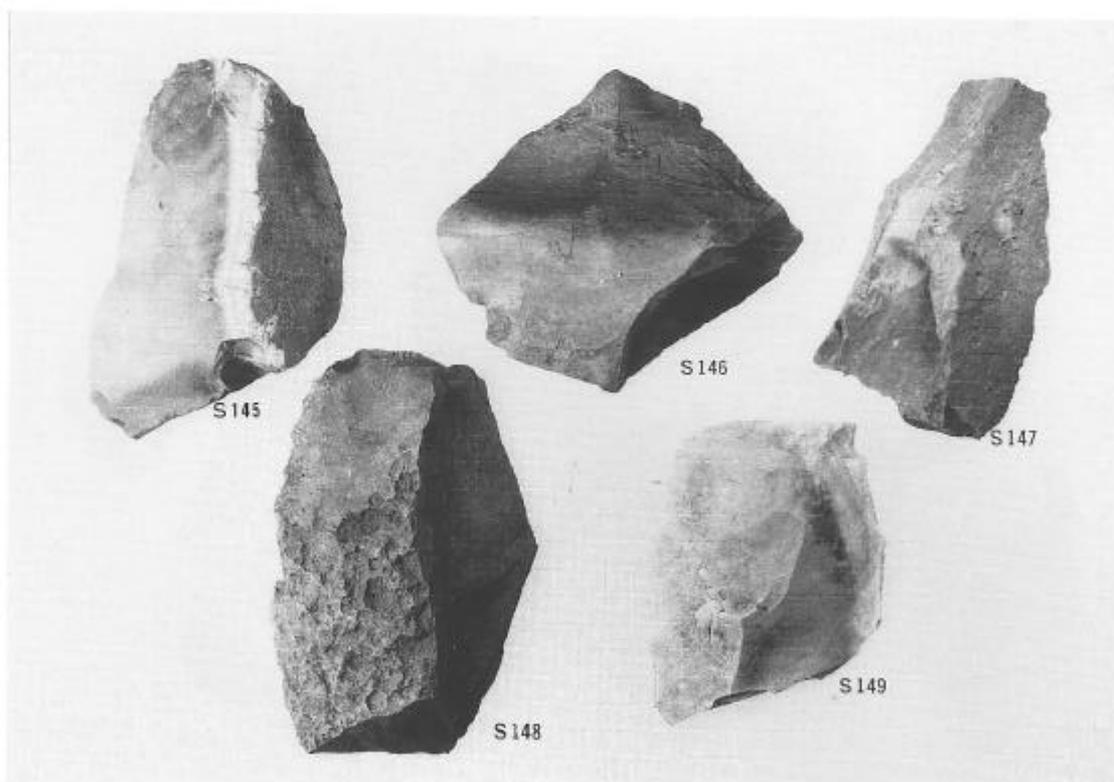
1 遺構外出土遺物(52)



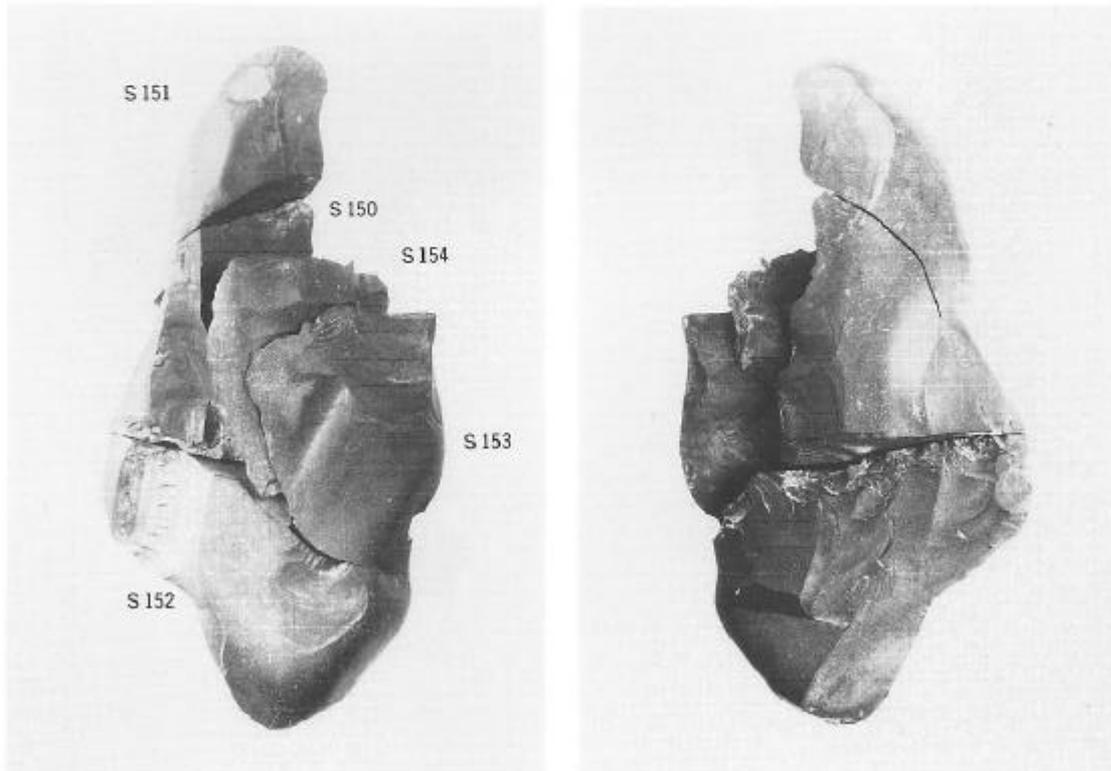
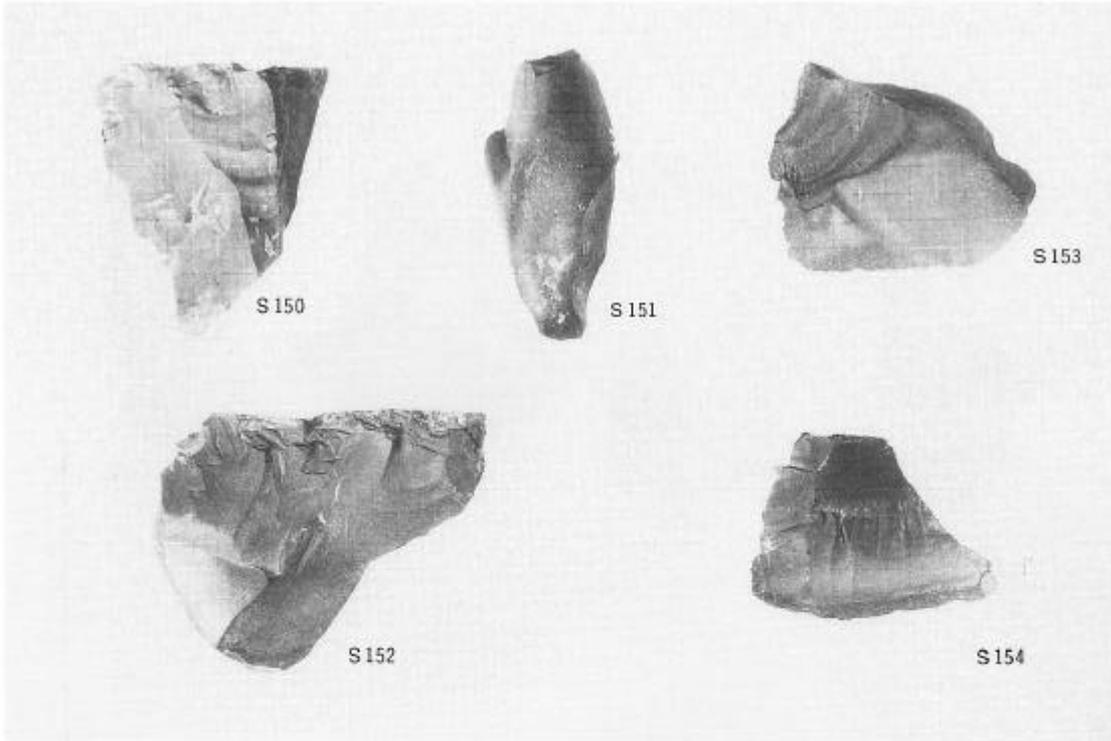
2 遺構外出土遺物(53)



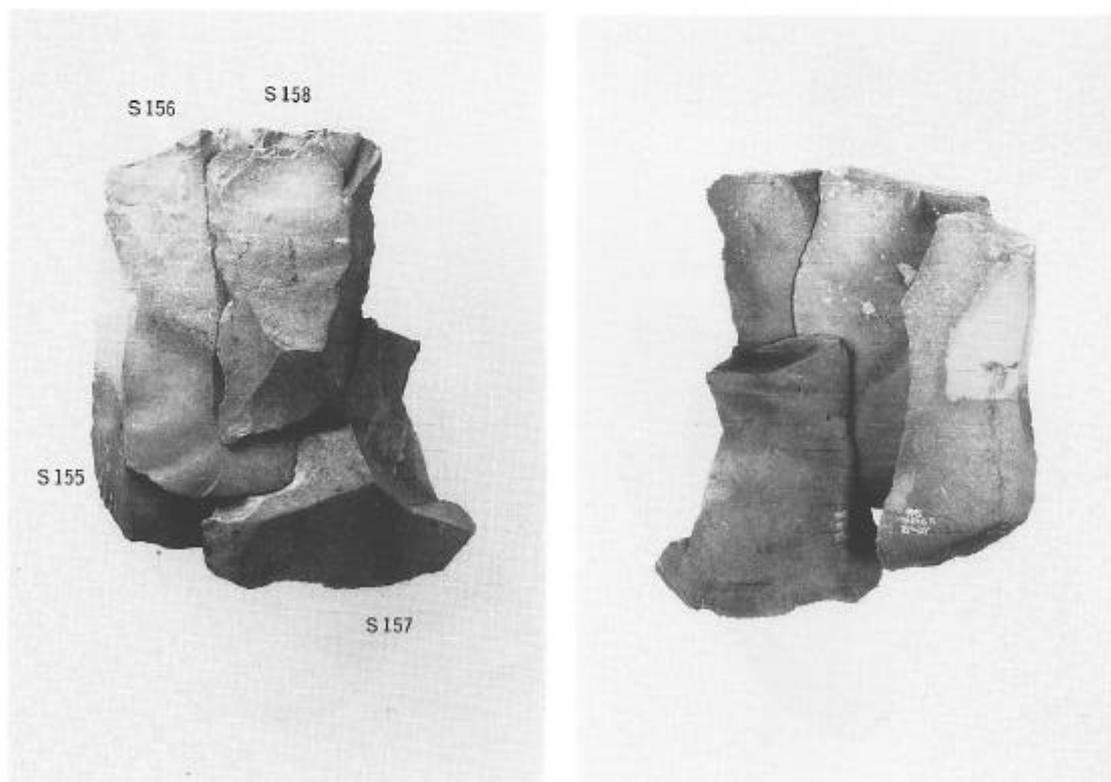
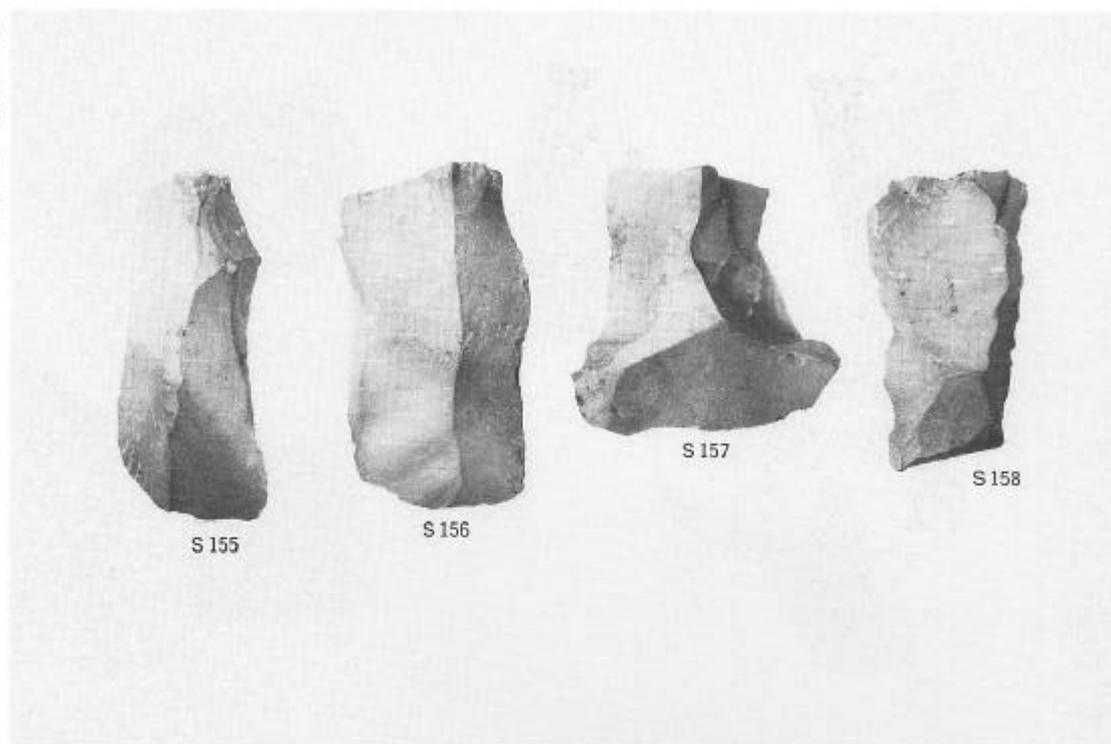
1 遺構外出土遺物(54)



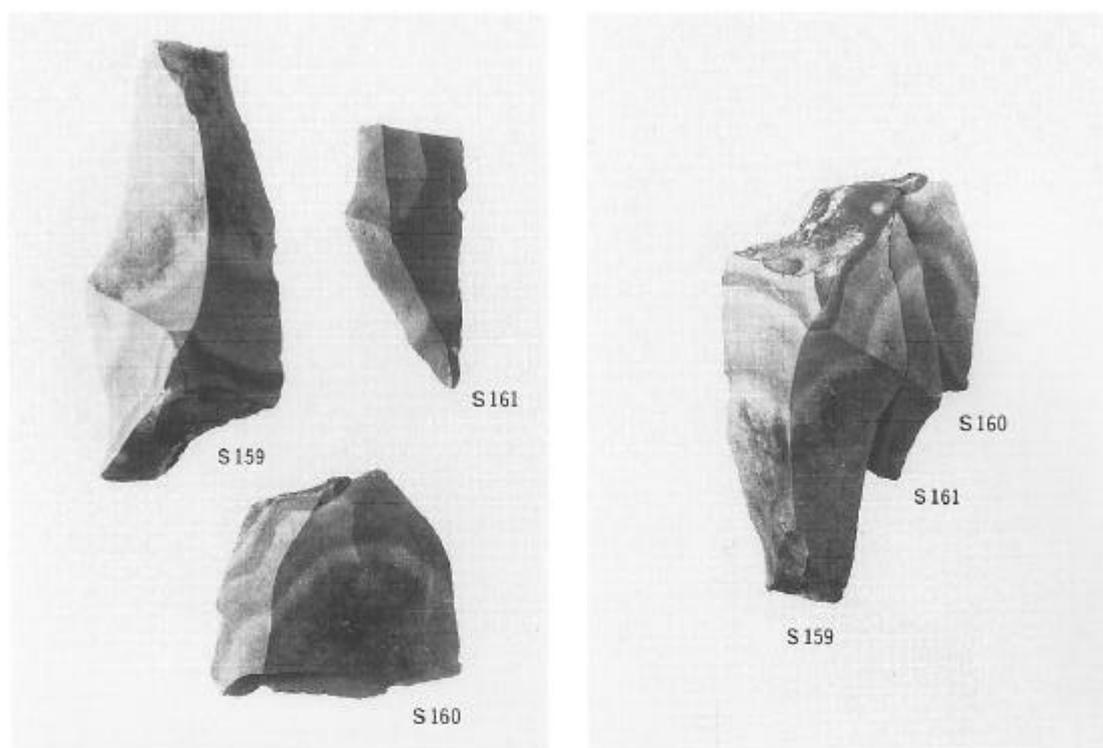
2 遺構外出土遺物(55)



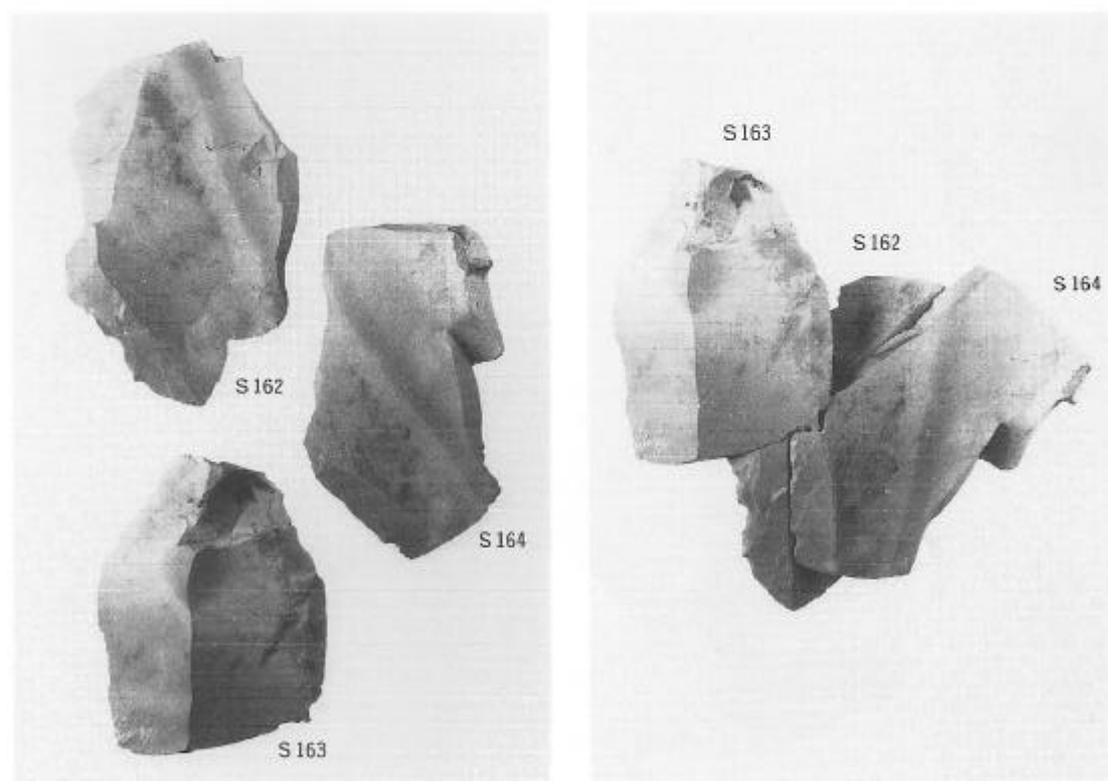
剝片接合資料A
遺構外出土遺物(56)



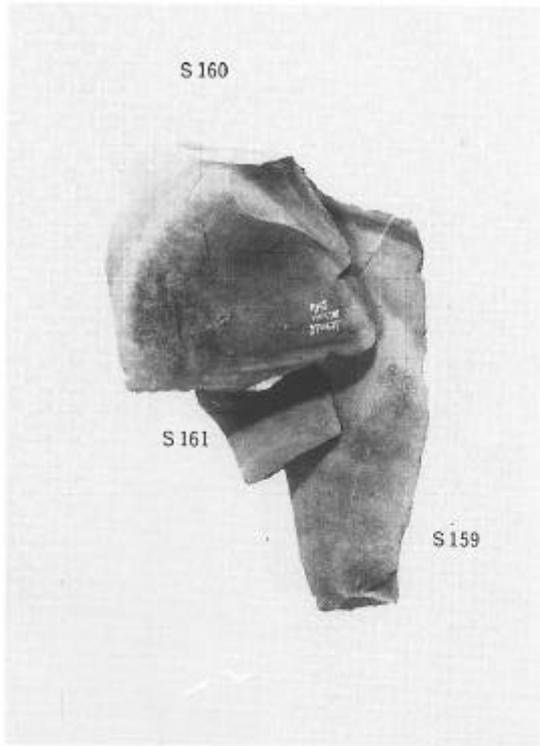
剥片接合資料B
遺構外出土遺物(57)



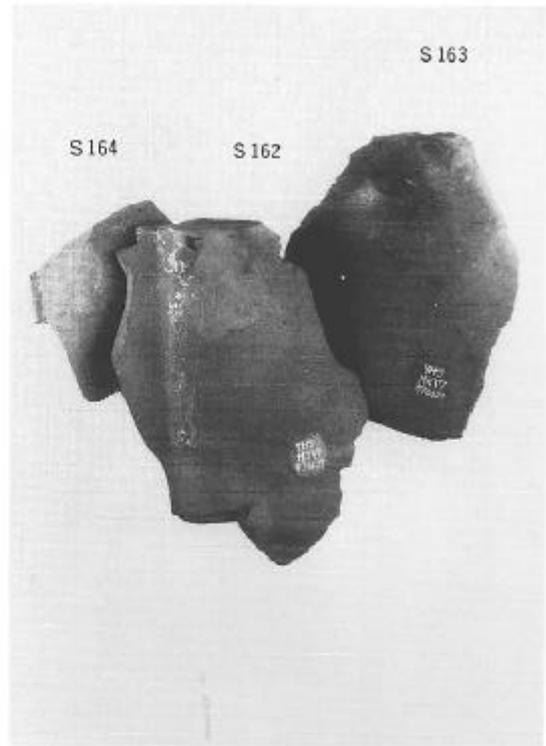
1 剝片接合資料C



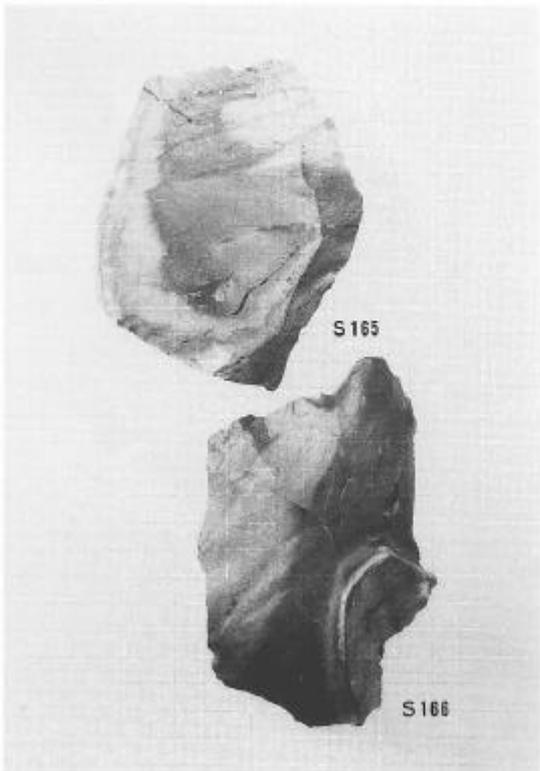
2 剝片接合資料D
遺構外出土遺物(58)



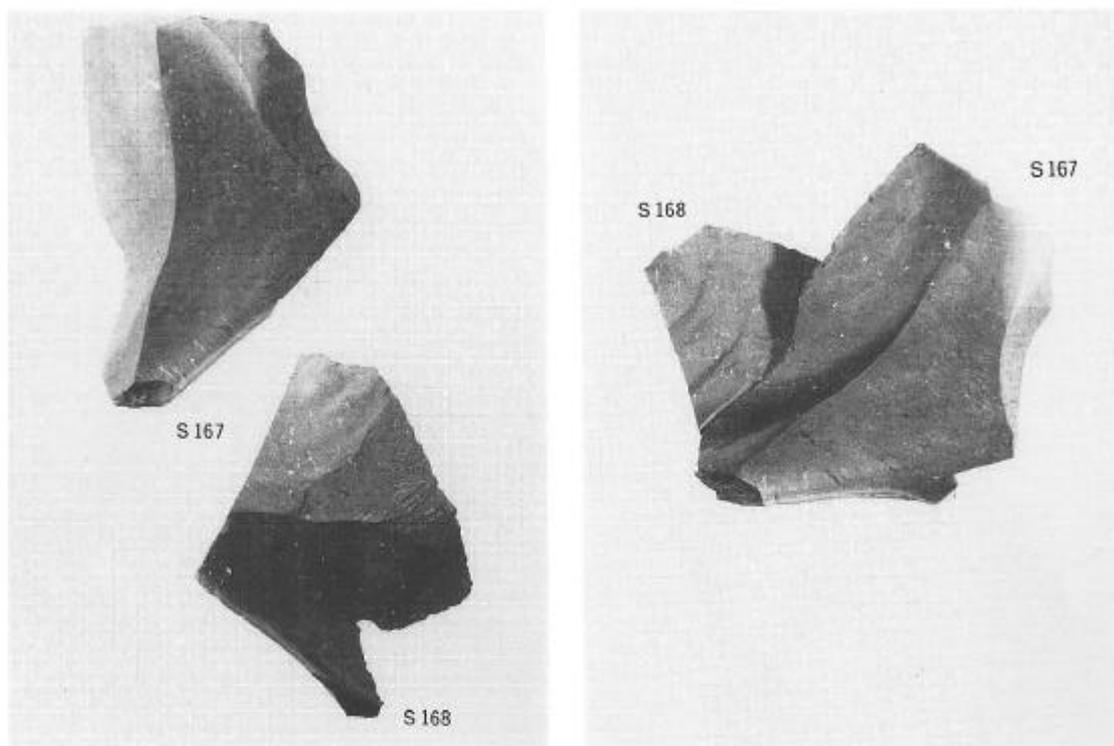
1 剥片接合資料C



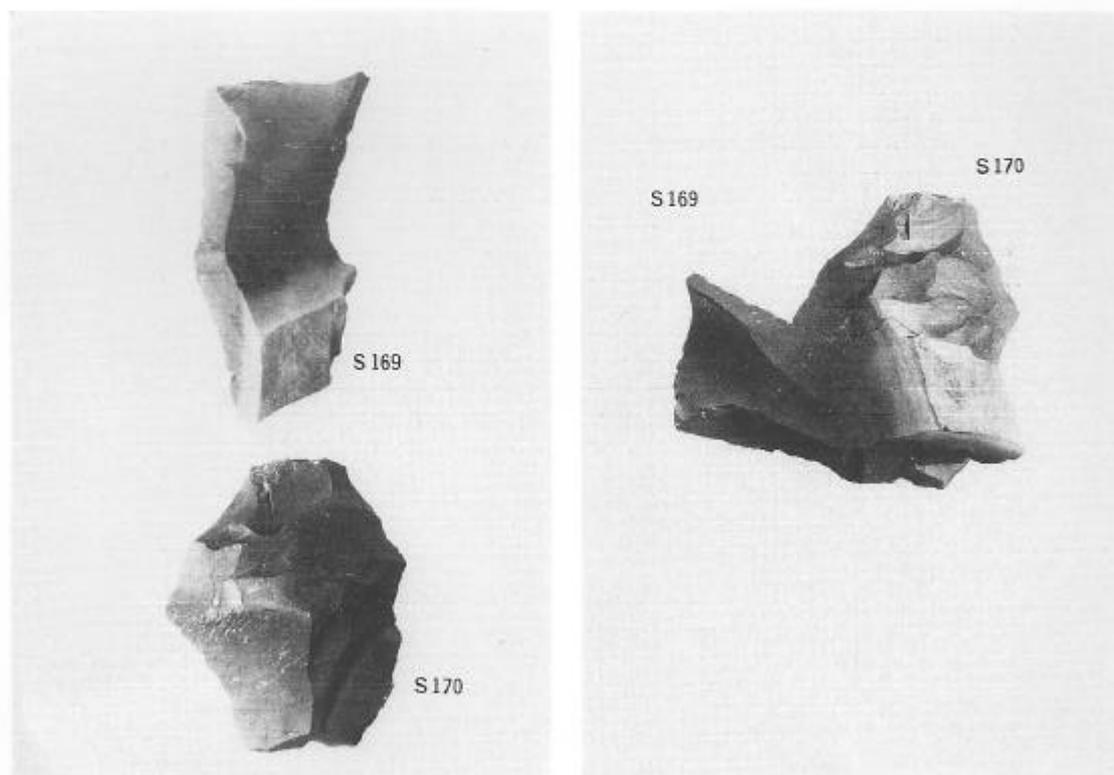
2 剥片接合資料D



3 剥片接合資料E
遺構外出土遺物(59)



1 剝片接合資料F



2 剝片接合資料G
遺構外出土遺物(60)